

# バカと幻想と舌禍の女 神

閻魔刀

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

文月学園史上初の観察処分者となった吉井明久。

この話は観察処分者になって間もない頃の彼とその仲間？　・・・達が幻想と月の世界でヒドイ目に会わされるだけのアナザーストーリー。

注意：この作品には以下の成分が含まれています。

- ・原作どこ行つた？
- ・キャラ崩壊
- ・途中からGLが極端に増えます。

・バカ+変態ばかり……

これらが平気な人達はゆっくりしていつてください。

# 目次

## 番外編

番外編・もし、明久を幻想郷に引き入れ

ようとした理由が全く別の理由だったら

1 | 1

番外編・もし、明久を幻想郷に引き入れ

ようとした理由が全く別の理由だったら

2 | 10

番外編：第13回東方Project

人気投票の結果を受けて依姫さんに不満

があるそうです。

プロローグ

始まりは突然に？ | 41

え？ もう終わり？ そんなまさかあゝ

? | 55

巻き添えになる人が増えていく……

75

幻想入りって普通パニックになって大

騒ぎになると思うのはボクだけですか？

| 95

やりようの無い怒りは何処へと向ける

べきですか？ ??? | 119

1日目

天界は今日も平和です…… (遠い目)

永江衣玖 | 136

ヤクザ怖え…… (雄二) ヤクザ





## 番外編

番外編：もし、明久を幻想郷に引き入れようとした理由が全く別の理由だったら 1

もし、明久を幻想郷に引き入れようとした理由が全く別の理由だったら 1

「なんで吉井君を幻想入りさせようとしたのかしら？」

「なんでって？」

え？ な、なんで八雲さんは僕を見て顔を赤くしているんだ？

なんでそんな気まずそうな顔をしているんだ!!

「まさか、僕には変な能力が眠っていて、その力を借りて何かの事件を解決してほしいとか？」

「い、いえ……そうじゃなくて……そのお………」

でも、そんな感じは全くないんだよなあ……

適当な事を言ってみただけど、全く違うみたいだし？

「幻想郷の危機ではあるわね……でも、その……理由がちよつと……」

「いいから早く言いなさいよ！ 齒切れが悪すぎるのよ!!」

ヤバイ！ 綿月姉妹の二人がキレた!!

お願いだから話を進めてよ!!

「……ええ、実は幻想郷はある危機に見舞われていまして、その為に“吉井君を”借りた  
いと思っっている所なの」

「その為に何かの敵と戦うとか、説得するとかして欲しいな感じなの？」

「確かに貴方はかなりの“霊力”を有しています。幻想郷の管理者としてそれなりに  
人を見る目や力はあると思っっているわ」

そんなマンガっぽい事を言われても困るんだけど…… いや、うれしくはあるんだけどさ……

「だけど、その力は幻想郷では“女”しか使えないの。貴方が女だったなら確実に大  
妖怪相手でも力でねじ伏せる事が出来る程に……」

え？ じゃあなんで呼び出されたの？ それじゃあ僕はただのエネルギータンクで  
しかないじゃないか？

「貴方を呼び寄せようとした理由だけど、今、とある異変のせいで男たちが人妖問わず根  
こそぎ誘拐されてしまっただけです」



え？ どれだけ凄い事になっているの？

幻想郷ってところの人達がどれだけののかは分からないけど、大騒ぎする程の大事  
件だとしたらかなりの人数になるんだろうか？

「そこで私は考えたの。 男が根こそぎ攫われたというのなら……」

「「言うのなら?!」」

八雲さんの言い出した言葉は僕らの予想の斜め上を行くともない事だった……

『外から靈力の高い男の子を連れて来てそいつに世継ぎを作らせちやえばいいじゃない!!』……と。

「『外から靈力の高い男の子を連れて来てそいつに世継ぎを作らせちやえばいいじゃない!!』じゃない！ なに良い事思いついたみたいなドヤ顔してるのよ!! そんな事の為に連れて来たって言うならいちいち私達を巻き込むな!!」

二人共とうとう我慢の限界を超えて、八雲さんを袋叩きにし始めた。

しかも途中でキツネのお姉さんも乱入して文句を言いたい放題なあたりあのお姉さんも聞かされていなかったんだらうな……

「い、一応吉井君であるべき理由もあつたのよ……つて痛い痛い！ 巻き込んだのは悪かつたからもうやめなさいよ!!」

あ、逆ギレした八雲さん（馬鹿）が現れた時の裂け目を作つて3人をその中に引きずり込んでいった。

ぼくのとなりに落ちて来たから、話をすすめたいんだと思うけど……

「今回外から選んだ子は吉井君だけよ。吉井君ほどの霊力と幻想郷受けする容姿が無ければ今回の問題は解決できないから……」

「それってどういう事です?」

「私達の幻想郷の世界では霊力の強い男の子から寵愛を受けた女性の元に強い子供が生まれて来る…… そうやって歴代の博麗の巫女を継ぐに相応しい子供を作る事で幻想郷の維持を続けて来たの」

それってまさか…… はっ! 綿月さんとレイセンちゃんがいつの間にかいなくなってる!?

さてはめんどくさくなったからって逃げたな!!

「そう、私が頼みたいのは…… 吉井君! 君に幻想郷に入ってもらって、そこで女子の内の誰でもいいわ。そこで次の博麗の巫女に相応しい世継ぎを作ってほしいのよ!!」

「全力で断る!!」

冗談じゃないよ! なんでいきなり異世界で女の子を口説いて子供だけ作って来いって!?

最低にもほどがあるじゃないか!!

「お願いしますううう! もう貴方ぐらいしかアテがないんです!! 他に霊力が高い奴

らって言ったらいつ死ぬか分からない病床のジジイとか、女を奴隷とか物ぐらいにしか見ていない最低な奴らばっかで、バカだけど誠実そうでかっこよくて、靈力も最強級と読んでいい程の量が潜在的にもある理想の男の子があなただけなのよ!! 私の体でもいいから! どんな変態プレイでも聞き入れてもいいから引き受けてよー!!」

ふざけるな! なんて僕が女の子相手とは言え妖怪相手に子作りなんてしないといけないんだ!!

つて、いい加減離れてよ!! 意外と力強いよこの妖怪さん!?

「人聞きの悪い事を言うな!! 僕を何だと思つて……」

『なんだなんだ? うえからなにか聞こえるぞ?』

『なんか女の人の叫び声が聞こえたような……?』

ま、マズい!! もし年上の女の人にアダルティーな哀願をされながら抱き付かれていなのに、それを強引に引き剥がそうとしている男子高校生の光景なんて見られたら……  
……………死は免れない!!

「ふうっ……」

あ、やばっ、紫さんの口元にやけてる……

「どんなヌルヌルプレイでもいいですからあゝ! 吉井君、お願いだから私を捨てない

「でええええく!!」

『おい、いま間違はなく女の声がしたけど、吉井って奴が女を変態プレイさせた挙句に飽きたからって捨てようとしているらしいぞ!』

『オイオイマジかよ…… 吉井ってたしか最近観察処分にされたって言うあの……』  
「分かった! 引き受ける!! 引き受けますから、これ以上僕の社会的信用が地に墜ちる前に幻想入りとやらをさせて下さい!!」

冗談じゃない!! この調子でいけば間違いなく僕は教師の物を平気で盗むだけでなく女まで食い物にして吐き捨てる最低な下賤士呼ばわりまでされちゃうじゃないか!!  
なんて汚い真似をするんだ!!

「はーい! それじゃあ、幻想郷へ1名様ご案内でくす♡」

こうして僕は幻想郷とよばれる場所へと行き、世継ぎ作りをする事となった。

……もう僕お婿さんへ行けないよ……

……もう泣いていいかな?

月の都 side

「お姉さまっ!」

「うーん……」

お姉さまが珍しく考え事に集中なさっていらつしやるわ…… 一体何を……

「よし、決めたわ!!」

「何をですか?」

「やつぱり吉井君をこつち側に引きずり込んでここでサグメちゃんとかつつけちゃおうって思うのよ?」

「さらりと怖い事を言わないでください!! なんてことをたくらんでるんですか!?!」

なんか私の予想のはるか先を言っちゃってしてくれてるんですけど!?!

「だってえ、まえまえからサグメちゃんから結婚相手が見つからないって言って愚痴つてばっかだったし……」

「確かにそんな事を滅茶苦茶書き込んでいましたけど…… スケッチブックを買い替える必要が出て来るまで……」

「さすがにそろそろ付き合いきれないのよ。 ことから吉井君を拉致……保護してサグメちゃんとお見舞いさせてくつつけちゃえば……」

「お姉さまもなかなか最低ですよ!!」

ボツにした理由

1. 書き続けていたら18禁になりそう
2. オリ設定が極端に多くなつてめんどくさそう（今書いてるのも大概な気もするのだが……）
3. 別にオリジナルで主人公を作っても良い。主人公がアキヒサである必要性を全く感じない。
4. これが一番重要……「どこかのラノベで見たような気がする」と言つた感じですね。

番外編・もし、明久を幻想郷に引き入れようとした理由が  
全く別の理由だったら 2

2. もし明久を幻想入りさせようとした理由が別の理由だったら2

「さて、この弾幕ごっこトーナメントマッチ。通称“ダンマク・オブ・ファイターズ2017”（以下DOF）もついに決勝トーナメントまでやってきました!! 実況は文文

○新聞報道部部長の“射命丸文”と……」

「解説の河城にとりがお送りいたします。」

「いやあく今年のDOFも熱い試合ばかりですね」

「今年はウチで新開発した放送機材の試運転もタダでさせてもらえるなんて、DOF運営委員会の皆さんには感謝の限りですよ」

「……ちよつとにとりさん？ それはいったいどういう……」

しばらくお待ちください……



「先ほどまで解説をなさっておりました河城にとりさんが急な都合で席を外すことになりましたので……」

「フハハハハハ！ 解説はこのサイキョーのあたい”チルノ”が解説を……」

しばらくお待ちください……

「いやー勝手に子供が侵入してくるなんて警備担当の白狼天狗の皆さんは何をしていた

んでしょかね?」

「本当の解説の代理は私、”博麗霊夢”が担当するわ」

「しかし、霊夢さんもよく引き受けてくれましたね。 てつきり断つて博麗神社でお茶でもすすつているかと思つていたのですが……」

「せつかくの決勝戦じゃない。 しかもその決勝まで残っているチームの一つは吉井明久がいる”吉井クズ久団”なんだから……」

『吉井クズ久とか言わないで! ”チームTHEゆかりん”だつて言っているじゃないか!』

『おい吉井、いきなり変なチーム名に変更するなど言っているだろ! 紫様が恥ずかしさのあまりに乙女みたいに顔を隠してしまっているだろうが! 私たちのチーム名は”YAKUMOシスターズとその奴隷”だと言っているだろうが!!』

『藍しやまもバカなおにいちゃんも勝手にチーム名を変えないで下さい! チーム名登録した時に”YAKUMOMEN(ヤクモメン)”って登録したじゃないですか!!』

「あくもう! 勝手にチーム名変えてまで侮辱しようとしたことに関しては謝るわよ! つて、未だにチーム名に關してもめてた訳!」

ギャーギャーとチーム名に關することでもまだにもめている3人。

紫に至つては明久と従者である式2匹の会話についていけず、特別に審判から胃薬を

受け取っている始末である……

「全く…… 相手のチームも無視されて半泣きじゃないのよ……」

「と、とりあえず八雲紫率いる“妖妖跋扈”チームに挑むのは、昨年のDOFトーナメントでは“クレイジーカルテット”を相手に惜しくも一回戦敗退であったにも関わらず、修業が身を結んだのか？ 今年は見事に決勝まで勝ち残ってきました” 光と地獄の妖精”チームです！」

『ヒック…… あたいらがその辺の妖精だからって無視するなよ……』

『さつきから入場してるのに話してくれない……』

『もくゆるさないわ！』

『ここは私達であいつらをコテンパンにしてやるしかないじゃない!!』

『私達、光と地獄の妖精チームが妖妖跋扈チームを叩きのめしてやる！ 死にてえ奴だ

け……かかって来い!!』

幻想入りした理由：八雲一家も選手として参加しようとしていたが、4人一組でしかチームを組めなかったために助っ人となる存在を探し求めてスキマを使って散策して

いたら偶然見つけた存在が吉井明久だった。

召喚獣の攻撃が弾幕と同じ仕様のものでして使えると分かったために、食べ物と金一封をちらつかせて参加させた。

大会系の格ゲーみたいに優勝後にオリキャラのラスボスを用意して大暴れさせる予定だったが……

没にした理由：舌禍の女神に比べて描く意欲が湧かなかった事と、チーム分けが思いつかかなかった（今のストーリーも大概面倒なことになり始めているのだが……）

このストーリーを本格的に作り始めていたなら、たぶん今書いている作品と違ってゆかりんとフラグが立っていたかもしれない……

3. もし明久の幻想入りした先が月の都では無かったら……

「おーい！ サニーちゃん、ルナちゃん、スターちゃん、おやつが出来たから早くおいでよー！」

「はーい！」

元気な返事とともにやってきたのは光の三妖精『サニーミルク』『ルナチャイルド』『スターサファイア』の3人。

今日吉井明久が作り上げたおやつは、少し離れた木に生っていたリンゴから作ったアップルパイだ。

初めて作った料理だったが、3人はとても喜んでおり、紅魔館のメイド長から譲ってもらった紅茶をぐびぐびと飲みながらおいしそうに食べている。

「「ぐ」馳走様!!」

きちんとぐ馳走様を言った3人は食器をおとなしく台所に持っていく、ちゃんと流し台に入れていく。

最初のころは食器などはそのまま放置してどこかに遊びに行こうとしていたのに……

明久が彼女たちに懐かれてからというもの、彼の言う事だけは素直に聞いてくれるのだ（その一方でいたずらの大半が明久に向き始めているが……）

「だけど、なんでばかなおにいちゃんはこの幻想郷にやってきたんだろう?」

「え〜つとたしか……あの時は姫路さんの手料理を雄二とムッツリーニに押し付けようとしてた時だったかな……」

## another story 明久side

『お前が喰えや!!』

『雄二人の犠牲で済むのなら安い買い物だろ!!』

『落ち着くのじゃおぬしら! そのような事をして犠牲者が増えるだけなのじゃ!』

『……………(すでに気絶中)』

お互いの死力を尽くした戦い(姫路特製手作りお菓子押し付け合戦)、ムツツリー二はすでに気絶させた。

後は吉井明久とその悪友、“坂本雄二”のどちらかが残り一つのケーキを口に押し込むだけで決着がつく。

そんな時だった……

『皆さん、お飲み物を持ってきました』

『ひ、姫路さ……グボツ!!』

『わりいな明久、俺はまだ死にたくねえんだよ』

『ビバツバアアアア(しまったああああ)!!』

雄二の汚い不意打ちによって姫路特製ケーキを食べさせられた明久はそのショックで気絶。



森の奥で追い詰められている少女達。

明久は子供達をかばうように前に出て、山犬相手にけん制するように木の棒を突きつける。

『……くうくん』

何を思ったのか、小さな山犬は明久に対してさみしそうな眼を向けていたが、それ以外の特別な事をする訳でもなくてとどこかに去って行ってくれた。

『『た、助かったあ……』』

another story 明久side end

「でも、その時のばかなおにいちちゃんは私たちの事をただの人間の子供だって思っていたんだよね……」

「森の中で正座させられて『こんな夜中に森の中を出歩くななんて危ないじゃないか！

お父さんとお母さんも心配するだろう！』って言つて、そのまま説教始めちゃうし……」

「しかも私達が妖精だつて言つても話を聞いてくれずに人里まで私達を運びながら山下りをしようとするし」

「あの時は本当にごめんなさい!!」



少女相手に土下座する男子高校生……

この情けないにもほどがある光景を雄二たちに見られたら大爆笑されることは間違いないだろう。

「だけど、どうするの？ 晩御飯までどこか遊びに行くの？」

「うん…… 出来ればそうしたいんだけど……」

「おなかいっぱいだからお昼寝かも……」

「zz……」

妖精だとかどうこう言ってもこういうところは本当に子供である。

満腹なうえに温かい日差しが程よく射している家の中にいるのだ。 眠くならない

方がおかしいだろう。

「はい。 お昼寝するならベッドにいきましょうね」

眠たそうにしている（サニーに至ってはすでに寝ている）を彼女たちの寝室に連れていく。

すでにお昼寝用にシーツを替えてあるベッドに寝かせ、優しく毛布を掛けてあげる。

「よし、眠れるように絵本でも読んであげるかな……」

吉井明久は三妖精達が眠れるように、自室として貸し出された部屋から適当に数冊ほど取ってきて、その本を音読することにした。

「私は正しくなんかない！ ただ〃正しくあろうとしている〃だけだ!!」

「わかんねーよ、何言ってるんだか？ おんなじやねえかそんなの」

「わからんか？ 私には貴様の言うような大した信念など持ち合わせていないと言う事だ」

「少なくとも、友達を危険な目に遭わせてまで貫きたい信念など私にはない！」

「私の聖者っぷりが気に入らないんだって？ 雲仙二年生」

「ならばがっかりさせてやろう！ 私が怒りに任せて暴れてしまうようなただのくだらない人間であると言う事を教えてやろう!!」

「「寝れるかああああああ!!」」

それも当然である。 明久がいきなり音読を始めたのは「めだか〇ツクスの第3巻」で本格的なバトルが展開されていった際のセリフなのだから、そんなものを音読させられたら眠れるはずもない……

サニーに至っては寝ていたはずなのに目を覚ましてしまうあたり、どれだけ酷い音読だったのが容易に想像ができるだろう……

没にした理由：「幼女とハーレムなんてさせてなるものか!!」とか思っていたら没にしてしまっていた。

特に後悔はないwww

それに、書いていく上で「エンディングをどうするつもりなのか？」を考えたら全く答えが出なかったたのでそれを考えたら没にする以外の選択は無かった。

因みに舌禍の女神の方のエンディングですが……もし予定通りに書けたなら……



23 番外編：もし、明久を幻想郷に引き入れようとした理由が全く別の理由だったら



25 番外編：もし、明久を幻想郷に引き入れようとした理由が全く別の理由だったら





27 番外編：もし、明久を幻想郷に引き入れようとした理由が全く別の理由だったら

「ある問題を理由に別れさせます」

番外編：第13回東方project人気投票の結果を受けて依姫さんに不満があるそうです。

第13回東方project人気投票の結果後の月の都。

その中心にある政務室での事だった……

「なんで…… 私は月の皆の為に戦ってきたのに…… なんで、日夜月の警備隊長としての仕事をして、やりたくもない玉兔の皆の鬼教官なんてやっている私を支持しないのよ!?!」

綿月依姫：88位↓89位

「依姫は二桁の順位だけましよ…… 私なんて……」

綿月豊姫：103位キープ

「失礼しまーす…… おわっ!?!」

吉井明久：東方キャラではないため対象外

「なんか依姫様が凄く落ち込んでいます!?!」

清蘭：93位↓85位

「キシヤアアアアアアアアアア!!」

「うわっ!?! 依姫様がなんかトチ狂ってる!?! 阿修羅みたいですごく怖いんですけど!?!」

鈴瑚：87位↓90位

『…鎮圧』

稀神サグメ：14位↓21位

玉符「鳥合の二重呪」

「痛い痛い痛い!! ちよっ!?! サグメ、あなた何するのよ!!」

『興奮気味だったから?』

「それだけでかなり強いスペルカードを使ったって言うの!?!」

「サグメさん…… さすがにそれはやりすぎだよ。 めっ!」

『っーん……』

「あ、サグメ様が落ち込んだ」

えええええ…… いや、体育座りでいじけているサグメさんもかわいいけど?

でもその辺に在る罪のないアリさんをプチプチ潰すのはやめてあげようよ……

「それで、なんで依姫様はそんなに落ち込んでるんですか？」

「……はい、これ」

依姫さんが鈴瑚さんに渡したのは何かの書類が入っている封筒。

その中に入っていた書類に書かれていたのは先ほど示した人気投票の結果を示すラ  
ンキング表だった。

「どうせ私なんて価値のない不人気キャラなのよ……」

『気にしないで。私もランキングが落ちている。月の皆の評価が悪いのはみんな一  
緒なんだからそう落ち込まずに……』

「祇園様……」

依姫さんが床に剣を刺した途端、僕とサグメさんの周りを囲う様に大量の刀が突き出  
てきた。

……なんで、僕も巻き込まれてるんだらう？

『ちよつ！ なんで!?!』

「……月の住民の中でダントツの高順位だから」

『ただの妬みじゃないの!?! それだけで刀の檻に閉じ込めないでよ!!』

「そんな事をするから人気が下がったんじゃないの？」

「くつ、なに？ そんなに寡黙っ娘が好きなの!? ドジっ子属性・寡黙・筆談トーク・運命操作なんてミステリアス要素満載なキャラがみんな大好きな訳!」

「いや…ドジっ子属性は二次創作が勝手に生み出した妄想の産物なんじゃ…」

「はあ？ だったらその二次創作とやらの世界に連れて行きなさいよ！ その妄想の産物とやらを滅茶苦茶にしたうえで私の事についてアピールしまくってや…」

だめだ… 依姫さん、過度なストレスでいろいろとおかしくなってる…

「ここしばらく忙しそうだったからなあ… 謎の侵略者対策とか、ヤンデレめいた事を言って襲うようになってきている女の子の捕縛とか、騒ぎを起こしまくる豊姫さんや僕への説教とか…」

『そう、擦れないで… なんでも順位の高さにこだわるものじゃない。 あなたへのその一票は… 依姫、あなたの事を想う人達が一つ一つ… 愛・思いやり・気遣い・優しさ・感謝・お礼としての気持ちを入れて贈ってくれた物。』

それは大切な事よ？ あなたが必要だと言ってくれる人たちが720人もいる… そこまで必要としてくれる人たちがいるなんてとてもうれしい事じゃないかしら？』

「… サグメ様」

サグメさん、いいコメントだなあ…

刀の檻に閉じ込められながら書き込む事でもないと思うけど。

『誰が人気で誰が不人気だとかそんな不毛な言い争いなんてやめるべきだと思う。私達はただ投票してくれたみんなに“選んでくれてありがとう”って感謝の言葉を伝えてあげるだけでいい。』

そもそも今のいる場所はそんなに不満なの？ 175人もの立候補者の中で真ん中の順位にいるあなたよりもはるかに票が入らなかった人たちは一体どんな気持ちでいるのかしら？ そんな中でも真ん中にいて、無難に普通に“仕方が無い”で割り切つて、乗り切つてみるのも…… 悪くはないんじゃないかしら？』

「「……………」」

稀神サグメ：前回（第12回）の人気投票初出馬でありながらも堂々の14位。今回（第13回）の人気投票でも21位の快挙。

票数も月の都の住民の中で次点の清蘭が774票の中、彼女は3674票と大きな差をつけている。

ベストパートナー部門においてもドレミーとのコンビで20位に入っており、月の都の住民の中ではぶっちぎりのトップであると言つてもいいだろう……

凶弾「スピードストライク」

月見酒 「ルナティックセプテンバー」

『え!? なんで清蘭と鈴瑚のふたりまで……』

「いや！ なんで僕までええええええええええ!!」

少年少女戦闘中……

『落ち着いたかしら？』

「「申し訳ありませんでした！」」

あの後、急にキレた皆を止めるためにサグメさんを閉じ込めている刀の檻を僕の手で破壊した後、二人で暴走する皆をねじ伏せた。（ほとんどやったのはサグメさんだけど



……)

真つ先にスペルカードを使った清蘭は鈴瑚さんが右腕を極められ、追撃の頭突きで身動きが取れなくなつたのと同時に投げ飛ばされた先に誘導されてそのまま叩き付けられて気絶。

豊姫さんはサグメさんとの、実質ただの喧嘩ですべての攻撃を捌かれ、膝折りで転ばされながら顔面パンチ。 さらにそこから右腕を極められた後で投げ飛ばされて倒された。

依姫さんは豊姫さんの攻撃が捌かれた際にそのままぶつかってしまつて倒れこんだところで僕が押さえつけている。

具体的に言うとうと神様を呼べないようにするために、特殊な組糸で縛り上げながら僕が上に乗つかつて首筋を掴んでいるだけなんだけど。

最も当の本人は「人気投票の力は戦闘力にまで影響するのか……」などと言いながら本気で悔しがっているだけだ。

「しっかし、なんで依姫ってこんなにも人気が無いのかしら？」

「原作でも屈指のチート級能力持ちで、月の使者のリーダーとかプライドが高くて生真面目なしっかり者属性持ちとか、若干ツンデレとか天然が入つてたりとそれなりのキャラはしているはずなのに……」

本当になんで人気でないんだろうね？

いや、こんな人気投票の事自体知らなかった僕が言うセリフではないけどさ？

『とりあえず神の力で“ドーン”って感じで決着をつけようとするのをやめた方が……』

「そんな事したら私の個性がなくなるだろうが!!」

『そこは建前でも“警備隊長として必死だった”とか言っておけばいいのに……』

なるほど…… 強すぎるって言うのも難儀なものなんだね。

って、サグメさん、いったい何の事を言っているの？

『前に紅白の巫女とか白黒の魔法使いとか、吸血鬼の女の子と言う訳の分からない集団が攻めて来た時に滅茶苦茶やったって聞いている』

「こつちだつて攻め入られた側なんだから正当防衛みたいなものでしょ？ だつたらむしろ……」

『だからと言つて神様から授かった特典をまるで最初から自分の力であるかのような演出はしない方がよかつた。 どうか剣術や普通の弾幕で立ち回って勝つて見せていたらもう少しは違った結果になつたかもしれない』

「えつと…… つまみどういう事？」

『分かりづらいかもしれないけど、要は地上と月の都とはまるで世界観が違うって事。

あなたたちの世界で仲間を集めて軍団同士で戦術戦を繰り返している中、私達みたいな神クラスの化け物が乱入してきてすべてを吹っ飛ばしてしまうの……」

ええ…… 本気を出したサグメさん達ってそんなに強かったの？

それは確かに強いって言ったら強いんだろうけど、そんな勝ち方をしたところで呆れられて終わりというか……

例えるなら剣術中心のバトル漫画の世界に核ミサイルを持ち込んで天才剣士達を皆殺しにしてもその世界で名高い天才剣士達が弱いとも思えないし、核ミサイルを持ち込んだ馬鹿が凄いとは思わなくて事かな？

「なるほど…… 要は世界観が違う戦い方をしたから、支持を得る勝ち方をしていなかったってことですよね？」

『なんかざっくりとした言い方だけど、清蘭の言う通り。お互いが対等なフィールドで競わなければ、たとえ相手を倒したところでその勝利も勝利とは認めてはもらえない。勝って当たり前みたいな条件で買ったところでそんな勝利に注目なんて集まらない以上、意味なんてないのよ』

あ、依姫さんがすごくシヨックを受けてる。「そんな…… あの時、私はただ兵たちの規範であろうとしただけなのに……」とか思ってるんだろうなあ……

ちよつと泣きそうになってきてるし……

『綿月姉妹の力に対して制限を設けなかったのは敵キャラとしては最悪。仮に“神様を呼び出せるのは一日に3回が限度”とか、“別の神様を呼び寄せる為には一度能力を解除して、ある程度の時間をかける必要がある”みたいな条件付きだったならば相手にも勝利の道が見えてきている分、より依姫自身の実力の高さが証明できるし、それならこういった制約があることで“これほどの実力者相手に何度も立ち向かわないといけないのか……”的な心理的な描写の一つでも加えておくだけでパツと見では依姫の圧勝であったとしても接戦だった感が出せる。それならたとえ多少苦戦したとしても地上の精鋭部隊相手に一人で抑えていられるというだけです。十分にはあるからね』

サグメさん、徹底的に考察しつつも依姫さんをたたきまくっているなあ……

もしかしてその時に何かあったのかなあ？

『過ぎたるは及ばざるがごとし』 モノには限度と言うものがある。 八百万の技とか399万回連戦しても勝てる計算とか、そういうインフレは黄金期少年ジャンプのバトル漫画の中でやっていなさいよ。 私達はあくまで必殺技に限りがある弾幕ゲームキャラなのよ?』

黄金期少年ジャンプって…… サグメさん、少年ジャンプ好きなのかな？

まあ、現代の少年ジャンプでも1京2858兆0519億6763万3865個の能力を使いこなすことが出来るなんてふざけたキャラがいたからそれに比べたら、依姫さ

んの能力なんて……

「ふえええええ…… うええええええええん！ サグメちゃん酷いよお!! 私だけを責めるのはやめてよお…… 私だって月の都を守るために一生懸命がんばってるのに、今回の侵略者相手に一番に立ち向かったのも私なのに、それが逆に人気出ないからダメだって言われたら私もうどうすればいいのよお……」

うわあ……あの依姫さんが頭抱えてガチ泣きしちゃってるよ……

もうプライドもへったくれもない酷い姿を晒したい放題だ…… その時の事情を全く知らないのにかわいそうになってきたよ……

「さ、サグメさん？ もうその辺にしようよ…… なんか依姫さんが凄くかわいそうになってきたんだけど……」

『別に私は責めている訳ではない。ただ、具体的に何が悪かったのかを一緒になって考察してあげて、今後どうするべきかについての参考になりそうな事を語っているだけで……』

「具体的すぎるダメ出しを淡々と徹底的に傷口をえぐるように語られるくらいなら単純にバカにされる方がましだって!!」

もう、これアレでしょ？ とつても普通で常識的な男の娘である僕がなぜバカ扱いされないといけないのかについて高学力組の連中から徹底的な議論を繰り返ね続けられ

て、その過程で考察の為にと称して僕の恥ずかしい過去を晒されまくっているみたいない感じなんですよ!?

そんな事になつたらもう泣きたくもなるって……

『よしよし、吉井くんは良い子だから大人しくしていようね?』

「なんか子供を諭すような言い方でバカにされてる気がするんだけど?」

「お姉様は桃をよくパクる! 玉兎達は言う事を聞かない! 吉井くんはウサギ達をヤンデレ且つ発情期に追い込む! やつたらいけないことだからって説教したら嫌われキャラ街道まっしぐら! 私だって、私だってえええええ……」

結局日々のストレスと今回の人気投票、そしてサグメさんの考察という名の”酷評”によつて完全にプライドが打ち砕かれた依姫さんを少しでも癒す事で慰めてあげるべく、今日の夕食に僕の得意料理であるパエリアを振るつてあげる事にした。

豊姫さんに手伝ってもらい、現代世界に行ってきた後で材料を買い揃え、月の都に戻つて鈴瑚さんと料理……

完成したパエリアを依姫さんに食べてもらいながら慰めてあげたらどうにか立ち直つたけど……

今後は依姫さんの前で人気に関しての話は避けようと思つた一日だった……

## プロローグ

### 始まりは突然に？

「……………痛てて……………」

全身を包む痛み思わず眉をしかめる少年

「たしか、島田さんと話をしていたらなぜか異端審問会って名乗ってた人達に犯罪者扱いされて……………」

状況が分からずに直前までに会った事を覚えているかどうか確認する事にしよう  
……………」

「雄二達に助けを求めようとしたんだけど、その前に木刀で襲われたんだっけ……………」  
訳が分からなかったけどとにかく島田さんと逃げ回って更衣室に避難させたんだっけか  
な？

その後、どうにか屋上に逃げようとしたら急に目の前が急に開いて、その先にたくさんの目のような物があつて……………」

ちよつと待つて！ 僕、何してた？

……………何これ？ 記憶喪失とかじゃないよね？

少なくとも声は出せるみたいだし感覚もあるみたいだけど、なんでか全身が痛い……あの時の目は追いかけてた人達の目だったのかな？

「うん、どうやら覚えていないのは大量の目が出て来てから後の事だけみたいだね。

そこから何があつたのかが分からないけど、全身に痛みがあるって考えたらあの後リンチにされたって考えるのが順当なのかな？ それにしては逆に怪我が軽い気もするけど……」

だつてそうだよね？ 女子と話をしているだけで木刀で襲い掛かってくる覆面集団が感覚が残る程度の半端なリンチで済ませる筈がないもんね……

取り敢えず、ちゃんと起きよう。漫画やアニメじゃないんだから記憶喪失になつても心配してくれるヒロインなんて居ないんだから。

そして僕は、ゆっくりと目を開いて……………

「なんじゃこりゃ……………」

……………!!？」



何これ!? こんな光景を見せられて叫ばない人間っているの!?

果てまで抜ける黒い空や白い土地! 所々に妙なクレーターのような大穴! しかも周りは無人。

そんな場所にいきなり放り込まれたんだよ!?

それでノーリアクションでいる? 絶対に無理だつて!!

「本当にどこのこナー!」

地平線の先には何も見えないし、風も全く無いから今の状況もあるから妙に気持ち悪いし……

つて、何処からどうみたつて文月学園、いや日本の風景ですら無い気がするんだけど……

まるでテレビでみた月の大地に似てるような気がするんだよな……

そんな感じの土地なんて僕が済んでた街には無かったような気がするし……

「でも、夢でもないんだよな……?」

目にコークスクリューパンチを当ててみてちゃんと痛いって事は夢じゃない可能性が高いと思う。

雄二達にこんな豪華なセットを組んでその中に放り込むとか、眠らせて海外に飛ばすなんて出来る筈がないし……

姉さんなら…… どっちかって言ったらホテルのような所に運ばれて色々されてると思うし……

「せめてなにかヒントがあればなあ……」

ポケットを漁っても、大したもののは出てこない。 スマホにハンカチ、昼食用の油と砂糖が少しに小銭しかない財布……って、スマホ!?

「そうそう、これがあるじゃないか!」

スマホがあれば地図アプリで場所くらいは知る事が出来るし、誰かに連絡が付けば助けて貰える!

そう思って電源を入れてみたんだけど……

「……………圏外かよ!!」

けど、画面に写るのは無情にも圏外を示すアンテナ表示とホーム画面のみ……

なんだよ! ネットにもつながらない、電話も出来ないスマホなんてただのカメラじゃないか!?

だけどその機能を使うのに必要なバッテリー欄の電池量は残り10%以下。 どうやら充電を忘れたらしい。

「せめてエリア内なら良かったんだけどなあ…… そうだったら、少なくとも現状の確

認位は出来るだろうに……」

このスマホ、契約の時に父さん達と連絡が出来る様に海外でも使えるようにしてくれたから、もし海外に拉致られても助けを呼べる可能性がある……可能性が

……

「あああああああああ………！！」

少し歩いてエリア内の場所を探そうと思ったと勝手に電源が切れた………

スマートフォン。電池が無ければただの箱。

いや、物が入らない分ただのお荷物だろ……

「とにかく、今はここから離れた方が良さそうだね。……どっちに行こう？」

太陽も無いからどこにどう動けばいいのか分からない。

時間は多分夜だと思うけど、それ以外のすべてが分からない以上、何処かに向かわな

いといくら僕でも飢え死にしちゃうよ。

「とにかく今は後ろに流れ星が見えたからそっちに行ってみるか」

何とはなしにそう決めて、電源の落ちたスマホをポケットに放り込もうとした。

「お前、珍しい物を持っているな」

独り言以外の声が掛けられたのはその時だった。

「……………コスプレ？ バニーガール?」

声を掛けて来たのは、一人の女の子だった。

浅葱色（あさぎいろ）って言うのかな？ そんなきれいな色の髪と服に注目が行きがちになっただけ。

…………その頭はウサ耳というかなんて言うか、少なくとも日本でこんな赤い瞳とウサ耳で普通に通りを歩いているような…………ましてやこんな荒れ果てた土地でするような恰好じゃない。

「サグメ様！ こいつですかね…………？」

サグメと呼ばれた女の子が首を横に振る。

そしてスケッチブックだろうか？ 本とペンを取り出して何かを書いているけど、なんで喋らないんだろ？

「どうします？ さつき都に攻め込んできた奴と似たような雰囲気、服着ていますし、

あいつ等の仲間の可能性も考えてとっ捕まえますか？」

その言葉に首を縦に振って頷いた……あれ？ 今の僕すごく危険な状況なんじゃ

……

「けど逃げる様子も無いですよね？ あの連中とは関係ないのかもしれないですよ？」

「何言ってるのよ鈴瑚（りんご）！ 私達に驚きすぎて怯えているのよきつと。そうに

決まってる!!」

いや、確かに驚いてはいるけど面喰っていただけで怯えてまではいないからね……

そう言えばこの人達（人なのかなあ？）誰かを探しているみたいだけど、話が全然見えてこないよ……

でも運がいい事に、どうやら言葉は確実に通じるみたいだ。

「あ、あの……」

「……何？」

え、なに!? なんであの娘見下したような眼でこっち睨んでるの？

取り敢えず、名前を聞いて話だけでも聞かないと……

「君達……誰？」

「そう言うのって、まずは自分から名乗るものじゃないのかな？」

「ごめんごめん…… えっと名前は〃吉井明久〃 日本で文月学園の学生をしている日

本人だよ」

「……………はあ？」

「年齢は16歳で、趣味はゲームと漫画、後パエリア作ったりするのが得意な…………」

「いやいやいや！ そんなどうでもいいことまで紹介されてもこっちが困るんだけど！？」

そんな、酷い!! そっちから名乗れって言ったからわざわざ自己紹介までしたのに…………

「そんな事よりも、ここはどこなの？ 日本じゃないって言われても…………」

「何適当な事を言っつて話をそらそうとしてるのよ、きちんと質問に答えなさい！ 適当な事を言っつても誤魔化されないわよ!!」

「い、いやだから！ 日本だって、ちゃんと答えてるじゃないか…………っ！」

さつきからずつとこの調子なんだよね………… 日本を知らないなんてまるでここが異世界みたいじゃないか！

オーバーロードとか恋○○双とかこの素晴ら○い○界に祝福○…………じゃないんだから…………

「清蘭？（モグモグ）そう威圧したら、答えられるものも答えられないよ？（モグモグ）」

うう………… 黄色いウサ耳さんありがとう…………

……  
「ぐうう……。で、でも鈴瑚！こいつが、前に攻めて来た奴らの関係者の可能性もあるのよ！そうですよねサグメ様っ！」

前に攻めて来た奴らって誰なんだよ……。さつきから酷い言われようだよ……。もう僕泣いてもいいと思うんだ……

あれ？サグメ様って呼ばれてた娘が首を横に振ってる……。庇ってもらっているのかな？

「そ、それも否定できませんけど……」

『吉井君……って言ってたかな？』

「え、うん」

この……人？は、二人の上司なのかな？

さつきからずっと喋ってくれずに筆談でしか会話しないからどんな人かは分からないけど、清蘭さんと鈴瑚さんの二人よりは落ち着いて話せそうな感じがする人だな。

『アナタは今、この都を脅かす奴らの仲間だと思われています』

「え？」

『ここは月の都。清蘭と鈴瑚の二人は“イーグルラヴィ”と呼ばれている調査部隊の

兎で、私はこの月の都の賢者の一人として呼ばれています、稀神サグメと言います』

「賢者？」

『賢者という言葉も知らないの？』

「知っているからね！ 僕もそこまでバカじゃないからっ!! “賢”い“者”と書いて賢者!! もういいでしょ!!」

なんて失礼な、僕もそこまでバカじゃないっての…… テストではちゃんと10問につき1問は解けてるし、最近は島田さんとちゃんと会話できるようにと思っただイツ語（実際にはフランス語）だって勉強してるんだから!!

「ふうっ…… そして、この月の都における為政者の一人であるって事も分かっていたら満点回答だったけどね」

『清蘭？』

「も、申し訳ありませんサグメ様!!」

もしかして、サグメさんって分かりにくいけど、凄く優しいのかな？

さつきから清蘭さんが小馬鹿にしてくるけど、その度に叱ってくれているし？

とにかくココはサグメさんを持ち上げながら話を進めて行けば上手く事が進んでくれそうだな。

「ああ、なるほど。 要は清蘭さんと鈴瑚さんは警察官のような仕事をして、最近事件



が多いからパトロールを強化している最中に、たまたま誰かに日本からここに連れてこられた僕を見つけて勝手に犯罪者の仲間にならされて仕立て上げようとしたって訳か……」

『……そうなの、二人とも？』

「いやいやいや！ 清蘭が勝手に敵に仕立て上げただけで、わたしは別にどうとも思っていない……」

「ああ〜！ 汚いわよ鈴瑚！！ 鈴瑚だって面白半分でいたずらしようとしていたでしょ！！」

「エー？ ナンノコトカワカラナイナー？」

「とぼけないでよ!? いっつも私に前線押し付けてのらりくらりと仕事サボっているくせにー!!」

「なっ！ そう言う清蘭だって外回りなのを良い事に都に帰ってくるなりこっそりと買いい食いとかしてサボっているのバレてないと思った？ しかもその時の領収書をウチの部署の経費で落としてるって事も知ってるんだから!?」

「い、いやっ！ あ、あの時はたまたま給料を落としていて、前借りする羽目になっていだから食費として必要だったと証明するための書類に…… って、そう言う事言うなら

鈴瑚だって前に機械壊した時、自分の扱いが悪かった事が原因なのに、敵に壊されたことにしてちゃっかりと責任逃れしてたわよね！ しかも買いい直しの為の金額を何倍も

多く書いて、余った金を大量の団子や遊び道具に使っているし！」

「ちよつ！ 二人共落ち着いて……」

何この二人!?! 急に喧嘩しだしてるんだけど！ しかも二人のやっている事って完全に横領じゃないか?! そんな事して置いて、よくバレなかったね!?!

『……二人からはゆつくり話を聞く事にする。取り敢えず今の貴方は十分以上に怪しいので一度こちらで拘束させてもらいます』

拘束って…… 何で僕いきなり悪いことしてないのに手錠をはめられそうになってるの？

「逃げたりなんてしませんから、そんな物騒なの出さないで下さいよ！ まるで悪い事したみたいじゃないですか……」

『悪い事……したみたい?』

「ごめんなさいサグメ様！ お願いですからその手錠をメリケンサック代わりに構えるのはやめて下さい!!」

いや、睨まれながら無言でスケッチブック投げつけられて、しかも手錠をメリケンサック代わりにして殴られそうになったら普通にビビっても仕方ないじゃないか!?!

僕がチキンっていう訳じゃないんだからねっ!!

『分かったなら良いわ。 静蘭、鈴瑚…… 吉井君、あの二人はここに置いて行きましよう。 取り敢えずついてきなさい……』

サグメさん、声出せないから喧嘩止められないんだ……

毎日こんな調子なんじゃ大変なんだろうな……

「分かりましたけど、首輪までつけようとするのはやめてくれませんか？」

『わざわざ意味も無く怒らせるから、貴方がそう言う趣味だと思ったのだけど……』

「いや、僕にそんな趣味は無いからね!？」

そして僕は、サグメさんに連れられて月の都と言う場所に向かう事になった。

………思っていた方向とは、だいぶ流れが違ってたけど。

あ、静蘭さんと鈴瑚さんが別のウサギさんたちに捕まってる。  
件で問い詰められるんだろう。

多分さつきの横領の

さすがにあれは自業自得って事でいいか！

え？　もう終わり？そんなまさかあ～？

「所で、ハコはどコ？」

『ココは綿月姉妹と言う私と同格の為政者が住んでいる屋敷。　貴方の件で報告を入れ

たら君に直接聞きたいことがあるそうだから直接彼女らがいる部屋へと案内する』

　　って言う事があつて、いきなり政治家の執務室みたいな場所に連れてこられた。

　　“綿月豊姫（わたつきとよひめ）”さんとその妹さんの“綿月依姫（わたつきよりひめ）”さんって言うらしいけど……

　　はつきり言ってしまうと清蘭さん達といた時の方がマシだったかもしれないと思いはじめている……

　　だつて……

「なら、もう一度聞く。名前は？」

「吉井明久」

「なら吉井明久、あなたの出身は？」

「日本……」

「……この都に来た目的は？」

「目が覚めていきなりここだったから分からない」

「……ここまで、どうやって来た？」

「前後の記憶が無いから、それも分からない。裂け目のような物が迫って来たと思っ  
たらなぜかあの荒野にいたんだ」

「……レイセン」

「依姫様、結構痛い程度の拷問にでも掛けましようか？ ショックで記憶が戻るかもしれ  
ません!!」

「何このチビツ娘!? 何気に怖い事言わないで!! だ・か・ら! 拷問されようが何されようが、今言った以上の事は分らないし、知らないんだってば!!」

さつきからこの調子だもん。 何この苦行、いい加減僕も怒りたいんだけど!!

いくら言ってもなかなか信じて貰えないし、本当に埒が明かないな……

「あら？ この菊の彫刻綺麗ねえ。 これは、あなたが作ったものなのかしら？」

お姉さんの方はのんきに僕の持ち物を漁っているし、妹さん（それでも僕より少し年上っぽいけど……）の方はさつきから正直に答えているのに全く信じてくれないし……

「いや、これただの百円玉……お金だし」

「お金？ その割には、見た事も無い貨幣ね。 ……その日本と言う国はどこにあるの

？」

「それはこつちが聞きたいよ。 そもそもここ、どこの国なの？ 日本でも中国でも漢

字圏ですらないなら、モンゴルとかインド辺りなのかな？ 東南アジアとは違うよね

？」

この部屋に連れられて来るまでに、サグメさんと少し街を回ってご飯もおごつてもらったけど（ここしばらく砂糖と塩しか食べてないと言われたらなぜか憐れむような目で見られたんだよね……）あの料理は間違いなく中華系の料理だったよ？ 街並みとか見ても明らかに昔の中国風の雰囲気だったし、これで中国じゃなかったら一体何処が中

国なんだ？　とでも言わんばかりに中華風の物ばかり！　お土産を持って帰りたいくらいだよ全く！！

でもみんなの名前とか聞いていたら日本人っぽいネーミングだし……　もうわけわかんないよ。

「あなたねえっ！　こちらが下手に出ていたらのらりくらりとワケの分からない事ばかり……！」

「依姫も落ち着きなさい、そもそも下手に何時出たのですか？」

「で、でもお姉様……！」

「それに、大体の予想は付けられましたわ。それを説明したいから少し静かにして貰えないかしら？」

え？　どういう事？　被害者である僕でさえ訳が分からずにいる事に対して予想が出来たって……

しかもあんな僕でも滅茶苦茶に思えるような事に対して……

このお姉さんの方、どれだけ凄い人なんだ……？

「貴方がこの月の都にいるのは、恐らくですが“幻想郷”と呼ばれる所にいる通称“スキマ妖怪”『八雲紫（やくもゆかり）』の仕業とみるべきでしょう」

「八雲紫？」



「彼女は“境界を操る程度の能力”と呼ばれる力を持っています。彼女の手によって貴方は私達や幻想郷の者達の言う“外の世界”から連れてこられたとみるべきでしょう」

「境界を操る程度の能力？ 結局はどういう事？」

「そこに関しては後ほど説明しましょう。つまり、貴方はそのスキマ妖怪によって外の世界から拉致された。ただどなにか彼女に取って計算外な事態が起こり、幻想郷へと入るはずだったにも関わらず……」

「この裏世界みたいな所に入り込んでしまったと……」

なるほど、いくら僕がバカでもここまで言われてしまったら分かってしまった……

つまりこの人達にとって僕は……

「あの……豊姫様？ 結局どういう事なんですか？」

「だからレイセンちゃん。ここの人達にとって僕は外の世界って言う場所からやって来た“異世界人”って事になるんだよ」

何かの目的で幻想郷と呼ばれる場所に連れていかれる筈だった僕がなぜか異世界で遭難……

ゲームかマンガでしか聞いた事の無いような展開だけど、豊姫さんの言葉を聞いて今までの僕に怒った理不尽極まる出来事の大半はきつちりと噛み合わせる事が出来た。

「ですけど信じられません…… 幻想郷の連中の都合で連れてこられた者がまさか私達、月の都の元にたどり着いてしまっただなんて……」

「あら？ 私だつてこうだと確信している訳ではありません。でも私の能力を使ったわけでもない、吉井君が余計な拾い物をしたわけでもないのにあの子がこんな所に来てしまうというのは、こうでも考えないと辻褄が合わなさすぎるのです」

「え？ 豊姫さんも世界を渡り歩く能力を持つているんですか？」

「そうですね…… まあ、彼女とは違った方法ですが……」

そう言った彼女はいきなり扇を取り出し、それを軽く振るう。

それと同時に、先程まで明久達がいた部屋は一瞬で消え去り、代わりに明久にとって見慣れた景色へと変わっていく。

「へっ？」

「あの……豊姫様？ ここは……」

「ここは文月学園つていう学び舎の屋上よ？ 吉井君の話を元に部屋との点とこの学園の点を合わせてつないでみたのだけど…… この場所で大丈夫かしら？」

「は、はい……」

正直、啞然とするしかなかった…… これまでの事が実はリアリティがあるだけのただの夢だったんじゃないかって思える程にあっけなく、簡単に終わってしまうなんて

……

「ね……ねえレイセンちゃん、豊姫さんの能力って一体どういう能力なの？ これ幻覚とかじゃないよね？」

「え……ええ、間違いなく現実を起こっていることです。豊姫様の能力は“海と山をつなぐ事が出来る程度の能力”と言いまして、海は私達が住む“月の世界”の事を……山は“地上や幻想郷”の事を指しているそうです。その海と山の空間の点同士を合わせで一瞬で移動できる能力なんです」

な、なんてチート能力……で、でもこれでもうあんなワケの分からない“非日常”的な事はもう終わりなんだよね！ 月の都の皆にお礼を言った後で普通に帰って砂糖と塩を食べた後でぐっすり寝てこれからも普通の日常に戻っても大丈夫なんだよね!! 「やったー！ ありがとう豊姫さん!! サグメさんにもありがとうって伝えて貰っても……」

「……別にあなたがお家に帰るのは構わないけど、それで本当にいいのかしら?」  
「……え?」

ドユコト? もう僕も普通に学校に戻れたんだからそれでハッピーエンドじゃないの!?

なんで思いつき感謝の言葉をさえぎられているの!?

「もし、八雲紫という女が私の予想通りの妖怪だとしたら、こんどは幻想郷なんかには飛ばされることになるわよ?」

「あ…あの、言っている事がよく分からな……」

「分からないなんて言わせませんわ。もし、八雲紫が何かの目的で貴方を幻想入りさせようとしたというのであるならば、私達が月に帰った後でまた同じことをしようとするでしょう。こう言う事に関してはあの女は本っ当にしつこいですからね」

「確かに、一度私達姉妹でわざわざ叩きのめしてあげたのに、性懲りも無く仲間を集めて攻め込んできたぐらいですからね……」

この二人が溜息を付くほどに面倒臭いって、その妖怪さんだけしつこいんだよ!?!  
粘着ストーカーかよ!!

「兎に角、今のまま吉井君がこの世界に帰るのはむしろ危険ですわ。貴方を今すぐ月の都に送り返します。レイセン、月に戻り次第、すぐ月兎の者達に遷都を急げと伝言を……」

『あら? 私そんな真似させると思っているのかしら?』

「!?!」

あはは……この短期間で色々あり過ぎて、もう何があっても驚かなくなってきた  
僕がいるよ……

どこから聞こえたのかは分からなかったけど、良く見たら貯水槽の上に見覚えのある大量の目が詰まった穴のような物がある。

多分、異端審問会って名乗っていた人達から逃げた時に見えた目はあの穴の中の事だったのか……

「だけど予想外だったわね…… まさかこの子を抱いて運んでいこうとしていたら、いきなりへんな服着た変人共が錯乱して暴れてしまう物だから手元からポロリつとつい落としてしまつて……」

「それで僕が落ちた先が月の都？ って、その異端審問会と言うのはまさか!？」

「はい、あなたを追いかけてまわしていた子達は全員叩きのめして病院送りにしました♡」  
『主にやったのはわたしと橙ですけどね……』

さつきから空きっぱなしの穴から別の妖怪が出て来た。

キツネと猫又かな？ 九本も尻尾があるみたいだからもしかしたら妖怪物でよく出て来る妖狐だと思うけど……

「らんしやまー、あの気持ち悪い人たちはてつじんさんって言う人におねがいしてきました。 “ きゅーきゅーしや ” って言うのを呼んでおくからもう大丈夫だそうです」

「ありがとう、さすが私の愛猫、橙!」

「にやはは! らんしやまー、くすぐりたいですー!!」

あの二人つて一体どういう関係なんだろう……

姉妹……なのかな？ 猫耳尻尾の娘が嬉しそうにしているから多分ただの上司と部下の関係じゃないとは思うけど……

「ああもうかわいいよ、写真に収めて、ツイートなうツイートなう!!」

「藍？ あんたその箱みたいなのでいきなり何やってんのよ？」

「箱言わないで下さい！ これは『ケータイ電話』つて言つて電話したり、外の世界の

情報を集めたりできる優れモノなんですから!!」

いや、色々とツツコミたい所だけでもまずは仕事しろよ！

つて、言いたいけどココでツツコンだら間違ひなく叩きのめされるだろうからやめと

ろ……

「……

これはアレだ。あのキツネさん、ただの『親バカ』だ。しかもモンスターペアレ

ント（通称モンペ）とか呼ばれるレベルの……

多分ツ○ッター辺りで写真を載せてるんだと思うけど、絶対幼女にコスプレさせて喜

ぶ変態だとか言われてるだろうな……

「……もういいかしらスキマ妖怪」

「言いたいことがあるなら無視して続けて頂戴…… 藍の育て方間違えたかしら……」

あ、あのスキマ妖怪とか呼ばれたBB A……お姉さんも頭抱えてるよ…… あの妖怪

も苦勞しているんだね。

「なんで吉井君を幻想入りさせようとしたのかしら？」

「なんでつて？」

「とぼけるなスキマババア！ あの変な異端審問会とかほざく連中から助けてくれたのは感謝しているけど、なんでそっちの世界に僕みたいな普通の人間を入れようとしたんだ!!」

「そうだ、はつきり言つて僕は普通の人間だ。ほんのちよつと窓ガラスぶち割つて下の階まで逃げようとしたり、ドイツ語を覚えようと必死だけどなかなか島田さんに通じなかつたり（実際に覚えているのはフランス語）鉄人に没収されたゲームや本を取り戻そうとした際に間違つて鉄人の本を古本屋に売りさばいたりして観察処分者にされたりとかしているけど、たったそれだけの普通に生きる普通の人間なんだ！」

「はつきり言つて妖怪なんかと殺し合いなんて出来る自信なんてこれっぽちもない

……

「はっ！」

「ここで気が付いた。妖怪の中には人間を食べる妖怪もいる事を……

つまりこれらの状況も合わせて推察すると……

1. 八雲紫は妖怪

2. 幻想郷には彼女のような妖怪がたくさんいる。

3. 八雲紫はワープなんて手を使ってまで外の人間である僕を捕まえて来た。

4. 八雲紫はBBAで僕は男……

「僕を餌づくりの為の道具にしようとするとはこの外道！ 恥を知れ!!」

「「いや！ なにをどう考えたらそんな結論にたどり着くんだ!! まずアンタ（貴方）が恥を知りなさい!!」」

な……外しただと…… この僕の完璧な推理が……

「はつきり言つて吉井明久”本人”はどうだつてよかつたの」

「え?」

「私の目当ては吉井明久自身に宿っている能力。そして、吉井明久の操る召喚獣の力

だけが目的だったの」

「あつはつは！ 僕自身に宿ってる能力? そんなの持っているわけがないのにボケちゃつたのかなこのおばあちゃんは……」

ひゅつ！↑カッターを投げる音

ぱしつ！↑依姫が明久の足にカッターが刺さる前に見事キャッチする音

「次そう言つたら、今度は脇腹か腎臓に行くわよ?」





のね。吉井君の正義感とバカさ加減を利用して自分の箱庭を守りうる時間を稼ぐための捨て駒、あるいは“人柱”と言った所かしら？」

「死なせるつもりまでは無かったのだけど……なぜわかったのかしら？」

「思い付きが流石に低俗過ぎるのよ。あなたの事だから敢えてこんな物語ならありきたりな手を使うことで貴方への容疑の目を向けられないようにする為なんでしょうし、他にも作戦があるのでしようけど……もうちよつとひねった方が良かったんじゃないかしら？」

「そうだ、そうだ！　いくら何でも僕の事をバカにし過ぎだぞスキマババア!!」

「……………ごめんなさい、見栄張っちゃってました。本当は依姫さんの言った通りになつてたらもの見事に引つ掛かって月の兎の皆を傷付けてたと思う……」

「だとしたら吉井君にとつては災難だったわね。今、私達はある事情があつて月の都はさつき話した幻想郷への遷都の為に準備をしている所なの。だけど、そのスキマ妖怪が『数千は軽く超えるだろう月の民を受け入れる受け皿はない』つて言つて私達の使者を叩きのめして追い返したの……」

あれ？　なんか雲行きがおかしくなつて来たよ？

そう言えばさつきから聞きたいことがあつただけど……

「ねえババ……八雲さん、一つ聞きたいんだけど？」

「今一瞬ババアって言おうとしなかったかしら？」

「ソナナコトナイデスヨ？ ウン、イッテナイ！」

「なんでカタコトになっっているのよ？ ……本当に一つだけよ？」

よし、八雲さんから言質は取ったぞ！ さっきから分からない僕にとって重要な質問  
！

「遷都って何？」

「……………はあ？」

あ、あれ？ 僕、何か可笑しな事聞いた？

「……………吉井君、遷都と言う言葉に関しては部屋に戻った後でサグメにでも聞いて置きなさい。とにかく今のあなたの立場は分かったわ。ここはなにがなんでもあなたを月の都で保護します。レイセン…………」

「そんな事させると思っているのかしら？ 橙、あなたは吉井君を取り戻しなさい！ 藍！ 橙成分とか言うワケの分からない物の補給は済んだでしょう？ 藍は妹の方を殺りなさい！」

あれ！ あのスキマババア、やりなさいの方が「殺りなさい」ってなつてたよ！  
あの二人の事をどんだけ逆恨みしてんだ!!

「二度も攻めておきながら簡単に降参した貴方に一体何が出来るのかしら？」  
「二人共どうやら勘違いしているようね。…………あの時素直に降参したのは私達が弱かったからではない」

「二度目の襲撃時には依姫一人に簡単に叩きのめされて泣きながら逃げたのに？」  
「なつ、泣いてないわよ!! 変な言いがかりをつけないで!!」

あれ？ なんかにどつちが悪い側なのか分からなくなつて来たんだけど？

一応、スキマ妖怪が「悪」で月の皆が助けてくれた「善」のはずだよな？

「2度目の戦いで私が素直に降参したのは……………」



73 え？ もう終わり？そんなまさかあ～？

「幻想郷の皆を巻き込みたくなかったからよ……」



巻き添えになる人が増えていく……

「はつきり言っておくわ！ あの時は幻想郷での戦いになりそうだったから仕方なく降参した……」

「負け惜しみもそこまで行くと本当に滑稽でしかないわね。お姉さまに土下座して命乞いまでしたって聞いてるわよ？」

依姫さん、お願いだからそんな悪役みたいな事を言わないで……

どっちが悪役か分からなくなってきた、なんか悲しくなってきた……

「でも、ここは幻想郷じゃない。外の世界の大きいだけで何処にでもある学び舎……」  
いや、試験召喚システムって言う特別なシステムを導入した重要な試験校なんですけど……

あ、でも紫さん（スキマババアって思っただけでも殺されそうだし……）程の熟女なら今更新しい発明の一つ二つではもう驚かなくなってきたもおかしくないのかな？

100年前からしてみれば今では当たり前前になつてる列車や電話ですら当時では革新的な発明だったりしたって話だし。

「なにが言いたいのかしら？」

「ハッキリ言うわね。 幻想郷からしてみたらどうでも良い校舎の一つや二つくらい消し飛ばされても知った事じゃないって言ってるのよ!!」

そう言った紫さんは何かカードのような物を取り出してきた。  
あのカード、なにか嫌な予感がするんだけど……

結界「夢と現の呪（ゆめとうつつのしゆ）」

紫さんが呪文みたいなのを唱えた途端にドラ○ン○ールみたいなデカイ気孔波っぽいのが出て来た!?

でも、こっちに向かってくる様子はないし…… 動こうとする前に中央から突撃していったら普通に殴り掛かれそう……

「弾が外れた」、そう思っているのならそこで終わりよ!」  
「え?」

紫さんが笑顔でそう言った瞬間だった……

「ちよっ! 大玉の中に大量の弾幕って!」

大玉が破裂した途端に大量の弾幕が襲い掛かって来た!

これ喰らったら即アウトじゃない!? しかも、時間が経つごとにどんどん増えて来る

んだけど!!

なんかひと昔の弾幕シューティングゲームみたいな感じがって、そんなこと考えている場合じゃ……

「あ、あれ？」

あ、あれ？　ここは、学校に戻って来る前に色々と尋問されていた部屋だよな？

あ、ありのままに起こった事を話すよ？　『僕はある八雲紫と言う妖怪が放った弾に襲われて危険な状況に追い込まれていたと思っただら、いつの間にか別の場所へ移動させられていた！』

『何を言っているのかわからないと思うが、僕も何が起こったのか……』

いや、いくら僕がバカでも容易に想像できたよ？　こんな事が出来るのは……

「間一髪だったわね……」

やっぱり豊姫さんだったね……

多分座標となつている点をつなげたままだったからすぐに戻せたとかだろうけど……

どうしよう……　このままじゃ帰るに帰れないじゃないか……

a n o t h e r   s t o r y   紫 s i d e

「……逃げられたわ」

くっ、出来る事ならどうかあの子をこちらで確保しておきたかったわね。

あの子の中で眠り続けている能力『異常を正常に戻す程度の能力』を目覚めさせてこちら側に惹き込む事が出来れば幻想郷の結界を攻撃している奴を止める事が出来るかもしれないというのに……

「ゆかりしやまー？ 階段から誰かが近づいてくるですー！」

ちっ！ さすがにあれだけ騒ぎを起こせ嫌が応でも人が寄ってくるわよね……

自衛隊とかじゃないだけまだマシではあるんだけど……

「紫様！　ここは急いで幻想郷に帰還を……　キヤア！」

あ、扉の近くにいた藍がそのままぶつけられたわ。　まあ、あの子なら大丈夫でしょうけど。

「オイオイ！　一体何だこりゃあ?！」

「……あの美女のバスト、推定"E"はある。（……ブシャアアア!!）」

「ここだけまるで戦争の後のようじゃ……　にわかには信じ難いがこれはあの女性の仕業かのう?！」

なんか個性的な子達ね？　炎の様に赤いタテガミが目立つ子と、わざとらしい爺や喋りがうっとおしい女の子に、……なんであるの小柄な男の子は鼻血を拭いて倒れているのかしら?？」

「……ただの熱中症」

今は残暑も残らない秋の終わりよ……　へ々な言い訳にもほどがあるわね。

……あれ？　今、この子私の思考を読んだ？　あの覚妖怪みたいな能力でも持っているのかしら?？」

「おいババア！　この状況は一体如何なつて……（ニヨオオン）ぬあああああああ  
!!!」

「……それにかこつけてキツネっ娘のスカートの中を覗こうなん……ッ!! しまっ—」  
 「そうか、おぬしの事は橙（ちえん）と呼べばよいのじゃな? 明久にこんな従妹がいたと……わああああああ!!」

いけない! 赤髪の子の言葉でついカツとなつてしまつてついスキマ送りに……

し、仕方ないじゃない! 私、永遠の17歳の乙女なんだから! あんなこと言われたらつい「やっっちゃったZ E!」つてなっちゃう時だつてあるのよ!

「紫様、一体何やつてるんですか? あの子たちは別に取り込む必要も無かつたのでは?」

「ついカツとなつてやつてしまつたわ。今では後悔してる……」

「ゆかりしゃま…… そんな人間の衝動殺人みたいな言い訳をしなくても……」

藍だけならともかく、橙にまで呆れられてしまつたわね…… 過ぎてしまつた事は仕方ないわ、あの子たちにはうまい事説明して、吉井明久を呼び出すための餌として利用させてもらいましょ……

幸か不幸か、あの子達もあまり強いとは言えないけど能力が眠っているようですし、それを利用するのも悪くないかもしれないわね……

side end

「それで吉井君？ 今後どうする気かしら？」

「どうする気？ つて…… 元の世界に帰ったらまたスキマ妖怪に誘拐されるだろうし……」

「でもこの世界で私達の保護無しで生きて行けるのかしら？」

実際に豊姫さんの言う通りなんだよね……

依姫さんには悪いけど、この都から出ても一人で生きて行けるわけでもないし……  
妖怪相手に戦える気もしないし……

「でもお姉様、吉井君を保護すると言っても、部屋はどうするのですか？」

え？ 依姫さん、一体どういふことなんでしょうか？



「だとしたら吉井君にとつては災難だったわね。 実はこの月の都はある3人組から都の侵略を受けているの」

え？ 侵略？ たった三人から？

「今はどうにか兵士を総動員して退けてはいますけど…… いつ攻め落とされるか分かったものじゃないんです……」

「レイセンちゃん、もしかして豊姫さんが言っていた“遷都” つてもしかして……」

「そう、“幻想郷への避難” そして最悪……” 幻想郷の大地を浄化して侵略する為の計画” です……」

なっ！ まさか……あの女の狙いは僕の中に眠っているのがどうこうと言っていた能力の回収と、僕の召喚獣を利用して研究した後であの女なりのやり方でそれ再現。戦力を増強させる事で、逆にこの月の都を叩く作戦だったのか！

さすが大妖怪として長生きなだけある！ なんて汚いんだ！ (全く違います)

「お姉様…… ここはサグメの提案通りに行ってみるべきでは？」

「確か？ 彼女の友人に支援を要請して“夢の世界” に住民全員を生身のままで避難させ、月の都を凍結。 敵を凍結させた都におびき寄せて時間稼ぎをするという話だったかしら？」

あれ？　なんか、僕を置いてけぼりにしてどんどん話が進んでいるんだけど……

いや、まあこんな難しい話に僕が入った所で全然意味わかんないし、出来る事もないんだけどさ……　なーんか釈然としないなあ……

「私は反対だと言つたはずよ。　夢の世界は短時間なら十分な休息が取れるし、それなりに楽しい世界ではあるから一時の平穩は手に入るわ。　でも、そんな所に何か月もいては私達にとって逆にストレスになってしまふ。　ハッキリ言つて、ストレスに対する耐性の低い月人では半年も持たずに音を上げてしまふでしょう」

「ならどうするんですか!?　このままでは私達は一方的に蹂躪されるだけなんですよ！　ここで行動しないで何時動く気ですか!?!」

ちよつ！　なんか姉妹喧嘩が勃発しそうですねですけど!?!

レイセンちゃんがどうにか止めようとしているけど、熱中し過ぎて聞こえてないみたいだし、このままじゃ……

「ストップ！　ここで喧嘩してても始まらないじゃないですか!?!」

とにかくこの二人の言い争いを止めよう……　じゃないといつまでたつても話が続かないじゃないか!!

今後における僕の立場を確保する為にも、この喧嘩はどうかして止めないと!!

「そ、そうね……」

「け……けんかしても話は進まないわよ……ね？」

あ、あれええ？　なんで依姫さんは拳を構えてるんだろう……

豊姫さんは何で恥ずかしそうに胸を隠しながら顔を赤くして……

「あ……」

よく見たら僕の手の平が美人姉妹の胸にすっぽり収まつてるぞ？

うん、これは怒ったり恥ずかしがったりしても仕方がないよね？

びくっ！↑微妙に左手が動く音

あつ、やべっ……　依姫さんの胸に触れている方の指を動かしてしまつて……

「……この……この変態！痴漢！！変質者アアア！！」

「いや、その……誤解で……うぼおあああああ……」

おふっ……凄いい鉄拳……　羞恥心で加減が無い分、鉄人の拳よりも凄いかも……

やばい！　マウントポジション取られた！　追撃が来る！！

あつ、でも胸の感触はとても柔らかかったな……　姉妹喧嘩も止められたし、そう言

う意味では結果オーライだよ……？

「うーん、ここは一体？」

僕は確か喧嘩を止めようとした際の事故で依姫さんと豊姫さんの胸を揉みしだいてしまつて……

「あれ？ 人間？ 私、月の住民の夢を見て回っていたはずなんだけど？」

「このお姉さんは一体誰なんだろう？ 白黒の球が付いたワンピースにサンタキャツプ……牛の尻尾みたいなのが付いているけど……」

それに、夢？ ……走馬灯とは違うと思うけど、なんか訳分からないな……

「あの、お姉さんは一体？」

「わたしは夢の支配者“猿（バク）”の一人で『ドレミー・スイート』と申します。貴方は、月の都の住民じゃないはずですよ？ なんで月の世界で夢を見ているのですか？」

「いやああく、実は……」

僕はこの夢の世界にやって来るまでの間に何があつたのかを説明する事にしたんだけど……

「夢の内容がおかしいと思つたらそう言う事だったのね！ 色んなえっちい内容の夢ば

かりが入り込んできて！ そのせいで私がどれだけ大変だったと思ってるの!？」

「ええっ!!」

夢を食べる妖怪さんだつて言っていたし、僕がどんな悪夢を見ていたのかは分からないけど、ドレミーさんの言った通りなら結構エツチな夢だったのかな？ そりゃあ、依姫さん達の胸は凄く柔らかかった……

つて!! いきなりこのお姉さん何いきなり十徳ナイフなんて振り回してるの!？」

「触らないで、こつち見ないで！ この変態!! わたしの本職が悪夢を食べる事だからつて、こんな羞恥プレイはもう耐えられないわ！ こつちだつてサグメからの頼まれ事で忙しいんだから、いい加減とつと出て行きなさい!!」

「わかつた！ わかつたから暴れないで!! ちよつ、本当にナイフはシャレにならな……つて、うわあああああ！」

危ない危ない…… また転んでたまるものか！ どうにかドレミーさんの手を抑えてナイフを奪い取つたし、それでも暴れる彼女の事が転びそうになつてはいるけど、怪我しないように捕まえているからもう大丈夫！ 前回の二の舞を踏んでたまるか！ つて……

あれ？ なんかお互いの顔が近すぎない？ ああ、倒れないように引き寄せたら抱き付ける位に近づいちゃつたからか…… それに、この手の平で感じるむつちりとした柔

らかい独特な感触は…… まさかね？

「う〜っ!!」

な、なんかすごい涙目でこっち見てるんだろう……

あ……なるほど、僕の手が今度は彼女を巻き込んで尻に行っちゃってた…… って、ヤバイ！ これは今度こそ本気で殺され……

「ひつく…… うえええん…… 男にお尻触らせるなんてまねなんてしたことなかったのにいい……」

「えっ、ちよつ…… 今度はマジ泣き!? いや、うかつに暴力振るわれるよりキツイんだけど!」

まさか突き飛ばされてからのマジ泣き…… いや、セクハラ働いちやったこっちが悪いんだけど……

「ご、ごめん！ 本当にごめん！ 踏んでも蹴つてもいいから泣くのやめて下さい！ いや、結構本気で!!」

どうにか土下座を繰り返しながら説得して泣き止んでもらったけど…… これはうかつな暴力よりキツイ気がするな……

って言うかなに、このラッキースケベ的な出来事……

異端審問会の皆に知られたら、本物の拷問の末に殺されちゃうだろうね……

「だって…… アナタの夢で出て来た○○○とか×××って事をされている夢を食べちゃつたら変な気持ちになっちゃって…… なんか、こう…… 妙な高揚感と共に体がムズムズと」

「ドレミーさん、これはきつと何かの勘違いだ！ 気にしたら負けだ!!」

この女の子、相当危ないよ……

いや、僕の夢を食べたせいだと言っていたから僕の責任もあるんだろうけどさ…… 「はっ！ と、とにかくさつさと目を覚ましてこの世界から出て行きなさい。 あなたの悪夢はエッチな方じゃなければ後でおいしくいただいてあげますから」

うーん、そう言われても仕方が無いか、もしここが夢の世界なら現実の体が目を覚ませば自然と出て行く事になるはず。

あ、そう言えばさつき気になる事言っていたよね？ それについて聞いてみるかな。

「そう言えばドレミーさん」

「なに？ わたしは忙しいのです。 質問があるなら手短にお願います。」

なにか色々動き回っているけど、何やっているんだろう？

いや、それ以上に聞きたいことが……

「さつきサグメさんに何かを頼まれて忙いって言っていましたけど、どういう事で

すか？ サグメさんとはいつたいう関係……」

ヒュツ！↑（包丁が投げ飛ばされる音）

危なっ！ いきなり何投げつけてるんだ!!

「5秒やるわ…… アナタの信じる神に祈りをささげておきなさい」

避けた際の一瞬の隙に首を掴まれた!! つて、冷静に分析している場合じゃない!

滅茶苦茶イタイ！ メキメキ言つて、このままだと折れる折れる折れうるウウウ!!

「あつ、ああ……ごめんなさい。これは偶然こつち側にやつて来た吉井君のちよつと痣になつちやつてるだけの首よね？ 決してわたしの愛おしい愛おしいサグメをたぶらかさうとしているクソスベタ天邪鬼オンナの汚い首なんかじゃないわよねえ？」

「そ、そうですよ。 嫌だなあ〜」

「あはは……。 ごめんなさいね？」

微笑みながら一度手を首から放して優しく擦つてくれる。 どうやら僕の首は救われたようだが、このお姉さんはアレだな。 ただの“ヤンデレ”だ。 サグメさんとはいつたいう関係なのかは分からないけど、どうしても確認したいのなら命を賭けないと行けなさそうだ。

「本当にごめんなさいね？ お詫びにわたしに答えられる限りの質問に答えてあげましょう」



「あ、いえ…… 答えたくないなら無理に答えなくても……」

“ 気にしないで ” と言つて笑顔で返してくれるドレミーさん。

一応、優しい方の妖怪さんなのかな？ その天邪鬼さん？ がサグメさんになにか悪い事をしただけで、この獺さんもサグメさんの事になると周りが見えなくなるだけなのかも？

「わたしとサグメがどれほど愛し合っているカップルなのか？」 についてよね？」

「いえ、何を頼まれたのかについてですけど？」

「そうだったかしら？ ごめんなさい」

あれ？ 今この妖怪さん、いまとんでもない事を口走らなかつたかな？

いや、突つ込むのはやめよう。 じゃないと今度こそ僕の首が危ない。 一生寝たき

りなんて絶対ゴメンだよ。

「わたしがサグメから頼まれたのは月の民が色々困つて、それで月の民の全員が避難できるような世界を作つてほしいって頼まれたのよ」

……あれ？ たしか、依姫さんと豊姫さんは“ 幻想郷 ” の土地を使つてお引越しをす

るつて話していたような気が？

「ま、サグメの同格のあの姉妹は幻想郷を利用しようとしているみたいだけど？ サグ

メって基本的に穏健派だからねえ。外の連中の都合とか命なんてどうでもいいと思っっているみたいだけど、別に表立って堂々と攻撃的な態度を取って見下す気味にいるつもりもないみたい」

ちよつ、僕の思考が読まれてる？　もしかして考えている事が夢の世界のどこかで出ていたのかな？

「それで、せっかく広大な世界を作るって言うのならせっかくだし、わたしとサグメの愛の巢も思いつきり作っちゃおうって思ってたね？　外の世界のマンションって言う人間の住居を参考にした空間を作っている所なの!!」

意外とクリエイター気質なのかな？　僕の住んでるマンションの部屋と同程度かそれ以上に優れた機能が満載だし？

「疲れたサグメを癒す為のお風呂に、二人で暮らすために必要なおそろいの食器とか、あとおそろいのパジャマや下着の用意も……」

うん、このお姉さんは“ヤンデレ”要素が強いのかと思っただけど、まさか“百合”の属性も持っていたとは。

物凄く楽しそうに話しているドレミーさんの瞳は恋する乙女のそれだったけど、どこか狂気じみてもいたし……

「ね、ねえ？　この部屋は一体何の部屋なの？」

この空間、機能性はともかく大まかな部屋割りには僕の住んでいる部屋とほとんど同じ作りなんだけど、その部屋の内一つだけが違う扉になっていた。

まるで鉄格子のようになっていて、その中には謎の鎖が数本と変な動きをしているこけしのような物に、バケツには謎の液体が……

「……サグメと愛を確かめ合う為のお・へ・や♡」

サグメさんって、どう言う趣味をしているんだ……

一応、現実の世界で目を覚ましたらサグメさんにこのことを伝えて置こう。

「そろそろ出られるかな？　なんだか起きたばっかの時みたいなのが……」

部屋の案内の後も少しだけ話していたんだけど、その途中で朝起きたばっかの時みたいな倦怠感が襲って来た。

ドレミーさん曰く、獺が管理している夢世界から自然に出る際には妙なだるさが襲ってくるらしい。

「そうですね、一旦ココでアナタとはお別れですけど、もし月の都での滞在を続ける気なら気を付けなさい」

「え、なんで？」

ドレミーさんの言いたいことが分からずについ聞き返してしまった。

まあ、このだるさも原因の一つなんだろうけど……

「私、最近趣味で夢占いって言うのもやってみてるんだけどそれが本当に当たるのよ。せつかくだからそれで明久君を占ってみただけど……」

ドレミーさんはさつきまでとはうってかわって真剣な表情になってはつきりと聞こえるように言い放った……

『アナタは月の都にとつては“災い”、流れに任せたまま居続けるなら必ず都に不幸をもたらす事になる』……と。

幻想入りって普通パニックになって大騒ぎになると思うのはボクだけですか？

「あれ？　なんで縛られてるの？」

そこは見た覚えのない部屋だった。　部屋の床でその辺の荷物を放置するかのよう  
に寝かされていた。

もうこんな事態には慣れてきてしまったからあまり驚きは無いけど、せめて自由に動  
けるようにはなりたい……

「おーい吉井明久！　流石にもう起きたでしよ？　さっさと起きないと、その鼻の穴  
にヨーグルト詰めるわよ？」

廊下に通じているのであろう扉から、この世界に来てから最初に出会ったウサ耳の女  
の子、清蘭さんが入って来た……

「あ……」

ちよつと状況を整理しよう。

1. 女子高生の制服みたいな服に着替えさせられたまま、縛られてあおむけで眠らさ  
れている僕

2. たまたま入って来たのは浅葱色のワンピースが似合う兎っ娘の清蘭さん
3. そんな清蘭さんがいる位置は僕の顔面のちょうど真上

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ブボラアツ!!」

うん、自然とこうなるよね？

ワンピースのスカートの部分を防ぎながら連続踏みつけ。

夢の世界から起きてから真っ先に記憶に残ったのは……

さらなる見慣れない天井と、美少女が履いているきれいな浅葱色のパンツ。そして

て、少女が踏みつけて来る足の裏の感触だった……

「痛い！ さすがに連続での顔面踏みつけは流石に痛い！ 良く喋れるなど思いたくなくなるくらいすごく痛い!!」

なんで？ なんでさつきからこんな目に会ってばっかなの？

僕は雄二と違って痛めつけられて喜べるほどマゾなんかじゃないんだから!!

「あはは！ 吉井君も災難続きだねえ？ せっかくキミの為にサグメ様がわざわざ君を

自室に迎え入れてくれたって言うのに」

あ、鈴瑚さんも入って来て説明してくれた。

え？　じゃあここ、サグメさんの部屋なの？

道理でなぜかとても大きくて心地いい香りがする部屋だと思っただけど……

って、ちがーう!!

「いや、それで何で僕は縛られてるの!?!　あの姉妹の仕業？　依姫さんからの処罰か何かなの?」

「いや……　依姫様も最初はそこまでするつもりではなかったらしいのだが……」

「無かつたらしいけど?」

「サグメ様が緊急で呼び出されて話が進んで行った後、豊姫様がわざわざ用意した部屋までオマエを運んで行ったんだけど……」

「……あ、あの?　……清蘭さん?」

あ、あの……　なんで急に顔を赤くしている訳?

なんで急にモジモジと腰が若干引けた態度でチラチラとこつちを見て来るの!?!

「あつはつは!!　いや、あの後の吉井君凄い事をされていたんだよね!　そりゃあ、もう気絶しているのを良い事に君に付ける予定だったメイド兎達が……」

「鈴瑚!　流石にこれ以上は色々とマズいつて!!　コイツの男の子としての尊厳が完全に失われることになっちゃうよ!!」

「え、多少の恥くらいあった方が逆に色々男として豪胆になれて来るもんだって！」  
「いや、そうだとしてもわたしの口から言うのはちよつと…… 恥ずかしいって言うか、  
無茶っていうか……」

え？ 何?! ここまで引つ張つておいて何怖い事を中途半端に言つて終わらせる気  
なんだ!!

『吉井君、貴方は依姫が付ける予定だったメイド兔によつて襲われて……』  
襲われたつて何!! 僕が気絶している間に何されたの!?

お、落ち着け! とにかく詳しい事を聞いてみよう……

「もしかして? その兎達は敵のスパイみたいな存在だったとか?」

『いえ、彼女らを正気に戻してから問い質したら』「彼を抱きたい」と思つて発情しながら襲つてしまった」。

“ 眠つている少年を襲うというのも悪くは無かつた…… 後悔はしていない ”

“ 正直、あの子に本気で恋をしてしまった。 殺してでも私の物にしたいとすら思つた ” と証言していました』

「何それ!?! どういう意味で襲われたの!?! いや、想像は付くけど敢えて絶対に言わないぞ!?!」

おいコラ! 鈴瑚さんも腹を抱えて笑うな!! 清蘭さんも僕を変態を見るような目



で見つめながら距離を取らないで!?

何気に一人だけヤンデレっぽい事を言っている娘も混ざっているし!? 一応、僕だつて被害者なんだぞ!! ……被害者、なんだよね?

『結局、その兎達は依姫が半殺しにして捕まえて牢屋に連れて行った……』

「……僕の面倒を見る事になっていた兎達が可愛そうに思えて来たのって僕だけかな?」

「オマエが心配する必要なんてない。心が安定するまで数日だけ牢屋で反省してもらう程度だ。………あいつ等全員、〃オマエの事を思い出すたびに愛おしくて食事が

喉を通らなくなる〃 って言つてまともな食事を取つていないらしいけど……」

「清蘭(さん)!! それって本当に大丈夫なんだよね(ですよね)!!」

今の清蘭さんの発言に鈴瑚さんも驚いてツツコミを入れていたよ!?

なんで僕なんかが魔性の男みたいな扱いになつていいのか?とか色々と思う所はあるけど、ここで生活する事に対してかなり怖くなつて来たよ!?

『その後、依姫と話し合つてあなたの面倒は私とこの二人で見る事になつた……』

「そうじゃないとアンタみたいな危険人物相手に周りが何をしてくるか分かつたものじゃないからね」

なるほど、最初に会つた時に普通に対応してくれた3人だから、まともに面倒を見れ

そんな人物を選ぶなら確実にこの3人に絞られるだろうね。

僕も顔も知らない人にいきなり世話なんて焼かれても対応に困って戸惑い続けるばかりだっただろうし……

「とにかく、今日はサグメ様と本来なら外勤の私達が、アンタの監視の為だけに異動させられてるんだから感謝しなさいよ?」

「なんだか、」仕方なく、面倒を見てやっている」とでも言いたげな態度だけど、僕のせいで本来の仕事に手が付かなくなっているって言う以上、僕にも責任はあるだろうから素直に感謝位はしておいた方がいいよね?」

「清蘭ってば、素直じゃないな。なんだかんだ言ってる今の楽な上にそこそこ収入も良いこの仕事に就くことが出来た事に感謝しているくせに?」

「鈴瑚? 取り敢えず、その余計な事ばかりしか言わない軽い口をふさいで置こうか?」

あ、鈴瑚さんがなにかへんな銃弾みたいなのに撃たれた。

あれって何なんだろう?

『楽に思うがどう思っているようにそれは貴方達の勝手。でも、仕事である以上は真剣にやりなさい』

「はい、ごめんなさい! ほら清蘭、今日の所は皆への引継ぎも終わったし、吉井君も連れてどこかに食べに行こうよ? 親睦を深めるって言う意味も込めてさ?」

そう言った鈴瑚さんが僕と静蘭さんの手を引っ張って夕食に誘ってくれている……  
ここまでしてくれる鈴瑚さんの優しさに感動しつつも、これだけは聞いて置きたかつた……

「で、本音は？」

「横領の件が清蘭のせいでバレたからその仕返しに激辛麻婆を口に突っ込んでやろうと思つてその為の駒として吉井君を利用しようとした」

「サグメさん！ 鈴瑚さんが横領の件では勝手に自爆しただけのクセに反省してないみた……モゴモゴ！」

「ヨシイクーン？ イロイロアツテツカレタデシヨ？ セツカクダカラオゴツテアゲルヨ？」

『吉井君、今日はいろいろあつて大変だったと思うから今日はこのお金を使っておいしいものを食べておきなさい。明日からまた大変な目に会わされるだろうから覚悟を決めてしっかり今日のご飯をかみしめておくこと』

『あ、その二人から余計な物を押し付けられたら遠慮なく食べなくていいからね？』と念を押してくれたサグメさんと別れ、一転して大人しくなった鈴瑚さんと清蘭さんに案内されてきた中華料理店でサグメさんに言われた通り、味わう様にきちんと噛み締めて食べた……

八宝菜とシウマイのセットをいただいたけど、とてもおいしかったと思う。

途中で静蘭さんと鈴瑚さんが回鍋肉を薦めて来たけど、なんか真つ赤になつていたら謹んで遠慮しておいた。

サグメさんと別れる前の話の事もあつて色々と警戒していたけど、清蘭さんが普通に食べていたから普通においしいのかと思つた……

が、その回鍋肉を鈴瑚さんが横からつまみ食したら、椅子から床へと転がり落ちて悶絶し、ダイイングメッセージとして「せーらん」と書き残した末に気絶した事を考えると、清蘭さんの味覚がおかしいだけようだった……

ちっつ、一体如何なつてやがる!?

さっきのクソババアが変な裂け目みたいな所に強引にねじ込んで落としたと思つたら、そこは馬鹿みたいに熱いエネルギーの研究設備みたいなどころだし。

訳が分からなかつたから、たまたまここに近づいて来た鳥みたいなコスプレした女を捕まえて強引に場所と時間について聞き出そうとしたが、幻想郷がどうだの何時かは時計見ればいいだの要領を得られないバカな事をほざきやがる!!

「お空、あの人間は見つけられたかい!？」

「うにゆう〜う……ここにも居ないよお……」

「俺達のアイドルであるお空さんに殴りかかるとはその人間は許せねえぜ!」

「みんな! こんな事でさとり様の手を煩わせるわけにはいかないよ! どうにかあたい等の手で捕まえて牢屋に投げ飛ばしてやるよ!」

「「押忍っ! 分かりやした、姐さん!!」」

しかも、聞き出している所をあつちの赤黒の猫耳女に見られてしまったのがマズかつた。

あの“お空”とか呼ばれている女、頭はおかしいがさうとう慕われているようで、少なくともこの設備の連中の全員を敵に回した事になる。

今はどうにか逃げ切っているが、このままじゃマズい。 どうにか出口を探して脱出

しねえと!!

「とにかく、今はここを動かないのが上策みたいだな。ここはこの設備のなかでは比較的涼しい方だし、何気に水があるのもデカイ。ここは泥棒みたいでかつこ悪い気がするが、しばらく騒ぎが落ち着くまでここに隠れさせてもらおうぜ!」

「どうやらここは管制室みたいなところだな? たまたま棚の中に飲み物と非常食が入っていたバッグがあったからサクつと強奪させてもらったぜ。」

「つと、誰か来たな? 見つからねえ場所に隠れて……」

「よし、ここに隠れてつと…… さあ、来てくれよ、” 火焰猫燐 ”。あのタテガミ人間を捕まえようと躍起になっているお燐さんを逆に捕まえてあの形の良い胸の中でニヤンニヤンしてやるんだ!」

「なるほどな、こいつらも一枚岩じゃねえって訳か?」

「だったらどうにかなるかもしれねえな……」

「よし、来てくれよ? ここに捕まえてニヤンニヤンしてやるんだ! ニヤンニヤンニヤンニヤ…… 阿保終え亜 d f s どえええ……」

「あ、さっきのバカが逆に後ろから捕まって絞め技で落とされやがった。」

「これはチャンスだな。後で助けてやって、美味しい事利用してやるとするか?」

さっさと出たいところだが、ここはしばらく我慢だ。

勝負に出るのは………

搜索範圍が外にまで広がるだろう翌日以降だ!!

坂本 s i d e e n d



土屋 s i d e e n d

「うおおおおおおおおおおおお!?!」

いきなり謎の裂け目に飛ばされて数分後に俺は薄暗い部屋に落とされていた。

どうも薄暗くて良く見えないが、中はとても散らかっている。ボロボロの人形やボールなどの遊び道具が散乱し、まるで聞き分けの無い子供が暴れたかのような……

「……ここは、何処だ？ ……さっきの裂け目を作った美女は一体？」

ここで立ち止まっていてもなにも始まらない。とにかくココを散策しよう。

一緒にいた雄二や秀吉に会えるかもしれない。

「……取り敢えずこの部屋から出よう……」

「うーん？ ……誰かいるの？」

はっ！ 何だと!? 中に人がいても気付かれないように音すらも消していたというのに……

「おにいさんはだあれ？ どうしてこんな所にいるの？」

俺はいつの間にか後ろに下がっていた！ 気が付いたら飛び退いていた！

本能とか反射なんて言う分かりやすい物じゃない！ いや、それもあつたかもしれないが、自らの肉体そのものが加速して超スピードで動いていたかのような気分だ！

「もしかして、私の新しいお人形さん？」

……だが、そこに居たのは七曜に輝くきれいな羽と煌々と輝く赤い瞳の女の子。

……その片手には可愛らしい装飾が飾られたクマのぬいぐるみを持っていて、本当に可愛らしい。

……そんな美少女が無邪気な笑顔で訊ねて来る。

……地下室の美少女…… さっきまでの俺だったら鼻血を噴いて気絶モノだったはずなのに…… なぜだろうか？

……この少女の前ではなぜか動悸しか走らず、心臓が握り潰されそうな圧迫感しか襲って来ない……

……この俺が興奮するならまだしも、恐れているというのか？ この幼い少女を相手に……

「あれ……？ 違うのかな？ ま、そんなのどっちでもいいよね！ おにいさん、一緒にあそびましょ？」

「……遊び？」

「わたしのなまえはフランドール、ずっとここに閉じ込められているの……」

フランドールと名乗った少女は突然俺と距離を取る……

一体何の遊びをする気なんだ？

鬼ごっこなんかで済めばいいんだが、この子の放っている殺気がそんなものでは済まないと告げている!!

その証拠にある程度離れた所で急に止まったあの子の手の平から奇妙な光が放たれて……って！

「…………くっ！」

咄嗟に彼女の放った光弾を避ける！ あの光弾は何かがおかしい！ 一発だけ掠つたが、服が完全に消滅している！

「あはは！ よけたよけた」

「…………フランドール。 ……一体何をやる！」

「嬉しいな。 お人形さんはみんなわたしの事を“化け物”とか“クソガキ”ってしか呼んでくれなかったから、おにいさんみたいなお人形さんはめずらしいかも？」

……なるほど、この子はなにも教えられていないのか。 ……人を傷つけてはいけな  
いって言う常識とか本来持っているべき倫理感と呼べる物を！

「わたし、ずっと退屈していたの…… お姉さま達やパチエ達は遊んでくれないし、お人形さんはすぐに壊れてしまう」

フランドールが抱えていた人形がバラバラに爆発した!? どれほどの力を籠めればそんな事が起こせるんだ!!

「わたし、おにいちゃんであそぶ！」

「…………フランドール、“みんな”って言うていたな？」

「うん、それがどうしたの？」

「…………お前はそう言っつて、何人もの人間を殺してきたのか? ……すぐに何かの冗談だ

と言うのなら、すぐに取り消せば……」

「ううん、遊んでいたらみんな勝手に殺されていったの…… お姉さまもパチエもみんなもそう……なんで壊しちゃいけないの？」

「……常識を知っていけば分かる事だろう？」

「常識……？ それは誰が決めたの？ そう言う規定って誰かがまとめた物が存在するの？」

「……確かにこうあるべきだと本に記されたりしているモノでもないが……」

「ならいいじゃない。何より、わたしが楽しいんだから」

……これで確定だ。 ……あまりにも幼い言い分。

……善悪の区別その物が全くつかない子供そのもの。

……何かに不満を抱え、それに対して反抗して駄々をこねているかのような……

（……この子は完全にネグレクト（教育放棄）されているんだ。 ……だから知らない。

……気付くことの辛さや悲しみが……）

……先程までのやり取りで俺が感じた印象はこんな感じだ。

……俺に出来るかは分からない。 ……だが、放っておくことは出来ない。

「おにいちゃん？ ようやく遊んでくれる気に……」

土屋がフランドールの前まで歩み寄る。

「……ああ、遊ぼうか？」

「え、ホント？ それじゃア……」

……やはり、喜んで手をあげようとしてきたな。 ココで！

「……ただし！ 人を傷つけるような危険な遊びはナシだ」

「だから、どうしてダメなの？」

……よし、疑問に思ってくれた！ ……きつきから思った事だが、確かにこの子は常識がないかもしれない。

……だが、非常に聞き分けがいい子の様にも思えた。 ……そうでなければ、俺は会話そのものが成立せずにすでにこの世にいなかったかもしれないんだ。

「……お前、大切な人とか仲のいい人っているか？」

「……いるよ……」

……よし、脈絡のない質問に納得していないながらも答えてくれた。 ……これで確定的になった。

……この子の事は話し合いで解決できる!!

「……その人は、今からやろうとしたことと同じことをされて喜ぶような奴なのか？」

「魔理沙を馬鹿にするな!! 遊びとかじゃなく本気で壊すよ!!!」

……なっ、怒鳴っただけだというのに床や壁に亀裂が！

……恐ろしい程の力だな。……だが、ここで退くわけにはいかない！

「……そうか、喜ばないんだな」

「当たり前だ!! 何を言ってる……」

「……そう、当たり前のことなんだ」

「えっ?」

「……そんなことをされて喜ぶ奴なんて居ない。……今キミはそれをしているんだ」

「……あ」

「……自分がされて嫌な事をしてるお前を見て、お前の大切な人は喜ぶと思うか?」

「……よろこばないよ。でも、遊びには付き合ってくれるから……」

……スカートの裾をつまみ、うつむき気味になりながらもフレンドールは答えてくれた。  
た。

……この子はきちんと大人しく話を聞いてくれている。

……ちゃんと正そうとすればきちんとわかってくれる子なんだ。

……確かに強烈すぎる殺気とキャラクター性故に目をそむけたくなる奴らの気持ちも分からなくはない。

……だが、そうやって気持ち悪がつて隔離して、それで一体何が変わる?

……いや、なにも変わりはない。むしろ悪化して狂っていつて最後には……

「……なら、もうわかるよな？」

「うん…… ごめんなさい……」

「……もう気にしていない。 そう怖がらなくてもいい」

……ちゃんと謝れるのなら、もう大丈夫だろう。

……出来る事ならさっさと帰りたいたいところだったが、その前にこの子の家族を一度問い詰めよう。

……こっちは命まで取られそうになったんだ。 かるく土下座でもさせてやらないと気が済まん!!

土屋 s i d e e n d



秀吉 s i d e

「なんじゃココは…… とても汚い部屋じゃのう……」

どうやら女子の部屋のようじゃが、とにかくだらしがないにもほどがあるぞ。

どうやら書籍部屋のようじゃが、姉上が呼んでいるようなBLモノの同人誌が乱雑に放られておるし、空気もよんどんでおって少々吐き気がしてきたわい……

どうやら向こうから出られそうじゃから、急いでここを出よう……

家主に見つかつたら大変な事になる。

「な、なんじゃこの部屋は!？」

扉を開けた先には先程とは非にならんほどの汚い部屋がそこにはあつた!

いい加減に干された女性モノの下着、溜まりに溜まつた洗濯物の山、適当に並べられ、今にも落として割つてしまひそうな高級そうな食器の山!

挙句の果てには、袋にして何枚程必要になるか分からないゴミの丘!!

正直、姉上も家ではだらしが無いが、これは流石のワシも見たことが無い酷い光景じゃ……

「い、急いで脱出じゃ! こんな所にはいたくないのじゃ!!」

とにかくこの家? から脱出する為にも大急ぎで扉を開けて回った!

しかしどこもかしこも似たような状況の部屋ばかり。 本当に出る為の扉が無いのかと思つて開けようとした最後の扉……

「「……………え?」」

扉の先にいたのはおそらくこの家の者であろう少女二人であった……

一人は学園でもそうそう居ないであろう程のきれいな女子じやつた。

ワシ程女性像が屈折しておらん限りは男が言い寄つてきてやまない程じゃ……

弄りがいがありそうな幼さが残りながらもとても美しい容姿、腰まで届く青色のロングヘア―、その上に綺麗な桃の実と葉に注目が行きそうな帽子、掃除中だったのか? 若干汚れ気味だがロングスカートの前には極光の飾りが付いたエプロンを装着しておる。

一方の女性は元々の容姿云々はともかく、とにかく酷い物じやった。

下は下着一丁で、申し訳程度によれよれのパーカーを着込み、髪はボサボサで寝ぼけ眼でだらしない……

寧ろどうやったらかこまで酷いありさまになるのか、逆に聞いてみたくなる程じやった……

「ああ、ちょうど良かったわ！ あんた緊急で呼び出したお父様からの使いでしょう？ さつさと掃除手伝いなさいよ」

「はあ!? 一体何を言っておるのじゃ!! ワシは……」

「はい、じゃああそこのごみの山、全部袋にまとめて外に出しておいて」といきなり言われて大量のごみ袋を押し付けられたワシは仕方なくそのゴミの山の対応に追われってしまった。

この様子だとしばらくの間ともに話は聞いてもらえんじやろう……

そう思ったワシは仕方なく、このゴミの丘を処分すべく作業に取り掛かろうとした。

その際に「あ、この手袋忘れてたわ。割れた酒瓶も混ざっているから指斬らないように気を付けなさい」といわれて手袋まで渡されたが、一体何日放置すればこんな挙句になるのじやろう……

そう思いつつも、ここは仕方なく作業を開始した……  
ここは一体何処なのじゃ……？

秀吉 s i d e e n d

やりようの無い怒りは何処へと向けるべきですか? ???

……フランドールと名乗った女の子の部屋に落ちて、命を狙われたもののどうにか説得に成功。

……事情を聞くと、この子はとても強力な力を持つ吸血鬼で、「ありとあらゆる物を破壊する程度の能力」と呼ばれている力を持っているらしい。

……話相手になってくれた存在が増えた事が嬉しかったのか、少しだけ過去を語ってくれたが……

「……そう言う事か。……確かに、その話が本当なら外へと出るなど言いたくなる」

……フランドールの話が本当ならば、誰のせいにするか分からないか分からなくなってくる。いや、もしかしたら誰も悪くは無いのかもしれない。少なくとも俺としてはこんな小さいのにも関わらず、重荷を背負ってしまったこの子を責めたくはなかった……

当時はまだ破壊の能力そのものを持っていなかったこの子は小さな人間の村を守る吸血鬼“兼”魔法少女として有名だった。

まるで女神の様に崇められ、自分を慕ってくれた村人の悩みをいくつも解決してき

た。  
水害が起きて川が氾濫しそうになった時には“魔法少女”として豪雨に耐えながらこれまでより堅牢な護岸ごがんを数秒で作り、村の水没を防いで見せた。

他国からの侵略者が村に襲い掛かって来た時、“吸血鬼”としてすべての侵略者を撃退して村からの死者を出す事無く皆を守り抜いて見せた。

どさくさに紛れて、侵略者である人間の内の何人かを“情報を引き出す”という名目で拉致して食料にもしていたようだが、その点にだけ目をつむれば間違いなくこの子は幼くして英雄として相応しいだけの優しさと愛情を持ったいい子であった事がうかがえた。

だが、それもその時の世代までの話だった……

人間の時代が一つの世代を越えた頃、ある謎の怪事件が勃発したのである……

“フランドールの偉業を神話の様に語った人間”達が忽然と姿を消したのだ……

フランドールの目にも、村人全員の目にも映らずに、まるで“神隠し”に会ったかか  
様に……

その頃にはフランドールだけではなく、村人から選出された独自の自警団も作られ、もう少してフランドールの力に依存しなくても十分に村を守れるようになる」と期待が高まっていた時期でもあった……

彼女も油断しているつもりは無かった。自警団の皆も当時の国家でも最高レベルの警備網を構築し、ただの村とは思えないほどの防衛力を誇っている。

そんな中で起こった失踪事件。流石にこの異常現象には皆頭を悩ませた。

フランドールが事件解決の為に動いたと噂が流れる度に消えて行く村人達。共通する点と言えば“フランドールの英雄譚を語り、彼女を神格化する発言”をした者ばかり。捜査を続けて行くうちにある情報が入ってきた。『影のような物が一瞬で人を呑み込んだ』……と。

その情報を元にフランドールを含めた自警団全員で捜索に当たった。だが、結果は散々なもので手がかりが発見出来ずに撤退せざるをえないと言う最悪な展開だった。

皆をあざ笑うかのように徐々に消されて行く村人達。村に送り込まれたスパイのような存在が居るのかと思ひ、自警団の中から何人か選出して村を離れての調査に向かったが、自国を含めたすべての国がシロ。むしろこの村に攻撃した者は“皆呪われたかのような残酷な方法で殺される”とまで恐れられ、自国内でもこの村だけは重税を掛けられなかったというほどだ……

その頃になってフランドールは姉にも相談し、快く協力してくれた姉が友人のツテや当時の部下を使って独自に調査を進めていたが、そちらの方でも全く進展が無かったらしく、いつも自信満々で傲慢不遜な姉が珍しく頭を抱えてヤケ酒ならぬヤケ血を煽っていたそうだ……

捜査が進展しないまま数か月…… ついに村人の7割が消え、村長と自警団の判断で村人を近隣の村に避難させようと言う話が出て来た。

事件を解決できずにいたフランドールは村の土地への愛着もあつて最初は反対したものの、村人達の安全を優先したいという言葉に何も言えなくなり、結局村を放棄する羽目になってしまった……

その翌日、自警団のメンバー3人とフランドールを除いた全村人が消えた…… フランドールにとつても訳が分からなかった…… 自警団の皆も困惑していた。村長の判断で敢えて予定を早めて避難したのかと思つたフランドール達は残つたメンバーを二人一組に分け、危険に対しては逃げる事を基本方針としながら近隣の町や村を回つて来たが、どの町や村にも「村人達は来ていない」と返されてしまった。

失意に暮れる皆は、一度手がかりを求めて皆村へと戻る事となつた……



だが、戻って来るメンバーが足りない…… みんな方向性こそ違えど、一つの分野において人間レベルなら最高峰の能力まで発現し、その範疇ならフランが居なければ彼らが伝説クラスの英雄や偉人として名をはせるだろうと思える実力を持った本物の精鋭達。

そんな精鋭が一人で油断している時に暗殺されるならいざ知らず、自身の安全を優先しながらチームを組んで警戒している状況で敵にやられるという事が起こりうるとは思えなかった……

流石の自警団員たちもこの恐怖に逆らえずに騒ぎ出した。

恐慌状態に陥った自警団員の一人が全霊力を使ってその場からどこかへと逃げ出した。

集会所の門を蹴り開け、子供のような悲鳴を上げながら曲がり角を曲がったその瞬間だった……

彼の姿が見えなくなった瞬間……彼の悲鳴が”完全に消えた”……

そこから出て来たのは謎の”闇”そのものだった……その闇はあまりにも気味がわるかった……

“狂気”とか”怨念”などと言った負の感情が収束したとかそんな分かりやすい物では無い。フランの持つ魔法少女としての知識においてもあのような”モノ”の存在など聞いた事が無かった……

この闇に自警団員の内、隊長格の少女を除いた残りのメンバー3人が自身の能力を全力で振るい、全力全開・手加減なしの攻撃を放った……

だが、「銃を扱うスキルの全てを支配する程度の能力」を持った銃使いの聖なる弾丸を全弾必中させても、「伝説の武器に選ばれ、完全に使いこなす程度の能力」を持った暗黒騎士の呪われた魔剣による最強奥義によって切り裂かれても、「森羅万象（火・水・木・

金・土)を操る程度の能力」を持った東洋の島国から追放されて流れ着いた大陰陽術師の封印術も、全てが意味をなさなかった……

攻撃を受けた闇は、すこし震えたかと思つたその瞬間、攻撃してきた3人を一瞬で“消滅”させた……

フランドールは恥も外聞も無く激昂して喚き散らしながら自身を太陽光から守る事が出来る魔法を行使し、隣にいた自警団長の少女の手を引きながらその場から逃走した。

とにかく、最後に残つたこの少女だけでも守らないと…… そんな気持ちでいっぱいだった……

だが、無情な事にフランドールは体の4分の1程、少女に至つてはその闇によつてフランドールが掴んでいた手を除いたすべてを吞まれて消滅させられてしまった。

結局、その一瞬に気が付かないまま紅魔館近くの森まで逃げたフランドールは絶望していた……

一世紀にわたつて守り抜いた村人を諷が分からないまま消滅させられてしまった上に、最後に残つた一人の少女でさえ守れなかった現実……

それを“信じられなかった”フランドールは吸血鬼として禁じられた行いを試してしまふ……

己の血を少女の右手に流し込み、その血が持つ驚異的な再生能力を使って少女を自身の眷属として蘇生させるといふ自分本位の勝手なワガママを……

結果から言つて、蘇生は成功した…… 吸血鬼の血がなせる業なのか、フランドールの想いが生んだ奇跡だったのか、それは分からないが、蘇生には、成功した……

フランドール自身、最初は助けて貰えたことを感謝してくれるだろうと思つていた。とにかく、大切にしていた“仲間”を助ける為の“善行”を積んだと信じて疑わなかった……

だが、すぐにそれが勘違いだったと思ひ知る事になる……

“守護神”の様に信仰すらされていたフランドールの本質が少女を蘇生させてしまった事で露呈してしまつたのだ。

フランドールが神ではなく吸血鬼と言う“化け物”でしかないという事に……

そこからは完全にその少女との関係は破綻していた。事情を知り、激怒して殴り掛かつた姉の言葉でようやく自身の過ちに気が付いた。

そんな姉の仲裁の元で少女へ謝罪を繰り返し、どうにか仲直りが出来ないかと説得しようとしたが、全く耳を貸してくれない。

それどころか「自分を唯の化け物にした癖に!」とフランドールへ怒鳴り散らし、どこから手にしたのか? 聖水や銀の弾丸まで用意して攻撃してきた。

それでも諦めずに謝り続け、説得も重ねてきたが、それも虚しく説得から数日後……

少女は人間の大都市にて政府の高官を襲撃。自身の事、フランドールの事もすべてを喋り表向きには処刑、裏で本物の神の加護が込められた退魔の聖水を一気に飲み干してシヨック死したという……

最後に紅魔館に送られた彼女の遺書には守れなかった仲間への謝罪とフランドールへの恨み言がびっしりと書き込まれていたと言う……

そこからフランドールは狂ってしまった…… 紅魔館の地下に閉じこもり、最初の数年は食事もまともに取らず、魔法少女としての魔法もほとんど喪失した代わりに「ありとあらゆる物を破壊する程度の能力」が発現。

その頃には完全に人格が狂気に満たされ、ちよつとしたことですぐに能力が暴走…… 決定打となったのはフランドールの情報を聞きつけた当時の教会のエクソシストやヴァンパイアハンターを名乗る騎士団が紅魔館に攻めて来た時だった……

一時期姉が籠城戦を決め込んでいた物の、最終的には暴走したフランがたった一人で

全ての敵を遊び感覚で皆殺しにして一掃……完全に壊れた妹を見て危惧した姉は友人や部下と共にフランを強引に取り押さえる。

その力を恐れて説得を諦めた姉は友人に頼み込んでフランを地下室に監禁。複雑な結界を用いて封印を用いて出られないようにしてしまったという……

「……………予想以上に重いんだが」

「おにいちゃん、わたしのことがこわい……う？」

“完全に嫌われた”、いや、“怖がられた”……そう思ったのかフランドールは怯えながら俺から距離を取ってしまった……

あれだけの事があったのならば仕方が無いのかもしれない……

「……………少しだけな」

「うえっ……………ヒック……………うえええん……………ゴヴェンナザイ……………キライにナラナイデ……………友達もいなくなつて、お姉様やパチエにも見捨てられて……………もう……………私が死ぬば良いのかな？」

しまった！ 今のは失言だったか!?! だが、ここで嘘を言つても情緒不安定なこの子がどうなるか流石に予想が付かないんだ……

「……そういう事を言うな! フランドールが狂ってしまった理由を聞いたなら正直少しだけ怖くなったのも否定はしない! それでも昔のフランドールがいい子だと知っている分、安心してもいい」

「ほんとうなの? 嘘じゃ無いよね?」

「監禁する前は本当に危険だったかもしれない…… 外に出せばトラウマが邪魔をしてまた狂ってしまうかもしれない…… けど!」

「……もう、防げなかった事件に関しては今責めても仕方がない。……唯一の失敗もフランドールは反省しているし、大切な人が出来た以上暴れたくなくとも思っている。なら、これ以上何が必要なんだ?」

「えっと……」

「……言い激むか。……この辺はまだ小さい子供なんだな。……常識とかに関して

では少しずつ外に出られたら学んで行けばいいだろう。」

「……ただ、今回は俺が教えてやった方が良さそうだな。」

「……迷惑かけてしまった家族みんなに“ごめんなさい”だ。……本当に反省しているなら俺も付いて行くから二人で一緒にそのお姉さまとやらの謝りに行こう」

「いいの? おにいちゃん? もし許してもらえなかったら……」

「……気にするな」

「それにうえにあがったらいるのはお姉さまだけじゃない。パチエやめーりにさくやまでいるんだよ？ おにいちゃんにもしもの事があつたら……」

「……いきなりここに落とされた地点で上の人間に見られる危険は高かった。……こうするのはあまり変わらない。……寧ろ動く為のいい口実になる」

「さくや以外はみんなにんげんじゃないんだよ!! そのさくやにしたってにんげんじやかんがえられない能力を持っているんだよ!？」

「……なら、気を付けないといけないな」

……結局外に出る為にはこの部屋から出ていかないと出られない。

……文月学園に帰って急いでUSBメモリを回収して写真を作らないと……

……ムツツリ商会の未来の為に!!

……その為にこの子の問題を解決しないといけないというのなら、それだけでも命を賭けるに値する!

「ありがとう…… おにいちゃん」

……上目遣いでこつちを見て来るフランドール

……耐えろ! 耐えるんだ! ムツツリスケベはうるたえないっ!!

「……土屋康太」



「え?」

「……俺の名前だ。……あだ名で呼びたければ”ムツツリーニ”でもいいぞ?」

「ありがとうムツツリーニおにいちゃん。改めて、わたしはフランドール…… 皆は

“フランドール”って呼んでくれてるよ?」

……フランドールか。……いい呼び方だな。……今後はそう呼ぶか?

「……そうか。……ならフランドール、ここを出るにはどうすればいい?」

「えつと…… この扉を開ければ階段になっているからそこを登ったらおつきな図書館になってるんだ。そこから先の廊下を道なりに進んで行けばエントランスに着くからそのまま外に出られ……」

「……いや、外に出る前にフランドールのお姉さんと話したい。……まずはそこに向かう」

「うん! 結果を物理的に破壊するからちよつと下がって!」

……フランドールに促された俺は少し後ろに下がる。

……そのフランドールは何かを凝視しているが、そこから何かの点がフランドールの手の平に集まっている?

「きゅつとして…… ドカーン!!」

うおつ! フランドールが何かを握りつぶした途端に部屋の壁とドアが破壊された!?

裏側には何か陣のようなものが書かれていた跡が残っていたが…… この能力はこ

ういう使い方をするのか!?

「いこつ! ムツツリおにいちゃん!!」

「うおつ!」

凄い力で引つ張られていく! ……だが、今度は加減が出来ているようで、まるで小さかった頃の日向を思い出す……

……せっかくだ。 ……この子の問題は絶対に解決して見せる!

???  
side

「どうかなされましたか？」

「……いえ、地下にいるフランの封印結界が破壊されたみたいね……」

階段の先にある大図書館。そこには大量の本を片付けるべく走り回っている少女と、それよりも若干年上だろうか？ 紫の縦縞を基調とした服が似合うお姉さんの姿がそこにはあった……

「え!? それって大丈夫なんですか？ 一度レミリア様に報告を入れておいた方が……」

「ええ、お願いするわ…… 私はここで待ち構えて迎撃するから、とにかく急ぐように伝えなさい」

「分かりました、パチュリー様！ ムリはなさらないで下さいね？」

「……ええ、そうしたいところだけど、それは出来ない話みたいね」

「ええ!! なぜですか？ いくら妹様が強いと言えど、パチュリー様はそれ以上の魔法力、寧ろ勝つてしまわれてもおかしくないのでは？」

「索敵の魔法を使って見てみたのだけど、今回はフランだけじゃない……」  
「え？」

「ドブネズミが一匹紛れ込んでいるわ。間違はなく、この子が今回フランが外に出ようとした理由ね」

「もしかしたら外来人でしょうか？ 保護するという名目で私が捕まえておきましょうか？」

「よしなさい、こあ…… こいつ、なにか嫌な予感がするわ…… フランがなついている理由は分からないけど、私が迎撃する以上の刺激は与えないでおきましょう」

「分かりました…… では、そろそろ行ってきますね」

「お願い……」

こあ（小悪魔だから）が大慌てで外に飛び出していく。

今この場にいるのは魔法陣を展開し、迎撃態勢に入る少女が一人だけである……

「来るなら来なさいフラン…… 貴方の事は嫌いじゃなかったわ…… 狂気から助けられなくて、本当にごめんなさい……」

もう救えないというのならせめて私が終わらせてあげろ。レミイの手を妹の血で汚させたくは無いから……」

135 やりようの無い怒りは何処へと向けるべきですか? ???

パ  
チ  
ユ  
リ  
|  
s  
i  
d  
e  
  
e  
n  
d

## 1 日目

天界は今日も平和です……（遠い目） 永江衣玖

「…………ごめんなさい」

「天子、衣玖…… お前らは本当にバカか!! 特に衣玖!! 我らが主たる竜宮の使いであるお前だけは天界では唯一まともだと思っていたんだがな?」

「毎日毎日仕事が忙しくて、掃除なんてしている暇なんて無いんですよ? 私は独り身何ですからしょうがないじゃないですか?」

「そうよそうよ! こんな事件を起こされたくなかつたらわたしと衣玖との結婚を認めてもいいじゃないのよ!!」

「いくら恋人同士だからってやっていい事と悪い事があるだろ! いや、お前らの関係を認める気は無いんだが…… って、なにさりとお前らの奇妙な関係を認める要求してるんだ!」

「あ、あの……ワシは別に気にてはおらんから、この辺で……」

なぜワシはパシリにされたにも関わらずこの二人を庇っておるのじゃ?

あれからも「注文した昼の弁当が下界から届くからそれを受け取って来い」と言われ

て使いに出されたり、「わけのわからん生物を入れる籠を取って来い」と言われては天子（てんし）と呼ばれておる青髪の少女に尻を蹴られ…… 挙句の果てには「洗濯物が乾いたからさっさと畳め、シワになったらオシオキだからね！」と言われて見知らぬ女性もその下着を含む衣服のすべてを畳まされたりと散々な目に会ったのじゃ……

そこをこの青髪の娘のお父様に見られて大騒ぎ…… 言い訳をするこの女子二人がゲンコツを喰らつて正座をさせられておるのじゃ……

因みに衣玖殿は流石に服を着せられておるぞい？ あんな不埒な格好で延々と正座など普通に考えれば虐待のそれと変わらんからのう……

「毎日きちんと掃除をしておればこんなことにはならんだろう？ その気になればお前ならならもつといい男を見つけてそいつに掃除くらいさせられるんだから……」

なんだか妙な方向に説教が向かってきておるのう。多分この様子じゃとこの二人は全く聞いておらんじやろう。

青髪の女子もボソボソと小声で愚痴っておるし、この調子じゃと今後もこう言う事が起こるんじやろうなあ……

……  
これ以上の面倒事はごめん被るわい。説教に気が向いている最中にここを離れ

「そうそう、木下君といったね？ 今日はまだもうこんな時間だ。せつかくなのだから今

日はここに泊まっていくと良いだろう。今、私の使いの者が君の部屋と食事を用意してくれているから、良かったら遠慮なく食べて行くといい」

……ようとしたのじゃが見事に失敗してしまったのじゃ。

まあ、善意で夕食と部屋を用意してくれるのだし、せっかくだからいただこうかのう？

いきなりあんな目にあつて、流石に疲れたぞい…… 電話が通じたら姉上に家に泊まる旨を伝えんといかんのう……

そう思つてケータイを取り出して連絡しようと思つた矢先に、使いの服を来た女性が案内してくれるそうなので、連絡は後にすればよいと思つて開くことなくそのままポケットにしまい直した。

この時、少しだけ待つてもらつて姉上に連絡を入れようとするべきじゃつたと後悔する事になるとは微塵も思つてなかつたのじゃ……



another story 天子・衣玖side

いつの間にか先程の爺や言葉の女の子がいなくなっていますね……

この空気から察して、いなくなつて2時間と言つた所でしようか？

足の感覚がなくなつてきたと思いましたが、もうそんなにも時間が経つていたので  
すね……

「そう言えばあの娘は一体誰なんだ？ 天子、最近あのような娘を下界から雇つたりしたのか？」

あれ？ あの娘お父様の使いじゃ無かつたの？ 命令したらそのまま普通に掃除し

てくれてたからってつきり私が勝手に動かした使いだと思っただけだ？

衣玖にサインを送って聞いてみたけど、全く心当たりがないってしか返ってこないし

……

「おい、なぜ二人共そんなに冷や汗を掻いている？ その微妙に手元が動いているのはなぜなんだ？」

「いえいえいえ！ 何でもありませんよ？」

「天子、お前もなんでここだけに急に敬語になるんだ？」

危ない危ない…… ハンドシグナルでサインを送り合っていたのがばれるとは思わなかったわね……

こくなつたら……

『……衣玖？』

『……総領嬢様』

緊急時に総領嬢様と開発した瞬きを中心に組んだモールス信号で会話をする事に……

どうやら総領嬢様も同じ考えの様ですね……

「逃げるわよ!!」

「あ、こちらー！ ちよつと待て!! 全員！ あのバカ二人を捕らえろ!! ケツ引つ叩き直して、食事抜きでオシオキ部屋に放り込んでやる!!」

「ちよつ！ 飯にも娘に何する気なのよ!! そう言うオシオキは3歳を最後に卒業するモノでしょ!？」

「お前らのバカさ加減を考えたらむしろ優しい方だ!!」

この歳になつてお仕置きが尻叩きなんて冗談じゃないわ！ 絶対衣玖と共に逃げ切つてやるんだから!!

明日には下界で騒がれている変なボールについて調べに行くんだから絶対に邪魔なんてさせないわよ！

「総領嬢様！ お願いですからおとなしくしてください！ 今捕まってくれるなら総領様に黙つてこつそりと食事はお持ちしますし、衣玖殿と一緒にの部屋を用意しても良いですから!!」

そんな単純な手に引つかかると思っているのかしら！ あんまり私を馬鹿にするんじゃないわよ!!

あ、衣玖がいつの間にか前で大暴れしてる…… なんかいきなり「疾風迅雷」とか言つて超高速移動までしてるし……

「衣玖さん、こういう時だけ滅茶苦茶早いですね!! 天界史上最速を更新できそうです

よ!？」

総領様が放った敵がなにか言っていますけど、ここは無視で良いでしょう。

ああ…… 総領娘様の桃のような甘い匂いが掃除で疲れ切った私の体に活力を与えてくれます!

ココはもうあれですね、『愛する総領娘様との逃避行を遂げたのちに、二人で愛を深め合う時間を確保せよ』という竜神様の御意志なのです!! (ぜんぜん違います)

「待つてくださ〜い……」

「なんでこういう時だけ凄く身体能力を発揮するんだよ…… あれだけの容姿と才能に恵まれているのに……」

『天才とバカって紙一重』って言葉が下界にあるらしいけど、あの二人を見ていたら納得がいくよ…… オレらじゃ束になっても敵いやしねえ……」

ふっ! どうですか? これが二人の愛が成し遂げる『絆の力』です!

誰かに使われているだけの小間使い程度がどうかできるとは思わないでください!!

「天子様! お願いですからおとなしくお部屋にお戻りください! 我々は別に大人しくしてくれるなら衣玖さんと付き合おうが結婚していようが、ハーレムを構築していようが別にいいんですから!! エロネタが増えて寧ろ我々にとってはご褒美ですから

……」

「うるさい！ アンタらの趣味なんてどうでも良いのよ！！ 確か男はコッチが弱いのよね！」

「喰らいなさい！ 総領嬢様直伝のタマ蹴り術を！！」

「「ありがとうございました！！」」

うわっ……気持ちわるっ……

私と衣玖の金的を喰らっているのにむしろ悶絶しながら恍惚とした笑顔でお礼言うって……

私よりこいつらの方がイカれているんじゃないの？

「よし、総領嬢様！ ここは何が何でも逃げ切つて見せますよ！」

「ええ、こうなった以上絶対に逃げ切つて逆にお父様に私達二人の愛を認めさせてやる！」

「その為に、まずはあの木下とか言う女の子を人質に取る！ そして一度下界に逃げるわよ！！」

「ふいふ、なんだか申し訳なくなってきたのう…… 迷惑をかけたお詫びだと言つてあんなにも豪勢でおいしい料理を振つてくれたとは思わなかつたのじゃ。特に鮭をスパイスで味付けしてパイ生地で包んだあの料理は絶品だつたのじゃ……」

とは言つても、流石に色々ありすぎて疲れたのう…… シャワーも浴びた事だし、姉上に連絡を入れて寝る事にするのじゃ…… ここまで遅くなつてしまつたのじゃから姉上は憤慨するに決まっているが……

まあ、そこは連絡を遅らせてしまつたワシのせいじゃから仕方ないのじゃろう…… 一度、ケータイを取り出して開いてみる。 じゃが、姉上にいくら電話をしてみてもなかなかつながらない。

どれほど電話を掛けても圏外と言う案内が出て来るのみ……

今いる場所が屋敷の奥深くなのだらうか？ と思つたワシは一度外に出て掛け直そうと思つていたその時じやつた……

「人質を確保おおお!!」

「な、なんじゃ！ お主ら一体何がどうなつて…… のあああああ!!」

いきなり現れたのは先程まで説教されておったはずの二人ではないか!?

まさか、あれから説教に嫌気がさして逃げ出しおったのか!?

なんて行動力じゃ…… まるで明久と雄二を思わせるような行動力じゃのう……

呆れを通り越して関心すらするぞい……

「総領娘様！ 人質を確保しました！」

「よし、このままこいつが案内された部屋に隠れるわよ！ そののちに下界に逃げてそこでこいつを博麗の巫女に押し付け、適当に二人で暮らす家を確保するのよ」

な、何をかんがえておるのじゃ!? あらかた二人の関係を否定されて大喧嘩に発展したとかそんな所じやろうが、やり過ぎではないか!?

「お、落ち着くのじゃ二人共!! そんな事をしてもすぐに見つかるだけだぞい！ 一体何を言われたのかは知らんが、ここは落ち着いて話し合いを……」

「アンタが外人人なのが問題なのよ!! 私達が下界に連れてアンタを元の世界に戻す手伝いをしてやるから黙ってここは人質になってなさい!!」

「ちよつ、話がつながっておらんぞ!! なぜお主らの人質になる事が元の世界に帰る事につながるのか? それ以前に元の世界とはいったい何のことなのか、訳が分からないのじゃ!?!」

「いいからここは大人しくアンタが案内された部屋を教えなさい!! じゃないと尻をぶつ叩きまくって電流でも流し込んでやるわよ!!」

なにはた迷惑な事を考えとるのじゃ! ……この者のお父上には申し訳ないが、わたしも自分の身が可愛いのじゃ。

ここはおとなしく人質になっておくのが賢明なのじゃ……



「なるほど、お父様ってばこんないい部屋をアンタに回したのね…… 私の部屋はいろんなもので埋め尽くされているって言うのに……」

「ここ以上に広い部屋をいくつも持つているのに何が不満なんですか？ しかもその内の一つは下界から取り寄せたって言うSMグッズとやらでいっぱいになっているから狭く感じるだけで、むしろ総領娘様の持ち部屋のなかで一番広いじゃないですか？」

「……もう、ワシはツツコミなど入れんぞい」

先程からこの二人が関わりと碌な目に会わないのじゃ…… 姉上に電話しようとしても全然通じないし、一体何がどうなっているのじゃ？

「そのへんの無駄話は一旦終わり！ 衣玖、こいつを適当に見張っておきなさい。逃げ出すようだったら口ふさいで高圧電流でも流し込めばいいでしょ？」

「それは構いませんが、何処に向かうおつもりですか？」

少しはワシの命の安否も気にして欲しいのじゃ！

「緋想の剣（ひそうのつるぎ）を取りに行ってくるの。あれがあれば見つかったも相手の弱点ついて瞬殺できる程度には便利だし」

「はあ…… 緋想の剣を手に入れるまでは見つからないで下さいよ？」

「分かってるって♡ その間にこれから向かう“幻想郷”についてきちんと説明しておきなさい。その娘も訳が分からないだろうから、ここいらできちんと説明しておいた

方が良いと思うの。もし外来人だしたら私的には面白くなりそうだしね」

「分かりました。では行つてらっしゃいませ」

衣玖に見送られ、青髪の少女はそのまま扉から出て行つてしもうた。

しかし、幻想郷とな？ よくよく考えてみればワシは文月学園の屋上に行つてからここに来るまでの記憶が全然ないのじゃ……

これを機に何がどうなっているのか状況を整理するべきじゃな。

「総領娘様がいなくなつた事ですし…… 改めて自己紹介させていただきます。私は永江衣玖。先程出ていかれた比那名居天子様の恋人で、ついでに“竜宮の使い”と呼ばれている妖怪でもありますわ」

「……はい？」

正直、すぐには信じられなかったが、認めるしかなかった……

ワシははつきり言つて人のウソを見抜くのは得意な方じゃ。じゃからこの永江が何かの冗談を言つているというのならすぐにでも分かるなのじゃ。まあ、女子同士で恋人と言われても姉上の趣味であるBL本や、学園の女子の趣味嗜好のズレのおかげで大して気にするようなことでもないのじゃが……

だがしかし、もしかしたらこの者が天才的な詐欺師でワシの目すら欺けるほどの超人的な嘘の才覚の持ち主だと言うのなら流石にお手上げじゃ。

……だが、ここは信じる事を前提で話さねば何を言っても水掛け論にされて、話を先へと進ませてもらえない気がせんわい……

「ここは天界と呼ばれている、徳高き者達が住む事を許された一種の楽園なのです」

「楽園？ それにしては……」

「頭のおかしいバカが多すぎると？ それも仕方ありませんね…… 実際には、この天界の住人“天人”は大半がバカです。徳が高いと言えば聞こえは良いですが、その徳の積み方の大半は困難に対して愚直と言つてもいい程にまっすぐに立ち向かっていった結果によつて高まつたものですから……」

大体言いたいことは分かつたぞい。要は程度の違いこそあれど明久のようなタイプしかおらんという事なのじゃな？

あやつもドが付くほどの善人じゃがどうしようも無い程のバカでもあるからのう……

まあ、永江が頭を抱えておるが、ワシが見てみた限りじゃとはつきり言つて明久を超えるバカはここにはおらんじやろう……

あやつのはワシらの理解を遥かに超越した規格外な発想を何度も見せてくれたからのう……

「ただいまー！」

「総領嬢様！ ……随分と速かったですね？」

「前と全く同じ場所に置いてあるんだもん。 だったら前と同じ手で奪う事が出来るから寧ろ楽勝でしょ？」

そう言いながら比那名居は自慢げにしながらその手に挿んでおる片手剣を見せつけて来たのじゃ。

自慢気に掲げるだけあって、その剣はとても美しかったのじゃ……

緋色のきれいな刀身は光り輝いており、軽く振っただけでこの部屋の家具を簡単に切断して見せておる。

どうしても取りに行っておきたいと言いつ出すのも納得してしまったのじゃ。

「それで…… 説明は全部しておいたのかしら？」

「いえ、総領嬢様の御帰還が予想以上に速かったので、全部とまでは……」

「そう？ じゃ、後は走りながら説明するわ。 この壁を切断するから少し離れていな  
きゃ」

比那名居が部屋の壁を切り裂いた後に部屋を抜け出す羽目になったのじゃが、その後  
に永江から話の続きを聞かされたのじゃ。

1. この天界の下にある下界に幻想郷と呼ばれている地があるという事

2. だがこの幻想郷は様々な妖怪がいて、ワシのような普通の人間では簡単に殺され

てしてしまうという事（ましてや能力を持たぬ外の人間なら論外らしいのじゃ）

3. だが、下界にある博麗神社と呼ばれている神社の巫女“博麗霊夢”という少女ならば外の世界に帰してもらえるとという事

「分かった？ まあ、お父様は幻想郷や幻想入り関連の事件の事を殆ど知らないから、ア  
ンタに対して向けられている危険が全く分かってないのよ。 実際に一晩泊まってい  
けだなんて、行動遅いものにもほどがあるわ」

「むう……」

「……と、いう訳で木下さんはわたし達の手で迅速に博麗神社にまでお送りします。

天界で下界の電話なんて通じる筈ありませんし、ここで地上に降りればもしかしたら、  
貴方の持っているその“けーたい”とやらも通じると思えますよ？」

はつきり言つて、今のワシの立場からしてみれば殆ど役に立たん情報じゃ……

いくらワシの足が二人よりはるかに遅いからと言つて、横抱きで抱きかかえて言う  
のは勘弁してほしいのじゃ……

一応、ワシも男なのじゃぞ？

「木下さん、一度ここで降ろします。 今から下界に降りるのですが、木下さんは当然空  
を飛ぶことは出来ませんよね？」

「ワシはそんな超能力者ではないぞい……」

「幻想郷じや、空を飛べるくらい別に珍しくもなんともないんだけどね。じや、アンタ衣玖に背負ってもらいなさい」

そう言った比那名居が取り出してきたのは……

「なぜ荒縄を取り出すのじや!?! まさかこれでワシを引っ張って連れて行く気なのか!?!」

「そうですよ天子様! これほちよつと木下さんがかわいいそうですよ!! 肌に跡が残ってそれを見られたら絶対に変態女子と認定されちゃいますよ!?!」

あれ? 今、さらりとワシを女子扱いしておらんかったか?

「何言ってるのよ? これは衣玖の背中に木下さんを背負わせて、落ちないように固定する為に用意したのよ?」

「なるほど、そう言う事ですか…… それなら大丈夫……なわけないでしょう!! 私にも跡が残ってしまうじゃないですか!! 余計嫌ですよ!」

「いやいやいや、そう言う問題ではないぞ! 単にワシを持ち運びたいのなら普通に籠とか用意するっていう手もあったのではないのか!?!」

「……あ!!」

本気で思いつかなかったのか……

今更じゃが、この二人に大人しく流されるべきではなかったのやもしれんのう……

「まっ、今更過ぎたことを後悔しても仕方が無いわ。今はとにかく下界に降りるのが先よ」

「籠を取りに行く時間の方が惜しいしね」などと言い出した比那名居がいきなり剣を収めたと思ったら、ワシをいきなり抱え出したのじゃ……

そして、その眼前には丘のような物…… 一度下を覗き込んだのじゃが、間違いなくその下には雲と山のような大地……

ま、まさか……

「あ、あの比那名居殿？ ワシはやっぱり一度戻って明日、落ち着いてから帰ろうとおも……」

「もう遅くい!!（遅いですよ?）」

ココは“腹をくくろう”と覚悟を決めたワシは不本意じゃったがワシを抱える比那名居にこれでもかと言わんばかりにしがみついたのじゃ……

永江曰く、もしこの一瞬の判断が無ければ、ワシは簡単に振り落とされて地面でミンチになっていたやもしれんと言っておったな……

「いざ幻想郷にしゅっぱーっ!」

「大丈夫ですよ。なんだかんだ言っただ総領娘様がそのまま墜落したなんてことは

……… ありませんか………ら？」

「なぜココで疑問形になるの……… つて、飛び降りてから言うでな………ああああああ  
ああああ!!？」

この時のワシは人生で初めて本気の悲鳴を上げてしまったと思うぞい……  
なぜ？ ……と言われると、そうじやのう？

「あ、ごめん。衣玖く？ 悪いけど上から追いかけて来るバカ撃退してくるから、それ  
まで木下さんを預かって？」



その本気の悲鳴を上げてしまう少し前、先程までがっちりと支えておったはずの比那名居がワシを永江に向けて投げ飛ばしおったからじゃ……

永江曰く、一瞬でもタイミングが狂ったらそのまま下に落ちて「ミンチになっても不思議ではない」状況だったそうじゃ……

あれが原因で数日程高いところがダメになっちゃったぞい……

ヤクザ怖え……(雄二) ヤクザではありません(???)

「……あれ? ここはどこだ? 俺は明日に備えて残っていたレーションと水を食えるだけ食って一度その場で寝たはずなんだが?」

俺が目を覚ますとそこはなぜか牢屋の中…… それ自体は珍しい事じゃねえ。翔子にいつも閉じ込められているからこんなことは慣れっこだ。

「おいこらよくもオレらのアイドルのお空さんをぶんなぐつてくれたな!! 絶対に許さねえからな!!」

「生きてここを出られると思うなよ、人間風情が! 今さとり様がお前の件で話し合いを行っている。その判決次第ではお前の最後になると思え!」

鉄格子の先にはへんな化け物が大勢いやがる。さつきからこいつらが言っている“さとり”って奴がこいつらの主らしいな。どんな化け物が出て来るかは知らねえが、ここは無駄な体力を使わねえように気を落ち着かせながら休むのがベストだな。

処分を待つって事はコイツらはそれまで手出しは絶対に出来ねえ。ビビる必要性までは全く無い以上焦らなくていい。

ここで俺のすべき行動は……

「……………寝るか」

「二度寝するんじゃないか!! 舐めてんのかコラア!!」

知るか! 牢屋の中じやする事もねえ。翔子の場合だったら、いきなり縛り上げて襲つて来るからどうにか脱出を図るモノだが、まだ誰も何もしないって言うなら脱獄以外は何しても構わないって事になる。

だったらココは大人しく休むとするか……

それから更に2時間後……

「……………さとり様、こいつ寝てますね?」

「ええ、寝てるわね…… よつほど寝不足なのかしら?」

んあ? ようやく来やがったか? そろそろ起きた方が良さそうだな。流石に寝過ぎだったか調子が出てこねえ……

「なるほど、牢屋に閉じ込められる状況に慣れていくという訳ですか。よほど暇していたみたいですね?」

なっ! このチビツ子、俺の考えている事を読みやがったのか!? いや、今のは簡単

に推測できるし、さっきの妖怪もどきのコスプレ連中から連絡を受けているかもしれない。ねえ。

とにかくココは一度話をしてみよう。本物かどうか確かめた方がよさ……

「確かにあなたの事は先程ペットであるあの子達から報告を受けていますが、その気になればあなたの心の奥底のすべてを読み取る事が出来ますよ？ 外の世界で幼少時代に“神童”の称号を欲しいがままに手にし、過去の事情から不良としても“悪鬼羅刹”と呼ばれ、恐れられている”坂本雄二”さん？」

なっ、このチビツ子はマジで心を読んでいるのか？ だが、この程度の情報なら多少の調査能力があれば、引き出せる程度の情報。まだ決定打になるものは……

「……なるほど、あなたが牢屋に入れられることに慣れているのは幼なじみの女性からの過剰なアプローチのせいですか？ 貞操がどうこうって……あなた達の関係、すでに貞操がどうこう言ってられるレベルじゃないですよ？ そこまで関係が進んでいるうえにあなたもまんざらではないようですから、ここは彼女の事を……」

「分かった！ 信じる！ 心を読むことは信じるから、もうこれ以上は言うなああああああ!!」

マジだ！ このチビはマジで心を読んでやがる!! このままいったら確実に根掘り葉掘りすべての情報を引きずる出されてしまうじゃねえか!?

頭で色々と考え込んでしまう俺とは徹底的に相性が悪すぎる。ここは大人しく余計な事をせずに話を聞くしかねえな……

「いくつか質問させていただきたいのですがよろしい……ようですね。では、水を用意しましたので少し飲んだら質問に答えていただきますよ?」

オイオイ……俺が水を求めている事も把握済みかよ。

今回ばかりは助かるけどよ……やっぱさっきのバカ女に殴り掛かった事だよな?

さっきの妖怪コスの口ぶりからして、タダで済ます気だけはねえんだろ……つて!!

「おいテメエ! お空を馬鹿にするならアンタのメンタルをぶっ壊してペットの餌にするわよ?」

「うおっ! なんだこの力!? 見た目以上のパワーがあるじゃねえか?」

痛つてえ!! いきなり檻を蹴破つたと思つたらその一瞬で足に蹴り入れて来やがった!!

さっきのバ……鳥女の事がよほど大切みてえだな……

うかつな事を思つたらその地点でアウトつて考えた方が良いみたいだ。

「ここまで速くさとり様を怒らせる人間って言うのも珍しいよね?」

「さとりしやまアアア!! この人間にいきなり殴られて……胸倉掴まれて怒鳴りちらされてえ……えぐつ……しかも正直に答えたのに暴力まで振って……」

「おおおおい!! それに関しては悪かった!! 俺も訳が分からなかったんだって!!  
しかも返って来た答えが常識外れ過ぎたからバカにされていると思つて……ブ  
ベエツ!!」

「正直に謝罪すればそれで許されるとでも? あなたのその謝罪が心からの物ではな  
く、“失敗した、次はもつとうまくやろう” っていう打算面での反省でしか無いこと位  
は簡単に読める事を忘れていますか?」

素直に土下座した頭を思いつきり踏みつけられた!! 良く見たらあのチビ、クズを見  
るような目で見下してやがる!

いくら何でも理不尽すぎるだろ!? 普通ここは敢えて流すか説教した後で尋問を再  
開する物だろ!?

「その理不尽な暴力をお空は受けているんですよ? 本当だったら、地底のルールに  
則つて火刑か斬首位の罰は受けてもらう予定でしたけど、今回は状況が特殊なようです  
し、話を聞いてから決めようと思います」

それどつちも死ぬじゃねえか!? 一瞬で終わるか徹底して苦しめる気があるかどう  
かの違いしかねえぞ!?

「と・に・か・く、こつちの質問に全部答えていただきますよ? 意図的に嘘を付いたら  
制裁を加えますので正直に答える事をお勧めしますよ?」

「アンタが心を読めるのに嘘とか付ける訳ねえだろ!? つーかなんだ、その拷問器具は!?!」

「ええ、今の様に素直に答えていただければその分は情状酌量の余地は与えてあげましょう」

いや、今のも質問だったのかよ!?

つて、拷問器具についても答えてくれ!! あの異端審問会つて奴らのと違ってマジなやばいやつばつかじゃねえか!?

「あら? 別い言わなくても容易に理解できると思っただけですか? 次の質問ですが……」

こうして尋問と言う名の一方的な取り調べが恐ろしい速度で進んで行った。

読心系のスキルがあるところも早く進むもんなんだ…… まあ、本気で忘れている情報とかあったら逆にアテに出来ない事もあるけど、このチビっ子が妖怪だつて言うんならその辺も織り込み済みなんだろ?

「ええ、その辺も織り込んでいますので安心してください。あくまでこの地霊殿の主として“公平に”判断しますので」

その公平つて言うのがどういう意味かは分からねえが、とにかく質問はこれで終わりそうだな……

この調子だと理由を付けてあと数日はここに閉じ込められるのか？  
めんどろな事になりやがったぜ……

「あら？　もう何日もここにいられるとも思っているのですか？」

「……はあ。」

「もう結論は出ましたので、貴方への処遇を言い渡そうと思います」

スゲエ早くね!?　特殊性はともかくそんなに判断しやすい事例なのかコレ!?

「ええ、貴方もかなり理不尽な仕打ちを受けた後の様ですしね。私を騙す気でこのよ  
うな事をして言い逃れできると思い込んでいるバカならココで生きたまま解体して  
ペットの餌にしてやろうと思ったのですが……」

やべえ……　見た目に反して滅茶苦茶やべえよこのチビ……

「どうも心を見てみる限りではそんなつもりは無いようですし、人格が破綻しているサ  
イコパスという訳でもないようですから、今日一日ほど上の部屋に泊めながらこの世界  
……“幻想郷”、そしてその暗部として恐れられている“地底”の世界について説明を  
受けて貰います」

さつきから思っていたけど、何なんだ？　幻想郷とか地底とか……

さつきからこいつらの口ぶりから察して本当に妖怪がいるかのような感じで話を進  
めてるし……



「ええ、その通りです。今、あなたがいるこの世界は外の世界で忘れ去られ、ただただ消え去るしかなかったはずだった者たちが集う最後の楽園“幻想郷”です」

「楽園？　って、割にはこの牢屋に閉じ込められるまでをみてみた限りだとそこのお空って鳥女以外は大概ぶっ飛んでいるみたいだが？」

「そう思うのも仕方ありません……　なぜならココは……　いえ、あえて“この地域”とでも言いましょうか？　この地域に集う者達は全て幻想郷の地上でも忌み嫌われ、迫害され続けた者達が集まってできた地獄の釜の入り口ともいえるエリア……”地底”の世界なのですから……」

……俺、秀吉とムツツリーニがどこにいるか分からねえから何とも言えねえけど、実は一番ヤバいところに落とされたんじゃないかね？

流石に生きて帰れる気がしねえんだけど……

「本当に理解が早くて助かります…… いや、まだ半信半疑と言った所でしようか？  
なんというべきか、こう……」 理解はしたしそれなりに信用できることはある」。け  
ど、「完全に信用できるほど甘いつもりは無い」……と？」

「そりやそうだろ？ ここですんな滅茶苦茶な事言われて完全に信じ切る何ぞ寧ろ出来  
る奴の方がイカレてる」

「ですが、いまのあなたの現状が最も危険な方であるという事は間違いありません。

他の二人がどこに落ちたのかまでは分かりませんが、単純な危険度だけならここよりも

高い場所はそうそうないでしょう」

この地霊殿の主を名乗る“古明地さとり”から幻想郷について色々と説明を受けたが、今だに信用できねえ……

いや、信じられねえのは俺自身がこの現実を理解出来てねえ事だ……

多分、原因はあの変な帽子をかぶったババアの仕業だろ？

あのババアが何をしたのかは知らねえが、どうせあのババアもなにかしらの妖怪でいつらとは違う能力を持っていて、それを使ってこの場所に落としたりとどこか？

「ババアって…… 貴方の考えているババアと言うのは恐らく“八雲紫”と言うスキマ女の妖怪の事でしょう。確かに彼女は“境界を操る程度の能力”と呼ばれている力を持っています。その能力を使えば、人間の2・3人位簡単にこの幻想郷に取り込むこと位は出来るでしょう……」

なるほどな…… ならここから帰るならあのスキマババアを叩きのめせばこの妖怪のワンダーランド的な世界から俺達がいいた学園に帰してもらえるって訳か？

「ええつと…… 今後は彼女に対して“ババア”呼ばわりはやめた方がいいですよ？

彼女は一応人間の年齢に換算したら一応乙女と呼んだ方がいい年齢に相当しますので…… 貴方だって年の近い女性から“おっさん”呼ばわりされたら流石に反応に困ってしまうでしょう？」

ちっ！ 仕方ねえ…… あのババ……女のご機嫌を取らねえと帰れないって言うならこの程度の譲歩は必要か……

悪鬼羅刹なんて呼ばれている分舐められるのも癪だが、あの鳥女を相手にいきなり暴力に頼って失敗しているからな……

今後はどうか自制して大人しく話し合いで……

「この地霊殿の外を出てからまともに話を聞く妖怪や人間はほぼ皆無で、大抵は喧嘩になるか」弾幕ごっこ」と呼ばれる光弾飛ばしの決闘に発展してしまいますよ？」

おい!! 俺から少しだけ芽生えてきていた自制心を返せ!

なんだよ! さっきの俺の反省は一体何だったんだ!?

「つーか、さっきから俺の心を先読みして話を一方的に進めてんじやねえ! 今、余計な事を考えないようにしているけど、頭痛がひどくなつていく一方なんだよ!!」

「……またやつてしまいました。……客人をもてなすたびによく言われるんですよ。根底にある好き嫌いとはかく『アンタと話そうとしても会話が成立しなくてイライラする』……って」

「自覚ありかよ…… そうならさつきと治せ……」

「貴方は自分の目を潰せって言われて躊躇なく実行できるのですか?」

「このチビにとってどんだけの無理難題なんだよ!？」

「つて、話がそれたな…… とにかく今いる幻想郷つてところから外の世界に出る為の方法はそのスキマ女に頼むしかねえのか？」

「いえ、一応他の方法もあるにはあるのですが……」

「なんだ……歯切れが悪いな？ 他の方法だと何か不都合があるのか？」

「不都合と言いますか、何と言いますか……」

「取り敢えずもう一つの方法とやらも教えてくれねえか？ 知つておいて損は無いだろうからな」

「そうですねか…… もう一つの方法は、“博麗神社”と呼ばれる神社の巫女“博麗霊夢”と言う少女に頼んで幻想郷の外に出してもらおうというものです」

「なんだ？ 寧ろこっちの方が手っ取り早そうじゃねえか？」

「どこにいるか分からない女を頼りに探し回るよりも一つの施設を管理している奴相手の方が簡単に探し出せる分確実に帰る事が出来そうなんだが……」

「古明地、その博麗霊夢つて奴はそんなに気難しいのか？」

「いえ、むしろあなたのような外来人を外の世界に帰すのも彼女の仕事の一つですから、先程のような暴力的な手に頼らなければ、すぐにでも帰してくれるでしょう……」

「だったら……」

「ただ、今回のあなたのような場合ですと仮にあなたをそのまま外の世界に帰したとし

ても、彼女の怒り次第ではより危険……初見殺しのな場所に幻想入りさせてあなたを困らせようとする可能性も……」

ああ……なるほど、女の情念って怖い物があるからな……

翔子を見ていたら良く分かるんだよ。最近では監禁するだけじゃなくなってきた、既成事実を作って結婚を迫ってきたり、バカツプルに道を聞かれただけなのに浮気を疑われてケツに……

やめよう……これ以上は何か思うだけで危険かもな……

「まっ、だとしたら寧ろ好都合だ」

「……なぜですか？」

「もしまだ俺になにかしらの仕返しをしようとする気だったとして、俺があの子の立場だったらもう一つの脱出法である博麗神社って所に向かう道の途中で待ち構える。

神社にたどり着けるってところで邪魔をしたら相手は焦りから冷静な判断を取りづらくなるし、なんだったら博麗神社で直接待ち構えて“私がラスボスです”的な雰囲気を出して堂々と制裁するって言う方法もあるからな」

どうやら、結局あの子とは一度戦う事になるみたいだな……

そう言えば、古明地が牢屋から外に出す時、『何日もここにいられると思っっているのか？』と言っていたな。

だとしたら、こんな所に長居する理由はなさそうだな。

いや、むしろこいつらからしてみれば俺の存在はむしろ……

「……迷惑以外の何物でも無い邪魔者って事か？」

だろうな…… 古明地からしてみれば、大切な家族が無関係な喧嘩に巻き込まれて、妹分をぶん殴られたみたいなものだからな。

こつちの都合に巻き込まれて、キレて当然の家族の怒りを押さえつけてからまともに話を聞こうとする分、寧ろ寛大な方だろうよ……

「本当に察しが良くてこちらでも遠回しに言わずに済むので正直に言ってしまうと」助かります」。流石にウチの家族に暴力をふるってくれた人間を歓迎できるほど、私も甘いつもりはありませんから……」

「いや、今回の件はコツチが悪かったんだ。仮に古明地が何日もこつちに泊めたりなんてしてみろ？ 多分……」

「逆にこちらの方が問題を起こしそうですしね……」

そう言った古明地と扉の方を向いたんだが……

その視線の先にあつたのは、さつきから殺意むき出しな目で俺を見ている「お憐」と呼ばれていた猫と、今だ俺に怯えている鳥女だ……

「別に…… そいつが」生きている」間はこつちも手出ししませんよ」

「タテガミライオン怖い……」

「タテガミライオン」つて…… もう何もしねえからさつきからお前らが持っている俺の鞆を返してくれ。それがないと出るに出られ……」

ボス↑鞆を足元に投げられた音

はあ…… 我ながら凄く怯えられてるな……

そんじゃ、さつさとこんなところ出て地上とやらにでも向かいますか……



## 幻想入り2日目

注意：深夜1時現在、ムッツリーニはまだ寝ていません!!

小悪魔 side

私の名前はこあ……

紅魔館内でパチュリー様が管理している大図書館の司書悪魔です。

パチュリー様からの命で、この館の主である“レミアア・スカーレット”様を探し回っていたのですが……

「……シツレイシマシタ」

「言い訳をさせて頂戴!!」

今のお嬢様を見たらいろんな意味で期待が出来ないので、仕方なくそのまま戻る事になりました。

だって…… お嬢様のお部屋を無礼と思いつつ、ノックもせずパチュリー様からの緊急事態の報告をしようと思っただけに入ったら、「全裸で何してんの？」って言いたくなるような状況だったんですよ？

これでも結構表現としては控えめで、これ以上の事を書くとならぬR-18のタグが付いて

も仕方が無いんですから……

「こちらは緊急事態で大騒ぎな中、メイド長様とお嬢様はラブラブで羨ましい限りですよ」

「緊急事態なのに気が付けなかつた事に関しては謝るわ。こあ、その様子だと外来人騒ぎか妹様が脱獄したって言った所かしら？」

あ、一瞬で着替えた。お嬢様も先程までの痴態から立派なお召し物に着替えさせられていますし。

さっきの痴態を見せられて、よく簡単にスイッチを切り替えられますね？

「厄介な事に両方なのですけどね？ パチュリー様が言うには外来人が妹様の部屋に入り込んで、妹様が地下室の扉を結界事まとめて破壊して脱獄したとの事です」

「そうですか…… なら急ぎましょう…… お嬢様たちの食料として提供されたわけでもない外来人を傷付けたら、あの紅白巫女との騒ぎが面倒になりますからね」

ああ、たしかこの幻想郷においての外来人の扱いは大まかに分けると4種類いるんですよね。

1. まずはこの紅魔館の様にスキマ妖怪や幻想郷そのものに受け入れられて引越してくるケース。こちらの方は私達の様な外に適応できなかった妖怪達にあるケースですね。

2. 何かしらのきっかけで幻想郷に迷い込んでしまうケース。この場合はその原因を取り除いてしまえば後は勝手に解決するので、博麗の巫女の元に押し付けてしまえば大抵は大丈夫です。

3. お嬢様達吸血鬼などの人間を食料とする妖怪用に食料として提供されて誘拐されるケース。このケースで幻想入りした人間はどうしようもないクズしかいないので、最初から何の慈悲も無く殺せる分、ストレスの発散にはいいんですよね。

そんな事を言ったら、パチュリー様から叩かれますから絶対に言いませんけど？

4. 幻想郷に何かしらの危機が迫っていて、その能力を見込まれてヘッドハンティング（勧誘）されて幻想入りするケース。これは私達が幻想入りする前にあったようです。詳しい事は分かりませんが……

多分、今回の外来人は2番のケースに近い状況だったのでしよう。そうでなければいきなり妹様の部屋に入り込んでしまうなんて起こり得る筈がありませんし？

「フラン一人ならいざ知らず、外来人まで関係している状況で取り押さえるにはパチエだけでは厳しいわね……」 運命「ミゼラブルフェイト」!!

おおっ！ レミリアお嬢様もやる気ですね!!

運命「ミゼラブルフェイト」!! 変幻自在な鎖を敵に叩き付ける為のスペルカードですが、“鎖”と言う性質上、対象者を拘束して追撃をかける事も出来る万能スペルを出

すとは！

「どこで戦っているのか案内しなさい。一分でケリを付けるわよ」

「は、はい！ 今パチキュリー様は図書館内の地下室前のドアで迎撃態勢を整えております！」

「ならもう戦っている頃ですわね…… 私の“時間操作”を使います。二人共、私の手に！」

そう言われ、私とお嬢様は咲夜さんの手を握りました。

それとほぼ同時に図書館前の扉に戻りましたが……

「相変わらず凄まじいですね、咲夜さんの“時間操作”……」

「感心するのは後にして欲しいですわね…… それにしても妙に静かです…… まるで嵐の静けさのような……」

あれ？ 咲夜さんの言う通り妙に静かですね？ まさか、パチキュリー様の身に何かあったというんですか？

とにかく中に急ぎましょう!!

「パチキュリー様！ 御無事です……」

先程パチキュリー様と別れた場所に戻って来てみると、そこでは予想外な展開が繰り広

げられていました……

「こあ？ 悪いけど少し待つてもらえるかしら？ このバカ二人にオシオキするのに忙しいから……」

オシオキと言っていますが、傍から見たら虐殺後みたいですよ？

少なくとも、パチュリー様が全身血まみれで、フラン様は白旗みたいなものを持ったまま水の牢獄の中で震えてて、外来人らしき少年はパチュリー様に胸倉を掴まれながら鼻から大量の血を吹いている光景を見せられたらパチュリー様が一方的に少年を叩きのめしたようにしか見えません……

「兎に角、お嬢様と咲夜さんも来ていますから、そろそろやめた方が……」

「パチエ、大丈夫……ぶ？」

ほら…… お嬢様も固まっていますし……

「取り敢えず、一体何がどうなったらこんな挙句になるのか説明してくれないかしら？」  
「この少年に対して私がキレた」

「いや、何があったのか分からないから何とも言えないけど、わけも分からずにこの場で処刑なんて真似したら事情を聞けないじゃないの……」

「違う…… 確かに今私は怒っているけど、まだオシオキが済んだわけじゃないわ。」

フランは水符「ベリーインレイク」で動きを封じているだけだし、この子に至っては勝

手に自爆して鼻血を噴きだしただけよ？」

「鼻血ってこんな血が出る物じゃないですよね（じゃないわよ）!?!」

パチュリー様が全身血まみれになる程の鼻血って……

その出血量だと人間なら死ぬんじゃないや……

「とにかく話を聞いてちょうだい。こゝろが図書館から出た後の事なんだけど……」

小悪魔 side end

パチュリー side

「……来た」

私はここで日符「ロイヤルフレア」の陣に魔力を込める。

扉を開けた瞬間に痛みを感じる間も与えずに決着を付ける為だ。

3・2・1……

『大丈夫だ、話せば分かってくれ……』

今よ!

「日符「ロイヤルフレア!!」

扉がわずかに開いた瞬間を狙って、魔法陣の中心で収束させた光のエネルギーを叩き付けて大爆発を引き起こす。

その破壊力は吸血鬼どころか生物である限り、存在を保てなくなってしまうほどに強

力なモノ。

『うおっ!!』

『キヤアアアアア!!』

まあ、フランならこんな単純な攻撃なんて防いでしまうでしょうけど……

あ、外来人らしき侵入者の事をすっかり忘れて……

「ふうっ、危なかった。予想以上の火力だったな」

「ムツツリお兄ちゃん…… 本当に人間なの？」

え…… なんて無傷なの？ フランが防いだって言うなら納得がいくのだけど、当の

フランの方が驚いているし……

「……いきなり何をする！ ……俺達じゃなかったら死んでいる!!」

「地下が騒がしくなったと思ったから魔法で調べさせてもらったけど…… やっぱリネ

ズミが入り込んでいたのね……」

まあ、殺すつもりで撃つたから当たれば死ぬんだけど……

って、あの黒服の子は見てみる限り人間よね？ ただの人間じゃなかったら一体何者

なのよ？



「貴方がどうやって避けたのかは知らないけど……」

「パチエー!」

「フラン、そこで大人しくしていなさい。水符「ベリーインレイク!!」」

フランにこれ以上暴れ回られたらたまったものじゃない。

今はあそこのネズミの相手をしていきたいから、仕方ないけどこの水の牢獄の中に閉じ込めさせてもらおう……

「……おい、一体どういうつもりだ! ……まさかフランが暴れるからなんて言う馬鹿げた理由で……っ!!」

「火符「アグニサンシャイン」…… 馬鹿げた? 此方の事情も知らないネズミにそんな事を言われて黙っていたくはないけど、お前のような外来人を不必要に傷つけると後が面倒になるのよ」

「……そう言うワケにはいくか!! ……いきなり変な裂け目のような物に落とされた上に、地下で殺し合いに発展しそうになって、更に勝手な都合に振り回されて火炎弾の標的にされ、最後にはどことも分らない場所に放り出されるだ…… ふざけるな!!」

全く……本当に厄介なネズミね。こいつの言い分通りだとするなら、多分、あのスキマ妖怪の逆鱗に触れてスキマにいきなり落とされたのね。

まあ、ほぼ無傷なのを見てみる限りあのフランを言葉だけで説得できたのでしよう

……

「そこに関して」だけ」は称賛に値するけど、これ以上ははつきり言つてこつちにとつても迷惑なのよ……」

「私達はこの後フランの封印部屋の修復で忙しくなるし、レミイの食料として提供されたわけでもないただの人間を相手に取つて食つたりもしないわ。

貴方は十分凄い事をやつたの。どうやつたのかは知らないけど、あの気がふれてくるフランを簡単に大人しくさせ、更に味方に付けてここまで上がつて来たのだから……人間にしては上出来よ？ だけど、もうこれ以上あの子に関わろうとする理由も無いでしょう？」

「……何が言いたい？」

「この辺り一帯の地図と私の印を刻んだ書状よ。見逃してあげるからこの二つを持ってさつさとこの部屋から出て行きなさい。この館の内部にいる者達が相手ならその書状を見せればある程度の面倒を見てくれるわ……」

この子は十分凄い事をやつてくれたわ。

あのフランをどうやってねじ伏せて説得したのかは分からないけど、これ以上はただの人間に関わらせる訳にもいかないし、外来人関係の余計な仕事は増やしたくないのよ

……

これは半分以上は彼にとつて都合のいい口実。この後で予想されるだろう修羅場から離れさせるために用意された逃げ道。

ただの人間である以上、余計な危険を回避できるメリットしかないこの言葉に乗らない手はないはず……

「……クツクツクツ。……あつはははははは!!」

「恐怖でおかしくなったのかしら？ 大丈夫よ、私の後ろ側に走って行けば廊下に出られるから、別に怯える事も……」

「……人間をなめるのも大概にしろ!!」

そんな風に思っていた私もバカだったわ…… この黒服の少年はただの人間じゃない……

何かの為となつたらどんなムチャでも厭わない、生粋の真正正銘の大馬鹿な人間だった。

「……できるなら話し合いで解決したかった。が、はつきり言ってお前とは戦つて取り押さえた方が手っ取り早そうだ!!」

「ちよっ！ ムッツリお兄ちゃん!!」

「……フラン、少しそこで待っている!! すぐに終わらせる!!」

人間と言うのはどうして少し下手に出たらこども調子に乗るのかしら？

少しだけ自分が正義そのものであるかのような状況にすぐに酔って、まともな判断もしようとせずに簡単に流されていく……

その証拠にその両手にあるのはわずかな電気を生み出すのが良いところの小道具と小刀一本のみ……

私も舐められたものね……

「はあ〜っ……」

「……あ、あれ？」

「さすがはただの人間…… 魔法や能力が使える訳でもないのに、そんな小道具二つだけで私をどうにか出来ると思っっているなんて、妄想もそこまで行くと見事なものね……」

「……何だと!？」

あの子、意外と感情的なのね。 覆面をしていても見ただけでキレてるってわかる位だから……

「人間、私が現実を見せてあげる。 さつきまでのお遊びとは違う、お前の一生を注ぎ込んで到達できない境地の世界があるという事を……」

そしてそれに達しえる程の時間と努力をつぎ込んでも変えられない事もある現実と  
言う名の絶望をね!!」

もうただの人間と言えど容赦しない！ 殺す気は毛頭ないけど、それ以外ならなん  
だってやってやるわ！

そんな思いで私は、火金符「セントエルモピラー」を発動させたわ。

ロイヤルフレア程の火力は無い代わりに速攻性に優れていて、対人用において確実に  
トドメを刺すのに使える魔法だったのだけど……

「……加速」

それに対してあの子は躊躇なく前に突っ込んできたの。

驚いたわ。普通に考えたらず自殺行為でしかないのよ？ いくら“倒す”程度の火  
力に抑えているとはいえモロに喰らえば失神は確実、下手したら数週間は永遠亭に入院  
されてもおかしくない程度の火力は込めていたのだから。

もし、この技を殺すつもりで撃つていたらあの子は消し炭も残らなかつたでしょうね

……

「なっ！」

だけど、あの子は信じられないことに超スピードを発揮して見せ、簡単に躲し切つて見せた。

念の為に同じ火炎弾を数発程連射させて見たものの結果は同じ。炎球の隙間を通り抜けるように簡単に回避して見せた。

だけど、私もバカじゃない。

ここで普通なら距離を取る所。遠距離への火力以外の魔法が不足している私にとつて殴り合いなんて無茶にもほどがある。けど、近寄られた時の事を考えた魔法もいくつかは持っている。

金木符「エレメンタルハーベスター」

歯車のような形をさせた回転のこぎりを自身の周囲にいくつも展開させる事が出来る緋想天ルール限定のスペルカード。

このスペルカードを使いながら上に飛んで、逆に超高速で突っ込んでくるこの子を交差方気味に掠めてダメージを与えてあげる。

「……加速」

また超高速移動？ どうやらこれがあのこの能力のようだけでもうその能力はなんの意味も成さないわ。

金の刃にわざわざ突っ込んでくる狙いが分からないけど、この回転のこぎりで意識を

刈り取ってあげる。

上から追い込むように飛び込んで、私の周りで飛び回るエレメンタルハーベスターを押し付けようとした……

「……「不落要塞」

え？ あの子今なんて……

いつの間にか取り出していたナイフのような物でエレメンタルハーベスターの軌道をそらしながら下をスライディングでくぐり抜けて……

ブシャアアアアアアアア……

「……え？」

イヤアアアアアア!! まって！ ありえない!! 一応、この魔法はスペルカードルールの仕様にしてあるから、当たっても血が出たりとかはしないはず……

仮に運よくあのネズミに当てていたんだとしても血が噴水の様な事にはならないはず……

「……すまないフラン。……俺は先に逝く……」

「ムッツリお兄ちゃああああああん!?」

え？　もしかして、鼻血？　なんで？　さつき物凄い速さでスライディングしていったはずだけど!!

私は触れてもいないし、フランが何かしたという訳でもないみたい……  
だったらなんで？

「……黒ガーター。……大人のいやらしい下着」

ちよっ！　この子まさか!!

「見たわね……　私の下着……」

「……何のことか分からない」

「とぼけないで正直に答えなさい？　って答えなくてもその鼻血が良い証拠でもあるんだけど……」

「……何のことか分からない。　これは誤って頭を床に打ち付けただけ」

へたな言い訳にもほどがあるわよ!?!　私の服（特に下着）を血まみれにして、へんな勘違いされたらどうなるのよ!!

そんな気持ちであの子の胸倉を掴んでから慣れない掌底アッパーを顎に叩き付けてあげようとしていた時だったのよ。

「パチユリー様、御無事で……」



あ…… どうしよう…… こあ達になんて説明したらいいのかしら……？

パチユリースide end

「つていう訳なのよ」

「はあくつ…… 本下に下らない決着…… 結局そのねずみ小僧はパチエの下着を覗いて自爆。フランはあのねずみ小僧のおかげで信じられない位に大人しくなって隅っこで振るえているだけ……」

「お嬢様、一応彼を客室へと運んでおこうと思うのですが……」

「いや、まずは永遠亭に連れて行きなさいよ。明らかに彼の出血量が致死量ギリギリじゃないの……」

「それが…… かれの荷物を調べさせてもらったのですが……」

「咲夜は本当にマイペースね…… それで？」

「いくつかよく分からない機械類が大半を占めていましたが、その中にいくつか輸血用と書かれた血が数バツク程ありまして……」

「なんでそんなものが都合よく入っているのよ!?! この子よく血を吹きだしているの!?!」

「それは分かりませんがお嬢様の言う通りの可能性が高いですね。他の道具も揃っているようですし、客室のベッドまでお運びした後ですぐに輸血を行います」

「ええ、任せたわ……『お姉さま! ムツツリお兄ちゃんを離して!!』……フランの事、すっかり忘れてたわ」

「レミイ、取り敢えずフランもそのムツツリとか呼ばれている子と同じ部屋に置いといてもらってもいいかしら? 地下室の修復と結界の再構築に時間がかかりそうでその間ずつとフランを水牢獄に閉じ込めておくのにも限界があるのよ……」

それにフランもなぜかあの子と一緒にだすとごく大人しいから、あの子が起きるまでフランに面倒でも見させておけば余計な結界を張らなくても暴れる心配もなさそうだし……」

「え…… 本当に大丈夫なの? 水の中に閉じ込めたから仕方なく大人しくなっちゃって言うワケじゃなくて?」

「ええ、今回は本当にフランは一回も暴れていないの。もしあの子が神経が狂っている状態で脱獄してきていたなら能力を使って水牢獄なんて簡単に抜け出して見せたでしょうし」

「確かにそうだけど…… まあ、パチエはこんなことで嘘なんて言わないし……」

数分程レミアは悩んでいたが、いつの間にか咲夜が客室のベッドへと運んで輸血の準備を済ませていたのもあって、仕方なくフランを解放して土屋が運ばれた部屋へと押し込むことにした。

フラン自身土屋の事が心配で出歩く所では無くなったので、都合よく土屋の客室への誘導に成功。

当初は念入りに結界を張っていたが、あまりにもフランが大人しかつたのもあり、仕方なく封印結界を解くことを決断した。

その頃には過剰な警戒心が原因で逆にレミアたちの落ち度によって問題を起こしそうな状況に陥っているのだから仕方ないとも言えたが……

おまけ

一方、紅魔館門前では……

「くっ…… 何なのですか、この機械兵のような奴は!?! 私能力では機械相手だと殆ど役に立たないというのに!!」

紅魔館内部が土屋とフラン関係で大騒ぎになっている頃、紅魔館の門番「紅美鈴（ホ

ン・メイリン)はいきなり現れた謎の機械兵との戦いに苦戦していた。

中で暴れている外来人に用があるといきなり訳の分からないことを言ってきたことを理由に追い返そうとしたのだが、相手が強引に突入しようとしてきたのを機に戦いへと発展。

「気を使う程度の能力」は生物が相手だとそれなりに強力な力を発揮する能力である。だが、“気”そのものが無い機械が相手となるとこの能力は一転して最悪な能力と化してしまふ。

気をソナーの要領で周りに拡散させることで敵を感知しようにも、相手に気が無いので一切反応が無く、また生物が相手ではないので気を拳に収束させて叩き込んでも気だけではダメージを与える事が出来ず、思っていたほどの効果も上げていないのである。

「( )まで………ですか………」

邪魔者は排除して訳ですか…… 敵がチェンソーを振り下ろしてくるって言うのに一歩も動けない……

こんな調子じゃ、門番なんて引退するべきなんでしょうかね？

「わはー!!」

なっ! あの子はよく氷の妖精達と遊びに来る妖怪……

このままじゃあの子まで巻き添えに!!

「うわあああああああ!!」

間に合って！ 関係の無い子まで巻き添えにする訳には……

「何をしているんですか！ なんで急に……」

無邪気な笑顔を向けるその子が手に握りしめていたのは、先程少女と一緒に飛んで来た花だった……

この子は命がけの戦いが行われている中、何も考えずに花の一点しか見ていなかったのだ……

周りの状況なんて気にも留めていない。少女はただ自分の小さな世界しか見ていなかった。

「あはは……こんな状況で何やってるんですか……?」

そう言えば幻想入り前に拳法を叩き込んでくださった師匠が言っていましたね……

『他人と比べる事は無い。キミはキミらしくあればいいのです。もし何かの壁にぶつかった時に思い出しなさい。 “強さ” でも “才能” でもないのです。 “自分の世界” …… それを見据えながら己を高めていきなさい。そしたらきつと、たどり着けるかもしれませんよ?』

たしか、あの子が飛んで来た花を捕まえた時は…… こう、ゆつくりと手を伸ばすように…… 潰さないように優しく握りしめる!!

パァン!!

……え? 今の何かがはじけるような感覚は一体?

気のせいでしょうか? しかし、この謎の高揚感と自然との一体感は本物……

「極彩「彩光乱舞」!!」

え? 軽く放っただけなのにあんな簡単に吹き飛んで……

もしかして、これが“悟り”……と言うものでしょうか? 今まで以上の膨大かつ純

度の高い気を引き出しながらも、それに飲み込まれる事無く使いこなして見せている。

いや、これほどのレベルの高い気を解放しておきながら、怖いくらいの落ち着きすら感じています。

その一方で、相手にも心があつたのでしょうか? 今の一撃を機に激怒したかのよう  
な猛攻を繰り広げてきます……

虹符「烈虹真拳」!!

凄い……手数を増やして乱打を試みても十分な威力になってます! 怒涛の拳打が  
全体的確に敵に叩き込まれて敵を後退させて見せました!!

先程まで激怒した咲夜さん以上の悪魔に見えていた相手も、今では怖くありません。

私があればほど恐怖を感じていた存在も、世界から見ればこんなにも小さい存在だったのですね!

見えます! 見えますよ師匠! いえ、見えるというよりも世界を感じているのです

!!

これならきつとみんなを守る事が……

「がつ! な、なぜそんな所から爆発が……」

しまった! 相手はたしか爆弾を発射する銃を持っていました。

一度弾を避けたとしても足元で爆破されたら意味が無いですよ……

なんて厄介な…… それに……

敵が祈るようにその両手を合わせたとたん、私が到達した境地を簡単に真似て見せて

います……

相手は一体何者だというんですか? もうわけが分かりませんよ……

「うあつ……!!」

一瞬で距離を詰めて来たと思ったら、先程とは比にならない速度でチェンソーを振つ

て来ました!!

一度距離を取るように回避しましたが、その後に襲つて来た衝撃波だけで雑魚は一瞬

で倒されてしまうでしょうね……

私が何十年とかけて修業した事で到達できた境地を相手は“見ただけで”真似て来るなんて……

どんな事をすればそんな事が出来るといえるのですか？

「ですが関係ありません!! 極彩「彩光乱舞」!!」

だからどうしたと言っているのです!! ここで退くつもりはありません!!

敵を打ち上げて、そこから“敵が動かなくなるまで”怒涛のラツシユを叩き込むだけの事です!!

気符「星脈弾」!!

そう……私の戦いはこれからだ!!



## バカと寝坊助と朝食タイム

月の都で保護されてからの翌朝。

僕は朝早くからサグメさんに叩き起こされていた……

『……何をしているの？』

「さ、サグメさんに投げ飛ばされたからじゃないか…… お、起こすならもつと優しくしてよ……」

『何度も揺さぶつたのに、“後495年”とか寝言を言うから、きちんと目が覚める様にしてあげたの？』

「いや……いくらベッドの上に背中からとは言っても、思いつきり投げられたらびっくりしすぎて腰が抜けて起きられなくなっちゃうよ……」

後で清蘭さんから聞いたけど、見事な一本背負いだったらしい……

サグメさん、何気に武術も出来るのかな？ 見た目は翼が生えているだけの普通の女の子なのに……

『取り敢えず、あなたがココで今後どうするかについて話したいから、食べたい物を教えてくれませんか？』

「あ、うーん…… ココでの普通の朝食がどんなのか分からないから、皆のオススメで……」

だ、だってしようがないじゃないか!? 僕、まだここに来て一晩明けたばかりなんだよ? ココが異世界である以上、夜に食べた料理が普通に日本にあるものだからと言って朝食も日本と同じようなものがあるって言える確証なんて無いじゃないか!!

『そう…… なら、今日は単純な豆乳と油条ヨウティアオでいいかしら?』

「油条?」

鈴瑚さんにどんな料理か聞いたんだけど、油条って言うのは、要約すると“揚げパンの一種らしい……”

なんか、この月の都の食事ってなんだか中国っぽい感じだよな?

殆どの物がなんか日本らしさを感じるけど、住居と食事はなぜか中国っぽいのは何だろうか……

他にも詳しい事は分からなかったけど、ライスヌードルっぽい感じの料理や、お粥とか包子パオズなんか朝食として食べられるものが多いらしい……

まんま中国のそれでした…… 鈴瑚さん、熱弁ありがとうございます。

「あ、吉井くん。そのパン、豆乳に軽く浸してから食べても美味しいよ?」

「へえ…… あ、ホントだ」

「ちよつと鈴瑚！　なんでコイツにだけそう親切にいろんな食べ方教えてんのよ!?　わたし、そんな食い方があるなんて知らなかったわよ!!」

「あれ、そうだっけ？」

「ムキヤー!!」

『三人共朝から元気……　少しは大人しく食べる……』

でもこういつた皆で騒ぎながら食べる朝食なんて久しぶりだなあ……

高校に入ってから一人暮らしだったから、どんなご飯を食べるにしても（砂糖と油ばつかりの時の方が多いけど……）慣れるまではどこかさみしさのような物を感じていたし……

「それにしても吉井君は本当に味わって食べるよね？」

「確かにアンタの食べ方ってわたし達に比べて遅いつて言うかゆつくりと　味わっている”って感じだし……」

『吉井くんの世界では、ほとんどの人がゆつくりと味わう様に食べるのかしら?』

「たしかにサグメ様の言う通りですね。　わたしも仕事の都合上、朝は簡単な食事を早食いして部隊の隊舎に出勤なんて当たり前ですし、鈴瑚は逆に、仕事中でもドカ食いし過ぎつて言うくらいに食べてるし……」

「あはは……　昨日はサグメさん達のおかげでカロリーが取れたからね。　朝もきちん

とカロリーが取れるなんて感動モノなんだよ」

「感動モノって……」

あれ？　なんで清蘭さんは訳が分からないって言わんがばかりの顔をしているんだ？

『吉井くん。　昨日貴方が私の部屋の一部を貸すという話で決まった時に貴方の荷物を預かって、調べさせてもらったんだけど……』

「あ、中身の配置が変わっていたと思っただけ、やっぱりそう言う事だったんだ」

『そこはどうでも良い……　解読に時間がかかったけど、学問書と思われる本と謎の遊び道具のような機械がいくつか……』

「……待って下さい。　なんで学問書と遊び道具が一緒になって入っているんですか？」

清蘭さん、ごめんなさい……　実は学校では碌に勉強なんてしていなくて、友達とバカやって遊んでばかりいました……

『さつきも書いたけど、それらはどうでも良い……』

「いや、良くないですよ？　事と場合によっては吉井君の性根を叩き直してやらないといけないと思います」

「犯罪行為（横領）に手を染めたのがバレて、面倒事を押し付けられている二人には言わ

れたくないよ!!」

『三人共静かに。それらの中に、ほんの少量の塩と砂糖が入っていた。昨日聞いた話は何かの冗談だと思いたかったけど?』

「たしか昨日そんな話もしていましたね。もしかして吉井君もなにか料理が出来たりするの?」

「一応……ね? パエリアとか得意だけど?」

「へえ? アンタ、意外な特技を持っているのね? それだけはわたしには出来る気がしないわ」

「まだ人並みって言った所だけどね? でも、あの砂糖と塩は一応僕の昼食だよ?」

『「……………え?」』

…………え? って、なんで三人共固まっているの? なんでそんな異常者を見るような目でこつちを見ているの!?

「吉井君? さっきサグメ様も言ってたけど、なにかの冗談だよね?」

「アンタ、いくら何でも同じネタは使いまわされても飽きるだけなんだけど? 塩と砂

糖だけが食事って……」

「失礼な！　いくら何でも砂糖と塩だけなわけじゃないじゃないか！」

『良かった……　流石に肉まんくらいの物は食べている……』

「油もきちんと食べているよ!!」

『「……今この子、なんて言った？」』

「いや、砂糖と塩と油くらいは食べているって……」

『「……もういい。　頭が痛くなって来た……」』

あれ？　サグメさんが頭を抱えながらもスケッチブックに言いたいことを書き込んでくれている……

そんなにおかしい事を言ったのかな？

「ね、念の為に聞いて置きたいんだけど、いいかな？」

「いいですよ鈴瑚さん」

「因みに一日三食ずつとこんな感じで食べているのかな？」

「いや、一応小さい乾麺を……」

「ま、まあ栄養価的には良くないけど、食べているだけマシなのかな？」

「64等分に切つてからそれをお湯で戻して、しょうゆを軽くかけてから食べてるよ？」  
 「その乾麺つて、元が結構大きかったりする？」

「ううん、片手で掴める位の大きさだよ」

「「アウトオオオオオオオオオオオオオオオ!!」」

ええええええええ…… そんなにおかしいのかな？

食費が少ない分、一日に食べる分を減らさないとやつてられなかったただけなんだけど？

サグメさんまで声に出してまでツツコミを入れて来てるし……

「え？ なに？ なにがアウトなの？」

「『え？ なに？ なにがアウトなの？』……じゃないよ！ なんでもともと片手で持てる程度のサイズの乾麺を64等分にしてるの!?! そんなに細かくしちゃったら、もう一口分も残っていないじゃないか!!」

「アンタの家つて、そんなに貧しかったの？ もしそうなら流石に可愛そうになつて来たんだけど……」

「いや、一応生活費の仕送りが多少はあつただけ……」

「ならなんでそんなにキツイ食事で生活してるの？」

『流石にそれはありえない……』

「いやあ……それが趣味の方にお金が行っちゃって生活費の方にお金が回らなくて……」

『「……」』

ポカーンって擬音が似合う位に開いた口が塞がらないでいる3人の顔がすごく面白  
いんだけど……

「……ここで笑ったら絶対にぶん殴られるよね？」

「私も結構趣味に金を使う方だけど、流石に吉井くんみたいな事は正直……」

「黙れ横領犯」

「その言葉、ブーメランにして返してあげるよ」

「わたしのは給料紛失で前借りの証明の為に申請していた領収書の中に、間違って関係  
ないのまで紛れていただけですう……!! 鈴瑚の方が意図的な分、余計に悪質なんだから  
!!」

「清蘭みたいに自覚も無くやってしまう兎の方が反省も出来ない分性質が悪いだよ!!  
分かってて言ってるの？」

ヤバイ! また二人が喧嘩しそうに……



つて、あれ？ サグメさん、なんで急に席を立つて？

「……………喧嘩両成敗」

「あわわわわわ……………」

あ…………両手の指をポキポキ鳴らしながら二人に近づいていく…………

清蘭さんと鈴瑚さんが怯えているけど大丈夫かな？

「すいませんでしたー!!」

凄い………… 僕と雄二並みにうまい土下座だ…………

流石にここまでやったら許してもらえて…………

「これ以上喧嘩するなら、両手に水を混ぜた砂入りのバケツ（8リットル）2個を持ったまま廊下で立つてもらおう」

あれ？ 意外と緩い罰なのかな？

「……………食事抜きで三日位」

三日食事抜きの方がシャレにならないです。バケツ持ったまま立たされるなんてほとんどおまけみたいなモノなんじゃ…………

「本当にごめんなさい！ もうしませんから、そのお仕置きを撤回してください!!」

サグメさん、もう本当に許してあげて下さい！ 二人共、本気で泣きそうな目になっているんですけど!?

見ているこつちも可哀想になって来たんだけど!?

「サグメさん、もう二人共反省しているみたいだし、許してあげて下さい。これ以上は可哀想ですよ」

『これ以上は食事が不味くなるから、もういい…… 今度やったら……』

「今度やったら?」

『布団を紐で一緒に巻き付けて暗い押し入れの中に一日中閉じ込める』

子供への折檻じゃないんだから!?

いや、今の時代でそれやったらほぼ虐待だよね?」

「ま、まあとにかくさつさと食事を済ませちゃおうよ。 食べ終わった後でどうするの

か話し合う予定なんですよ?」

とにかくなんだか騒がしすぎる朝食になっちゃったけど、さつさと終わらせよう……  
「所で話を戻すけど…… 吉井君が我欲に負けて娯楽に大金をつぎ込んだりやう程、地上は娯楽に満ちているの?」

「うん、昔からある伝統的な遊びや、最近になってできたものまでそれはもうたくさん。

外国から伝わって来たものも相当あって、その遊びを極めた専門家みたいな人達が集

まっつてその遊びの様子を全国規模で放送するなんて事も珍しくないんだ……」

『だからって、基本的な生活費まで使いこまなくても…… おっと、説教臭くなつてしまいましたね』

「サグメ様の言う事も尤もだと思えますよ？ コイツの金の使い方は歪んでいるとしか言いようがないし……」

ああ、もうっつ！ 素直に認めるよ！ 僕は金遣いが荒いですよーっだ!!

マンガとゲームに無駄金つき込んで食費もままならないですよ!!

『吉井君にお金関係は一切任せられない類のバカなのは確定だとして……』

「……もう泣いていいかな？」

「絶対にダメ」

なんだか、僕の評価が極端に下がって行っているんだけど？

少なくとも“異端審問会”と称して無関係の男を集団で叩きのめすなんて事だけはしてないんだけどなあ……

「今日の午前中で着替えとか、必需品を買いそろえて置いた方が良いんじゃない？ って思ったけど、話を聞く限りだところいつにだけは絶対に金を持たせる訳には行かないですよね？」

「清蘭、それは私等にも言える事なんだけどね？」

「……悪かったわよ」

ああ、そうか！ そう言えば、着替えとかどうするか決めていないんだっ！

今着ているのも、ウサギさん達の制服の余り物だつて聞いているし、学ランは洗濯中でまだ乾いていないらしいし……

それに歯ブラシとかタオルとか、もしかしたら身分証明関係の手続きとかも今日中にしないとイケないのかな？

昨日、サグメさんが大変になるって念を押したのも分かる気がするよ……

『……仕方ないですね。私がお金を出しますので、買って着て貰い…… やはり私が吉井君について行きましょう。小金とは言え、貴方達に私のポケットマネーを預けるのは不安以外の何物でも無いですからね』

もうボクらはサグメさんからお金に関する面では信用の“し”の字も無いみたいだ……

隣では清蘭さんと鈴瑚さんが本気で悔しがっているし……

つて、サグメさん、どれだけの金持ちなんだ!?

「本当に迷惑ばかりかけてしまつて……」

『別に…… 私があなたを保護すると言つたのです。貴方がキッチンとしていてくれる

なら衣食住を保証するのは当然の事……』

「いくら何でも面倒見良すぎな気がしまーす!!」

「鈴瑚の意見に賛成でーす!!」

あ、清蘭さんと鈴瑚さんが復活した。

なんかギヤーギヤー言っているけど、またサグメさんを怒らせないかなあ……

『だったら、自分のお金位はきちんと管理する！ 安くないのよ！ 一千万・二千万と言  
う金は!!』

「サグメ様、壁ドンしたせいでヒビが入っているんですけど?! スケッチブックをそん  
な乱暴に扱わないでください！ もう紙がグシャグシャになっていきますよ!!」

一千万かあ…… ギャンブル系の漫画とか読んでいたら億単位で動くことが多い  
けど、そんな偏見のせいなのか微妙な小金に感じてしまうことあるよねー？

いや、実際には凄い大金なんだけどさ……

『吉井君、何？ その微妙な顔？』

「え？ そんな顔していました？」

『ええ、少なくとも一千万の重みに関して分かっていないって言う顔していましたね』

「いや、結構重い額なのは分かってはいるつもりんだけど、外国に行っている僕の両親  
が億単位で金を動かしているらしいから…… そんな話ばかりを聞きちゃうと……」

そう言えば、僕の両親も外国で結構活躍しているって姉さんが言っていたような？

向こうはドルだし、どんな仕事をしているのかまではきちんと把握できていないから正確な金額までは分かっていないけど……

『へえ？　なら、貴方にはじつくりとお話が必要なようですね？　お金の重みについて夜にきつちりと叩き込んであげますので、楽しみにしていなさい』

あ、オワタ……

これは徹夜で何かしらの勉強をさせられるパターンだ……

『取り敢えず、今日は細かい手続き諸々と必需品の買い物。　コレらを今日中に全部終わらせます……　三人共すぐに出られるように準備』

「え？　うん、わかった。　でも、全部一日中で終わるの？　僕のいる世界だったら必需品が全部そろっている大型のお店があるから1・2時間もあれば終わったけど……」

『大丈夫です。　問題ありません』

サグメさんにそう言われて促された僕達は大急ぎで出かける準備を始めた。

とは言っても、ほとんど持っていくものが無い僕は2分で準備が終わって、サグメさんに部屋から追い出されたけど……

部屋の中から、サグメさんの胸がどうか、清蘭さんの何かが妬ましいだなんて聞こえたけど、聞かなかった事にしよう……

そうじゃないと僕の命にかかわる気がしてならない……

another story サグメside

「清蘭、一体どうしたの？」

「あー…… 最近、またブラのサイズが合わなくなってきた……」

なるほど、買い食いばかりしてその分の栄養の大半が胸にいったのね……

「なるほど、週一で私がマツサージしている分、大きくなっちゃったって訳？」

え？ ちよつ…… 鈴瑚は一体なにを言っているの？

マツサージ？ そんなもので胸が大きくなるというの？

「うっさい、それが原因だったら鈴瑚だって大きくなっているはずでしょ？ アンタの

胸は相変わらず微妙に出ているだけのまな板じゃない？」

「そー言う事言わないでよ！ 私の胸はまだ成長期なんだから！」

諦めないで鈴瑚…… 私はそんな貧乳な鈴瑚を応援してる……

「そう言っている奴ほど胸が大きくなるなんて事が無いから不思議よねえ？」

「そんなヒドイ事をいう清蘭の胸なんて…… こうだ!!」

「ぶほおっ!!」　なんでそうなるの!!　何処触ってるの!!　サグメ様もいるんだから、夜まで待つ……」

夜?!　夜にこの二人何しているの?!　さっきまでの喧嘩は何?　仲がいい程喧嘩するゝ的な関係なの!?

つて、言うか正直に言わせてもらおうと、清蘭の胸が羨ましい……　その乳の脂肪を300gぐらいで良いから分けてほしい……

『鈴瑚?　さっきから……』

「あ、悪ノリが過ぎました……」

「さ、サグメ様……　助かりました」

『手緩い!　ここは脂肪を全て燃焼させるつもりで揉みまくる。私が清蘭の腕を拘束する。　鈴瑚はもつと調子を上げて揉みまくりなさい……』

「さ、サグメ様ああああああ!!」

私の胸も成長が芳しくないのに……　清蘭の胸だけが大きくなるなんて許せない。その胸の脂肪が手に入らないのならいつその事……

「よーし、サグメ様の許可も出た事ですし?　ココは遠慮せずに思いっきり……」



「ちよつ、鈴瑚！ お願いだからその両手の“ワキワキ”って握りしめるのやめて!!  
滅茶苦茶怖いんだけど!」

「大丈夫ダヨー？ 痛ナンテシナイカラー？ 少し気持チヨクナルダケナンダカラ？」  
「どつちにしても嫌よ!! サグメ様も私の両腕を抑えてないで正気に戻ってください  
!!」

失礼ね。私は正気よ？ だからこそ、清蘭の胸の成長を止めるべく、ここで清蘭の胸を揉みまくってあげるのよ？

「り、鈴瑚もサグメ様に騙されちゃだめよ！ 胸を揉めば小さくなるなんて迷信よ！」  
「うふふふ…… もう私にそんな事は関係ないの…… この場で巨乳化への道を潰す。

これを機に巨乳殲滅 Project をサグメ様と立ち上げる。最終目標は月の都  
だけでなく吉井君の世界からも巨乳を抹消してやる……」

もげろ…… 巨乳のすべてがもげるがいい……

清蘭の次は豊姫の番よ？ 貧乳に悩む女の嫉妬の嵐をその身に受けるがいい!!  
「それに、サグメ様がなぜか貧乳側のつもりでいる様だけど、それは違うわ!!」

なにを言っているの？ 清蘭、見苦しいだけのいい加減な主張はやめなさい？ 私も  
吉井君を部屋に泊める前日までどうにか胸を大きくしようとして色々やって来たけど、  
どれもこれも全く効果が無かったのよ？

「サグメ様のその胸は貧乳じゃない。私よりは結構小さいけど、理想的な形を保つことで水着のような露出の多い服でも映える大きさをも兼ね備えた、いわゆる“美乳”って奴なのよ！」

え？ 私の胸が美乳？ そんなことないわよ…… 全然大きくも無いから形なんてはつきりと……

あれ？ 鈴瑚はなぜ私の胸を見ているの？ ほ、本当に自慢できるような胸じゃないんだから……

「ホントだ。いくらサグメ様でもついていい嘘と悪い嘘があるんですよ？」  
「少しくらい形が崩してもバチは当たらないわよね？」

「それに今、サグメ様は私の両腕を拘束しているから説得も出来ない！ ココでどつちつかずのこうもり女にオシオキをする絶好のチャンスよね？」

マ、マズい…… ココはどうか説得を……

「か、仮に私の胸が美乳とやらだとしても、その美乳は詰まる所、小さい側に属するはず。大か小で区別するなら小である以上、私はあくまで貧乳の味方になる……はっ!?!」  
し、しまった！ ココで直接自分の口で喋ってしまったら私の能力が……

「サグメ様…… ちよつとだけですから？ ねっ?」

「あーあ、サグメ様自覚無く能力を使ってしまいましたね? “口に出すと事態を逆転さ

せる程度の能力”……もしここで私を解放してスケッチブックを取りに行く道を選んでいたら、鈴瑚が味方に戻ってくれたかもしれないのに、そのチャンスを自分で捨ててしまったんですよ？ 恨むならそのドジっ娘な自分を恨んでくださいね？ サ・グ・メ・さ・ま？」

しまった！ くつ、清蘭はこの展開を狙って……

「勝手に自爆したサグメ様のその美乳。この場で崩壊させて見せますよ!!」

「裏切り行為、ダメ、絶対!」

え!? なにこの百合百合な展開!?

「よし、サグメ様のブラを外すわよ!」

「イヤアアア!! お願い、私が悪かったから許してええ!! 鈴瑚の……鈴瑚の手があ

あああ!」

「もちろん……ム・リ♡」

爽やかな笑顔で返された…… ああ……さらば、私の巨乳(予定)。もう私は一生巨

乳になる事が無くなってしまった……

「……もう好きにして」

この状況…… どうあがいたって逆転なんてできっこない……

それこそまさに何かの理由で吉井君が乱入してくるぐらいの“奇跡”が起こるとか

じゃないと……

『つて、こんな大声を聞こえない振りなんてできるかアアアア!!』

「!?!」

今の声つて、吉井君?

サグメ side end

「つて、こんな大声を聞こえない振りなんてできるかアアアア!!」

今ならドレミーさんの気持ちがかかるかもしれない! 確かにコレはキツイよ?

異性のイチヤイチャ全開の百合シーンのエロ声とか聞かされるだけでも危ないのに、直接映像感覚で見せられたらキレても仕方が無いよね……

「ちよつと何やつてるの!?! さつきから凄い事を連呼してるけど、こんな壁一枚隔てただけだったら、意外と聞こえるんだよ!!」

もう、これムツツリーニだったら即その場で出血多量モノだよ！　まあ、僕も少し鼻血でてるけど!!

「なんか恥ずかしくなつて来たんだけど……」

「もう、鈴瑚の悪ノリが過ぎるから……」

『吉井君を待たせる訳にもいかないから早く着替える。　清蘭の下着は諦めて』

「下着無いと揺れて痛いんですけど……」

「適当に包帯でも巻けば？　吉井君の私服選びの際に事情を説明してついでに買ってき

たらいいだけなんだし」

「ちよつときついけど、素直に今のブラで我慢するわよ。　それ以前に包帯なんてこの

部屋に無いでしょ？」

『前に捕まえた兎達を縛るのに使った』

「ああ……　たしかそんな話してましたね……」

結局女子三人が準備を終えたのはあれから20分後だった……

それでも女子三人が姦しく騒いで散らかした部屋の片付けもあつたから結局サグメさんの家から出たのは更に20分過ぎた後だったかな？

この調子で日用品を買いに行く時間までしている余裕なんてあるのかな……

## バカと逃走と新事件？

「身分証明の手続き、意外と早く終わったね。ハッキリ言つて身元不確かな僕の事に  
関して怪しまれると思つたけど、こうもすんなりと話を通るなんて思つてなかつたよ」  
今は昼の11時くらいだろうか？

サグメさんが月の都であると便利だからつて役所のような場所でいろんな書  
類の手続きをしていたんだけど……

確かに10枚以上は書類を書かされたのに、意外とあつけなく書類が通り、後は僕の  
私服などの買い足しのみとなつたのだ。

「え、何言つてんの？ サグメ様がある程度裏から手をまわしているからこんなに早く  
終わったのよ」

「マジ？」

「マジだよ吉井君」

「ここままでしてくれるのはありがたいけど…… サグメさんがなぜか裏で汚い事を  
やっている政治家みたいになつているよ……」

『次は吉井君の日用品全般を買つておかないと……』

ぐうぐう…… ↑ 鈴瑚の腹の虫の音

「……その前に昼ごはんからいただきますせん?」

「吉井君! 私をそんな食いしん坊みたいな目で見ないで!」

『食いしん坊な鈴瑚の為に、ご飯から食べに行きましよう』

そう言われてサグメさん達に連れられてきたのは、さまざまなお店が集まる商店街のような場所だった。

たくさん品物を売っている店が集中していて、その店の数は大型のショッピングモールと何ら遜色がない程と言われても信じられる規模だろう……

「凄い…… とても活気に満ちてて、みんな楽しそうだね」

「アンタもこの光景に驚きを隠せないようね? 特に今日は月の兎にとっては喜ばしいお祭り騒ぎの日だからね」

「限定品とかも結構出回っているんだよね。吉井くんも元の世界に帰れる日が来た時のお土産用に何か買って行ったら?」

なるほど、それもいいかもしれない……

少し離れた所にあつたウサギのキーホルダーなんて葉月ちゃんにプレゼントしたら喜んでくれるかも。

『その前に昼ごはん…… 名の知れた名店に行列ができ始めるから早くしないと』

「いけない!! 清蘭、吉井君も付いてきて。最近出来た美味しい店があるのよ!!」

「ちよつ、鈴瑚。そんな強く引つ張らないですよ!」

「ちよつ、もげる! 腕がもげるウウウ!!」

満面の笑みを浮かべた鈴瑚さんに引つ張られていく……

清蘭さんも鈴瑚さんに文句を言いつつも柔らかい笑顔を向けているあたり、寧ろこの

二人の方が楽しんでるんじゃない……

つて、サグメさんが置いてけぼりになってる!!

サグメさんを置いてかないで!!

いろんな食べ物を売っている屋台が集まる場所に到着し、鈴瑚さんが中心になって多様な食べ物を買って込んでいく。

しかも屋台を切り盛りする女性達が気のいい兔達ばかりで「お嬢ちゃん達可愛いからオマケしちゃうよ!」「はいよ元気なお嬢ちゃん! 大盛り4人前お待ちっ!!」なんて感じでサービスまでしてくれた。

まあ、中には「サグメ様も大変ですね…… よかつたらこれもらってください」とサグメさんを心配してくれる兔も多かつたけど……

一般人にも周知の事実って言える程サグメさんは忙しいのかな?



「うーん、おいしいっ!!」

「オエツプ…… 食べ過ぎた……」

いろんな屋台で買い込んだ食事を休憩所のテーブルの一つを確保して皆で食べていたのだが、鈴瑚さんが調子に乗って買すぎたのが原因で、清蘭さんが食べきれずにテーブルに伏せてしまっている。

『オム焼きそば（オムライス風に玉子で包まれた焼きそば）の大盛り』に『ホットドッグ2本』『焼き鳥合計14本』も食べたなら無理もないけど……

『清蘭、少しの間だけ休む？ 少し離れたベンチが空いているから、そこで横になるといい』

「ゴベンナザイ…… スゴジャズマゼデクダザイ……」

サグメさんの肩を借りてそのままベンチで横になった清蘭さん。

残ってしまったチャーハンとから揚げと焼きそばは僕と鈴瑚さんの二人で消費する事にしよう。

でも鈴瑚さんもよくたべるなあ…… 僕も一応この中で唯一の男子だしそのメンツを保つためにもココで頑張って食べ切ろう……

「……………」

「あー…… 吉井君も頑張ったと思うよ？ うん……」

鈴瑚さん、今は話しかけないでほしいかも…… このままだと吐く……

正直舐めてた…… 流石にチャーハン大盛り3皿に焼き鳥13本、から揚げ18個も食べきれたのは十分凄い方だと思う…… こんなに食べても平気な奴って言われたら雄二ぐらいしか思いつかないや……

鈴瑚さんはその倍に加えてお好み焼きも2人前分は食べていたけど、流石に厳しそうにテーブルに伏せてしまっているし……

「まあ、もう少し休んだら買い物に行こうかな？ 清蘭も買いたい物があるらしいし」

「アンタ等、あれだけ買い込んだのを全部食べた訳？ 凄いけどバカじゃないの？」

『食べ切った根性だけは凄い……』

どうやら清蘭さんとサグメさんは動けるようになったみたいだ。

二人共すごい驚いた顔をしているよ……

でもあれだけ食べた後だとすぐには動けそうにもないし、少しだけ休ませてもらうことにはした……

すぐに動いたら100%吐く……

「でもこの調子なら買い物もすぐですよね？」

「だったらすぐに終わらせませんか？ 私も買い物に行きたいのがあって……」

食べ終わってから20分後。僕と鈴瑚さんもようやくまともに話せるようになったので、今後の予定について話し合っていた時だった……

——バンツツツ!

うわっ、びっくりした!!

誰なんだ! いきなりテーブル叩くなんて!

「おやおやあゝ? 誰かと思えばイーグルラヴィのお二人さんじゃないの?」

「こんな所で会うなんて偶然だねえ?」

いきなり話しかけて来たのはいかにもレディースの不良ですって感じの化粧が濃い兔が5匹。

よく見るといつの間にか囲まれてしまっている……

「清蘭さん、鈴瑚さん、皆知り合いなの?」

「さあ?」

どうやら知らないみたい。どこにでもこんなのがいるんだよね。ありもしない因縁吹っ掛けてカツアゲしようって言うのが。

「三日前にアンタら二人に潰された『兔夜叉<sup>ウサヤシヤ</sup>』だコラア!!」

二人が覚えて無かっただけだよ……

って、名前可愛いね! 特攻服っぽいやつデザインも、エンジンを細々と食べている可愛い兎なんて……

「なに? 今日のはのんびりとお買い物?」

「足でまとい二人も巻き込む事になるとは災難だったねえ?」

うわあくお…… 僕が反応に困っている間にメリケンサックだの金属バットだの色々と用意しましたよ……

『名前可愛いね? あなたたちの趣味?』

「「なんだとゴルアアツ!!」」

あ、サグメさんのコメントを見て激怒した兎夜叉さんの一人がバットでスケッチブックをボロボロにしちゃったよ……

このままでとサグメさんと会話が出来なくなっちゃうけどどうしよう……

「へえ? この二人が人質になると本気で思っているんだ?」

「仕方ないなく。もう一回叩きのめしてあげないと理解できないならもう一度やってあげるよ」

「食後の運動も兼ねて、二度とこんな真似が出来ないようにしてあげる!!」

そう言った清蘭さんと鈴瑚さんの二人が椅子から立ち上がって前に出る。

「舐められたものね……」

「上等だコラ! 掛かってこいや!!」

「はいストロップ!!」

「いかにも」乱闘始めます」みたいな流れを作り出した両者の間に割って入って行った。

そうじゃないと周りに迷惑がかかるじゃないか!!

「あ? 何コイツ?」

「吉井君、あぶないよー?」

「いやいやいや、ココで暴れる方が色々とマズいですって!!」

お巡りさんのな兔さんか人がここに来ちゃうって……

二人とも一度横領で立場が悪くなっているんだから、これ以上騒ぎを増やさないでよ……

「そつちも落ち着きなよ? むやみやたらに殴り掛かるのは良くないって!!」

「「はあ?」」

清蘭さんと鈴瑚さんが目当てだった兔さん達は、急に出て来た僕を相手にきよとんとしてる。

「今日の所はこれで勘弁してください!」

適当に僕の財布から125円だけ渡す事に……

これ、よく考えたら今の僕が持ち合わせている全財産なんだ。外の世界に帰れたらある程度お金引き出しておこう……

「いちそうさまでした！ 皆逃げるよ!!」

ここで脱兎の如き勢いでその場から逃走した。

二人を置いて真つ先にサグメさんの手を引つ張つて逃げたけど、清蘭さんと鈴瑚さんならうまく僕らに追いついて見せるだろう。

「……あ!? ちよつ、待てやゴルアア!!」

「へへーんだ！ 待てと言われて待つバカなんて居ないよーっだ!!」

兎夜叉の皆も慌てて追いかけたけどもう遅い。

こういう商店街みたいな人混みが激しい所での追い掛けっこでは逃げる側の方が圧倒的に有利なんだよ！

僕は鉄人と地獄の鬼ごっこと言う名の英才教育受けているんだ。あのレベルの逃走劇を何度も繰り返していればこのくらいできて当然なんだ!!

今回ばかりは鉄人に感謝した方がいいかもしれない。ありがとう鉄人!!

「逃げるな清蘭テメエ！」

「兎に角あいつ等を囲むぞ！ アンタはあつちに回れ！ お前はそつち、アタイはこつちに回り込む!!」

「分かっているわよ。 あいつ等は絶対に逃さない！」

「あの、すみません…… あっちてどっちですか？」

「……………」

「よし、全員撒けたね」

僕らはあの兎夜叉達を振り切った後、商店街のようなエリアからしばらく走った海のような所にいた。

「あ、あんた結構やるじゃない…… あれだけ走ったのに息一つ切らしてないなんて……………」

「あの程度だったら外の世界で何度もある事だったしね。 あの場では最善の判断だったでしょ？」

「別に喧嘩しても良かったんだけどね？ やり過ぎなければ国家権力使って逮捕の為に武力行使って事で終わらせられるし」

いや、清蘭さんのその理屈だとただの職権乱用だよな？

結局の所、あの兎夜叉さん達には最初から勝ち目は無かったって事じゃないか……  
「だけどもんだかんだで吉井君のあの判断が一番良かったと思うよ？ あの兎夜叉達の顔見た？」

「……」きよとーん」だった。　クスクスツ……」

「サグメ様も笑いすぎですよ。　って、あははは!!　ごめんなさい、あの顔思い出したらつい……」

「耳もピクピクと変に震えさせてるし、鼻の穴も無茶苦茶開いちゃってしまいましたしね。

アハハハツ!!」

「……おなか痛い。　吉井君、これ以上言わないで……　思い出すたびに笑いが……」

「サグメ様、別に遠慮せずに笑ってしまえばいいじゃないですか?」

「みんな笑っちゃだめだよ。　あの子達も一応女の子なんだし……　あはは!」

「そう言う吉井だってあの鼻の穴で笑うなんて失礼だって……　ぷーっ、クスクスツ……」

あの玉兎さん達には悪いけど、あの間拔けな顔に関してだけは笑わせてほしい……  
でもどうしよう?

あの顔は面白かったけど、多分あの兎夜叉の皆がまだ総動員で探し回っているだろうし、あの商店街みたいな所にはいけそうにもないね。



「貴方達は一体何をどうやったたらそんなバカみたいに爆笑できるのよ?」  
「あらあら、とても楽しそうね?」

あ、依姫さんと豊姫さんだ。

一体何の用だろう?

「いえ、吉井君の機転で喧嘩になりそうだったのを上手く撒いて来ただけなんですけど……」

「いきなり吉井がサグメ様の手を掴んで逃げ出した瞬間の相手の顔が本当に面白かったのよ。クスクスッ……」

「もう〃きよとーん〃って擬音が似合ってる顔で、女の子にあるまじき顔してたんですよ。あはははっ!!」

「依姫さんも機会があればやってみたらどうです? たまになら面白いかもしれないですよ?」

「やめておくれ。そんな事より、吉井君達に話があつて来たのよ」

話? 一体なんだろう?

「一度吉井君の日用品に関してなんだけど……」

「あ、さっきのトラブルのせいで商店街に戻れそうにないんですよ」

「あの手のバカはしつこく探し回るから明日までは行けそうにもないです」

かと言って、叩きのめして牢屋に連行させても調書やら何やらで忙しくなって買い物どころじゃないだろうし……

結局、買い物には行けそうにも無いか……

しばらくこの女子高生みたいな制服で我慢するしかないか……

「あら？ サグメったら、わざわざ買い物までしてくれているの？ ならこの話は余計だったかしら？」

「「え？」」

「やっぱ、外の世界に戻って方が一スキマ妖怪に狙われるリスクを考えたら短時間とは言え不安よね？」

え？ 豊姫さんが申し訳なさそうな顔をしてるけど……

「たしか吉井くんって外の世界では一人暮らしなのでしょ？ なら外の世界に戻ってあなたの家から日用品を取りに行けたらって思ったんだけど。 ……やっぱ差し出がましかったかしら？」

「「豊姫さん（様）、ありがとうございます!!」」

全員で思いっきり抱き付いたり肩を組んだりしようとしたけど大丈夫かな？

因みに、僕は正面から抱き付こうとして依姫さんから蹴りを入れられました。

「そ、そんなに喜んでもらえたならわたしも嬉しいわ。……つて、3人共離れてくれな  
いかしら?」 流石に重い……」

あ、3人共強引に引き剥がされた。

最初は重そうにしている豊姫さんを心配したレイセンちゃんが頑張っていたけど力  
不足で、結局依姫さんが引き剥がした。

「と、とにかくまた文月学園の屋上に移動します。吉井くんと私は当然として……」

「後は誰が行くか……」

「はいはいはい!! 私達行きたいです!!」

おつ、清蘭さんと鈴瑚さんの二人が行きたそうにしているよ……

物凄い必死になって懇願してるけど、そんなに外の世界に興味があるのかな?

「悪いけどサグメちゃんにもついてきてもらえないかしら?」

あ、二人が物凄く落ち込んでる。

鈴瑚さんに至っては血涙まで流してるし…… よほど悔しかったのかな?

「外の世界とやらの食べ物に興味があったのに……」

「今日は商店街に寄れない以上、外の世界に行つてもきつくなつた下着を買い直した  
かったのに……」

ええ…… 二人共、理由が酷いよ。 観光に行くわけじゃないんだから……

「豊姫さん、せっかくですし二人の事も連れて行ってあげてほしいです。僕が暮らしている世界を二人にも見せてあげたいですし……」

「!？」

あ、二人の眼が凄いきらきらと輝いている……

そんなに行きたいんだ……

「ふう…… 仕方ないわ。一応、二人共上のウサ耳は隠せるかしら？」

「訓練は受けているので大丈夫です!!」

そう言った二人が頭の上を手の平で軽くスツとなぞると簡単に頭の上にあったウサ耳が消えた。

正確には“隠した”だけなんだろうけど…… って、あのウサ耳って隠す事が出来るんだ？

「それじゃ…… 行くわよ」

豊姫さんが扇を軽く振るう。

その瞬間、前回と同様に文月学園の屋上へと一瞬で景色が変わる。

前回来た時と違って屋上はかなり荒れている。

多分、あの時の八雲さんが放った大量の弾幕の跡なんだろう……

「よし、文月学園にとうちやく!!」

「へえ、ココがアンタが通っている。文月学園。ってところなのね？」

「なんか静かだね？ 今ここに人っていないの？」

「ううん、多分今は授業中で中で勉強しているんだと思う」

外を見てみる限りどのクラスも体育の授業が無いみたいで、とても静かだ。

「なら、人に見つからないようにこっそりと出ましよう。それにあのスキマ妖怪が見ているとも限らないし」

「授業中の皆に迷惑をかける訳にもいかないしね」

多分今は授業中のはずだから誰かに見つかる可能性は低いはず。

抜き足・差し足・忍び足でゆっくりと降りて行こう……

階段を下りたは良いんだけど…… 何かがおかしい……

いくら何でも静かすぎる。 昼のはずなのにホラー映画みたいで相当怖いんだけど

……

「……あれ？」

「どうしたの吉井くん？」

「あ、豊姫さん…… いや、あまりにも静かすぎて……」

なんでこんなにも静かなんだ？

まるで〝人が一人も居ない〟かのような……

「今日はたまたま休みだったとか？」

「いや、休みでも何人か人が居る筈……」

用務員のひととか、会った事がある訳じゃないけど、学園長も確か試召戦争システムの研究に熱心で、この学園に常駐しているって噂も聞いたことがあるし……

「まあ、でも言葉通り誰も居ないって言うならある程度は自由に動けるんじゃない？」

「なにがあつたのかは分からないけど、これは異常事態だよ……」

『何が…… どうなっているの？』

サグメさんがスケッチブックの代わりに僕の学生証の空白部を使って話を……

「つて、勝手に僕の学生証を使わないでよ!! まあ、僕もメモ帳としては全く使っていないから別にいいんだけどさ……」

会話が成り立たないよりはいいけど、あんなものをいつの間持って来たの？

僕、学生証は鞆に置いてきたはずなんだけど……

「なら、この学園内を散策してみる？」

「そんな時間は無いんじゃないかなー？」

僕は鈴瑚さんに賛成したいな。

だって外の世界に長時間いると八雲さん達に見つかる危険がある訳だし、もしかしたら僕が祝日などを忘れている可能性もあるから……

もしそうだったら僕が笑いものにされるだけで済む。

「いえ、念の為にこの建物の中を調べてみましょう」

「「えっ？」」

さつきまでにこやかにしていた豊姫さんが真剣になっている……

なにか理由があつて言ってると思うけど、何を気にしているんだろう……

「もし万が一ですが、スキマ妖怪が何かしらの工作を行った結果がこの無人の校舎だと言ふのならすぐに外に出るのは危険よ」

『そのスキマ妖怪が何をしたのかを知る為にこの校舎内にあるものから手がかりを掴む？』

なるほど、確かに遠回りだけどその方が確実かな……

僕だったら外に出て何がどうなっているのか確認しようとするけど。

「なら一度解散して個人で確認しに行きます?」

『一人で動くのは危険。吉井くんは私と豊姫の二人で守る』

「ならわたしと鈴瑚は二人で外を見てこようと思います」

え? いや、確かにあんまり人数多くても動きづらいけどさ……

清蘭さんと鈴瑚さんの二人は外の世界に一度も来た事は一度も無かったよね!?

「え? 二人共大丈夫? 迷子になつたりしない?」

「心外だなあ吉井くん。私と清蘭が元々は何処出身だったか忘れてないよね?」

あ…… 二人の出身で……

『“調査部隊”イーグルラヴィ』月の部隊の中で唯一異世界浄化の最前線で活動できる特殊部隊の出身でもあるんだよ?」

「アンタに心配される要素なんてこれっぽちも無いの。分かる?」

小バカにするような清蘭さんの言い方は気に入らないけど、正直納得してしまう僕もいる。

それでも少し不安が残るけど、そこまで自信を持って言う二人の事を信用しないのは彼女達に対して侮辱にしかならないだろう……

「分かった……でも絶対に無理はしないで」



「ええ、絶対に無理はしない。これでも引き際は心得てるのよ?」

清蘭さんと鈴瑚さんの二人はすぐに階段を下り、外へと向かって行った。

「吉井くん、貴方はこの中を案内して」

『私と豊姫はあの二人と違って現場での勤が働くわけではないから、何処にどんな部屋があるか分からない以上、危険な部屋などに気が付かずに事故になる可能性もある』

「そんな場所はないと思うけど…… 確かに中は外よりも複雑だし、そう言う意味では僕の案内が必要か……」

サグメさんの言葉に納得した僕は二人を連れて学園内を案内していく事に。

ハッキリ言って、なんだか人のいない学校舎って言うのはかなり不気味だ。

トイレに行きたくもなるけど、そのトイレでさえどこか不気味で入りづらい寒気を感じてしまう程だ……

そんな中、二人から真っ先に案内してほしいと言われた場所は……

「吉井くん、まずはこの学校の教師が集まる部屋に案内してもらっていいかしら？ 生徒を指導する立場にある教員の職場ならなにか手がかりが残されているかもしれない」

職員室だった……

## 俺と喧嘩と一角の鬼（雄二 side）

「はあ…… しかしこれからどうすつか？ この金も本当に役に立つのかどうか分からねえしな……」

だが、古明地が言った事が本当なら、この地底とやらはこの幻想郷の中ではかなり治安の悪い方らしい。

相手の妖怪次第ではただの人間でしかない俺なんて簡単にカモにされる可能性もあるんだ……

「しかしあのチビ、俺の足下見やがって……」

そう言う俺の手の中にある軽くなった財布の中にはたったの二千円……

今後必要になる物を買ひ足す事を考えたら不安しか残らない。

こんな事態になったきつかけは地霊殿の正門を出る数時間前であった……

「坂本さん、申し訳ありません。貴方にお話しして置かないといけないことがあるのを忘れていました」

「忘れていた事？」

「一体なんだ？ 余計な面倒事は避けたいからとつと出て行きたいんだが……」

「面倒はかけさせません。坂本さん、この幻想郷で使えるお金は持っていますか？」

「は？ ココ（幻想郷）で日本と同じ金が使えとは思っていないねえけど……」

「ええ、貴方の予想通りですね。ココでは全く使えない紙くずとゴミです。貴方の事ですから『出来ればそのお金がもらえたら……』なんて思っているようですが……」

「ハッキリ言つて幻想郷で使えるお金に関して、こちらもタダで渡す訳にはいきません」

「……何が言いたい？」

「何が言いたいのかは頭の回転が速いあなたなら容易に想像が着くはずですが？」

「もし古明地から金を手にしたければ、価値のある“何か”を差し出せつて事か？」

「ええ、例えば……」

「あ？ いきなり何を見てんだ？」

「外の世界では当たり前でも幻想郷では希少価値のありそうな物なんて都合がいいかもしれませぬ？」

ちっ、コッチが色々困っているからと言って足元見やがって……

だとしたらココは何を出す？ 先月機種変したばっかのスマホ（Xperia Z5）でも出すか？ それとも、俺の鞆の中身から音楽プレーヤーとか明久からパクって……”借りてきた”はいいが返せる気がしなくなってる予定だったゲーム機でも出してみるか……

いや、ケータイは地底から上がった後で秀吉かムツリーニと連絡が取れるかもしれねえし、今の音楽プレーヤー鉄人に没収された後に買い直した奴だから大した曲も入って無い。

外の流行の曲が分からない音楽プレーヤーなんてはつきり言ってこいつらにとっては無価値も良いところだろ……

ゲーム機も同じ理由で却下。 たいしたソフトも持っていないからこいつの好みに合わなければゴミとして処分されるだけだろ。

上手く行くかは分かんが、ここは……

「これは…… 外のお金ですね？ しかし、なんでこんなものを？ 先程も言いました

が、このお金は幻想郷では全く使えない価値の無い物だと……」

「確かに『幻想郷』では全く価値がねえんだろうな……」

「……何が言いたいのです？」

今は心を読んでいないのか、こつちを疑うようなジト目でにらみながら聞き返して来た。

なら当然の反応だわな……

「だが、今の外ではこの金が当たり前になっている。もし外に行く機会があつたらその金は数日分の飯を食べる程度に役立つ筈だぜ？」

そもそも外に行く機会が全く無かつたらこの理屈は詭弁以前の問題なんだが……

頼む、上手くいってくれ!!

「上手くいってこれって…… はあつ…… まあ、いつか機会があるかもしれないし、

一応持つておこうかしら？ 貴方の心の中にある記憶から読んだ限りの情報を元に計

算した相場になりますか……」

そう言つて古明地が渡してきたのは昭和の中期位に使われていただろう、今では全く見ない千円札（伊藤博文）が2枚。

「おいコラ！ 普通に円が使えるんじゃないか！ なんで1万円渡して二千円になつて帰つてくるんだよ!?!」

「仕方ないでしょう！ 此方では外の世界と比べて物の価値が高くは無いですから!!」

貴方の世界では大衆食堂の定食が一食600〜800円も出すそうですけど、この幻想郷では食堂の定食が一食60〜80円（現代円600〜800相当）で済むんですよ!! 寧ろおまけして換金した後で倍以上の価値に相当するお金を渡しているんですから、文句言わないでください!!」

金のレートが旧東京オリンピックピックぐらいの時代で止まつてんのか!? これが嘘とかだつたらシャレにならないぞ!!

仮に嘘だつたとしてもこつちの立場の方が弱い以上、この情報が本当である事前提で話を進めねえと一步も動けなくなつてしまうから仕方が無いって言つたらそれまでなんだが……

「全く…… 人間と言うのは本当に自分に取つて都合の悪い解釈となつたらワガママばかり! 50年も前に来たあの女もギャーギャーと文句ばかりを……」

な、なんか古明地が凄い愚痴こぼしてただけ……

50年も前の昔の人間と一体何があったんだ？

「すみません、この話は貴方とは関係ありませんでしたね……あと一応、私達が追い出したからと言って簡単に死なれてはこちらの方が困りますので……」

「そう言えば出て行く事に言っていたよな？ 幻想郷の連中は程度の違いこそあれど、基本的に話し合いで解決するのはほぼ不可能だと……」

「もし時間に余裕があったなら、『弾幕ごっこ』と呼ばれる決闘法について説明してきましたか？……」

「お前のペットが俺に怯えてたりキレたりしてるから、今日中に出て行かないやならないんだろ？ ルールブックみたいなのがあったらそれも貰えないか？ 地上に上りながら覚える」

「そんな都合のいいものではありませんので、その辺に関しては適当な妖怪か人間にでも聞いてください。弾幕ごっこのルールに関しては脳筋の鬼でも覚えられるくらい単純なので、この後で貴方が出会った妖怪に知性があるならその程度の事は教えてくれるでしょう……」

知性の無い下級妖怪に真っ先に会ったらどうするんだよ……

「まあ、その可能性もありますし……そうですね。せつかくですし、かなり強引なや



り方ですが、貴方の中に眠っている能力を目覚めさせてみましょうか？」

「は？」

何言ってるんだ、このチビ？　とうとうあれか？　中二病でもこじらせたか？　心が読める事を言い訳に肩から“第3の眼”なんて降ろして……

・「だから設定なんかじゃないって！　本当に第3の眼があるんだって！」とか周りの知り合い相手に言い張ってたり……

・あのお燐とか言う猫を“使い魔”とか言っているのを見られた後で「アニメ見過ぎ」とか言われたり……

・だつせえマント羽織って「我が名は“怨霊すら恐れ忌む少女”古明地さとり！　最恐最悪の悪の覚り妖怪よ！　アハハハハハ!!」とか言つてノリノリだったしする、痛い小5ロリだったって訳か？

本当にそうだったらクソ笑え……

「なんでそれを知っているんですか!!　お燐とお空ぐらいしか知らない私の忌まわしき過去を……」

物凄い顔が赤いんだが……　本当にやってたのか？

「適当な事を考えていただけなんだが……　すまん……」

「今回は心から反省しているようですね。 〃絶対に喋らない〃…… それを条件に許そうと思います」

寛大な処置をどうも有難うつと。

確か、能力がどうこうって言っていたな？ そんなものどうやって目覚めさせるって言うんだ？

「能力の解放についてですね？ 本当はこんな手で目覚めさせるのは良くは無いのですが……」

「なにか問題があるのか？」

「ええ、普通は能力が目覚める可能性が見えた時に能力の系統に合わせてゆっくりと開花させていくものなのですが……」

あ、この先が簡単に読めたわ。

「普通のやり方ですとあなたの能力次第ですが、最低でも半年はかかります」

「長いわ!! 外の世界に帰れたとしてもその時には留年確定だぞ!!」

「ですので、今回ばかりは強制的に能力を目覚めさせようと思います」

「強制的に？ どうやるんだ？」

どうせ碌な方法じゃねえんだろ？ 適当な理由を付けて断って……

「私の“妖力”を込めた弾をあなたの頭か心臓に近い箇所を狙って撃ち込みます」  
「殺す気か!？」

一番分かり易くてヤバイ方法じゃねえか!! しかも急所狙い!!

外の危険度を言い訳にしてこつそりと俺を事故死したことにして始末しようとしているとしか思えねえぞ!？」

「もちろん、貴方のようなケースで幻想入りをしてしまった外来人を殺す訳にもいかなので加減はしますが、乱暴な方法である事に変わらないのは否定できませんね。」

要は眠っている相手に対して暴力で叩き起こすような物ですし。

……しかも今回使う力は“妖力”ですから。手順を少しでも間違えたら良くても妖力中毒になって行動不能、最悪……」

「死ぬとか言わねえだろうな?」

「私の“妖力”に侵されてその身と心が変質し人外の化け物と化す危険があります。もしそうになったら二度と人間には戻れません」

「躊躇なく断らせてもらおう!!」

どこの吸血鬼が会得した禁断魔法だ!!

そんなリスク背負って能力得るくらいなら自力だけでどうにか脱出しようとするわ

!!

「くすくすつ……冗談ですよ？ 安全には十分に配慮していますから、そうなる前に貴方の中に宿っている霊力か魔力が働いて私の妖力の毒を全て吐き出してくれませう。ですのでこの方法でもリスクはゼロですよ？」

「妖力が人間に対して毒なのは事実なのかよ!？」

「ええ。……とは言っても、私の全妖力を流し込んでも数日入院する程度のもので、万が一何かあっても降りた先の旧都にある診療所でも簡単に治療出来ますよ」

笑顔でシヤレにならない冗談ほざきやがって、人生で初めて肝が冷えたぞ……

そう言った古明地が急に俺の背中に手のひらを触れさせたんだが、その時の手が凄く味の悪い感触だったのを覚えてる。

それから数秒後に背中に激痛が走って、そのまま吹っ飛ばされたんだ……

何メートルも先に飛ばされて扉に激突したが、その時はなぜかあまり痛みは無かった。いや、寧ろ俺の全身からドス黒いエネルギーのような物が力となって吹きだし、気味が悪くなる程の高揚感を覚えた程だ……

「その黒いエネルギーは”私の妖力の毒素”ですよ、それが黒以外の色になったらすぐにその力を抑えて下さいねー！ それを怠ると急激な力の消費についていけなくなつた体が全身筋肉痛になって、二週間は立てなくなつてしまいますからー!!」

「おおおおい！ それ普通に危ないじゃねえか！ 何がリスクゼロだ、十分危険じゃ

ねえか!!」

文句を言ってやろうかと思ったが、「それでは良い旅を」……と淑女みたいなポーズと共にお辞儀をされるのとほぼ同時に扉を閉められた。

事実上古明地の手によって追い出された俺は数分程待つてエネルギーの色が黒以外に変わるのを待つことにした。

ただ待つているだけの数分と言うのは意外と面倒臭い物があったが、黒以外の色に変わった後はスムーズに事が進み、簡単に力を抑える事が出来た。

「と、なんて思い出している間に街に到着つと……」

考え事をしていたら地底の街、〃旧都〃に到着していたみたいだ……

治安が悪いなんて聞かされたあとだから警戒していたんだが、意外と活気があるな……

とは言っても、地底って言うだけあって上を見ても太陽なんて見えないし、空気もあまりきれいとは言えず、慣れない環境で少し咳き込んでしまうが……

外周から荷物の中に入っていた望遠鏡（ムツツリーニからバクつて……たまたま借り

ていた)で見てる限り、特に目立つのは謎の“無料案内所”、“キャバレー・キャバクラ・SMクラブ”、“一発一千元・選りすぐれの美女降臨!!”なんて書かれた看板や、外で客引きをしている飲み屋のボーイのようなおっさん、“CLOBBSOG”の看板を掛けたゲーセンなど……

「つて殆ど歓楽街じゃねえか!! 滅茶苦茶暗い廃スラム街やホームレスが集まる集落みたいなどころを連想した俺がバカなのか!」

とは言ってもこの街には着いたばかりだし、持ち物を確認してみる限り、何も調達しないで先に進むのに不安を感じるから、ここは一度中に入ってみるか。

「……こんな所で休んでられるか。 さっさと出て地上に上がるぞ!」

中に入って数分で俺はこの街に入った事を後悔した……

「お兄さん、色々と溜まつてるんじゃないの? 中でスッキリしていかないかい? 一

回ほつきり300円(外の相場で3000円相当)、可愛い娘何人も紹介するよー?」

中に入って一分で怪しい店のおっさんに引き留められて逃げる羽目に。

俺みたいなガキが大金持っているように見えるのかよ……

「キヤアアアアアアアアアア！ だれかあのひったくりを捕まえてええ!!」

「ヒヤツハー！ キタぜ旧都オオオ!! 俺達を止められるなら止めてみる…… ブルア

アアア!!」

「うるせえ」

大慌てで逃げてから3分後にはバイク乗り回すひったくり二人を相手にすれ違い際にラリアット……

あいつ等が立てた砂煙で制服が汚れちまったじゃねえか……

それだけでも面倒くさいってのに……

「おいコラ、てめえ……」

「あん？」

「俺は松川って言うもんだ……」

「で？ その松川さんが一体なんの用だ？」

「このクソガキが！ ムカつく面しやがって…… 調子こいてんじゃねえぞコラア!!」

「逃げた先で速攻で因縁つけられるって…… お前こそ痛い目見たくなかつたら、さつさと消えろ」

「んだとお!」 もう勘弁ならねえ……! 今なら金を払えば許してやる。だが断るって言うんなら…… 分かって…… ブルアアア!!」

「さっきのひつたくりからパクった”金属バット”で攻撃、たまたま近くにあった”自転車”を叩きつけて、たまたま持っていた”とがった短い鉛筆数本”を口にぶち込んで……」

「ちよっ! お前、何するんだ!? オボエエ!!」

それから5分後には道端でカツアゲに会いそうになつて、仕方なく金属バットで執拗に頭がち割つて、うずくまっている所に顔を蹴り上げてあおむけにしてやって、たまたま近くにあったボロボロの自転車を叩き付けて追い打ちとして自転車の上から何度も相手にのしかかる。

悶絶している所で地底に飛ばされる前にたまたま研いで置いた短い鉛筆数本を口に叩き込んで掌底アッパーと張り手数発を叩き込む事で返り討ちにしてやる羽目になった。

本当に騒ぎしか起こらねえんだなココは……

近くに寄つて来た妖怪や人間も喧嘩を楽しむようにあおつて来やがるし……

「テメエみたいなクソガキなんぞに俺の金が…… 畜生……」

そのおかげで殴りまくつた際に飛び散つた900万(外の相場で9000万)も手に



入ったのはいいけどよ、だけどよく見てみたら何枚か血に染まつてるんだよな。

逆にコツチがカツアゲしたみたいでいい気分じゃねえよ……

「もうこんな所の空気なんざ一秒たりとも吸いたくねえ…… 買うもん全部買ったら余った金の大半を処分して地上に上がる!!」

いろんな意味で治安が悪すぎだろ！ 地上で嫌われる奴らの集まりって、この街の住民を見てようやく納得がいったよ!!

こんな頭のおかしい変人・狂人の巣窟なんて普通の感性で長居なんて出来る訳ねえだろ!!

「ったく…… まあ、これだけあれば当分は持つか……」

謎のカツアゲ君から手にした金の内数万円分の服とか食料に地図などの必需品や最低限の宝石類（上で金が使えない時の転売用）を買った俺は、そのまま地上を目指して街から脱出しようとした……

「あ、姐さんだあああ!!」

「逃げろおおお!!」

店を出てすぐに周りの奴らが大慌てで俺から逃げ出した。

姐さんって誰だ？

「あ、ゆーぎのあねさんだ！」

「酔っぱらいのおねーちゃんだ!!」

「やってきていきなり大暴れする悪の外来人さんをやっつけに来たぞー！」

いや、逆に子供はヒーローショーでも見に来たかのような純粋な目で一つの場所を見つめていやがった。

つーか悪の外来人ってなんだよ？　むしろ喧嘩ばかり吹っ掛けて来たのは相手の方

なんだが……

考えるのをやめよう……　どうせこの街でヒーロー気取ってる変な奴がやって来たってだけだろうからな。

どこの世界も関係なくガキは正義のヒーロー様が大好きってのが相場であるって事  
だろ？

「つて……なんじゃこりゃああああ!!」

適当に逃げようと思ったその瞬間に謎の光弾の嵐“弾幕”が降り注いできた！

「ちっー！」

どうにか避けようとその辺の路地などに逃げ込む方法も一瞬思いついたが、あの弾の威力が正確に分からない上に、この街の住人柄を考えたらその中に誘導されてまた囲ま

れて喧嘩なんて事になりかねない……

幸か不幸か分らないが、あの弾幕には若干だが人ひとり分ギリギリで避けられるスキマがある事に気が付けた。

そこで俺は、ボクシングの足捌きの要領でステップを踏みながら弾の隙間を縫うようにしてすべての弾幕をどうにか回避する。

「あんた、噂に聞いたとおりにやるねえ」

一体何が起こったのかと頭の中を整理しようとした直後、少し遠くの方から急に声が聞こえた。

少し男勝りな声と共に現れたのは威勢のいい感じの角の生やした女。

盃を片手に持ち、その中には酒と思わしき液体が注がれている。

「恰好から察して外来人だろうけど、ココでは暴れる奴には暴れて迎え入れるってのが礼儀ってね！」

鬼符『怪力乱神』!!

いや、どちらかって言ったら相手の方が一方的に暴れて来たのを迎え撃つただけなんだが!?

「つーか汚ないぞ!! さっきから遠距離で弾をピコピコと打ち出しやがって!!  
ただの人間を相手にここまでやるか!」

「どうする…… 古明地の奴が解放させたって言う能力とやらを試すか?」

いや、自分の能力がどんな能力なのか分かっていないのにいきなり実戦で使う訳にも  
いかねえ……

ココはあのバネ状に展開されて拡散していく弾を避けながら隙を見つけ、その瞬間に  
この場から逃げ切る!!

「あれ? おいアンタ、なんで反撃してこないんだい?」

「悪いが俺にはそんな弾を打ち出す技なんてまだ持つていないんだよ」

「なるほどね…… だったら私に付いてきな。 付いて来れたらこの世界の決闘法“弾

幕ごっこ”について教えてあげるからさ!!」

付いて来れたらって……

「ごっこだぞー!!」

「あー! ゆーぎあねさん、まってー!!」

やっぱりそう言う事か!! さっきの弾とは違うタイプの…… 少しデカイ大玉みた  
いなのを乱射しながら逃げて行きやがった!!

って、このガキ共凄いい根性あるな！ あんなもん乱射されたら大抵邪魔にならないようにって大人が止める物なのに、周りの大人があきらめモード入っているのをいい事に物凄い速さで追いかけているし……

「どんだけ人気あるんだよあの女!？」

「チクシヨウ！ 絶対に捕まえてやる!!」

幸いだったのは今撃っている弾幕も少々危険だが避けられるスキマがあつた事だ……

その間をさつきと同じ要領で回避を繰り返しながら、全力疾走で追いかけていく。

「チツ……」

途中から細長いレーザーの掩護射撃まで絡んできたことでより避けづらくなった。

それでもギリギリで避けられる辺り、あの女はこのばらまいている弾を利用して遊んでいるんだろ？

「だったら最初はそうやっていい気になってろ！ すぐに捕まえて叩きのめした後で弾幕ごつことやらについて吐き出させてやる!!」

「お見事！ 弾幕ごっこを知らないのにここまで無傷で弾幕をかいくぐってくるとは思わなかったよ」

「ごっちは生きた心地がしねえけどな」

あれから様々なレーザーや弾が俺の逃げ場を奪おうとするように乱射されてきたが、どうにか躲し切って見せた。

しばらく追いかけていると、広場のような所に着いた方がいいが、そこであのツノ女が止まったかと思ったら謎の称賛。

一体如何したいのか訳が分からず、つい足を止めて警戒してしまう。

「そう言うな。その根性と行動力に免じて私が知る限りの事は教えてやるよ」

取り敢えず俺はこれまでのいきさつを説明する事にした。

「あははは!! そうかい、なるほどなるほど。そいつは災難だったねえ!!」

「笑い事じゃねえよ…… こちとらこの世界に来てから殆ど喧嘩か命がけの鬼ごっこしかしてねえんだぞ?!」

「そりゃあ地霊殿の方はお前が悪いからしょうがないさ。しかし、私はむしろお前みたいなの乱暴者は好きでね?」

「そりゃどうも…… だけど、俺はアンタみたいな新キャラにいちいち構っていられる

時間なんて無いんでな。

“ 弾幕ごっこ ” とやらに關してだけ聞いたらすぐにここを出る……」

「……だが、力の無い奴はここを出る前に死ぬ。せつかくだ……お前がどこまで生き

延びる可能性があるのか、ついでにその辺も試させてもらおうよ！」

「人の話を聞けよ!?! 本当に話を聞かねえ連中ばかりなんだな!!」

枷符「咎人の外さぬ枷」

ここにきて何故か悪鬼羅刹と呼ばれた不良なだけの人間と怪力乱神を持つ鬼の一方的な腕試しが始まってしまった……

## ムツツリと姉と魔法少女

「……俺は一体」

目を覚ますとそこはとても豪華な紅い部屋……

フランの地下の監禁部屋程ではないが、

はっ、フラン！ フランはどこに…… っつ！ 急に腕に痛みが……

「ちう……ちう……（血を吸う音）」

なぜフランが俺の手首に噛みついている？

そして思いっきり血を吸われているんだが……

いや、〃吸血鬼〃である以上おかしい事は無いんだが……

「……フラン、起きてくれ」

かるく頭をなでながら起こそうとすると意外と簡単に起きてくれた。

「フアア…… おはようムツツリお兄ちゃん」

「……どうなっている？」

「あの後、鼻血を噴きだしたお兄ちゃんがパチエに殴られそうになってソコにお姉さまやさくやがやって来て部屋に運んでくれたの」



なるほど、だから目覚めたのが客間のような部屋だった訳か……

「あと輸血って言うのもさくやがやってくれてたよ？ 『なんであんなに予備の血があるのか？』 って驚いてた」

「……ムツツリなら常備して当然のもの」

「ふーん……」

よく分からんと言う顔をしているな…… ならばそれでいい。

フランをムツツリの道に進ませる訳にはいかなないからな……

「あら、目が覚めたようね？」

「……お前達は一体？」

扉を開ける音と同時に二人の少女が入って来た。

一人はメイド。俺以上に感情を殺したような冷徹な瞳と太ももに備えてある大量のナイフが印象的だ。

もう一人はフランとよく似た少女。本当にフランと瓜二つな容姿をしているが、フランのような無邪気さは感じられず、代わりに異常な程に子供離れした威厳と風格を感じてしまう。

「お前達とは少々失礼ではないかしら？」

「咲夜、そのナイフはしまっておきなさい。刺すのはこいつが余計な事をしようとした時だけで十分よ」

「かしこまりました」

なぜそんなに物騒な事を言われぬといけぬんだ……

あ、オレが侵入者だからか？

「お、お姉さま！」

「フラン？ もう客人も起きたのだからここに居る理由も無いでしょう？」

「……わ、私はお兄ちゃんと一緒に居るもん!!」

「ハア……」

フランからお姉さまと呼ばれた少女がため息をつく。

「その子には少し話があると云ったでしょう？ 寝ている間の面倒はフランが見るといいう約束だったのにこれ以上私と約束を破る気なのかしら？」

「う……」

約束？ 一体何の事だ？

「その子次第では無傷で済ませてあげるからおとなしく部屋から出ていなさい」

「う……」

あんな一方的な物言いでは小さい子供のフランでは不満が募るだけだろうな……

“館の主”としてならば仕方のない一言だったのかもしれないが、実の姉からあんな言われ方だけはされたくないかっただろうな……

「……分かった。ムツツリお兄ちゃん、バイバイ」

「……話が終わったからカメラの使い方を教える。……大人しく待っていてられるか？」

「本当！ 約束だよ!! 私、ココから二つ離れた部屋で待つてるから、絶対に来てね？」

“……ああ”とだけ返事を返した後でフランは部屋から出て行った。

あんな約束をしてしまったが大丈夫だろうか？ 姉の方が物凄く不機嫌になってしまっているが……

「それよりも自己紹介がまだだったわね。私の名前は“レミア・スカーレット”。

この紅魔館の主にして、あの愚妹……フランの姉よ」

「……土屋康太。……そうか、ちょうどいい。……俺には妹がいるんだ。……妹を持つ兄としてお前と話がしたいと思っていた」

「ええそうね。私も貴方とは一度話してみたいと思っていたの。妹を持つ姉としてね？」

ハッキリ言つて、オレはエロ以外で頭を使うのは苦手だからな……

こうも堅つ苦しい自己紹介なんて論外だ……

だが、妹を持つ兄（姉）と言う点でレミリアとは話をしたいと思つていた所だ。

「あなたは確か急にフランの部屋に落とされたと聞いているわ。でもあのフランが説得だけで大人しくしたのは意外だったのよ？」

ウチの司書長が魔法で攻撃した事に関しては此方に非があるから、この場で謝るわ」

わざわざ頭を下げるどころか地面に土下座までして頭をこすりつけて誤つてくれて  
いるが……

実の所を言うと、その件に関してはあまり気にしていない。

なんだかんだでフランには傷一つついていないし、オレも役得と思える事があつたか  
らな……

とは言つても、子供とは言え館の主にあまり無様をさらさせ続ける程失礼なつもりも

ない。

小さい子供によくやる”たかいたか”!!”の要領で持ちあげたら顔を赤くしながら激怒してしまったから流石に降ろしてあげる事に……

「パチエから事情は聴いたけど、貴方はフランからどこまで聞かされたのかしら？」

「……フランの過去話を少しだけだ」

「そう…… その上で貴方はフランを外に出してあげたいと？」

「……ああ」

あの子は確かに過去に過ちを犯したかもしれない。

だが、謎の暗闇の件に関してはどうしようもなかった事でもあるし、助けたかった少女の事に関してもあの子なりに必死になっていただけじゃないか……

あれだけの長い時間を外に出る事も許されずに狂ったまま一人孤独に過ごして来たんだ。もう許してやってもいいじゃないか？

「貴方の言いたいことは分かったわ…… ムリね」

「……ムリ？ ……出したくないだけじゃないのか？」

簡単に納得するとは思っていなかったが、”ムリ”とはどういう事だ？

まるで出す気が無いんじゃないかと”出せない”かのような……

「勘違いしないでちょうだい。私としてはあんな忌まわしい過去の事は許しているの

よっ。」

「……ならばなぜ出さない？」

「貴方はフランから『魔理沙』について聞いているかしら？」

「……少しだけ聞いている。説得する時に大切な人について聞いたらその名前が出て来た」

もつとも、その子の事は詳しく聞く余裕が無かったからそれ以上の事は知らないがな……

「なら話が早いわ。私がフランを外に出さない理由はその魔理沙が原因なのよ」

「……は？」

……待て、全然話がつながらないぞ？ なぜ今のタイミングで魔理沙が話に出て来る？

「訳が分からないって顔をしているわね？」

「……当然だ！ ……オレはてつきりフランの過去をまだ引き摺っていて、それで監禁生活が続いていると思っただが!？」

「あの件に関しては私の裁量だけで決めつけていい事だとは思ってないわよ。あの件に関してはフラン自身で答えを出せなければ誰にどう許されたって救えないし、救われもしないって思っているもの。その件に関してはあの子が自分を許せるようになる

までもう口出しはしないわ」

「土屋様。問題はその魔理沙……あの“強欲の魔法使い”が妹様の恋人関係にある事なのです」

「……イマナンテイツタ？」

「問題はその魔理沙……あの“強欲の魔法使い”が妹様の恋人関係にある事なのです」

「……聞き間違いではなかったようだ。……それで、その魔法使いになんの問題があるんだ？」

強欲なんて二つ名を付ける辺り、あまりいい印象が無いようだが……

「ええ、むしろ問題だらけね……一応、どうしようもない程に性根が腐っている訳では無いのだけど……」

「……一応いい子なんだな？」

「あの行動を見てそれでも“いい子”と呼べるのなら貴方の頭の中の人間は大半が善人って事になるでしょうね……」

一体何をしでかしたんだ……

聞くのが怖くなって来たんだが……

「そうね……私達が掴んでいる情報を元にした被害だけでもぎつとこんなものかしら」

そう言ったレミアアが一つ一つ丁寧にその魔法使いの所業を説明していった。時々隣にいるメイドのフォローが入っていたが、纏めるとこんな感じである。

1. よく大図書館の本を盗んでいく。その際によく門番と小悪魔とパチュリーの3人をフルボッコに。

パチュリーが「アリス」に貸してあげる予定だった本まで盗られた」って愚痴っていららしい。

2. 紅魔館の壁を幾度となく破壊。修理費用がついに数億（外の相場にして数十億単位）に達する。

捕捉：幻想郷の建設業者の者達も儲け以上に修復回数に呆れ切ってしまう始末で、レミアアでさえ建設会社の方々に何度頭を下げたか分からない……

3. 幻想郷きつてのプレイボーイ（あくまで女子です）で落とされた妖精メイドは数知れず。

聞いた話では紅魔館外でも口説き落とされた女も数知れないらしい。

「……もういい。……それを聞いていたらただの悪ガキにしか聞こえなくなってきた」

もう3番目とか決定的だろう……よく修羅場にならなかつたな？



それ以前にフランが百合の趣味があるとは知らなかったな……

「それも当然ね。フランはそのことを知らないから……」

それは色々大丈夫なのか？

いや、やっぱりマズいだろう。今後付き合い合っていくうえで恋人の事は本当の意味で理解したうえで信頼しないと付き合い合っではいけないから……

恋人がそんな女（フランも女子です）だとしたら、レミアも“家族”として反対するに決まっている……

「フランが外に出るたびにこんなことばかり起こるのよ？ 私に似て……私以上に可愛くて愛しいフランをあんなナンパ女にやれるはずがないじゃない」

「……だとしても監禁は流石にやり過ぎ……」

どうやらレミアは相当妹に対して過保護になっているようだ……

多分、フランから聞いた事件がきっかけになったんだろう。

もしオレがレミアの立場だったなら同じことを…… いや、オレの兄貴達が反対して止めるかもしれないが……

「う☆…… だったらどうしろって言うのよー！ 赤い霧の異変以降、フランがなっているって事で遊び相手として歓迎していたらいつの間にか恋人として付き合い合ってるし。」

パチエから聞いた魔理沙の問題点の重大さに気が付いた時には手遅れで、手切れ金を用意して別れさせようとしたけど、受け取らないだけならまだしも離れる事もなく、この紅魔館の乗っ取りをたくらんでるんじゃないか？” って思いたくなるようなことばかり繰り返すし…… しまいには地下から出て来た時に魔理沙の方が” スツキリ” したような顔で出て来るのよ!? もう私訳が分からなくて一体どうしたら……”

「……な、なんか話があさつての方向に……」

た……確かにそれは見てみた……ゲフンゲフン！ 酷い問題だな……

……頭を抱えて蹲るレミリアがすごく可愛いな……

「……分かった。……この一件、乗りかかった船だ。 オレがその魔理沙と言う子と

話をしてみよう」

「あいつはあなたの話なんか聞かないと思うけど……」

「……フランとの恋愛事情を出せばいやが応でも話さざるを得ないだろう？」

とは言ってもレミリアの話の通りならば魔理沙と言う少女はかなりの問題児のよう  
だ……

こちらもそれなりの装備を整えておかないといけないな……

……あれ？ 確かオレはフランの件を説得する為に話をしていたような？

「……そう、なら話が早いわ。魔理沙が現れるであろう数日の間、あなたのその器量を見込んでフラン専属の執事見習いとして雇……」

「雇い入れる」…… そうレミリアが言おうとしていたみたいなんだが……

「うおっ!!」

急に館全体が揺れだす。

幾度と響く揺れの間に背中に羽を生やしている小さなメイドが慌てて部屋に入ってきた。

「緊急事態故にノックもせずに入ってきて来て申し訳ありません!」

「構わないわ。それよりもどうしたのかしら?」

「あの“強欲の魔法使い”が門番と交戦中! 増援として私達妖精メイドも迎撃準備を整えて……」

「いや、妖精メイドの皆は館の中に避難しなさい」

せっかくヤル気になっている妖精メイド達をレミリアはその場で下げさせる。

いや、せっかくその娘もヤル気なんだしここは普通に出動させても……

「悪いけど、正直足手纏い。むやみにケガ人を増やしたくないのよ」

妖精メイドと呼ばれた女の子はとても悔しそうだが何も言い返せない。

言われている事が事実だったんだな……

「……オレは何をすればいい？」

「この調子だと門番はもう少しで突破されるわね…… 土屋、あなたがパチエに見せ  
たつて言うその“超高速移動”とやらを使つてやられた門番を回収してそのままフラ  
ンがいる部屋で彼女達の面倒を見ていなさい。

テストも兼ねてあなたをここで使つてあげるわ。もし成功したら、フランを外に出  
す件は認めてあげる」

え？ あ、いや…… 超高速移動つて何のことだ？

オレはあの時急に弾が遅くなったのをきっかけに弾幕に隙間がある事に気が付いた  
だけで……

「わたしはパチエがいる図書館に行つてくるから、後はあなたに押し付けるわ。 咲夜  
！」

「はっ！」

置いてけぼりを喰らっている俺を置いてあの二人は一瞬で消えてしまう。

せめて正門への行き方くらいは教えてくれてもいいだろ……

「あ、言い忘れていたけれど、ウチの門番の特徴は…… 巨乳でガチムチの女拳道家よ！  
やられているとしたら何気に寝てると思うから、その時は起こさずにそのままフラン

も待っている部屋に運んでおいてちようだい！」

確かに、特徴を聞いていなかったな……

万が一間違えてしまったら面倒だから……

another story レミリアside

「お嬢様。なぜあのような仕事で試されたのですか？」

あの人間を置いてパチエと合流した私達は持っているスペルカードの確認と作戦を練っていたのだけれど、なぜ咲夜はいきなりあんなことを聞くのかしら？

あの娘も人間なのだから簡単に予想が付くと思っただけけれど……

「どうしてなのかわからないと分からないのかしら？」

「いえ、大体想像が着くのですが……」

なるほど、確かに口にしないと分からない事もあるわね……

「私はいつに対してどこへ向かえ」と言っただけかしら？」

「どこへって……やはりお嬢様も意地が悪いですわね」

「ふふつ、厄介者を都合よく追い出したってだけじゃない？」

そう、私があの人間に向かわせた場所は、この館の正門。

つまり、私からの仕事を蹴ってこの紅魔館の外へと逃げ出せば、生物として信用はならないが、紅魔館にとって面倒な人間を都合よく排除出来る事になるし、もし律儀にバカ丸出しでテストをこなしてくれたなら人間にしては信用できる存在を短期間とは言え雇い入れる事が出来る。

どう転んでも、私達、紅魔館にとって都合の良い展開になってくれるのよ。

「でも良かったのレミィ？ そんな妖怪臭い事をして？」

「パチュリー様の言う通りですわね。実際に外に逃げ出したならあの男はその辺の妖怪に襲われ続けるに決まっているのに……」

「そうよね。この紅魔館は相当悪名高い館として有名ではあるけれど、実際には外にいる下級妖怪の方が野蛮で狂暴な物だから、大抵はここにたどり着く前にやられちゃうのよね。」

「あら、私が良い妖怪な訳が無いじゃない？ 使える人間なら大切に限界以上に酷使するし、役に立たない人間なら躊躇なく追い出すわよ」

「お嬢様、せめて大切に使う程度にして下さい……」

「あら？ 怖くなって来たかしら？ 安心しなさい。わたしの身と心は咲夜の物よ？」

私の中にある“女”を目覚めさせてくれた咲夜を見捨てるなんて、私には出来ないわ」

「お嬢様……」

ふふっ、この子は本当にいい子ね。

軽く腰に手を当てて抱き寄せるだけで赤く興奮するなんて……

「あら？ 何をそんなに興奮しているのかしら？ もしかして、実は震えているの？」

まあ、あの魔理沙が相手だと言うのなら怖くても仕方が無いかもしれないけれど……」

悔しい事に魔理沙の魔法の力は本物……私も一人で立ち向かつては絶対に勝てない運命にあると言える程の力の壁を思い知らされてしまうほどに……

どれほど考え方が人間離れしていようと咲夜も結局は人間。それを割り切って諦

めたとしても咎めるつもりは毛頭ない。

「いえ……これは歓喜の震えですわ！」

「はっ」

今の咲夜の言葉にパチエも反応に困っているわね……

「これまでわたしはお嬢様に仕える身でありながら、わたし一人ではあの強欲の魔法使いの襲撃を防げずにはいました。ですがお嬢様はそれらの失敗を許し、友の為に自らも戦おうとしてくれるその大なる器。そんな偉大なる主の為にこの身を使う事が出

来る事への歓喜！

そのお嬢様を命に代えてでも守ると言うこの重要かつ最高の役割を果たす事が出来る。それが今の私をこんなにも駆り立てているのです!!」

「そ、そう……」

な、なんか咲夜の笑顔が怖いんだけど…… 軽く修羅入っているんじゃないかしら？

「でも命に代えてなんて言わないでほしいわ。 咲夜が私から離れる事は許さない。

これは私が咲夜に命じた事の中でも唯一絶対の命令なのよ。 私達は絶対に負けない。

今日こそはあの魔理沙を倒し、これまでに奪われたものを取り返す…… 絶対よ!」

そろそろ来る頃ね…… 皆の士気も高いし、スペルカードの準備も万全…… 私 の 能

力で見えた運命もあの魔理沙が捕縛されている姿も確認できた。 今回こそは負ける要

素は一切無いのよ!

来るなら来なさい、強欲の魔法使い! 逆に返り討ちにしてあげる!!

レミリア side end

「……咲夜が私から離れる事は許さない。 これは私が咲夜に命じた事の中でも唯一絶



対の命令なのよ。私達は絶対に負けない。今日こそはあの魔理沙を倒し、これまでに奪われたものを取り返す……絶対よ！」

ど、どうしたものか…… なかなか入りづらいな……

「……なかなか来ないわね」

少女警戒中……

「……来たんじゃないの？」

「お嬢様、私が確認に行きましょうか？」

「いえ、戦力の分断を狙っているのかもしれないし、このまま待機していなさい」

少女更に警戒中……

「……ま、まさか今回の目的はフランだったとでも！」

「いえ、それなら別の騒ぎになっていないはずですよ！ 恐らく魔理沙にとつてもなにか計算外な事態に墜ち言っているのではないかと……」

「うー☆…… 何なのよ！ 一体何がどうなっているのよ!!」

「仮に魔理沙がここに来るのを諦めたならそれそれで大歓迎なんだけど……」

「レミイ、魔理沙はああ見えて諦めは悪い方なのよ？ 遅らせざるを得ない事態に陥っているだけだって言われた方が納得がいくわよ」

「パチエ、あの魔理沙が盗みを遅らせるとして、だいたい何分くらい遅らせられるかしら？」

「分からないわ…… あの人間の発想は型にはまるとどんな天才でも理解できない、奇抜な方向に秀でていくタイプだから……」

……な、なんかすごい言われようだな。

「……なんて言われているが、お前としてはどうなんだ？」

「わ、わたしは死ぬまで借りているだけだぜ？」

「……勝手に持ち出すのも盗みと変わらない。……お前はいいのか？」

「何の事だかさっぱりだぜ？」

さつきから手錠で拘束されているにもかかわらず、自身の事に関してしらばっくれ続けていた少女。

“霧雨魔理沙”はまだ素直に認める気は無いようである。

なぜこうなったのか、話は少し前にさかのぼる……

ムツツリ回想中……

俺はレミリアの指示通りに正門に向かって行った。

その時にチャイナドレスのような服を着ている女が虹色に輝く極太レーザーで吹き飛ばされている所を見てしまった。

宙に飛ばされた門番らしき女性がたまたまこつちに落ちて来そうなので、ギリギリのタイミングで受け止める事に成功する。

……一応言っておくが、下着を覗いたりなんてしていないぞ？ その下にズボンのような物も履いていたから見えてなんていない！

「……おい、大丈夫か？」

「くっ…… あ、あなたは？」

そうか、まだ門番には自己紹介していなかったな……

「……土屋康太。 趣味はどうさ……何も無い。 特技はどうちよ……何も無い」

「あの……あなた、趣味は盗撮で特技が盗聴って言いかけませんでした？」

「……気のせい。 そんな事は言っていない」

「いえ、今のあなたから感じ取れる気が嘘だと言っています……って！」

「……今はそんな些事について追及している場合じゃない」

箒で空を飛ぶ白黒の魔法少女、レミリアから「強欲の魔法使い」と呼ばれ忌み嫌われ、フランの恋人でもある少女「霧雨魔理沙」と思われる少女からいきなり日本のレーザーで狙い撃ちにされる。

「つ……土屋さん、あなたがなぜ急に館の方から出て来たのかは分かりませんが、ここは大人しく中に避難してください」

「……オレはレミリアからお前の救出を頼まれた」

「……え？」

かなり驚かれたな…… まあ、さっきの誤解されても仕方ない（実際に盗撮などに手を染めています）自己紹介の後では信じられないかもしれないが……

「おつ、なんだ？ お前外人か？ ここに落ちるなんて運が無かったのぜ！」

あの箒の少女が下りて来た。

どうやら俺に興味があるみたいだが……

「……お前は、もしかして霧雨魔理沙か？」

「おつ、私を知ってるのか？ 悪いが、私はこの図書館に用があつて来たんだ。この後も忙しくなるから失礼するのぜ」

「……分かった。………って、逃がす訳ないだろ」

なんの抵抗も無くさりと中に入ろうとした彼女を妨害するべく目の前に出る。

「逃してなるものか！」と思ひながら飛び出した途端に彼女の飛行速度が極端に遅く  
 なったような気がしたが、気のせいだと思ひたい。

「うおっと、凄い速さなのぜ!! やっぱそう簡単に貸しては貰えないみたいなのぜ」

「……お前に警告する。 ……盗みやめて大人しく帰れ。 ……もし帰らないなら  
 ……」

警告も兼ねてスタンガンを最大出力にしたうえで構える。

「この出力なら彼女に数秒突きつけたなら完全に意識を刈り取って気絶させてくれる  
 だろう……」

「初対面で失礼な奴だな。 人を泥棒みたいに言うな。 それに私の場合は借りている  
 だけののぜ」

「……反省する気は無いと?」

「ちゃんと借りてるんだから文句言われる筋合いはないのぜ! もしどうしても納得で  
 きないと言うのなら捕まえてみるがいい。 ま、どうせ無理だろうけどな?」

「……その言葉、忘れるなよ?」

「出来るならやつてみるよ!」

そう言った彼女は箒に跨り、そのまま空へと逃げて行った。

「……させるか!」

完全に空へと逃げ切る前にどうか追いつこうと地を強く蹴って前に出る。

その瞬間、彼女の空を上昇する速度が極端に遅くなっていた。

さつきから何度も起こっているこの現象…… さつきから疑問に思っていたが、今の状況でそれを考えている余裕が無い……

この場では彼女を捕まえるのを最優先にすべきと判断したオレはまだ手の届くうちに彼女の箒を掴み、一緒になって上昇していく。

「なっ！」

いきなり箒を掴まれた事で動揺してバランスを崩しそうになった霧雨。

俺にとつてその一瞬は決定的なものとなった。

「痛っ!!」

まず露出していた足にスタンガンを当て、更に体制を崩させる。

これで空を飛ぶのは不可能となったはず。

「うおっ！」

霧雨が驚いているが、これはオレがスタンガンを捨てて彼女の足を掴んだからだ。

魔法と言う異能の力によるアドバンテージが彼女にあるとはいえ、同じ人間なら魔法頼りの少女と運動系の男子高校生……

筋力の差でオレが勝っている以上、落下は避けられない。

「痛てえええええ!!」

当然、足を掴んだからには地面へと叩き付ける。

普通の少女にならこんな仕打ちは出来ないが、盗みを平気で働くような悪ガキ相手ならこのレベルなら抵抗は無い。

地面に叩き付けられたとは言っても大して浮いてもいなかったし、落とした際も背中から落として最低限の受け身は取らせたから大した怪我にはなっていないはずだ。

「……勝機」

とは言っても地面に叩き付けられた衝撃で数秒は動けない以上、こちらにとって圧倒的な勝機。

絶対逃がせないチャンスであるからには当然追撃を入れる。

まあ、バカ正直に正面から突っ込んで流石に避けるだろうから、起き上がりそうな彼女の服の後ろを掴んで再び転ばせる。

それと同時に蛇のようにうまく後ろに絡んで、彼女の目元を手で覆う。

視界を遮ると同時にたまたま回収できたスタンガンを彼女の喉元に突きつける。

妙な動きがあれば、その瞬間に高圧電流を流し込むためにだ。

「う……ど、どうなってるのぜー!」

「……教える気は無い。……このまま暴れるならコイツの電撃をお見舞いしてやるが

「？」

「わ、分かったのぜ……素直に降参するからその喉元に突きつけている奴を離してほしいのぜ……」

こうしてオレは“強欲の魔法使い”霧雨魔理沙を捕縛する事に成功した。

手を離そうとしたとたんにもまた逃げようとしたから仕方なく何度もスタンガン突きつける羽目になってしまったが、気絶した後に彼女の魔法具と思われる八角形の道具と箒を門番の女性に預け、霧雨には念の為に手錠まで掛けておいたので、ここまでされたら人間では対処は不可能だろうと思いたい。

ムツツリ回想終了……

番外編：レミリアと建設会社

レミリア side

「あのねえ、お宅らは何度修理した壁や扉を破損させれば気が済むんですか？」

「いや、えつと……そのお……」



……今回で何度目になるかしら？ 私自身でも数えきれないほどの言訳を何度も繰り返す事になったわね。

相手は河童のマークが目印の建設会社。

外の世界にある建設用の機械の再現に成功してから立ち上げた新設の会社らしいのだが……

「お宅らの無理な依頼の繰り返しのせいで他の案件の仕事が止まってるんですよ？ そのせいでにとり會長からウチの店長がクビにされかかってんですよ！」

「ごもつともなお怒りで机をバンバンと叩く数人の河童。」

もし幻想郷にここ以外にウチの改築が出来る建設会社があるなら何件かはしごして回すのだが……

「この件に関して空よりも高く海よりも深いわけがあるもので……」

「その訳のせいでウチも仕事でパンクしてるんですよ！ なかなか新しい河童や妖怪の採用のメドも立たないなかどれだけの苦労があると思ってるんですか!! アンタ、ウチら河童の陰でなんて呼ばれてるか分かるんですか？」

「い、いえ…… もうこつちの方でも色々問題が……」

「カリスマブレイク」、  
「おぜうさま」、  
「オゼリア」、  
「かりちゆま」……  
挙げて行ったらキリがありませんよ！」

ちよつ！ そんな話聞いてないわよ！

「……もういいです。 本当に事情がある様ですから今回まではどうにかウチで修復をさせていただきますけど、もう次はありませんからね？」

「……ええ、毎回毎回ありがとうございます」

「本当に何があつたらこんなに改築をする必要性が出て来るのか……」

頭を抱えながら河童達はため息をつけてそのまま帰つて行つた。

頭を抱えなくなるのはこつちの方よ……

「咲夜……」

「なんででしょうか、お嬢様？」

「パチエと美鈴を呼んで来なさい。 ……次には必ずあの“強欲の魔法使い”を叩き潰

す！」

もうあの人間は許さない！ 今度来たら一生もののトラウマでも与えてやろうかしら？

そんな事を考えながらパチエと一緒にこれまでに盗まれた本のリストを纏めたり、咲夜や美鈴と建設会社への改築依頼の回数の確認と庭の被害を再確認する作業に入る事にしたわ……

それが終わったところに確認できた被害は…… 金に換算して一庶人が弁償するなら

首をくくる必要が出るくらい  
の巨額に膨れ上がっていた……

レミリア  
a s i d e  
e n d

## バカと暴走と指名手配!?

「……貴方は誰？」

職員室に到着し、扉を開けた時だった。

中に入って電気を付けてみると、そこに居たのは謎の黒髪の女の子。

「まっつて豊姫さん！」

危ない…… 一体何処から出したのか、先程から何度か見せていた扇のような物を開いて何かをしでかそうとしていたから……

普通なら扇を開いたくらいで警戒なんてしないんだけど、幻想郷の妖怪の話を知り、月の都での能力を使っている綿月姉妹の二人を見ていたらさすがにね……

「ぼ、僕の名前は吉井明久！ 後ろの二人は“綿月豊姫”さんと“稀神サグメ”さんです！」

とにかくココは大人しく自己紹介から始めよう。

とにかく話をつなげないと、即乱闘に発展しそうな気がするし……

「吉井くん、あなた今までどこに居たのよ！ 今、あなたの事で大騒ぎになっているのよ！」

少し離れた所から秀吉に似てる人も乱入してきた。

物凄く慌ててるけど一体どういうことなんだろう？

って、サグメさんもこっそりと手に変な光を集めないでよ…… なんか嫌な力しか感じないんだけど……

「ゆうこ、あなたも落ち着く…… 私は“霧島翔子”。あなたの友人である坂本雄二の友達……」

「全く、霧島さんも少しは危機感を持つて下さいよ…… あたしの名前は“木下優子”」

「木下さんの事は秀吉から聞いているよ。確か、秀吉の“お兄さま”…… ブベツ!!」

「吉井くん？ ちよつと“お姉さん”、聞きたいことが、あるんだけどなあ〜？」

ちよつ、スカートを穿いているのにわざと性別を間違えたコッチが悪いけど、拳を構えながら近寄ってきてもただの脅迫でしかないって!?

「へえ…… 的確に撃ち抜かれた拳ね。とてもキレも良いし、拳に体重も乗せている、まさしく一閃必中と言える完璧な一発だったわ。それじゃあ不意打ちとはいえ吉井くんが避けられないのも無理はないかしら？」

あれ？ サグメさんが普通にしゃべっているけどなんで？ いや、朝何があったのか思いつきり絶叫していたし、無言である理由があったんだろうけどさ……

「単刀直入に言うわ。……って、あれ？」

え？ 木下さんが僕の胸倉に挿もうとしてるのにその手が勝手に外れていく……  
わざと外している訳じゃないみたいだし……

「優子、とにかく落ち着く……とにかく、ここにいても仕方が無い。 3人共ついてきて……」

どこか怪しく思える彼女の行動だったが、もしかしたら何かの情報を得られるかもしれないと思った僕は素直に彼女の後ろについて行く事に……

「Aクラスの教室？」

「そう…… 二年の方の鍵をこっそりと回収（強奪）してきた……」

「ええ、貴方達が何者かに誘拐されたってニュースが昨日の夜速報で流れて、外ではちよつとした騒ぎになっているの」

「しかも屋上で謎の爆発事件も発生したってニュースも流れてしまった事がきっかけでしばらく学園も休校になっている……」

「だけど、アタシと霧島さんはなにかおかしいって思う所があつて、それを確かめたくて学園に侵入したって訳」

「二人して不法侵入？ 木下さん、超が付くほどの優等生だつて話を聞いていたけど……」

「あたしがいくら優等生だったとしても愚弟が行方不明なんて事になったら流石に心配

するわよ? それともあたしが愚弟の事で心配しているからって家で大人しく待っている弱い女だって秀吉から聞かされていたかしら?」

「いや、犯人に関節技で手足を砕いて秀吉を奪還するような人だって聞いて…… ごめんなさい、お願いしますから関節を外そうとしないで!」

「ちっ、あと0.3秒で骨まで逝けたのに……」

凄い…… さつき触れようとした一瞬で腕がちぎれるかと思ったよ……

木下さん、なにか格闘技でもやってたのかな?

「つて、僕が驚いている一瞬で何が起こっているの!」

さつきの仕返しと言わんばかりにサグメさんが木下さんのスカートに手を掛けて思いつきり投げ飛ばす。

木下さんは慣性に逆らえずに一回転したが、そのタイミングに合わせてサグメさんのローキックが木下さんの足下に叩き込まれる。

その結果、木下さんは更に変な角度で地面に叩き付けられて悶絶してしまう。

空中で何回転もした木下さんのスカートの中身(ネコが可愛い黄色パンツ)が見え、意外と眼福……

つて、こんな事考えている場合じゃない!!

「ちよっ、サグメさんもストップ! 喧嘩している場合じゃないって!!」

「吉井くん、ちよつと待つてて。あなたをを傷付けようとしたこの男みたいな女にトドメまで刺せるから……」

「いやいやいや、とにかくやめてあげて…… 木下さんも凄い悶絶してるんだし……」

サグメさんが庇ってくれていたのは嬉しかったけど、正直な話やり過ぎだよ……

「あわわわわ……」

ほら…… さつきまで気丈にふるまっていた木下さんが顔真つ青にしながら震えているし……

なんか僕がすごく睨まれているけど…… うん、気のせいだよね!!

「木下さん、ごめんね……」

「……吉井くん、あたしのパンツ見たでしょ?」

「み、見てないよ?」

「そ、そう…… ならいいわ」

良かった…… パンツ見ていないか危惧していただけみたいだ。

まあ、普通に考えて素直にいう訳ないんだけどね?

可愛い猫がかかれていた黄色のパンツだったなんて言える訳が……

「因みにあたしのパンツの色は?」



「可愛い猫がデザインされた黄色のパンツ…… ブベラツ！ アベシツ!! モペ  
ロオオオツ!!」

「ちやつかり見てんじやないのよ！ 今すぐ忘れなさい！ 頭ぶつ叩きまくって記憶から消し去ってやるんだから!!」

「ちよっ！ 木下さん、さつき乱暴して仕返しされそうになった事を忘れ……」

『吉井くん、今回は貴方が悪いから素直に反省して?』

「サグメさああああああん!!」

流石にサグメさんと言えど女子のパンツを覗いている男を庇う気までは無いようだ。

何度も木下さんに踏みつけられている間、サグメさんが豊姫さんにメモを見せていたが、その内容は何故か『吉井くんはああいう可愛いパンツが好きなのかな?』って書かれていたような気がしたが、それを気にしていられるほど今の僕にそんな余裕は全くなかった……

「うう…… 痛いよお……」

『吉井くん? さつきひんやりした倉庫みたいなから氷を取って来たよ?』

「ありがとうサグメさん」

サグメさんの膝枕の上で大人しく氷嚢を木下さんから叩かれた所に当てる事に……  
こんな調子で大丈夫なのかなあ……

「あ、あの……」

『何、木下さん？』

「……ゴメン、何でもない」

……何を言いたかったんだろう？

なにかに對して申し訳なさそうにしていたけど、さっきの事に関しては謝ってもらった後だし……

「……吉井、この後聞きたいことがある。……さっきの職員室で二年Aクラスの鍵を取って来ってあるから、その中で話をしたい」

そう言った霧島さんが見せたのは豪華な装飾が施されているキーホルダーが付いたカギである。

“ディンプルキー”と呼ばれている今の所、ピッキングされたっていう話を聞かない最高クラスの鍵を使っているあたり、噂通りの豪華な教室なのだろう……

「……私のクラスの皆と吉井を心配している皆も来る事になってる。警察の人にも連絡するからココで休むといい」

彼女が扉を開けてくれた教室の中に入る。

室内の電気を付けた先に見えた部屋はうかつなホテルよりも贅沢な教室だった。

各机には座り心地の良いリクライニングシートと最新型ノートPCが置かれており、机も普通の勉強机の何倍も広い特別な物が置かれている。

奥には市立の図書館並の資料や最新の問題集などが置かれ、黒板としての役割も果たすと思われる超大型ディスプレイが特に目立っていた。

教室の後ろには簡単な冷凍食品やお菓子が入った大型冷蔵庫と何十種類ものドリンクが飲み放題の大型ドリンクバーが完備されていて、無性に喉が渴いてくる。

「霧島さん、皆の飲み物取って来る？」

「吉井くん、今でも使えるとは限らないじゃないのよ……」

いや、確かに木下さんの言う通りなだけだよ……

「それでも使えたらなあ〜」って思いたくなるのが真情じゃないか!!

「……水道も電気もまだ使える。……私は自分でコーヒーでも入れる」

「そ、そうですか…… なら吉井くん、アタシはドクペ持って来てくれるかしら?」

「私とサグメは適当でいいわ。 何があるか分からないし」

そ、それも当然だよね……

サグメさんと豊姫さんはこの世界で動くのは初めてなんだし。

だったらジンジャエールでも持っていくかな?

月の都のジュースもすぐおいしそうなのが多かったけど、炭酸飲料は無かったはずだから多分驚くだろうなあ。」

「……取り敢えず本題。……吉井くんが無事に戻ってきてくれて良かった」

「と、取り敢えず何がどうなっているのか教えてほしいんだけど…… 誘拐とか何がどうなっているのかがさっぱりで……」

「……え？」

なんで木下さんと霧島さんの二人が驚いているんだろう？

困ったような顔をして見つめ合った二人は何かを話してから僕に新聞を渡してくれた。

「付箋をしてあるからそのページの記事を読んでみて？」

「新聞？ えーつと……」

『吉井くん、なんて書いてあるの』

「……そんな」

その内容を読んでみて僕は驚愕することしかできなかつた。

《文月学園にて誘拐事件発生！ 屋上にて謎の爆発も》

これ、昨日僕らと紫さん達が大騒ぎした時の事じゃないか……

だけど、本当に驚いたのはこの見出しじゃない。

その後には書かれた内容である。

《吉井明久・坂本雄二・土屋康太・木下秀吉の誘拐事件と無差別爆破テロの容疑者としてテロ組織“月の都”のリーダーである“綿月依姫”と“綿月豊姫”を緊急対策として国際指名手配にする》

その文面の上には綿月姉妹の特徴を正確に捉えた似顔絵が書き込まれており（ただしその顔はかなり悪人面にされてしまっているが……）、内容も“懸賞金が20億に相当する金額を掛ける”・“吉井明久の誘拐を目標した3人も証拠隠滅の目的で暴行を加えて誘拐した”など、彼女らを極端に貶める目的で書かれたとしか思えない記事となっている。

「こんなひどい内容の情報を一体誰が……」

その質問を終える前に教室の扉が乱暴に開かれた。

霧島さんの話も合わせて考えると、彼女が呼んだクラスメイトと思うが実際に誰なのかは全く分からない。

何故なら……

「……ええ？」

「……!? なに……これ……」

『吉井くんの……顔の“お面”……?』

サグメさんがコメントした通り、急に入り込んできた男女は全員僕の顔をコピーしたお面をかぶってんだから……

正直自分の笑顔のお面集団がそろそろと寄って来る姿と言うのは、吐き気がするくらいに気持ち悪い……

「……吉井、素直に答えて。……雄二はドコ？」

「霧島さんには悪いけど、全く知らな……」

言葉を続けることが出来なかった。本当に知らないと答えようとしたとたん霧島さんが作りたてで熱いコーヒーが入ったカップを叩き付けて来たからだ。

「吉井くん!？」

「動かないで!!」

「……木下さん?」

僕を心配してくれた豊姫さんが駆け寄ってくるが、木下さんが急に僕の腕を逆にひねって押さえつける。

そのせいで豊姫さんもうかつには動けない。

「もしこんな誘拐事件が無ければ普通に秀吉が無邪気でバカな笑顔を向けて帰って来るはずだったのよ。」

アタシが勝手にあいつのコスメとか使った事で渋い顔をされたり、アタシだけダイ

エツトしている一方で無神経な態度の秀吉とご飯を食べたり、男らしさにうじうじと  
 言っている秀吉を新しい関節技の実験台にしたり……」

いや、最後のちよつとおかしい気が……

つて、木下さんが強くなつた理由つて秀吉だったの!?

「あいつが一晩居ないだけでこんなにもさみしい思いをするなんて思わなかつた……」

二日前に『アンタが居ない方が意外と楽だつたりして?』なんて言わなければよかつた…… 秀吉が一晩居なくなつただけでこんなにもさみしい思いをするなんて思つてなかつた。 いなくなつてようやく分かつたのよ…… どれだけ仲が悪くてもアタシは秀吉のお姉ちゃんなんだつて。なのに……」

「……木下さん」

『何を言っているの? 私達は誘拐なんて真似はしていない』

困惑の色が隠せないサグメさん。

豊姫さんも一体何のことなのか訳が分からずに、顔を伏している木下さんの言葉に困惑するばかりだ。

「なんでアンタはその誘拐女と一緒になつてヘラヘラと笑いながら普通に帰つて来るのよ!?! なんて秀吉じゃなくてアンタなのよ!! アタシの秀吉をどこにやったのよ

！ アタシの秀吉を返せ！ さもないと……」

「……優子、その吉井も誘拐された側だから人質にはならない」

「……チツ」

お面集団もたじろぐほどの怒声に僕らはどう言葉を掛けていいのかが分からなかったが、霧島さんの説得？もあつて木下さんは僕の腕を離してくれた。

けど、一体なんであの二人が誘拐犯つて話になつてているんだ？

あの時雄二達は来ていなかったはず…… この誘拐の話と僕たちの件は全く関係の無い別件なのか？

それともあのスキマババアの工作？ この世界で豊姫さん達を動けないようにする為に雄二達まで巻き込んで犯人に仕立て上げたのか？

結局それぞれの事件のつながりが分からない以上は考えても無駄だ……

「……さつきから真剣に考え込んでいるけど、実は何か知っている？」

少し手前の位置から霧島さんが僕を見ていたみたいだ。

その眼は僕や豊姫さん達を品定めをしようとしているように細めている。

その隠せていない殺気に染まりながらもすべてを見定めようとする瞳に耐えきれなかった僕はつい目を背けてしまう。

「……失礼、私も相当気が立っているみたい。 ……私の婚約者がいきなり酷い目にあ



わされていると思うとつい冷静でいられなくて」

謝罪を口にした霧島さんだけど、本当の意味では和らいでいない。

その証拠にその手には前に襲い掛かって来た異端審問会の皆が持っていた大鎌を拾ってきているし……

「……火で炙り、水で犯し、刃で切り裂いて、土に沈める。……犯人にはそれくらいの

事はしないと何の返礼にもならないと思う。……吉井くんには失礼だと思うけど、本

当に何も知らない?」

「本当に何も知らないって…… まあ、屋上の爆破に関しては八雲さんがやった事だつてことぐらいいしか知らないけど……」

ハッキリ言って本当にこれしか知らないんだよね……

そこから助けてくれたのが豊姫さんと依姫さんだったわけだし……

「……コレを見てもまだ言える?」

そう言つて霧島さんが大型ディスプレイを起動させ、DVDをプレイヤーの中に入れる。

「え?…なんで依姫さんが……」

映像が編集され、あたかも依姫さんが屋上を爆破したかのように見せている映像だった。

いくつもの火柱が校舎の屋上を薙ぎ払い、その後に残ったのは傷ついたふりをしてい  
る八雲さん達だけ……

本当はこの展開の後にあの妖怪たちが膨大な弾幕を放って来たんだけど、その辺に関  
しては完全にカットされてしまっている。

その映像の悪質さに僕は困惑しながらもこう言い返すことしかできなかつた。

「本当に僕はなにも知らない。豊姫さんと依姫さんの二人は僕を助けたんだ！ その  
事実はこの場では僕と豊姫さんだけしか知らないけど、それは本当の事なんだ!!」

「……そう。……あくまでその誘拐犯を庇う。……雄二と友達を傷付けたくはな  
かつた」

なんで……なんで誰も信じてくれないんだ！

豊姫さん達がいい人達だってことはこの中では僕が一番よく知っているのに……

なんで被害者である僕の証言を誰も信じてくれないんだ！

「霧島さくん、もういいっしょ？ ココはあの女を捕まえて、正式に指名手配になった後  
で賞金と引き換えに引き渡すまで拷問の二つ三つキメて置けば十分っしょ？」

「そうっすね。 どうせ吉井って奴もあの女に籠絡でもされて変に感化されてるってだ  
けでしょうし？ その辺の洗脳とかに関してはあるの女に任せておけばいいっしょ？」

さつきから扉の前で立ちふさがるばかりで何もしてこなかつたお面集団の内の数人

が前に出て来た。

「どうやら全員が霧島さんの言葉や正義感で駆け付けた訳では無いようだ……」

「吉井くん、お願い…… あなたが秀吉や霧島さんの婚約者を救えると言うのなら全部話して?」

「ここに至ってもあくまで木下さんは僕を弟を見つけて助ける為の鍵だと信じてくれている。」

「これまで僕の事と僕の周り位しか考えられなかった僕の小ささを思い知らされてしまおう。」

「けど…… 僕には本当に何の事なのかが全く分からないんだ……」

「……ゴメン」

「そう…… もういいわ」

「そう言った木下さんは僕の腕を掴もうとする。」

「今度は僕を保護する名目であの集団の中に放り込もうとしているんだろう……」

「約束は守る主義なのよ」

「ただし、サグメさんの言葉と共に木下さんの手は僕からわずかにそれてしまい、それと同時に木下さんの脇腹に蹴りを叩き込んで弾き飛ばす。」

「くっ、どうやら説得は無駄だったみたいね。 サグメちゃん、手筈通りをお願い!」

「スペルカード！ 玉符「烏合の呪」」

豊姫さんはどうやらこうなる展開を予測していたみたいだね……

サグメさんが呪文のような物を唱えた途端に玉のような何かが大量に召喚される。

その玉から夥しい数の札のような弾幕が乱射されて行き、お面集団はなす術も無く倒されていく……

お面被っているだけとはいえ、僕の顔の集団が吹っ飛んでいく光景と言うのはかなり不気味だ……

「吉井君、急いで逃げるわよー」

先に外に出ていた豊姫さんが僕を能力で取り寄せてくれたみたいだ。

僕が瞬間移動してサグメさんにお姫様抱っこされて逃げ出していく光景に霧島さん達も呆然としてしまっている……

「……………はっ！ 吉井君、待ちなさい!!」

「……………逃がさない」

霧島さんが装備を金属バットに切り替えて追いかけて来る。

木下さんも僕を今の行動で完全に敵と認識したのか、刺又（さすまた）と呼ばれる捕獲道具を装備して残ったお面集団を率いる様に追いかけて来る。

「ちよっ……………吉井君、貴方はいつもこんな生活をしてたの!？」

「いや、流石にこれはやり過ぎだよ! ……まあ、今回は来ていないみたいだけど」異端審問会” って名乗る連中から言いがかり付けられて襲い掛かれたりなんかは当たり前かな? 友達を売って囷にしたり、逆に売られたり、一日中逃げ回って罠に嵌めて追いかけてきた奴ら全員を峰落として窓から突き落としたり、峰刺しと称してナイフで刺したり、峰叩きで壁に何度も顔面を叩き付けたりしている程度だよ!」

『十分酷いわよ!! なに、貴方平気で友達を売ったりしていたの!?!』

「うん、さつき霧島さんが言っていた雄二っていう僕の事を馬鹿にして楽しんでる親友なんだけど、僕が女子と話していたって異端審問会の連中に密告して刺客が差し向けられたりとか当たり前だったよ!」

僕も雄二がきれいなお姉さんと一緒になってデートしていたって教えてあげたりしていたからお互いさまだけどね!!」

『本当にその雄二っていう子と親友同士なのか不思議なんですけど!?!』

とにかくこの異常事態を清蘭さんと鈴瑚さんの二人に連絡しないと……

でも僕のお面集団がどんどん増えてきているみたいでなかなか外に出られない……  
どうやって脱出するべきなんだろう……

『吉井くん…… ちよつと……』

サグメさんが僕のほつぺをつつきながらメモを見せてくれる。

「どうやら考えがあるみたいだけど…… 一体何をする気なんだろう？」

「えー、綿月豊姫に稀神サグメ。 お前達は完全に包囲されている。

さっきの手法で外に逃げようとしても無駄です。 人質を解放して大人しく投降しなさい!!」

色々と逃げ回っていた僕達だったが徐々に逃げ場を失ってしまい、ついにボロボロになっっている二年Fクラスの教室にまで追い込まれてしまった。

「よーし、そのまま動くなよ?」

「確実に囲め…… 絶対に変なトリックは使わせるなよ?」

「この女を引き渡せば賞金10億……山分けしても妹の手術代に届く金が入る…… 私の命よりも大切な妹が生きられるのよ……」

「山分けした賞金をねーちゃんに渡せば、もうねーちゃんがお金の苦労しなくて済む

…… ねーちゃんが夢見たアイドルへの道が開かれるんだ…… その為にも絶対に捕まえてやる!!」

「フヒヒ! このお金で幼女を捕まえて購入した部屋でペロペロしてやるんだ! どこかの部屋でも借りて、その中で一晚中貪り尽くしてやる! 金さえあれば何でも出来るんだよ、アヒヤヒヤヒヤ……」

おい、まじめに囲もうとしている奴らの中に何人かおかしいのが混ざってるんだけど!?

手術代がどうか、家族の夢がどうかはまあ重い話だし、参加した動機としては分かるけど……

最後の奴は何を考えてるんだ! こいつだけは絶対に月の都には連れていけないな……

あそこの純真で可愛い(ヤンデレ系美少女も含む)玉兔の皆が汚されたらたまったものじゃないやい!

「フヒヒ…… 良ーく見たらその翼生えてるねーちゃんも可愛いなあ? これはアレか? 捕まえようとする際についてうっかり胸とか尻とか揉んじやっても、事故で済んじやう的な展開ですかあ? ヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」

この野郎…… 最後のセリフの奴、幼女略取の趣味だけでも許せないのに、その上サグメさんにまで手を出そうってのか？

……決めた。こいつだけはどんな目にあつてもぶつ殺す……

「あら、遊んでくれるのかしら？ どうもありがとう」

つて、サグメさあああああん!? ちよつと、なに胸元を強調して誘つてるの!? そんな事をしちやったらあの変態野郎が……

「フオアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

これはもうアレですよね？ 誘っちゃつてるんですよ!?!」

「いや、まあ……軽く遊んでいるっほいけど……」

「遊び？ 火遊び？ いや、これは大人のお遊戯に決まつてる!!」

「ほんまもんの変態じゃねーか、流石にひくわー」

敵ながら隣で後ずさつた奴らに同意したいと僕は思った。

「それじゃあ……」

「……終わり。吉井だけは生かして確保」

「それ以外は」

「……最悪死んでも構わない」



「「よっしや、突撃いいいいいい!!」」

うわああああああ! やっぱりこうなったじやないか!!

さっきの変態を先頭に全員が武器を構えて突っ込んできたよ!?

このままじゃ変態野郎にサグメさんがR-15の範疇では語りようのない程の変態行為にさらされ、豊姫さんも捕まっていかがわしい事をされてしまうじやないか!!

ここからどうするって言うのさ!!

「ブベラッ!!」

「……………あ、ごめん」

……………つて、あれ?

さっきの変態野郎の頭に変な棒が叩き付けられ、そいつが転んだのをきっかけに皆横着して簡単に転んで行つたよ…………

『今よ、豊姫も走つて!』

「なっ!?! い、いつの間に上に…………ブベラッ!!」

「カネカネカネエエエエ……………プギヤ!」

「妹の手術代の為に……………モペロッ!!」

事前に打ち合わせしていたんだろう。豊姫さんも転んで前衛がひざまづくことに

よる“足場”を利用して走り抜く。

下の人間達なんて知った事ではない。誰かの工作に乗っかって襲い掛かってくる以上は“敵”なのだから遠慮なく足場として使わせてもらおう。

「くつ、バカ達が先走って……ちゃんと言う事を聞かないから！」

「……逃げられた。……これ以上の追跡はムリ」

霧島さんもいい判断だ。今の行動でコッチの力が計れなくなった上に踏み台として利用されてけがをした人手もかなりの人数になる。

人数の差をサグメさんの奇抜な発想で引っくり返された以上、この中で追い込みを掛けるチャンスはもうない。

どれだけ悔しくてもここは一度体制を立て直す必要があるんだからここは下がる。

絶対に追撃は掛けられないだろう。

「外に出れたわよ！」

『豊姫、清蘭と鈴瑚の二人は？』

そう言えば、一足先に外に出ると言ってた二人とまだ合流出来てない。

このまま置いて行くわけにもいかない……できるならこの場で待ってあげたいけど……

「これは……餅つき用の杵（きね）？」

豊姫さんが見つけたのは謎の杵。

少し果物っぽいや赤色の何かが付いているけど、これは一体？

『これは清蘭の武器。 弾幕ごっこ以外で戦う時に使っている物』

なっ、まさかあの二人……

「もしかして二人共捕まったの？」

あの二人を信じて別れたけど……

もう一度中に戻るべきだろうか？

『……二人の実力を信じて先に進みましょう』

「サグメさん!? なんで……」

「あの二人の事を信じましょう。 あの二人が心配だからって言うてこっちが捕まった

ら何の意味も無いのよ？」

「くっ……」

正直納得している訳ではなかった…… 僕としてはこの中にもう一度戻ってあの二

人を探し出したい。

でも……

「見つけたぞ！」

「賞金十億！ 絶対に手にするぞ!!」

「『……ダッシュー!』」

うん、豊姫さんの言うとおりで!

もし八雲さん達が情報収集目的でこいつらを利用してゐるならさっきのサグメさんの魔法のような何かも何度も使う訳にもいかないし、ここは逃げの一手だね!

こうして僕らの外の世界における史上最悪な鬼ごっこが幕を開けた。

……雄二達も誘拐されたってどういふ事なんだ?

another story 八雲藍side

「藍? これだけやったら流石に捕まえられるわよね?」

「出来るとは思いますが…… 紫様もハッキリ言つてやり過ぎですよ?」

「うふふ…… この作戦をなんて名づけよう…… そうだわ! SNS (スーパーネット ストーカー) 鬼ごっこ作戦なんてどうかしら?」

「はいはい…… 作戦名なんてどうでもいいですから、予定通りに作業を進めますよ?」

しかし、流石にやり過ぎではないでしょうか? まあ、今回の異変の解決の為にあの

小僧の能力が必要になるというのは分かりますが、それだけでこんな対応をしたことはこれまでに無かつたのですが……

「ふふふ…… 吉井君、あなたは絶対に連れて来て見せますわ。私の愛おしい人の息

子さん」

「紫様…… いまだに引き摺って……」

……と質問しようとした私に「よろしくねー」と言つて紫様はそのままスキマの中に入つてどこかに出かけてしまった。

この様子だと結界に攻撃を仕掛けている輩の方の対応に向かつているのだろうか……

「はあ…… 今日<sup>は</sup>は橙に<sup>ご</sup>飯を作つてもらおうかなあ……」

八雲藍 side end

## バカとストーカーと逃走タイム

20×  
× 15:30 文月学園から出て15分……

「え？ あれって……」

「綿月豊姫じゃない？ ほら……」

「わ…マジだ。写メ撮らせてもらおうかな？」

「待てや！ この糞アマ！」

「大人しくお縄にちようだいされろやああ!!」

『……有名人も大変』

「なにのんきな事を言ってるのサグメさん！ とにかく走って!!」

外に出てからも僕らは街のチンピラや即席の賞金稼ぎと化した住民たちに追われていた。

皆してバットのような簡単な武器を持ちだしたり、スマホで撮影しようとして追いかけて来るものだから始末に負えず、時折豊姫さんのレポートを使いながらギリギリの所で逃がっている。

《……繰り返します。絶対にテロリストを見つけてもその場で捕縛しようとせずに警

察に連絡する等の節度ある行動をお願いします》

「綿月豊姫、テメエだよ！ コラア!!」

「くそつ、あいつ等に先を越されるな。 逃げ逃げ!!」

「十億ウウウ!!」

うわつ、ジープみたいな車まで持ち出して追いかけてくる奴らまで現れた!!

さつきからニュースのアナウンサーがなにか言ってるけどガン無視で追いかけて来るし!!

こんなのからどうやって逃げろって言うんだよ!?

「うわつ、マジだ。 綿月豊姫だあ……」

「ああ……あの女、あんなに美人さんなのになんか悪者なんだろう？ ニュースで見ただぜ」

くつ、これが情報化社会ってやつの弊害なのか……

昨日まで全く名前も知られていなかった人の情報がたった一日悪者として流されただけでもうここまでの事に発展するなんて……

「オラアアアア!!」

「くつ……」

サグメさんを目掛けてバイクに乗りながらバットで殴りかかって来たヤンキーを横から突き飛ばす。

それと同時にサグメさんがバイクを奪い取り、バイク片手に追いかけて来た車に投げつけた。

見当違いな方向に飛んで行ったが……

「うわあああああ!!」

いきなりバイクを投げ飛ばそうとしたサグメさんに驚いた敵は大慌てで車から飛び降りて逃げ出した。

幸か不幸か、運転手を失ったからか？その車は一気に減速し、ガードレールにその車をこすりつけ続けながらも僕らの目の前で停止した。

「よし、この車を奪って逃げよう！」

『吉井君、使い方が分かるの?』

「実際に運転した事は無いけどね！」

無免許運転だけど知った事か！ここまでの大暴れに発展する位に警察の機能がマヒしているのならもうルールもへったくれもないよ!!

と、いう訳で豊姫さんを後ろの席に乗せ、サグメさんを前の席に乗せた後で僕が運転する事に。

……本当に大丈夫だね？一応レースゲームで何度かイメトレしたことがあるし？



たしか右がアクセルで左がブレーキだったはず……

「オ、オレの車が!!」

「くそつ、絶対に逃すな!!」

「あははは! ほらほら、鬼さんこちらー」

中のエンジンなどは傷ついていなかったようで、かなりの速度が出てくれた。

今、時速80キロと言った所だと思う……

「よし、逃げ切れたぞ!」

『豊姫、今後はどうする? どうにかして清蘭と鈴瑚の二人と合流したいけど……』

「分かっているわよ…… あのスキマ妖怪のやつ、とんでもない事をしてくれたわね」

「あ、やっぱり八雲さん達がなにかやったの?」

って、どうかそれぐらいしか考えられないよね? あの妖怪のコネがどれだけ凄いの

かは分からないけど、一人の間人を指名手配にしたり誘拐しても隠ぺい出来たりするこ

とを考えたらとんでもないパイプが繋がっているんじゃないや……

「…あ、吉井のやつね?」

「よし、運よく見つけられたわ!」

あれからすこし速度を抑えて走っていたんだけど、走ってから1・2分の所で急に聞

き覚えのある声が聞こえた。

「跳び付け〜!」

……と、思ってから数秒後に謎の衝撃と誰かが飛び乗ったかのような轟音。

「やつほー、吉井君?」

「驚いたわよ。あの建物に残っていたはずのサグメ様とアンタが変なのに乗って走っているんだからとっさの判断で合流したけど、一体何がどうなってる訳?」

一体何があつたのか、学園の外にまで出歩いていた清蘭さんと鈴瑚さんが車に飛び乗ったようだ……

多分ニュースを見ていなかったであろう、清蘭さんと鈴瑚さんに事情を説明する事にした。

「えええ〜……!」

二人共反応に困って引き攣った笑顔しか向ける事が出来ていなかった……

「でも、それってなんかおかしくない?」

「う〜ん…… 学園の中だったらこのレベルの騒ぎは日常なんだけど……!」

「吉井くん、今までよく生きていられたね!」

「まあ、さすがに街中でこんなことになるなんて思っていない……!」

清蘭さんたちが合流してから数分、危なっかしい運転を繰り返しながらも着実に僕の

家に近づいていることを感じていたその時だった。

……パアンツ!! ガガガガガガガガ……と言う音と共に急に車がバランスを崩す

……

「ちよ…… ちよちよちよ……!?!」

「あわわわわ!!」

どうにか車を横に寄せて止める事が出来たけど…… 一体何がどうなって……  
とにかくこの車が使え物にならないと判断して大急ぎで降りる事に。

「知ってた? 今、吉井明久のアカウントから”つぶやき機能”を使ってお前らの状況がリアルタイムで”実況されてる”って事によ?」

そう言われて驚く僕の目の前にスマホを投げつける男の姿がそこにはあった。

そのスマホを拾った僕は慌てでSNSサイトのアカウントを確認する。

真つ先にその男のつぶやき機能のページを確認すると、かなりの回数で更新されていた。

しかもその内容が「今文月学園の中にいるよ」「外に出たぞ。 豊姫達と一緒に脱出だ

〜!」「いま車を奪った。 北に向かって県道沿いに移動中」など、この世界に戻って来  
てからの僕らの状況を逐一伝える為の物である。

「おかげで待ち伏せも超カンタン!! ようこそ、賞金首の皆様?」

「僕らを歓迎する気であるって言うならその危ない連中と武器を全部下げてもいいんじゃないかな?」

「賞金ぶら下げた女がそこにいるのにそんな事するわけないじゃないか、よーしーくん?」

いつの間にか学園で遭遇した人数以上の……ヘタしたら3ケタは下らないだろうチンピラ集団が僕らを囲んでしまっている。

『吉井君、また逃げる?』

「ダメ、人数が多すぎる。どうにか隙を作らないと脱出すら不可能だよ……」

「ボクはこのチーム〃チェイン・ドラゴン・ライトニング〃のリーダーで……〃イサシ〃〃〃って言います。キミ達の最後を写真に収め、賞金を手に英雄となる者でえくす!!」

なるほど、今ニュースで悪人呼ばわりされ、ネットでも大炎上中の豊姫さんが相手なら何の罪悪感も無く襲えるって訳だ……

「全員でかかりなさい! 始末はボクがやります。まずはあの吉井って奴を行動不能にさせるんですよ!!」

「オオオオオオオ!!」

リーダーの指示で皆して突撃を掛けて来る。

「清蘭!」

「ええ、鈴瑚!!」

弾符「イーグルシューティング」!!

兎符「ストロベリーダンゴ」!!

清蘭さんと鈴瑚さんの二人がサグメさんの時の様にカードを掲げて呪文のような物を宣言した途端、清蘭さんからはうろこのような弾の弾幕、鈴瑚さんからはこれまでに比べてたら小さい代わりはかなり高速の弾を四方八方に飛ばしている。

「ウエーイ。 ネットでも大炎上中のテロリスト、月の都のリーダー綿月ちゃんの公開処刑動画を生放送中」

「コメントすげえ…… オレらすでに有名になれんじゃん」

「この生放送、別の動画サイトに投稿するわ。 広告料も一気に稼げそうだし?」

外野も集まりだして大騒ぎになりだす。

これ以上構ってられない以上、ここはサグメさん達を連れて逃げるべきだ!

「くたばれええ!!」

そう思つてサグメさんの手を握ろうとしていた瞬間、豊姫さんの様子を確認したけど……笑顔?

つて、なんで豊姫さん笑つて……!?

「……!?!? じぶんから……頭を!?!」

僕どころかみんな理解できていなかったようで、困惑でその場の全員が固まつてしまふ。

「はあく……… どんなものかわざと喰らつてみたけど……… 全然違うわよ」

キレてるのだろうか……… 信じられない事に全く無傷の豊姫さんは金属バットで殴り掛かった男から逆にバットを奪い取つて………

「(こう)よ………」

ガンー!………とも、グチャー!………ともとれるワケの分からない音と共にバットで飛ばされた男は空中で何回転も繰り返した末に数メートル先で気絶した………

「………え? ちょ………」

「(これ)、死……ん………?」

味方であるはずの僕らも全く声が出なかった。

あれだけ温厚で優しくて…… 少なくとも戦闘に関してはあまり得意そうではない豊姫さんがバットを使ったとは言え、大の男を何メートルも殴り飛ばしたと言う光景に清蘭さん達どころかサグメさんまで反応に困っている。

「うおおおおおいつ!? シャレになんねえ!」

「血……すげえ出て……」

「おい、だれか救急車を…… ゲボツ!!」

とにかくチャンスだと思い、僕も彼らが持っていた鈍器を一つ奪って豊姫さんがやったように殴り飛ばす。

相手が普通の人間相手だったら殴るなんて出来ないんだけど、今回は賞金目当ての外道集団が相手……

遠慮する理由なんて全くない!!

「こ、こいつらマジでイカレてやがる……」

「さつきから変な魔法みたいな弾を乱射してきやがるし…… もう訳分かんねえよ!」

「何やってるんだ、相手は俺達よりも遥かに少ないんだぞ! 全員でかかれば余裕で……」

その言葉が続くことは無かった……

業を煮やした豊姫さんが、さつきから使おうとしていた扇を開いて軽く扇いだとたん

にすべての勝負が付いてしまったからだ……

「う……ううっ……」

豊姫さんが扇を扇いだとたん、リーダーを除いた全員が吹っ飛ばされた。豊姫さん曰く「その気になればこの辺り一帯の穢れごとまとめて、敵を消滅させることも出来る」らしいが……

すでに残っているのは敵のリーダーと数名の手下のみ……だが彼らも完全に戦意喪失しており、完全におびえてしまっている。

「わ、分かった。オレらはお前から手を引く！ その……イサシンさんに誘われていただけで……」

「有名になれるチャンスだとか言われて…… 10億円山分けとかって…… だからっ……」

「ああつ、お前ら!? ぎっけんなよ!! 何ビビってんだ! さっきのトリックだってそうそう何度も使える筈がねえに決まってる。残った全員でかかればヨユーだろ!?!」

「じ……じゃあまずはいサシンさんが先陣切れよ……」

「そ……そうだよ行けよ」

「はあっ? 頼れるリーダーがいきなり最前線はってどうするよ? こういうのはまず



おまえら奴隷からかかるもので……」

ここで敵のリーダーの器が知れてしまった……

この男は何かの危機に相對した時、絶対に命を張れないタイプ。

部下を平気で見捨てて自分だけでも助かろうとする最低なリーダーだ……

「ふざけんなこの糞野郎！ お前のせいだ!!」

「リーダー語るならもつとリーダーらしくしろよこのヘタレが!!」

あんなことを言えばすぐに手下でさえすぐに見限るに決まってる。

仲間割れを起こし、そのリーダーは部下だった人間達によつて悲鳴を上げさせられながら姿を消していった。

「……ねえ、おかしいんじゃない?」

「おかしいって……まあ、豊姫さんがいきなり賞金首にされたり、街中で追われたりとか流石におかしいけれど……」

「わたしが言ってるのはそう言う事じゃなくて、なんでこんな滅茶苦茶な事を皆簡単に信じてるのかって事よ」

清蘭さんの言う通り、仮にいくら豊姫さんが犯罪者扱いされたとは言っても、それがたった一日で……しかも皆して率先的に襲い掛かつてその賞金を獲得しようとするな

んで真似は雄二でも流石にしない。

僕のもの限りでそんなことをする奴らと言ったら、せいぜい異端審問会のメンバーくらいなものである

「……………スキマ妖怪、見ているのでしょうか？ 出てきなさい」

「いつでもニコニコ、這いよるスキマ妖怪の八雲紫（永遠の17歳）ちゃん……………ですわ」

どこかの邪神のようなポーズを取りながらウインクまでキメてスキマから出て来るのは自称永遠の17歳こと八雲紫……………

さっきの騒ぎの後だとその行動にはウザさとイラつきしか感じない。

「ごめんなさいね♡ なにしろ人手不足な上に私達も追い詰められてるのよ？」

「どういう事かしら？」

「豊姫さん！ 今はのんきに話をしている場合じゃないですって！ 速くここから逃げないと……………」

「心配しなくても大丈夫よ。私が”外と内の境界”を操って人払いの境界を張ってるし、吉井君のSNSコメントも”今は”止めてあげているからそうそう人なんて来ないわよ」

あれ？ なんでこの妖怪は僕のSNSのアカウントの事を知ってるんだ？

まさか……ね……？

「コメント…… まさか、僕のアカウントを乗っ取って情報を流したのは！」

「あ、その辺の作業をしたのは藍の方よ？ あの子、式とか計算とか演算の類は得意だから、外の世界のプログラムなんて簡単に覚えてくれたから助かったわ〜」

藍って…… あのキツネみたいなお姉さんの方か……

あのキツネもどこか凄そうだと思っただけど、まさかこんな事が出来るなんて……

機嫌がいいのか、調子に乗っている紫さんは今回の作戦の全貌をペラペラと聞いてもいないのに喋ってくれた。

「実際に情報化社会と化している現代でただ新しく指名手配犯になった人がいるなんて言っても、物騒だな〜」位にしか思われず、普通に寄り道をして買い物をする事も貴方達なら可能だったでしょう？」

「うん、別に豊姫さんに僕の家の場所を教えてそのまま瞬間移動すれば姉さんが置いて行った服と化粧品を勝手に使えばほとんど誤魔化せるだろうし……」

「その通りよ、吉井くん。 だから私はここで指名手配の根回しをする前に文月学園にある全オカルトのエネルギーと私自身の能力と全妖力を利用して、ある“強制認識”を全世界に行使したの」

「ちよつ、全世界って……」

もし紫さんの言う事が本当なら、豊姫さんに対する認識はこの街どころか……

「これが昨日の日が落ちてすぐに使った私と藍による術の映像よ。オカルトのエネルギーが増幅する夜になった瞬間に文月学園を起点に全世界のオカルトスポーツのエネルギーを共振・増大を繰り返させて、その結果で生まれた絶大なエネルギーを利用して私の能力を使う事で、5分後には幻想郷を含めた全地球に対して効果を発揮する結界を作り上げる事に成功したの」

「なに？ この紫って妖怪、実は化け物すら通り越してんじやないの？」

「しーっ！ 鈴瑚、私もそう思ったけど、今は大人しく話を聞きましようよ……」

いや、僕もその時の紫さんって神様すら超越した存在になったんじや…… って思わずにはいられなかったんだけどさ……

それでも話はきちんと聞こうよ……

「実際の所、全世界に対して使った強制認識の術の内容は人々の異常な情報に対する認識のハードルを引き下げる程度の効果にとどまったんだけど……」

『詳しく言うほどの程度？』

「オカルトを全く信じていない上に疑心暗鬼に陥りやすい位に疑り深い人でも”妖怪”っているかも”、”魔法”って本当にあるみたい” って思わせる程度ね。私が今回操った境界は”虚と真”に対しての認識の境界” ってところかしら」

「え？ それでも、その程度であんな異常な人数に追われるようなことになるの？」

『吉井君、清蘭？ 少し静かに……』

「スキマ妖怪の言う通りだとしても規模が違うのよ…… 貴方からしてみればそれで十分だったのよね？」

え？ 豊姫さん、一体どういうことなの？

もう僕には理解が出来ない規模の話になって来たんだけど……

「まあ、流石に全世界って言うのは広すぎたかもしれないわね…… 国外逃亡なんて真似されても困るからって念入りに仕込んでおいたのだけれど、無駄になってしまいそうですね……」

『吉井君、そんな軽い催眠状態になっている中、あのスキマ妖怪は何をしたのか？ そこを思い出せたなら後の答えは簡単に出せる筈……』

「たしか…… え？ まさか…… 豊姫さんのニセ情報と僕のSNSのアカウントを使って……」

「ええ、あなたのアカウントの乗っ取りと、ニュースなどを使って豊姫たちの指名手配犯としてのガセネタをばらまいたのよ。表向きにはあなたの誘拐を実行した誘拐犯としての範疇で流しているのだけれど、興味を示して調べて行けば最終的に綿月姉妹どころか月の都に対して敵意や悪意が向けられるように出来上がっているの」

そして、紫さんは最後にこう言った……「あと半年もあれば外の世界の住人の全員が月の都の存在を自明のものとして認識するようになり、犯罪組織として忌み嫌うだろう」……と。

「ふざけるな！ 今すぐ二人の指名手配を解け！」

「そう、吉井君。 あなたの性格なら絶対にもう言うと思つていたわ。 だから……」

そう言つてスキマの扉から出て来た紫さんが前に出て来た時だった……

「ちよつと待ちなさいよ！」

「吉井くんに手出しをさせる訳にはいかないかなあ〜？」

清蘭さんと鈴瑚さんが前に出て来て僕を庇つてくれた。

あれ？ 僕のポジションがなんだか悲劇のヒロイン的な感じに……

（あの八雲つて妖怪は隙だらけ…… 私も外回りをしていた時に団子を限度いっぱいまで食べているから、うまく一撃で気絶させられれば……）

「そうそう、その黄色い玉兎さん？」

「なにかなあ〜？」

「流石に私を〃一撃〃で仕留めるのは豊姫どころか妹の依姫でも無理だから、その案はやめておいた方が良くいわよ？」

「なっ！」

うそっ！ 清蘭さんと鈴瑚さんの間を簡単にすり抜けて……

余裕そうな顔で堂々と両手を開きながら言い切る紫さんの顔に一切の油断は無い。

そんな紫さんを前に動けずにいる僕は悔しさと焦燥のあまり、つい拳を握りしめてしま……

「あら？ 吉井くん、怒っちゃった？ ……ああ、私があれば挑発したんだから当然よね」

「紫様、やり過ぎです。 まあ私自身、外の世界の人間がどうなろうと知った事ではないのでいくら暴れようとかまわないのですが…… その少年はどう思うでしょうか？」

紫さんの隙間から九つのキツネの尻尾を持つ妖怪“八雲藍”さんが出て来た。

実際、藍さんの言う通り人払いが掛けられているとはいえ、あんな弾幕を乱射できる妖怪達が6人もいるんだ……

この街が軽い廃墟みたいになるのは容易に想像できてしまう……

「紫さんは一体どういうつもりで！」

「そうね…… “そこ”なのよ。 私は吉井くんを“誘拐”しに来たんじやないの。

あくまでも“平和的”に、“平等”に“話し合い”をしに来たのよ？」

「はあ？ あんた何言ってる……」

「黙りなさい、青鬼。 今の吉井くんは、自身が置かれている状況を全く理解できておら

ず、月の都の兎達の庇護下で良いように振り回れ、ただいたずらに私達に敵愾心を燃やしているただ生意気なだけのガキ。そんな立場ではどこに付こうともどこかの“勢力は”幸せに終わっても、いのように使われた吉井くん個人は絶対に不幸になるわ」  
『そんなこと私がさせない』

あ、サグメさんのコメントのメモをまるで“部外者は黙ってる”とでも言わんばかりに紫さんが破り捨てた……

すごいサグメさんが怒ってる……いつブチギレてもおかしくない……はつきり言って守られている側のはずの僕でさえ逃げたしたくなるような殺気が出てて、少し漏らしそう……

「そんな事態を回避するためにも、あなたは私の話を聞いてみるべきだと思うわ？」  
八雲さんが指を鳴らしたと思った瞬間、僕らの足下にスキマが展開され、その中にとされる。

豊姫さんも巻き添えを喰らっているが、全く驚いていない彼女はわざと引つ掛かったようにも見える……

「どうしたのかしら？　遠慮なく座っていいのよ？　ここのコーヒートケーキは私のおごりで良いんだから……」



「……こんな誘惑に引つかかってたまるものか!」

「吉井、そう言いたいならアンタのそのヨダレどうにかしなさいよ……」

「吉井くん、凄い目が輝いているね〜」

そ、そんなことないもん! (ジユル……) ↑よだれを拭う音

僕がこのラ・ペデイスのケーキを見てガブリつきたいなんて思っていないんだからねっ!! ↑ツンデレ?

そう、僕らが紫さんによって連れてこられた場所は文月の街で有数のカフェ“ラ・ペデイス”である。

いきなり落ちて来た僕らの事を気にも留めず、みんな何事も無かったかのように動いている光景はあまりにも不気味に思えてくる……

僕らが動けずにいるのはその為だ……

決して目の前の席にある飲み物とケーキやクッキーを我慢している訳じゃないんだ!! ↑嘘

「周りは気にしなくていいわよ? “虚と真の境界”を操る事でこちら側の事が気にならないようにしてあげているだけであなただに危害を加えるような細工は一切してないから」

「それをどうやって信じろって言うんだ!」

「信じてくれないと」話し合い「自体が進まないんだけどなあ？」

そう言った紫さんが昨日使って見せたカードを36枚程、トランプ感覚でシャッフルして見せる。

適当に使えばどんな混乱が起こるか分からないという明らかな「脅迫」だよ……

「分かったよ……座ればいいんでしょ、座れば！」

乱暴に椅子に座る。こんな不機嫌な気分で食べ物がある席に座る事になるなんて思ってもいなかった……

「私達は座らないわよ……」

「どうぞ、ご自由に？」

「なら失礼しまーす！」

「『鈴瑚（ちゃん）!?!』」

あれ？ 鈴瑚さんは座るんだ？

まあ、どこか安心感はあるからありがたいんだけど、緊張感なさすぎじゃないかなあ……？

こうして紫さんによる「話し合い」と言う名目の脅迫が始まろうとしている。

僕はどうするべきなんだろう……？



## バカと交渉とブレイクタイム

今この場でハッキリ宣言しようと思う。……やっぱり誘拐されそうになった被害者としてではなく一個人としてあのスキマ女が嫌いだと！

「いきなり何考えてるわけ？ 気品高き紅茶を相手に大量の砂糖とミルクを投入するなんて…… ミルクミルク……本格派の紅茶を相手なら何でもミルクティーにして……

これだからお嬢様気取りのオバサンは……」

まあ、この辺の話は母さんからの受け売りでもあるんだけど……

実際に乗り気じゃなかったお母さんに夕飯のレシピで脅して（その翌月は小遣いを無しにされるという報復を受けたけど……）ティーバックの紅茶で試してみたら全部事実だったんだよね。

とは言っても、他の人に対してこんなことは言わないんだけど、流石にあの妖怪には何度も見下されてムカついていたからつい喧嘩腰になっちゃった……

「あら、吉井くんはなにも分かっちゃいないのね？ ミルクティーは紅茶の完璧な飲み方よ」  
「まあ僕は紅茶よりもコーヒー派だから別にどうでもいいけど。お母さんの趣味に付き合わされたのがきつかけだけど、コーヒーはとてもいいよ。徹夜でゲームをしなが

ら飲むのにちょうどいいんだ。仕送りが入ってすぐの日は7杯くらいは飲んでたくらいだし」

もつとも、それが父さんと姉さんにバレた時には飲み過ぎだつて説教されたんだけど……

特に姉さんからは「そんなアキ君にはオシオキのチューをします」とか言われて追いかけてまわされたりしたから仕方なく5杯に抑える様にはしてるんだけど……

「へえ、よくもそんな苦いだけの無粋で炭みたいな黒水を日に7杯も飲み干せるわね？」  
「そつちこそ、ミルクティーなんてカロリー補給にもならないただ贅沢なだけの飲み物をグビグビといけるんだね？ 一応僕も紅茶は飲むけどさ…… 自販機でアイスレモンティーを一気飲みなんて飲み方しかしたことないけど……」

「アイス？レモン？適当に一気飲み？ あり得ないわね。レモンは紅茶の風味を壊すだけですし、自販機の紅茶なんて砂糖多すぎて甘ったるいだけですし、一気飲みなんてしたら紅茶の味も分らないじゃない？」

別に紅茶にこだわりなんてないからどうでも良かったんだけど……

この後の紫さんの言葉には僕も本気でキレそうになった。

「君、舌は大丈夫かしら？」

「ウソだ!? 味覚馬鹿のミルクタンクのスキマ妖怪なんか舌の心配をされた!」

「吉井くん、貴方、個人的にも私の事が嫌いでしょ? さつきから私をバカにするような言葉で挑発して? いいわよ? その裏路地で殴り合ってもいいわよ?」

「やっぱり僕がこの妖怪さんと話し合いをしようとしても埒が明かなさそうだ……全然話し合いが進まないどころか思いっきり脱線してるし。」

「ま、直接殴り合いなんてしなくても貴方も指名手配犯にしてこの世界に帰ってこれなくすることも出来るからどうでも良いんですけど」

「そうやってアンタは僕を助けようとしてくれる人達を強引に突き放させ、自分の良い様に道具として利用している。僕がアンタに従わない理由なんてそれで十分なんだ」

「!」

「……浅い理解ね。 貴方みたいなバカとは話し合いでさえ相当苦勞するのよね」

「これ見よがしに呆れ顔で溜息を付いて見せる八雲紫……」

「それに“理由”についてもどうかしら?」

「何が言いたいのかしら?」

「いつの間にか豊姫さんも僕の隣に座って紅茶とクッキーを食べている……」

「僕だけで話し合いをしようとしても一向に進まないと判断したのか、間に入って話を

進めてくれるみたい……

「私や幻想郷に敵対するという事は、吉井くんの能力を私が欲し続ける以上、もう月の都だろうとどこだろうと関係なく絶対に吉井くんを幻想郷に連れて来て見せる」

「これはまた大胆な誘拐宣言だね〜？ ……モグモグ」

「つて、この玉兎がすでにお菓子の7割を食いつぶしてくれてるんですけど……」

「あ、あとアンタのおごりだつて言うから遠慮なくあの最高級アールグレイつて言う紅茶も注文したよ？ 今ポットみたいなのに入ってるのがそれなんだけど？」

「『『ただ飲め食いでんだ（してるの）！』』」

あ、『空気読め』のコメントと共にサグメさんが鈴瑚さんにゲンコツを喰らわせてる

……

清蘭さんも反応に困って苦笑してるし……

「あー……と・に・か・く！ このままこの事態が泥沼化してしまつたらお互い望まない戦争に発展してしまう危険だつてあるの？ そんな事になつたらあなたの立場は間違はなく不要な戦争の火種を作つた危険人物でしかないでしょうね」

「何言つてんだ！ それはアンタが僕を誘拐しようとしたせいだ！」

「それを引き起こしかねない今のあなたは何？ “眠っている能力に振り回される超能力者？”、“誘拐犯の手から異世界の女の子達の手で守ってもらえている悲劇の少年

？”。　違うでしょう？　あなたは一人の女の子の為に阿呆な発想と行動力をもって奔走する日常を送るだけの高校生でしょう？」

「紫様、敢えて言っておきたいのですが、いまだき吉井くんのような子は学園ラブコメのライトノベルの中にしかいませんよ？」

失礼な！　困っている女の子がいたら助けたいと思うのがふつうじゃないか！

……普通だよな？

「それがどうしたのかしら？　吉井くんからしてみればそんな日常をワケの分からない理屈で奪われようとしているのよ？　その日常を邪魔する貴方達は十分敵ではないし、私達のように助けようとする者達がいるなら助けて貰おうとするのは当然……」

「そこよ。　そこが大きな誤解なのよ？」

ここで紫さんが指を指しながら反論しようとしてきた。

僕と喧嘩になった時と違って、険しくはあるけれどどこか真剣になっている事が分かる。

「思い出してほしいわ。　最初に私が間違つて吉井くんを月の都に落としてしまった時も、あの学園の屋上での事も、その後で吉井くんの友人達を巻き込んでしまった事も、今日貴方達が追われた際に吉井くんまで巻き添えを喰らってしまったのも不幸な事故の様なものよ。　あくまで吉井くんを確保しようとした作戦に対して綿月姉妹やその



玉兎達が介入してしまったに過ぎない」

「ちよつ、何をぬけぬけと……」

「吉井くん達の日常を邪魔するつもりは無いわ。寧ろ能力だけでもいただけたら後は友人達と共に日常に戻ってほしいと思っっている位なのよ?」

「「なつ……」」

このスキマ妖怪の発言は意外だった……

誘拐しようとした以上、人間なんて適当な食料にでもして処分しかねない位に穢れた妖怪（偏見）から出て来たセリフだとは思えなかったからだ。

「そこで取引をしたいの。もう今後一ヶ月の都に対して戦争を仕掛けようともしないし、巻き込んでしまったあなたの友人達も私のツテを最大限まで使って文月の街に帰すと約束してもいいわ。エスコートもつける手筈も整えている。

指名手配も吉井くんが来てくれると約束してくれたらすぐに解いてもらえるように手続きを取ってもいいし、今回の依頼に対してそれなりの報酬を支払ってもいいと思っ  
ているわ」

「何ッ……」

スキマ妖怪の言葉に反応した藍さんが大きな裾の中から何かを取り出した。

その正体は妙に大きい、金一封と書かれている封筒。

その厚みから察して、数百万はあるかもしれない……

「但し、その見返りとして吉井くんのその両手に宿っている能力を何が何でも貰うわ。

あと、月の都でたくらんでいるだろう遷都計画の詳細もね？」

どうするべきなんだろう？ ハッキリ言つて僕からしてみればいいこと尽くめだ。

豊姫さんと依姫さんの指名手配が解ければ地上での悪評も無くなつてこれまで通りの日常を取り戻せる。

雄二達も安全が約束された上でこの世界に戻つてくれるし、僕もほんの少し力を貸すだけで報酬までもらえる。

僕個人からしてみればこれ以上ないと思える程の取引にも思えたが、なにか違和感が……

「何を迷っているのかしら？ これ以上は無い、いい取引じゃないかしら？ こちらからしてみれば、吉井くんが寝ている所を誘拐して能力を強制的に覚醒させたうえで両手ごと奪い取ることだつて出来た。」

それをわざわざ回りくどい真似までして淑女的に大人しく取引を持ちかけているのよ？ この世界での幸せが戻つて来る以上、月の都なんかに居続けようとする意味も無いでしょう？」

確かにこれ以上、月の都の皆に迷惑はかけられない……

あまり迷いすぎてスキマ妖怪の機嫌を損ねるのも良くはないかもしれない……

「実際相当生き辛い環境だったんじゃないかしら？ 穢れのない環境を自慢げに掲げ、地上人を見下しているながら”保護する”なんて名目で偽りの優しさを向けて、偽りの親切でピンチに陥らせるような存在の事を気にかかる必要なんて……」

鉄拳「マジ殴り」

紫さんの暴言を聞いた瞬間、我慢の限界に来ていた僕の怒りが限界を超えてしまった。

失礼極まりない女の人だけど、女性を相手に殴り掛かるなんて真似はこれまで全くできなかつた……

だけど、こんなひどい物言いをする人を相手に何もしいなんて僕を助けようとしてくれたサグメさん達に対しての侮辱以外の何物でも無い。

だったら僕に出来る事は一つだ!!

「……その口を塞げよ、このババア!!」

「あーら、何をそんなに怒っているのやら……」

「恩人がバカにされていると分かっていたら怒るに決まってるだろ!」

「分かってなかつたら怒らなかつたって事じゃないの…… まだ話はあるわ。あなたが散らかしたお菓子と紅茶は藍にでも片付けさせるからおとなしく座りなさい」

くそっ！ あんな暴言を吐かれた以上一発はぶん殴ってやらないと気が済まないけど、これ以上暴れたらただでさえ印象が悪い僕等の立場が更に酷い物にされてしまう……

「ここは大人しく座るしかないのか……」

「自分に取って大切なものを守る選択が出来ない人間にラブコメ小説の主人公たる資格は無いわね。頼まれたわけでもないのに関係の無い存在のピンチにまで首を突っ込んで、全てを救おうとしておきながら全てを台無しにしてしまうでしょうね」

「サグ……月の皆だつて無関係じゃない！」

「やれやれ。あなたの言う事はあまりにも愚劣で甘ちゃんでお子様ね」

「僕からしてみれば紫さんの言い分の方が非情過ぎると思うけどね」

そう、紫さんは自分に取って大切な箱庭、あるいはその住人以外の存在は使えそうな道具か買取できる駒でしかなく、いくらでも使い潰して良い存在だとは思っていないんだ。

そうでなければ月の皆のような自身にとつて害しか成さない敵であり、叩き潰すべき相手であるとか考えていないんだろう……

「……仕方ない、そんなあなたの為に最大譲歩したB案がある」

「はあっ!?!」

『あなたの能力をしばらく〴〵借りる〴〵』『幻想郷に月の都は関与らない』。それだけでいいわ。この二つさえしてくるならこの事態そのものを収束させてあげるわ」

「ちよつ…じゃあアンタ、最初から吉井くんの能力以外はどうでもよかつたつて事!」  
「その通りよ青兎ちゃん」

な…… なんだ、その条件は……

「頭の回転が悪い貴方達の為に少し分かり易く言い直してあげるわ」

「なんだと! それじゃあまるで僕ら全員がバカみたいじゃないか!」

「あら? 少なくとも吉井くんとその青い兎はバカにしか見えませんか?」

「なんだと!! 清蘭さん(こいつ)なんかと一緒にするな!」

少なくとも僕は清蘭さんよりはまともにも決まつて……清蘭さんの見る目が僕と全く同じなんだけど!」

絶対今の清蘭さんも僕と同じこと考えてるよ!」

「吉井くん、確かに私達のこの行動の根幹にあるのはあなたの誘拐でしかないわ。でもその目的は最終的に世界を救う事にもつながるの。だからあなたを一時期とはいえ連れ去ろうとしたのも故あつての事だから少しだけ大目に見て大人しく力を貸してくれた後は黙ってもらえないかしら? それで十分なのよ」

「……つまり?」

「……サグメちゃん」

『つまり、「吉井君が人質を材料にされたまま胡散臭い妖怪女にこき使われるか」、「スキマ妖怪から逃げて友達を見捨てるか」どちらか一方を選べって言うてるの』

「……コメントに棘があるけれど概ねそう言う事よ」

つまり、皆を助けたければ僕が紫さんの元で怪しいバイトをさせられるって事？

あまりにも都合が良すぎるぞ…… 逆に怪しすぎて返事に困る位だ……

(破格の条件だね。 吉井君、ここは受けるべきだと思う…… あいつ等が約束を全部守りきるとは思えないけど、とにかくこの条件を飲めばこの世界における豊姫様の不信感が解けるし、吉井君の身の安全も保障できる。 少なくとも周囲の人々を実質人質に取られた状況は打開できる！)

吉井君、ここは受ける振りをするだけでも良い！ まずは時間を稼いで、月の都に戻って依姫様やイーグルラヴィの仲間に増援を要請するのが得策……)

なんか鈴瑚さんが凄く考えてるのが分かるなあ……

だってさつきまでモグモグとおいしそうに食べていた動きが完全に止まってるし

……

(……は豊姫様にも相談して……)

あれ、鈴瑚さん？ 何に気が付いたんだろう？

急に立ち上がったって一体何が……

（豊姫様の様子がおかしい…… やっぱりこの取引のおかしさには気が付いているんですね。 今回の条件はあまりにも甘すぎる。 それ以前にこんな取引なんてするならばあのスキマ妖怪の後ろで構えているキツネが代行して話を進めればいいだけの事で、あのスキマ妖怪が出張って来る意味が全く無い。

もし、幻想郷にいる住民の中に“強制的に約束を遵守させる程度の能力”、あるいはそれと同等の効果がある秘具なんてものがあつたとしたら？ ここはまともに答えざるを得ない。 いや、そもそもこの条件はむしろ吉井君に追い込みを掛ける為だけの仕掛けになっているような…… どちらにせよ、あのスキマ妖怪からは異常なまでの執着を感じる!!）

「何を迷っているのかしら？ 皆を無事に円満に帰す為には私の依頼を手伝って後は無視するだけでいい。 余計な含みなんてない簡単な事でしよう、吉井君？」

「……でも、アンタはその為だけに関係のない人間まで巻き込んで、いたずらに皆を傷付けた。 それを無視するって事は秀吉達の安全の代わりにこれまで守ってくれたサグメさん達を裏切る事にもなる……」

「だから？ つい昨日知り合つたばかりの月の連中なんかの為に大切な友達を危険にさらす気なの？」

「あ、いや……雄二達だったら出会い頭に初見殺しの罠に引っかからない限りは大丈夫だろうから……」

「吉井君、その友達と本当に友情観念あるのか疑問なんだけど!」

豊姫さんも鈴瑚さんも失礼な! これでも秀吉だけは心配してるんだぞ!

秀吉ほど愛くるしくて可愛らしい娘が(男子です)化け物連中によつてあんなことやこんなことでニヤンニヤンされているなんて……

「むしろ興奮するじゃないか……つて、みんなどうしたの?」

あれ? ぼくなんかおかしいなことを言ったのかな?

紫さんどころかサグメさんまで気持ち悪い物を見るような目で見てるんだけど……

「そう……なら、これを見ても同じ事が言えるのかしら?」

そう言った紫さんが僕らの目の前に手をかざすとこれまでに何度も見たスキマが展開されてきた。

とは言っても誰かを通す為の移動用ではなく、分かり易く説明するなら小型のテレビ画面のように受信した映像などの情報をリアルタイムで流してくれる感じのものなのだ。

「これって……みんな!? 一体何がどうなって……」

スキマの先にいる雄二達の様子を見て僕は驚いてしまった……



バブル時代の歓楽街のような場所でテレビでしか見たことが無いような大金を持って値段に見向きもしないで散財をしている雄二。

無駄に赤い部屋の中で小さい女の子と一緒にになってカメラをいじくりまわしているムツツリー二……

江戸時代を連想させる村の中で、桃の飾りを乗せた帽子をかぶっている青髪の美少女と羽衣を纏った美女に連れまわされて疲れ切っている秀吉……

「……雄二達、全然大丈夫なような気がしてきたんだけど？」

もう、別に紫さんの取引に答えなくても大丈夫なような気がしてきたんだけど……

「答えは『否』って事でいいのかしら？」

「ああ、八雲紫。ハッキリと断らせてもらおう！」

「なら交渉は決裂ね」

その言葉の後に立ち上がった紫さん。

とたん、僕の後ろからなにか堅い物が弾かれるような音がした……

「私達を甘く見たわね、八雲紫？」

振り向いた先で見たのは、何かを蹴り飛ばしたかのように足を上げている清蘭さん。

そして……

「あなた…… 幽々子様から紫様に協力する様に言われてきてみれば…… まさか外の

世界での初仕事がただの人間の“両手を切り落とす”……だとは思わなかったですよ」  
銀髪のセミロングヘアと弾かれた刀が目立つ女の子だった。

どうにか刀を拾って距離を取ろうとするが、その前に後ろに回り込んでいたサグメさんが銀髪少女を掴み、一本背負いで床に叩き付けた！

だが、銀髪の女の子は大して堪えていない様で、紫さん達を置いてどこかに言っってしまった。

さっきの言葉から多分隠密系の仕事を依頼されて僕に切り掛かったんだろう……

それとほぼ同時に今度は紫さん側の方から何かを弾くような音が聞こえた。

「なるほどね…… 想像以上に面倒な力を発しているわね。」

察するに、これは何かしらの約束を強制的に遵守させるための道具かしら？」

どうやら豊姫さんが紫さんに攻撃したようだが、今豊姫さんが回収した天秤のようなデザインの小道具を見て僕は震えが止まらなかった。

この手のオカルトには素人の僕でも分かる程の禍々しい狂気がその道具からは感じ取れたんだから豊姫さんにはこれがどんな道具なのかですら簡単に察しが付いたのだろう。

「吉井くん……後悔する事になるわよ？」

「あんな女の子に人の手を切り落とすように依頼するような妖怪にだけは言われたくないね」

完全に悪役な捨て台詞を最後に帰ろうとしている紫さん。

やはり僕の中に眠っているという能力が手に入らないのが悔しかったのだろう……

さつき僕の拳を止めた方の手が少しだけ震えていた。

こうして紫さんとの交渉は決裂に終わった。

豊姫さんの指名手配の問題といい、これからどうなっていくんだろう……

## バカとトラブルと強制帰還

another story 八雲藍 side

「紫様？ その手は一体……」

「問題ないわ。 気にしないで」

そう言つて強がつてみせる紫様ですが、吉井の拳を受け止めたその手には少しだけ瘡が……

「だけど予想以上に強力な能力ね」

「あの吉井君の”異常を正常に戻す程度の能力”がですか？ でも能力名だけを聞く限りですと、なにも紫様に対して直接ダメージを与えるような能力だとは思えないのですか？」

「ええ、確かに”直接”私の手にダメージを与えた訳では無いわ。 正確にはあの子の能力によつて私の手に込めていた”妖力”の流れが変わつた事によるものなのよ」

「流れ？」

「ええ、あの子の能力は一言で言うなら一種のパワーバランス調整の能力なのよ。 例えはこの幻想郷をこの現世から隔離している結果。 これを消してしまえばこの妖怪

にとつての楽園は消滅し、幻想郷に住む妖怪たちや人里の人間達は否が応でも現世にはじき出されてしまうわ」

「そうなたら我々妖怪達は様々な大義名分を突きつけられた後、外の世界の人間達と戦争に発展してしまうでしょう……」

生物として絶対の力を持つ妖怪の存在を忌み嫌う人間共……特に己の保身しか考えない政治関係者は妖怪の虐殺をためらいも無く実行するでしょうね。

「そう言った世界を崩壊させうる力や異能に対しては吉井君の能力では打ち消す事は絶対に出ない」

「では、なぜ紫様の手を守ろうとする力を弾く事が出来たのですか？」

そう、紫様という通りなら、あくまで誰かを守ったり支えたりする力に対して吉井の能力は無力であるという事になるはず？

「それも簡単な事よ。あの時の私は手に込めた妖力を吉井君の拳を逆に握り潰す為の“攻撃”に転ずることが出来る様にしていたからよ」

え？ “攻撃”？

「さっきも言った通り、あの子の能力は誰かを守ろうとしたり支えようとしていたりする力に対しては殆ど……いえ、全くと言っていい程に力を発揮しないわ。でも、“誰か

を傷付ける”、”呪いの様に対象の何かに対して制限を掛ける”。そう言った攻撃的な力や対象を阻害する事を前提とした力に対しては絶対の力を発揮する」

「なるほど、確かにその能力は今の我らにとつて非常に欲しい能力ですね。外の世界から入り込んだ”オカルトボール”によつて揺らがされている結界に対して強引ですぐ安定化させることが出来る……」

「それによつて行き場が狭まったオカルトボールの力をたどり、すべてのボールを見つけて破壊する。それが私達の当初の計画だった……」

しかし、そこから計算外な事態が起こつてしまう……そう、吉井を回収しようとした際にあのバカ共が訳の分からない事を言いながら発狂。本気で吉井を殺す気なのか、武器を持つて紫様の胸元で抱かれている吉井に襲い掛かつて来た……

その珍奇な行動に驚いた紫様とつきにスキマに吉井君を投げてしまった結果、移動先の設定を一切行つておらず、結果として何十分とスキマの中をさまよい続けた末にたどり着いた先が月の都……

「もう、既に計画が破綻しているような気が……」

すでに流れは最悪……吉井の回収に失敗し、月の都の連中も巻き込んでしまい、向こうの都合で抵抗してきた結果、更に関係の無い他人を巻き込んでの追い込み。

ヘタを売つたら第三次月面戦争に突入しかねない勢いですよ……

「もう、月の都の者達には土下座でもなんでもして吉井君を……」

「絶対にイヤ！ 吉井君“個人”に頭を下げるならいいけれど、寄りにもよつてあの綿月姉妹を相手に土下座なんてもう二度とやりたくないわ！」

あの時縛り上げられた時の恨みをまだ引き摺っているんですか……

確かにあの時の奇襲時に奴らから縛られて3週間くらいは縄の跡が体中に残つて、風呂に入るときは見れた物ではありませんでしたが……

「でもどうする気ですか？ 紫様の話の通りですと、悪意を持つて能力などを使つてしまふと吉井君の能力によつて無効化されてしまふのでしょうか？ だとしたら我々ではどうしようも無いのでは？」

月の都に直接潜入しようにも穢れを感知されてたき出されるのが目に見えていますし、今回の交渉の件で西行寺様にかなり無理を言つて妖夢を引つ張つて来ましたから、もうこれ以上はムリを言えないですし……」

今回の一件は幽々子様もかなり難色を示されていたんですよね……

どうにか沖縄名物の紅芋タルト2万円分と完熟マンゴーを10キロ、ちんすこう3万円分とラフテー（沖縄風豚の煮物）を30人前、そして今後30年分ほど紫様独自のルートで食料を支援し続けると言う条件でなんとか増援を漕ぎ付けたという経緯がある以上、もう白玉楼のお二人にも当分無茶な頼みは言えそうにありません……

「ええ、もう私達ではどうしようも無いかもしれないわね。私達では……」  
そう言つてスキマの窓を展開する紫様。あの交渉の時に使つたスキマですが、使おうとしたタイミングが悪すぎたんです。

その窓の先に映るものは、先程と同じく吉井の友人達。

それぞれ別の場所に落ちて行つたようですが、各自どうにか生き残っているようです  
が…… って、まさか!?

「なら彼らを上手く利用してみればどうかしら? あの子の友達が月の都での友達を相手に戦う事になるなんてなつた時、吉井君はどう反応するかしら?」

「紫様、さすが卑怯です。スキマババア呼ばわりは伊達では…… あつ、ちよつ紫様、関節はそつちにはまがらな…… アアアアアアアア!!」

酷いです紫様! そんな腕を捻つたら流石の妖怪でもキツ…… 痛い痛い痛い!  
そこまで捻つたら本当にシヤレにならないなあああああああ……

another story 八雲藍side end



「ハア〜…… ようやく僕の家に着いた」

結局あのババア、何をしたかったんだらう？ あんな平和的な光景を見せられて何をどうしたら要求を呑むと思つたのかな？ あんな計算高い人にも……人？にもミスの一つや二つはあるけど……

あの話し合いの後、急いで僕の家に向かつて行つたのだが、その間に何度もチンピラやヤクザ紛いな連中に喧嘩を売られ続ける事態に見舞われる。

大半は清蘭さんが杵でボコボコに叩きのめしたり、サグメさんが上手く捌きながら関節技をいくつも極めて撃退したりしたから大した問題じゃないけど……

僕もサグメさんの足手まといにならないように何か格闘技でもやってみようかな？

テコンドーみたいな足技中心のやつとか？

「吉井〜？ ココがアンタの家なの？」

清蘭さんが指さす先には僕の住むマンション。

いつの間にか到着していたみたいだ。

「あら？　結構大きいじゃないの。　こんなに大きい家に一人で住まわせるなんて実は結構な金持ちだったりするのかしら？」

「いや……　その建物はマンションって言うんだけど、箱の全体が大きいだけで、実際にはそれぞれ住民に合わせて部屋が区切られているんだよ……」

「ああ、私ら玉兔の住んでる寮みたいな感じな訳ね」

なんだ、月の都にも似た感じの住み場所もあるんだ……

……豊姫さん、わざと言つてないよね？

「とにかく中に入るわよ。　吉井、さっさと部屋に案内しなさいよ」

清蘭さんに急かされて案内する僕。

「取り敢えずカギを開けるけど、万が一の事を考えて皆少し下がっててもらってもいいかな？」

あの永遠の乙女気取り甘党紅茶変態キモストーカー痴女スキマババアが何かしらの手を打つてもおかしくはない……

鍵を回した途端に爆発とかしてサグメさんとかが怪我なんてしたらたまったものじゃない……

ゆつくりと、落ち着いて…… 鍵を開けた。

「よし！ どうやらあの妖怪は僕の家には何も仕込んでないみたいだ！」

another story 八雲紫 side

「……動きますかね？ あの子達、仲がいいのか悪いのかよく分からない所がありますけど？」

「大丈夫よ。 なんだかんだ言ってもあの子達は吉井君を見捨てられない。 吉井くん  
の事を観察していればそれくらいの事は分かるのよ」

特にあの土屋とか言う小柄な少年。 あの子は特に言動に反して情に熱い所がある  
わ。

ムツツリスケベな性癖と盗撮癖のせいで気が付くのに時間がかかったけど。  
あの子も吉井君ほどではないけど充分な英雄体質たりうる器を持っている。

発現した能力の關係上、この異変における解決力はゼロに等しいけれど、あの子の素  
直じゃない純粹さと心の根底にある熱意は月の都の住民と絶対に気が合うわ。

しかも、吉井君と違つて相手と対話して解決しようとする能力も高いし、それを駆使するか力で解決するかどうかの切り替えもあの3人の中では一番早い。

まさかあのワガママお嬢様に狂気の塊をねじ込んでグチャグチャにかきませた末にすべてを台無しにしたかのような存在でしかないフランドールスカレットを相手に戦うことなく逆に味方に付けるなんて外の人間どころか幻想郷の誰にも出来ない史上初の快挙。

それを上手く利用できれば、この世界の新たな主人公格として吉井君にぶつける事だつて出来るかもしれない。

「そうと決まつたら明日の朝一で動くわよ。藍、橙に連絡して今日は休むように言いなさい。私も今日は着替えて休むから藍もスペルカードのデッキ編成を終えたらすぐに休むようにしなさい」

「え？　すぐに動くのではないのですか？」

「本当はすぐに動きたいのだけれど、坂本君がいる地底に藍が行ける様にするためには一度地霊殿に連絡を入れておかないといけないし、土屋君の方は橙のコンデイションをベストにおかないと万が一戦いになった時に厳しいわ。秀吉君の方についてはほぼ安全な上に今は博麗神社に最も近い場所にいるから霊夢に連絡を取つてコンビを組めば大丈夫よ」

あの天人と竜宮の使いのコンビの戦闘力なら戦う事になっても万全になった私と霊夢とコンビを組めば絶対に勝てる。

そうと決まったら早速地霊殿や霊夢の所に連絡を入れて今日はもう休みましょう。

「そう言えば紫様？」

「あら、何かしら？」

「先日、一度吉井君の家に侵入した時があつたじゃないですか？」

「ええ、たしかスペルカードを使ったとたんに逃げられたから吉井君の家に逃げたんじゃ？つて思つて家の中に侵入たわね。」

その際に中の風呂場やベッドを勝手に使つたけど、その事かしら？」

吉井君の部屋にあるベッド、結構寝心地良かったわ〜♡

冷蔵庫に食料品が一切なかつた事とシャワーが水しか出ないのには驚いたけど……

もうちよつとまともな生活を送りなさいよ。吉井くんとの取引の材料になる何かが無いかと家探しをしていたら銀行の通帳が出て来たけど……

毎月生活費として口座に15万も入っているなら十分マトモな生活ができるじゃないのよ。

「あの時の着替えはどうなされたのですか？」

「たしか…… あの後、部屋の中にあつたハンガーを使って下着を干して、ついでに帽子

も…… あ!!」

another story 八雲紫 side end

皆を家の中に招き入れてリビングへのドアを開け放つ。

その瞬間に僕らの視界に入って来た物……

「……なにこれ？」

紫色の女性用の下着、「ブラジャー」と「パンツ」がリビング内にて干されていた。

「まさか…… いや、そんな流石に…… でも姉さんならあり得るのか？」

皆にはまだ言つてなかつたと思うけど、実は僕には度し難い程に変態な姉がいる。

昨日の事であるスキマババアが色々やってたとは言つても外国にいる僕の親たちが

即座に動けるだろうか？

姉さんの規格外過ぎる異常性なら一日で日本に帰ってきて僕に関しての手掛かりを  
探し求めて家を荒らすくらい造作もなさそうだけど……

とにかくこんな僕が変態と思われてしまいそうな物なんて即刻排除しないと！

そう思った僕はその下着を外に出も投げ捨てようと手に取ろうとした……

『ダメだよ吉井君……』

「え？ なにが？」

『あのブラ、吉井君のサイズに合っていない…… 女装用にしても詰め物がいくつも必  
要に』

「「サグメ様（ちゃん）何がなんでも認めない気ね!?!」」

「僕に女装趣味はないよ!?!」

え？ 何!?! 僕は今サグメさんから女装趣味のある変態だと思われているの!?!

いや、まあこんな女子高生みたいな服を着て（それ以前にこれまで皆も僕の服装に関  
してスルーしていたよね？）、しかも家にはこんな下着があつたら何も否定できないけ  
ど……

「サグメさん、念の為に言っておくけど、これは僕のじゃなくて……」

「藍はそつちを頼むわ!」

パシッ！↑八雲紫が慌てた顔で下着を回収していく音

「あのスキマ妖怪、一度ココに来てたんだ!？」

いやいやいや！ あのババア何してくれてんだよ、なんて嫌がらせだ！

「紫様、帽子の回収も完了しました！」

「よくやったわ！ バレる前に早く帰って来て！」

もうバレてるよ！ 今度は僕の部屋だな！ 住居不法侵入で警察に突き出してやる  
！

ムツツリーニが部屋に置き忘れて行ったスタンロッドを片手に部屋に突入するぞ!!

「八雲紫、確保オオオオオオ……おお？」

「紫様あく、助けてください……」

ジタバタ！ ↑尻尾がつかえててスキマの先に進めずにいる藍。

「マズいです！ 吉井に見つかりました！」

「くっ、こんな時にだけ勘のいい子ね！ 藍、ちよつと待ってなさい！ 少しだけスキマを広げるからその瞬間に……」

……ここでかくく仕返しの一つくらいしてもいいよね？

突指「千年殺し（ただのカンチョー）」

ブスツ!! ↑スタンロッドのカンチョーがクリティカルヒットする音



「んほおおおおおおおおお!!」

「藍、大丈夫! 今あなた乙女にあるまじき顔してるわよ! と、とにかく急いで回収するから!」

うわっ、なんかすごい奇声あげちやってるよ!? 一体どんな顔してたんだろ?

多分、乙女にあるまじき顔って言っていたからせつかくの美女が台無しになる程に酷い顔だったんだらうけど……

「逃がすかアアアアア!!」

ジタバタと暴れている藍さんを人質として確保するべく、彼女の“尻尾”の内の一本を掴んでどうにか捕まえようとした。

「痛い痛い痛い!! 吉井、離せ! その手を離せえ!!」

「ぶげらっ!」

が、結局藍さんの足で股間を蹴られてしまった僕は悶絶、手を離してしまふ。

その隙を付いてスキマを拡張させたスキマ妖怪の迅速な行動によって藍さんもスキマの向こうへと逃げられてしまった。

「吉井、股間を抑えて一体何やってんの?」

「不法侵入者の捕獲」

「一人で無茶するんじゃないの! 万が一相手が刃物を持ってたらどうする気だったの

よ？」

だつて……相手が逃げていきそうだったし、部屋の構造に詳しいのは僕だけだし……それに藍さん達なら妖怪としての力に自信を持っているみたいだし、刃物を使う心配も無かつたかとか考えて……

「と、とにかくあのスキマ妖怪も帰って行つたみたいだし、すぐにでも荷物を纏めましょう」

豊姫さんがバッグを取り出してくれる。

……それどこから持つて来たの？

「取り敢えず準備を終わらせたらすぐにでも出ましょう。またスキマ妖怪共がここに戻つて来た時に備えて罠を仕込んでおきたいし……」

「豊姫さんやめて下さい。家族が来た時に巻き添えになる展開しか思い浮かびません！」

「……それもそうね。清蘭・鈴瑚、罠張りは中止してこつち手伝つてもらつてもいいかしら？」

「了解です」

……もう行動してたの？

あらかた僕達が外に出ると同時に起動するタイプなんだろうけどさ。

『…………この小さい小説本、面白い』

「成る程、死んでしまつたらやり直しをしないといけない……つて、結構キツいんじや……死ぬ痛みとの記憶もハッキリと残したまま過去に戻されてやり直しさせられるんですよね？」

『どうやらそうみたい。 ” 蓬莱の薬 ” による不死身より辛い思いを繰り返す事になる』

「信頼している仲間が目の前で殺された上に自身も見事に惨殺されたり、絶望しながら生かされた後でやり直しなんてさせられる訳ですからね〜」

鈴瑚さんにサグメさん？ それ秀吉が置いて行つたままの“ Re :ゼロか〇始める〇世界生〇 ” なんですけど！

今度会つた時に帰す予定の本なんだから、流石のサグメさん達でも勝手に触らないで欲しい物なんですけどー？

「あ、このかぐや姫つて蓬莱山様にそっくりね。 当時の姫だった事もそうだし……」

豊姫さんも!? その童話本も秀吉が今度演劇でかぐや姫役をやるからつて言つて買込んでいた本だよ！

間違えて同じ出版社の本を2冊も買つたらしいから一冊は僕がもらつたけど！

「あれ？ 豊姫さん、さつきかぐや姫がどうこうつて言つていたけど、かぐや姫にそつく

りな人があの都に住んでいるの？」

そう言えば、確かかぐや姫って話の最後には月に帰って行ったんだっけ？

もしあれが実話だったら今もそのかぐや姫さんは月でお姫様か王女様のな地位についている事になるのかな？

「いえ、数千年程前までは私と依姫の姉弟子のような……いえ、当時お師匠様が彼女の教育係でもあったから単に姉弟子と言うだけでは無いお方だったのだけれど、今から1200年程前にある罪で地上に追放されたの」

そのお姫様って罪人なのか…… だとしたら違うかもしれないね。

だってこのかぐや姫は話の通りなら月に帰っている描写もあるから、何をしたのかは知らないけど外に追い出されるような罪人が実は冤罪でしたって話でもない限りは簡単に月に帰るなんて出来ないだろうし……

「ここからは私達も又聞きで聞いた話だけど、追放された後の地上での話がかぐや姫の話にそっくりなのよ。ただ、最後の方は完全に違っているけど」

「へ？ どゆこと？」

まあ、かぐや姫本人じゃないなら色々違っている所もあるだろうけど……

又聞きの話なら伝えた人が都合よく嘘を付いて誤魔化した可能性もあるし……

「当時の私達の上司と月人の使者、および兵士達と地上での現地協力者も合わせて総勢

950名を相手に裏切った私の師匠と共に話を伝えた二人の兵士を除いて皆殺し。

地上で世話になった老夫婦を国外に手引きした後には逃走。そのままつい2年前まで誰にも見つからずに逃亡生活を送って見せたのよ」

「うん、少なくともこの本で伝わっているかぐや姫とは全然似ても似つかないことだけは分かったよ」

そのお師匠さん強すぎでしょ……

依姫さんと豊姫さんのお師匠さんって言うからには相当強いんだろうけど、兵士950人をたった一人で、しかもお姫様を守りながらの戦いなのにもかかわらず逆に軍隊を壊滅させてみせるって……

「いや、実際に倒した人数が多かったのは蓬莱山様らしいけど……」

「え?」

「あ、私も当時の資料を見ました。凄くパワフルな攻撃をして来たらしいですよね?」  
『ええ、軽く地面を掘っただけで土ダルマが完成され、その中に何人もの兵士を閉じ込めて圧殺して見せたとか、ジャンピングアツパーで殴られた相手が全員空中で10〜20回転ぐらいさせてから地面に叩きつけたとか、この建物の屋上並みに大きな一枚板を音速に匹敵する速さで投げ飛ばした、なんて話もある位』

なにその怪力女?      どんなゴリラなの?

いや、ゴリラでもそんな真似は出来ないだろうけどさ……

「八意様はそれ以上の力を持つ上にサグメちゃんがあの木下ちゃんって子に使った”捌き”も完璧に使いこなしてみせるのよ？」

多分力に関しては蓬莱山様の前で見せるようなことはしないでしようけど……」

うわお…… その怪力って月の世界において上の地位に着く為には必須なのかな？

って言うか、そのお師匠様紫さん同様、化け物すら超越してるんじゃない？

「最後にこう書かれてましたよ？」 893人殺しの蓬莱山”には手を出さなつて」

『当時生かされた2人も未だにイスに座るだけで震え、トンカチを見ただけで発狂する位のトラウマを植え付けられたられたのをきっかけに仕事を辞めさせられたつて』

とうとう極道みたいな二つ名まで付いちやつてるよ……

最強の力に加えてトンカチがどうこうって話から察して、平気で拷問までやるその危険な思考回路……

どう考えても犯罪者です。 しかも更生の余地を疑うレベルの……

「つて実際の所、蓬莱山様の話はもういいでしょう。 この話を続けてたら吉井君の中でのかぐや姫のイメージが屈折してしまうわ」

もう充分歪んでるよ！

いや、この”かぐや姫”と”蓬莱山”さんが別人であるかもしれないって事は分かつ

てるつもりなんだけど……

「長話もこれ位にして、吉井君の準備が終わったらすぐに月の都に帰るわよ」

手をパンパン！ と豊姫さんが鳴らすのと同時に準備に取り掛かる僕ら。

……せつかくだし、このかぐや姫の本も持っておこうかな？

何かの役に立つかもしれないし？

家にあるもののうち必需品である衣服や、筆記具の幾つかとサグメさんの為に全く使っていないノインちゃんデザインのメモ帳を全部。(サグメさんなら簡単に買えそうだけど、予備として……)

電化製品も幾つか使えると豊姫さんから確認が取れたからスマホの充電器とムッツリーニから格安で貰えたタブレット(iPod AOr)も持って行こう。(ムッツリーニは更にスペックの高い新型を買ったらしい)

確か入力した文字をそのまま朗読してくれる音声アプリがあるって言ってたからそれも何かの役に立つかもしれない……

「あ、そうだ…… おーい、清蘭さーん！」

「なに？」

「もし良かったら姉さんが昔使ってた服がある物置部屋があるからそこから適当に服を持って行っていいんじゃないかな？」

「敢えて下着がどうとは言わないよ？」

「だって下着がどうか言ったらまるで僕がバニーガールに他の女の下着を履かせようとする変態みたいじゃ無いか？」

「吉井ねえ、自分でなに言ってるのか自覚あるの？」

「え？ どうしたの急に？」

「吉井……本当にこういう時になに言ってるのか自覚が無いのね……」

「え？ なに？」

半ば呆れ顔で僕が案内した先の部屋に入っていく清蘭さん。

「その中に」おねーちゃんのおふく！と書かれた札がかかっている箱を幾つか適当に取り出す。

「じゃ、選び終わったら呼んでね。僕らはリビングでニュース見ながら情報収集でもしてるから」

取り出した箱を全部僕の部屋に運び込んだ後、リビングで寛いでいるみんなの元に戻る。

多分サグメさんがやったのだろう。



使い方を教えてないはずのテレビをすでに使いこなし、ニュース番組を見ているようである。

『今外は機動隊とか言う特別な治安維持組織の部隊が出動したって……』

「そ、そうなんだ」

てつきり僕は機動隊の方もあのスキマババアが何かやったと思ってたんだけど……

「ま、流石にこの世界にも治安維持の為の組織位はあるわよね。これ以上暴れられたら正義を語る組織の威信に関わるし、調査機関的な組織もあるならその手の組織は大抵自分の正義感に酔ってる連中が大半を占めるから、どんな圧力も買収も最終的には無駄に終わる。この調子なら指名手配の話はともかく、街中で暴徒に襲われる事は無いわね」

どうやら豊姫さんの解説通りのようで、外が徐々に静まり返っていく。

いや、何度か爆発の音が聞こえたから、多分自衛隊が威嚇も兼ねた戦車砲を何発か撃ったんだと思う。

……え？ だとしても威嚇目的で砲弾発射はやり過ぎじゃ？

「キヤアアアア!!」

「い、今の…… 清蘭さん!？」

もしかして今の音、家の近くで起こったんじや……

大慌てで僕らは清蘭さんが服を見ていた部屋に走って行く。

「清蘭さん！ 大丈夫……ブツ!？」

僕らはいろんな意味で驚いていた。

鈴瑚さんは「グッジョブ!」とか言いながら鼻血を吹いて倒れ、サグメさんと豊姫さんは「ハア!？」的な顔をしながらポカンと口を開けて啞然としている……

僕のリアクションとしてはそんな鈴瑚さんとサグメさん達の反応の中間的な反応である。

付け加えるなら「あ、これ僕殺されるパターンだ………」と絶望もしている位だろう

……

「キヤーキヤー！ なにこの下着！ まるで私じゃ無いみたい、ウフフ！ しかもコレならシツポの邪魔もしないし、デザインも可愛いし超サイコー！ せっかくだからコレも貰って……後はコッチのヒモみたいなものかなりエロいけど、これはこれでアリかもしれない？ 後なにかしら、前に変なポケットみたいなのが付いてるけど？ 変なりモコンのスイッチ入れた途端に凄いブルブル震えてるやつがピツタリ収まりそう…… あ……」

余程気に入っていたのか？ 既に何組もの下着を並べて大はしやぎしながら着替えている清蘭さんの姿だったからだ……

『心配して損した』

「我が人生に一片の悔い無し！」

「いや、鈴瑚ちゃん、少しは悔いなさい！」

女性陣は呆れ果ててリビングに戻っていくだけでいいが、一応唯一の異性である僕はそれでは済まされない……

「キヤアアアア!! このバカ、こっち見るなあアア!!」

「いきなり銃弾は危ないって!？」

清蘭さんが指先から銃弾を乱射してくる。

驚いた僕はどうか弾を避けようとするが間に合わない。

このままだと銃弾は僕の手を貫くか、めり込んだ末に弾丸が中に残ってしまうか……  
どちらにせよ重症だろう……

「……………え？」

そう思っていたのに清蘭さんが撃ってくる弾丸は全て僕の両手によって碎かれ、無かったかのように霧散して消えていく。

確かになぜか弾ける筈もないのに手を振って弾丸を弾こうなんて真似をしていたけど……

「ちよつ、コレ不可抗力…… ま、待って！ その杵で一体なにするつもり……」

「シネエエエ！ この変態!!」

「もぺろおおおお!!」

弾が通用しないと認識した（判断と呼べるほど冷静じゃ無い）清蘭さんは、今度は常に持ち歩いている杵を装備して僕をボコボコに叩きのめしにかかって来た……

この後に目覚めたのは翌朝のサグメさんのベッドの中で、月の都に戻ってくるまでの

間の事はほとんど覚えていない。

鈴瑚さん曰く、「三途の川がどうこう」とか、「雄二だけ助かろうたつてそうは行くもんか！」などと寝言でうなされていたらしい。

そして僕をボコボコにしてくれた清蘭さんは一晩中サグメさんから僕の件に対する始末書を書かされているらしい……

取り合えず、サグメさんに頼んで清蘭さんを解放しよう…… 今回の騒ぎの原因は

僕だし、下着姿を覗かれた挙句に延々と始末書を書かされるなんて可哀想だから……  
むしろよく僕が牢屋に入れられてないの？

## 俺と妖怪と今後の予定

「あ？　なんだ、ここは……？」

俺は確か星熊とか言う鬼から弾幕ごっこことやらについて教わっている所だったはずだ……

それがなぜこんな花畑にいるんだ？

「なぜこんな花畑にいるのかは分からねえが、とにかくここを早く出た方が良さそうだ。

しかし、なんだ……　こう、この世のものとは思えないほどに綺麗な……」

辺りを見回していると、大きな川が広がっているのが見えた。

一瞬海かと思つたが、海特有の潮風のおいを感じられない。

それなら自然と川だと推測するべきだろ？

「つーか……　花畑に川、弾幕ごっここと言う名の決闘……　それによく見たらこの花、蓮の花じゃねえか？」

そう……　諭えるなら、ここはまるで、あの世へとつながる世界のような――

「だとしたらヤベエ！　ここは引き返さないと本気で死ぬじゃねえか!？」

まるでどころか本当に三途の川じゃねえか！　俺、死ぬ寸前だつて言うんか!？」

『おいでー。おいでー』

『怖がることはないよー。こっちはいいところだよー』

『美味しい物もたくさんあるし、楽しい事がいっぱいなのテーマパークなんだよー』

ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

呼んでる！ 対岸からなんかよく分かんない奴らが俺を手招きしてやがる！

つーか、よく見たら一番右の方は小学生の頃の俺にバカにされた逆恨みで陰で翔子を虐めまくって、最後に事故で全身をバラバラにして死んだいじめっ子じゃねえか!? ダメだ！ アレの言う事を聞くのは危険すぎる！

更に目を凝らしたらあのいじめっ子の取り巻きとか、中学の時に喧嘩に明け暮れていた俺をバカにしておきながらエンコーの不祥事がバレたのを最後に失踪したクソ教師までいやがる!?

俺を恨みながら死んだ知り合い大集合じゃねえか！ こんな所、さっさと引き返して

……

『怖がることは無いよ雄二。こっちはこっちで楽しいところなんだよ？ 一緒に実況

プレイ動画を作ってYouTubeに投降して遊ぼうよ?』

『明久と一緒に』 龍〇如く6・命の〇〇〇の実況をしたいのじゃが、雄二がおらんと盛り上げらんのじゃ』



『……雄二は冴〇が好きだと言っていた。……今、その辺で止めている』

「つて、明久に秀吉にムツツリーニ!? なんでそつち側で手招きしてんだ!? ゲームを  
してえならお前らで勝手にやつてろ! 俺は戻る!!」

つーか、龍〇如くの6作目はまだ出てねえよ!?(2016年12月発売。編集当時、

同年10月) その地点で大嘘だつてバレバレなんだよ!!

『はっはっは。 そう怖がることは無いのじゃ雄二よ。 この通りわしらは元気じゃ  
し、何も心配はいらんぞい』

『だからこつちにきて一緒にタのシモウヨオウ……』

「おい明久、お前悪霊化しているつー自覚あるか? イヤ、あのバカにそんな自覚持て  
ねえか……」

そもそもあいつの嘘はいろんな意味で穴だらけでしかも態度にも出てるから簡単に  
見分けが付く。

俺を騙すなら、そんな明久のキャラクターまで真似るべきだったな! まあ、本当に  
明久だったとしても話なんて聞きやしねえけどよ!

『マツテよオ…… 雄二だけ助かるのはナツとクイカナインダよオオオ……』

「くそつ、この野郎はなせ! ぶっ殺してやる!」

明久達じゃねえつてなら話は別だ! (明久に限っては躊躇なくぶん殴つてやるんだが

……)

！  
そつちに引きずり込もうとする気だつて言うならこつちも殺し直す気でやってやる

た。  
……と考えながら、使い慣れていない霊力をどうにか込めた拳で殴りかかろうとした。

薄命「余命幾許も無し」

瞬間に突如現れた女が、大鎌を振つて悪霊共を両断した……

「おい、アンタ等何やってんだい？」

江戸っ子気質な口調で悪霊をけん制する……

そこから放たれた殺気は助けられた側であるはずの俺でさえ怖いと思える程の物で、それを直接向けられた悪霊からしてみれば恐怖以外の何物でも無いだろう……

「大人しく向こうで待つてな。このバカ騒ぎの件、映姫様にも報告させてもらうよ」  
そう言った女が手を軽くあしらう様に振る。

それだけだ…… それだけでさつきまでの悪霊共が川に叩き付けられた。

これは…… 能力バトル物でよく見かけるテレポートか？ いや、自身以外の物なら触れていなくても一瞬で移動させる事が出来る“アポート” ってやつかもしれないねえ……

どっちの能力なのかは分からないが、助けたからと言って味方とは限らない以上、警戒しているに越したことはないだろう。

「なあ…… あんた、もしかして“死神” って奴なのか？ ……俺を地獄かどこかに連れて行く為に来たって事か？」

「あつはつは！ まあ、死神だっていうのは正解だけどね。 あたいはその死神でも三途の川の船頭を担当している死神だから、まだ“生きている” アンタに対してはどうこうする力も権限も無いのさ」

さっきの悪霊への睨みを効かせた時と一変させて明るく話しかけて来た。

敵意は無いって事を示したいんだろう。 悪霊を両断した大鎌を近くにあった木に立てかけている。

「ああ、自己紹介が遅れたね。 あたいの名前は“小野塚小町”。 三途の水先案内人をやっている死神さ」

「つて、事は死んだ俺を閻魔大王様の元にも連れて行く気か？ それともアンタが閻魔大王と同じ役割も勤めているのか？」

「あはは、いいから話を聞きなつて。まだ生きてゐるつて言つただらう？」

それに、こんなにも可愛らしい閻魔大王様なんているわけないじゃないか？ さつきも言つたけど、あんたはまだ完全に死んじやいないよ。残念ながらね……」

なんでそんなに残念そうな顔をしてんだよ…… あ、腰に下げてる巾着から小銭の音が……

さつきの悪霊や船を渡る為の幽霊から小銭でも取つてんのか？

たしか、三途の川を渡るには6文くらい払わないといけないらしいが……

「驚いたふり」なんかしなくてもいいじゃないか。あんたに目覚めた能力ならそうそう死ねない事くらいは自分自身が分かっている事だろう？」

おい…… アンタなんでオレの能力について知つてんだよ……

another story 地底side

「ヤバイ！ このガキ、心臓が停止してるぞ！ 早く心臓マッサージを！」

「姉御の方も右足がグチャグチャになってやがる！ 大急ぎで医者を呼んで来い！」

一方、地底の旧都では大騒ぎに発展していた。

能力に目覚めたばかりの外来人“坂本雄二”と怪力乱神の鬼“星熊勇儀”による弾幕ごっこ講座が旧都の中央で開催されていたのだが……

「くそっ！ 姐さんの足がここまでボロボロになるなんて…… 一体何をどうやったらこんな挙句になるんだよ!!」

「おい、私の事は後回しでいい！ あの人間の方を先に……」

「もうすでに医者の方に運んでいます！ 後は姐さんの足の治療だけです！」

少し離れた所で救急車が止まる。

少しボロボロだが、さとり曰く『かつてとある町で一般人によつて病院に寄贈されたが、寿命が近づいたのを機に処分されるところで幻想入りし、それを旧都の医療機関に回せないかと引き取った物』らしい……

「とにかく心肺蘇生に全力を注ぐんだ！ 意地でも死なせるな！ 自分の命を助けるつもりで、それ以上に大切なものがある奴はそれと同じ存在を助けるつもりでやれ！」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアア!! 班長、あの女が……」地殻の下の嫉妬心の暴走を止められませんか!!」

「くそっ、こうなったら増援を呼べ！ 最悪、地霊殿に増援を要請してでも彼女を止めろ！ 絶対に近寄らせるな!!」

『ガ、アアアアアアアア!!』

「なんて力だ！ 総員、絶対に放すんじゃないぞ!! 放した瞬間、オレらを含めたこの場の全員が皆殺しにされるぞ！」

「やめなつてパルスイ！ アンタが暴れたつて勇儀の足が治る訳じゃないだろう！」

「ねえヤマメ、あの人間…… 助からなかつたらこのまま食べちやつてもいいかなあ？」

「キスメ！ アンタもこんな状況でのんきな口調で何言つてるのさ!？」

星熊勇儀の負傷に怒り狂つている橋姫少女、  
“水橋パルスイ”。

のんきな口調で坂本を食べるなどともない事を言い切つた釣瓶落としの幼女、

キスメ”。

そんな彼女らにツツコミを入れたり、どうにか暴走を説得で止めようと試みているいる土蜘蛛の少女” 黒谷ヤマメ”。

彼女らはそれぞれの用事で旧都に来ていたのだが、勇儀の騒ぎを子供たちから聞きつけた彼女らはその光景を見た瞬間、驚きを隠せなかつた。

地底旧都における最強戦力を誇る鬼であるはずの勇儀が片足を抑え、倒れ込んでいるのだからそれも仕方ない反応だろう……

「ヤマメお姉ちゃん…… あのね……」

ヤマメの幅広のスカートを引つ張りながら話しかけて来た少年は赤髪の外来人と勇儀が戦っている一部始終を見届けていた子供の一人である。

一度落ち着いたヤマメは子供と目線を同じ高さに合わせながら、刺激しない様に優しく事情を聞きだした。

1・意外にも一部の大人から“地底の脳筋アル中”呼ばわりされていた勇儀の弾幕ごっこ指導は的確で、わずか10分で坂本もジャブの要領で拳を突き出しながらだと靈力の弾を撃つことが出来た事。

2・外来人の目覚めた能力を確認するべく、勇儀が妖力を簡単に叩き付けながら調べ上げようとした結果、適当にばらまかれた通常弾幕が全て外来人に吸い寄せられるように当たった事。

3・しかし、それでも全く無傷なのを気にした勇儀が能力の限界を調べようと、実践訓練と称した弾幕ごっこを挑む。

その間、外来人が勇儀のこれまでに出示されたスペルカードを全て受け切るといふ異常事態に驚き、彼女は四天王奥義「三步必殺」をゼロ距離で叩き付けてしまう。

4・その結果、本来非殺傷仕様であるはずのスペルカードルールの弾幕を全て胸の一点で集中して受けてしまう事になった外来人が流石に倒れてしまい、奥義を直接足で叩き付けた勇儀本人も足を衝撃の反動でケガをしてしまい倒れた事……

「……その話が本当ならまさしく最強の矛と最強の楯の激突……」矛盾“つて呼ぶにふさわしい戦いね”

「じゃあ結果は引き分けかなあ？ 勇儀も足を怪我しちやっつたし、あの外来人も死に掛けたし？」

「いえ、多分この様子だと矛盾せずに矛が勝ったことになるわ。あの人間の方が明らかに重症なんだし」

救急車に乗せられる外来人。その胸部には勇儀が履いていた下駄と同じサイズの青痣。

少年の話の通りなのだろう……

それでは勝負に応じた外来人もスペルカードルールとは言え勝負を挑んだ勇儀も責める事など出来ない。

これはあくまで“決闘”であり、両者が承知の上で戦った正当な勝負なのだから、ここで事故で死人が出たとしても日常的に喧嘩や乱闘が勃発する旧都においてはそれによる結果に対してだれも文句は言えないのである……





雄二復活の前に三途の川近くではこんな事があつたのである。

「なるほどね。 だとしても運が良かったね。 聞いた話でしかないけど、地底に住む鬼の奥義を直接踏みつけられた奴は魂ごと完全に消滅させられてしまうとまで言われているからねえ…… それが鋼鉄の肉体を誇つていようとね」

「いや、この状況は実質死んでも同然……」

「まあ、あんたの場合は直接のダメージよりも全身を裂かれそうになった際の激痛の方でシヨック死しそうになった為に、体が無意識に魂と肉体のリンクを強制的に解いて切り離れたつてのが妥当かね？ 細い糸をはさみで切るようにスパン！……とね」

「いや、だからこの状況、実質死んでのと一緒になんじゃ……」

「ま、今この一件についてはもう考えなくてもいいと思うよ？ 起きたらどうせあたいは会う機会なんて無いんだし」

「いや、俺はまだあんたに聞きたいことが……」

質問しようとする俺を指一つで静止する小野塚。

答えるだけの猶予が残されていねえって事かよ……

「もういいから今回は肉体に帰りなよ。 あんたの能力に關してはさっきの怨霊の対応が遅れたお詫びも兼ねて、あたいがすこしだけ使い勝手を良くしてあげるからさ」

小野塚が俺の額を軽くつついた瞬間、少しだけ体が何かに締め付けられたかのようになる。

それから数秒後、どこかに引つ張られるかのように飛ばされていく……

そして最後に小野塚が何かを言ってくれていたような気がするが、はつきりとは聞かえなかった。

その時、少しだけ聞こえた言葉は……

『今度はきちんと死んでから来なよ。老いたあんたが大切にしている女と一緒に来れたなら、成仏記念に映姫様からパクって来たお酒でお祝いでもしてやるよ』

と言う、遠回しに励ましともとれるような言葉だけだった……

……あ、なんか変な棒を持った頭堅そうな女が小野塚の奴に関節技を決めてやがる。酒をパクったって話がバレたんだろう。なら自業自得だし、気にする必要もねえか

？

「つつー事があつてよ。それで見事復活できたつて訳だ」

「いやあく、本当にすまなかつたねえ」

頭を搔きながら謝つて来る星熊。

片足にはギプスのような物を付けており、緑色の瞳をした女の子に支えて貰つてゐる。

結局、俺達の騒ぎが原因でやつて来た医者連中は俺の事を軽く診断した後で異常なしと判断し、すぐに別の現場へと向かつて行つたようだ。

かなり適当な診察だったが…… やっぱり少しだけ金を残しておいて、地上に出た後でも念の為に病院で事情を話して検査してもらつた方が良いかもしれねえな……

「いや、こつちも承知の上でやつた事だし気にしてねえよ」

「ちよつ…… アンタ確か坂本つて言つたかい？ あんな風に殺されかけて気にしてないつて…… アンタもしかして人間の皮を被つた妖怪なんじゃないの？」

いきなり、クモの腹みたいに膨らんだスカートを着ている女から人外疑惑を吹っ掛けられた。

「あ？ 一応言つておくけど、俺は正真正銘ただの人間だぞ？ ……まあ、あの能力使つた後で言われても信じられないだろうけどよ……」

「トツプクラスの大妖怪でもまともに喰らつたら即死するつて言われている勇儀の奥

義を喰らっておきながらピンピンしてる地点で人間やめるとしか思えないって」

クモっ腹女の隣にいる桶女も同時にツッコミを入れて来る。

仕方ねえだろ…… 実際に俺はただの人間なんだからよ……

だがまさか、俺に目覚めた能力があんなガチガチの防御型だったとはな。

って、知らなかったとはいえそんなヤバイ技を喰らってなんで無事だったのか分からなくなつて来たんだが？

「人間のクセに勇儀とまともにもやり合えるなんて妬ましいのかしら……」

星熊を支えている女が“パルパル”とか言いながら物凄い恨めしそうな視線を向けている。

なんか油断したら後ろから刺されそうな恐怖を感じるんだが……

「よしなつてパルスィ。 確かアンタ、あのカツアゲ君から巻き上げた金を使いきりた  
いって言つてたよね？」

「ああ、そんな事も言つたが……」

正直な話、今回の騒ぎのせいでもかなり金が飛びそうなんだよ。

だからもうその辺に關しては大丈夫な気がしてるんだが……

「よし、良かったら今日はもう遅いし私が経営してる店の一室を貸すから泊まつていきなよ。 そこでマネーロンダリングでもしていけばいいじゃないか？」

「……あ？」

突然の提案について間抜けな声を出してしまった……

この調子だと俺のツラもかなりアホ丸出しな顔になってんだらうよ……

「よし、その顔見る限りだと来る気満々って事でけつてーい！」

「ちよつ、俺はまだ泊まるなんて言つてな…… それにマネーロンダリングつて一体あんな普段は何をやつて……」

「そんな赤い顔するなつて。 意外とウブなんだなあお前さんは」

ヤバイ、あの一件で力が強い事は分かつていたが、まさか人間の範疇なら最強クラスを自負できるくらいのは持つていたはずの俺を簡単にお姫様抱っこして見せるとは……

「……おい！ コレ、男ならだれでも恥ずかしいに決まつてんだろ！ 分かつた！ 分かつたから降ろせ！」

つーか足はどうしたんだよ!? さつきまで大変な事になつてたんじゃねえのか!?!  
「もう治つたよ」

「マジか!?!」

つーか鬼つてスゲエな!? 流石にガキンチョからヒーロー視されてる妖怪なだけはある……

さつきまでの騒ぎの様子だと確実に粉砕骨折していたように見えただが……

「ああもう妬ましい、妬ましい、妬ましいイイイイイイイイ!! 人間の分際で勇儀の事をそこまで心配できるなんてええええええええええ!!」

「おおおおおおおおいっ!! さつきのパルパル女が血の涙を流しながらハンカチ噛んで引きちぎってやがる!?!」

「星熊、頼むから本当に降ろしてくれ! このままだと嫉妬であのパルパル女にぶつ殺されてしまう!」

「大丈夫だつて。パルスイは意外と常識人だし、理性で自制を掛けられるタイプだから、大したことはしな……」

「勇儀…… 浮気は許さない……」

「ちよつ、パルスイ!? ちよつ、ストップ! 話せば分か…… アババババババ!!」  
ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!! 星熊の奴が…… 星熊の奴がスタンガンによって沈められたアアアア!!

「ゆーぎの姐さんとパルスイお姉ちゃんって本当に理想的な仲の良いカップルって感じだよー」

「お互いの意見を言い合える関係って素敵だわー」

ガキンチョ共、どんだけ羨ましがってんだよ!? 特に乙女連中!!

あれ絶対に理想的なカップルじゃねえって! 星熊の奴が一方的に束縛されてるだけだろ!?

「な、なあ…… あのさつきから俺の事睨んで星熊の奴を連れていった女って一体誰なんだ? アンタらの事も含めて教えてほしいんだが?」

「あはは…… あんたからしてみればいきなり変な女に絡まれて色恋沙汰に巻き込まれたぐらいでしかないからねえ」

クモっ腹女の方も反応に困っているし…… これは結構ガチでヤバい奴か?

「まあ、週一でやらかす事だから気にしなさんな。 私は黒谷ヤマメ。 まあ、さつき」人間の皮を被った人外”とか言っちゃったけど、どっちかって言ったら私等みたいな妖怪の方が合っているセリフだったね……

私は感染症などの病気を操る程度の能力を持った”土蜘蛛”なんだ。 良かったら覚えて行ってね」

軽くウインクをしながら笑顔で話しかけてくれる黒谷。

小野塚とは違う意味で明るい性格のようだな。

「私の名前はキスメー。 一応釣瓶落として紹介しておくねー」



今度は内気なのか黒谷とは打って変わって桶の中に閉じこもりながら上目遣いで自己紹介してくるチビツ子……

こいつ、名字を名乗らなかった辺り、この中の誰かと家族の可能性もあるな……

いや、種族は違うようだから名字が無いだけかもしれないねえが……

「んで、あのさつき勇儀と喧嘩してそのままどこかに連れて行つた女の子が“水橋パルスィ”。まあ、予想はついていると思うけど、基本的にはいい娘なだけだよ、結構嫉妬深い性格してるの…… それだけならまだ可愛いもんなんだけど……」

「あ？ なにか問題でもあるのか？」

言うべきかどうか迷っているのだろう。黒谷は何かに対して迷っているかのよう  
に頭をひねりだしている……

「ま、いいか。一時間もすればケロッとした顔して出てるし」

「それ本当に大丈夫なのか？」

「心配いらないうて。話を戻すけど、あのパルスィの能力と好みに問題があるんだ」

「気になるな。一体どんな能力を持っているんだ？」

「……嫉妬心を操る程度の能力」

「人心掌握系かよ…… 俺の能力と相性悪いじゃねえか……」

「つていうか、多分地上に出るまでの妖怪の大半があんたの能力との相性は悪いと思う

よっ。」

「へ？」

「一体どういふことなんだ？」

「まあ、その変については後で説明するわね。能力の方だけなら嫉妬心だけしか弄れないから嫉妬される要素が無ければいいんだけど……特に問題は好みの方なのさ」

「いやいやいや、嫉妬心を操るって言う能力も周りを巻き込んだら最悪殺し合いになりかねんだろ!」

「その辺は後でじっくり教えてあげるとして……パルススイつてば、勇儀と何があったのかは分からないけど、勇儀に相当惚れ込んでるのよね。まだ付き合っている訳じゃないけど、酔った勢いで愛の告白決めて勇儀に抱き付いたり、さっきみたいにスタンガンを叩き付けてどこかに連れて行こうとしたりなんてするのなんて週に一回くらいに頻度である事だし……」

「俺、星熊の奴と妙な親近感が湧いて来たんだが？」

「アンタも似たような目に合ってるのかい？」

「翔子から三日に一回くらいの頻度で変な牢屋の中に閉じ込められるなんて事があるんだよ……」

「あ……うん、アンタのその青ざめた顔見ていたら想像ついたから言わなくてもいいよ。」

「アンタも苦労してんだねえ」

「ねえヤマメ。 とりあえず勇儀の経営しているお店に案内する？」

「そ、それもそうね…… まあ勇儀なら大丈夫でしょ。 店もある事だし、一時間もすれば帰ってくるわよ。 ……多分」

ああ、大体のオチは読めたわ。

……死ぬなよ、星熊。

星熊が引きずられた道の先に敬礼を向けた後で案内すると言ってくれる黒谷に大人しくついて行く事にした。

俺の考え着く限りでは、星熊の特徴を元に夕方以降になって開ける店って言われたら真っ先に思いつくのは“居酒屋”だろう。

……あれ？ 居酒屋に人が泊まれるような部屋なんて作るものか？

俺の予想通りだとしたら寝床ないんじゃないのか？

番外編 赤髪少年移動中……

「いつてえなあ、何しやがる！」

「ちよつ、アンタが勝手にぶつかって来たんじゃないのよ!!」

黒谷に案内してもらっている中、いきなり人間にしたら30代前半位の男が数人、黒谷に絡んできた。

「オイオイ、ウチのアニキが骨折したみたいじゃね〜か? こりやー慰謝料モノですわなあ?」

「ヒヒヒ! こりやあ数十万じゃ効きやしませんぜ、お姉さんよオ? ま、その体でお支払いするって言うなら話は別……」

うわつ…… 今時こんな絡み方して女攫う商売とかしてる連中とかいるのかよ。

何黒谷が躊躇してんのか分からねえが、ココは助けに入るか……

「いい加減にしとけ。この女、星熊の奴がケツ持ちしてる女だぞ?」

「おいコラ! そう言うのはウチのアニキをボコボコにしてから言うんじゃねえよ!!」

「つたく、仕方ねえだろ? こいつらの事をどうにか話し合いで止めるべく拳から始める交渉術に始まり、追い打ち踏みつけに繋げる交渉術を使わないといけなかつたんだよ。」

「そのアニキとやらはお前らを置いてそのまま逃げて行つたみたいだけどな?」

「なっ! ま…待って下さいよアニキ〜!」

ま、結果として俺が叩きのめした分以外のケガは全くなかったって証明にはなつたみたいだし、星熊の名前も使ったからこれで黒谷にからもうって気にもならなくなつただろう。

「姐さんの友達とは知らずにすみませんでした！ 今大したものは持っていませんがどうにかこれで勘弁してください！」

男が何かを取り出して俺達にいくつもの品を渡してくれた。

「どうやら慰謝料代わりのつもりらしいが…… 男はこれ以上関わり合いになりたくないのか大慌てで逃げて行つた。」

坂本雄二は「怪しい注射×5」「注射の間違つた扱い指南書（著・ヤゴコロ）」「1万5千円（現代相場1.5万相当）」を手に入れた。

「金なんて貰つても……」

「旧都からも離れた所で暮らしている私達には使い道が無いさね」

「そう言つた黒谷とキスメは貰つた金を近くにいたホームレスみたいな連中に全額あげてしまう……」

焼いてしまうよりはマシな使い方だとは思うが、本当にそれでいいのか？

それからこんな調子でヤクザみたいな連中やチンピラに絡まれ続け、黒谷曰く何事

も無ければ5分で着くはずの道のりを30分もかけた末にようやく星熊の店に到着した。

番外編 e n d

## ワシと幻想の神社倒壊

「結局、博麗の巫女という少女はおらんかったのじゃ……」

比那名居殿と永江殿のワガママに巻き込まれて天界から誘拐同然に連れ去られ、その際に運よく博麗神社という場所に落ちたのじゃが……

「何なのよ！ 『オカルトボールを見つかるまで帰りません。探さないでください』……って！」

「今回ばかりはいなくてよかったですよ？ 結局秀吉さんの保護のために要石を使って衝撃を散らそうとした結果、博麗神社が完全に崩壊しましたし、しかも追手としてやってきた天人達をその場で切り捨ててから人里まで逃げてきたんですから……」

本当にあれ、大丈夫なのかのう？

神社内がぐちゃぐちゃになってしまっておるし、追手の者達も全員頭から地面に刺さったままだし……

「できることなら私達で保護してあげたいのですが……」

「事情が変わってしまったからね…… 今私たちと一緒にいると逆に危険かもしれないわよ？」

「いやいやいや！　なら、今後ワシはどうすればいいというのじゃ!!　これならおぬしらについていかずに明日、落ち着いてから地上に降りた方がよかったのじゃ！」

「あ、たぶんアンタがついてこなかったとしても結局あいつらは追ってくるに決まっていたから最終的に博麗神社が倒壊する運命は変わらなかつたと思うわよ？」

ううむ……　結局わしは最初からすぐに元の世界には帰れない運命にあつたというわけか……

「なるほど、それなら納得……」



「する訳ないじゃろ!!」

「まあまあ、〃善は急げ〃 って言う言葉もありますし……」

「永江殿! この状況のどこに〃善〃と呼べる状況があるのじゃ! いきなりわけのわからぬ女子の手でこの世界に飛ばされて友人とはぐれ、不幸中の幸いにも泊まれる場所で保護してもらえるかと思つたら、ごたごたに巻き込まれて人質に取られて、まともに眠れずに地上まで落とされ! それでも元の世界にすぐにでも帰してもらえと思つたら今度は元の世界に帰せる巫女もおらずにしかもその為の施設でもあつた神社までもが崩壊してすぐには帰れない!」

何なのじゃ、この理不尽極まる状況は! わしがいったい何をしたというのじゃ!

「まあまあ、巻き込んでしまったせめてのお詫びに外来の人間の保護区でもある人里までは案内いたしますし、そこで生活できるだけのお金と面倒を見てくれそうな方をお探しするところまではお付き合いますから……」

む……むう………　　そこまで言われてしまつては仕方ないのじゃ。

いくら文句を言おうともこれ以上状況は良くならぬし、永江殿もさすがに申し訳なさそうにしている以上、こちらから引き下がるしかないじやろう……

痛い目に遭いたくないからと言って二人の人間になつたわしにも非があるしろう。

「まあ、博麗の巫女からなにか聞かれたら私達のせいにもしておけば大丈夫よ」

「そうですね。　総領嬢様からしてみればむしろご褒美でしょうし」

「そうそう、あの子の夢想封印って結構癖になるのよ……　　って、衣玖ったら何言つてる

のよ！　私はそんなDMじゃないわよ！」

そういうなら比那名居よ……　　その恍惚とした笑顔を見せるのはやめてほしいの

じゃ。

あと息も荒いのじゃ……　　絶対にこの先の展開に期待している変態の顔じゃぞ？

男の娘・変態・少女移動中……

「と、いうわけで人里とくちやくく！」

あれから長い階段を降り、時折襲い掛かってくる獣や妖怪を比那名居が切り伏せたり、永江殿が電撃でなぶり殺しにしたりしながら移動して2時間……ようやく人里と呼ばれている場所に到着したのじゃ。

町の雰囲気は一言でいうならドがつくほどの“田舎”じゃった。

それなりに広い田舎町ではあるが、この広さだと歩きでも一日もあれば見て回れる程度の広さでしかない……

「全く寝ておらんから疲れたのじゃ……」

「外の世界では夜も眠らない街があるって聞いた事があつたのですが、秀吉さんを見ている限りだと全員がそうだというわけではないんですね？」

「それは“街全体”での話じゃ。夜に起きて働いている者もたくさんいると言いうだけ、わしみたいな普通の学生は普通に夜は寝ておるのう」

家で宿題が終わらずに徹夜した拳句に姉上に泣きついたことはあるが……

それでもこんなバカ騒ぎなんてしたことはないのじゃ。

「だったらどこかで休みたいんじゃないかしら？ さつさとどこか秀吉を保護できる場

所か宿を探さないと……」

「でしたらまず寺子屋はどうでしょうか？ あそこの教師は本性に難はありますが、こういった案件での信用は確かですし、秀吉さんでしたら彼女の趣味には合わないでしょうから襲われる心配も……」

ちよつ、到着してすぐにこの者らは何を言い出しておるのじゃ！

襲われるつて地点で洒落にならんぞい！

「ほら秀吉、さつきと行くわよ？」

「待つのはじゃー！ いったいどこに連れて行く気なのじゃー！ さつき襲われるのがどうこうつて言いだして……」

「大丈夫よ。 私ら以上のガチレズで、シヨタの性癖を開発するのが趣味で、よく幻想郷一の名医から怪しい薬をいくつも買い込んでいる本性を隠して普通の教師をしているだけのただのワーハクタクの半獣の変態にアンタを預けるだけだから」

「絶対大丈夫じゃないのじゃー！ そんな危険人物にわしを平気で預ける気なのか！ つて、頼む！ 離してくれ！ 後生じゃから、そんな危険人物を紹介するのはやめ……のあああああ！」

わしの懇願も聞かずに比那名居はわしの手を掴んで引き摺りながらその変態がいるという寺子屋まで引つ張つていったのじゃ……

男の娘・変態・少女移動中……

「寺子屋についたはいいんだけど……」

寺子屋に到着したわしらは門前で立ち止まっていた……

本当ならすぐにも門を開け、中に入って事情を説明して助けてもらえないか頼みに  
行こうとしたのじやが、門の中から聞こえた音と声を聞いて立ち止まってしまったの  
じや。

「うわああああ！ 頭が！ 頭がああああ!!」

「痛い！ すごく痛いよぉ……」

「あ…… お星さまが見えるよ……」

「わーい、お花畑に死んだおばあちゃんがいるよ…… まってーおばあちゃん……」

「よーし、次の子前へ！」

完全な体罰なのじや…… 外の世界でやったら大問題なのじや……

「けーね先生！ やりすぎじやないですか！ たかが宿題を忘れたくらいで……」

「ああ、そうだな。 そんな宿題を忘れた君たちにやり直すチャンスを一週間も与え、忘  
れたお前たちも『ちゃんとやります』とはつきり言いきってみせたよな？」

「「ひっ!!」」

「私はな、そんな約束を平気で破る“ウソつき”と忘れても許されると思っている“

「甘ったれ」が大っ嫌いなんだ」

「「は、はいいいいいい!!」」

「だが安心しろ、私はお前たちがそんな」曲がり切った最低な奴らであろうと」決して見捨てたりはしない」

「「それ以前に危ないのが何人も出てきてるんですけど!!」」

「安心しろ、ただの」峰頭突き」だ! 死にはしない」

「「何でもかんでも峰ってつけければ許される訳じゃないんですよ!!」」

「そんな曲がった奴らは私の愛の頭突きで更生させてやる! さあ、宿題を忘れた者は全員前に出ろ! 纏めて相手をしてやろう!!」

「「ギヤアアア!!」」

「せんせー! つの! つのまででてます!!」

「ものすごくいてえ〜!!」

「アブブブ……(気絶)」

「キヤアアアア! ○○君が泡吹いてます!!」

「……………別の場所を探そう（しましよう）」

わしら3人は子供たちの悲鳴が飛び交う寺子屋を背に、比那名居の言う別のあてにか  
けてそのまま離れていった。

子供たちよ……………せめて強く生きるのじゃ!!

男の娘・変態・少女移動中……………

「今後はどうする気なのじゃ？」

「それよりも秀吉君、さつきとても疲れ切っていましたけど大丈夫なんですか？」

「さつきの寺子屋から聞こえた悲鳴のせいで目が覚めてしまうた…… 逆にとても調子が良い気がするぞい」

寺子屋の中で命の危険までも感じ取ったのか、眠気なんてものは完全に吹っ飛んでしまい、妙に高揚した感覚すら感じてしまう。

寺子屋の門前から逃げるように立ち去ったワシらは比那名居のおごりで昼食をいただいておる。

わしは適当にざるそばを野菜天ぷらと一緒に食べておる。

「あと何件かあるけど…… 事情を説明したとして、それでまともに面倒を見てくれそうなの奴がいる所は……」

「命蓮寺の“聖白蓮”、永遠亭の“八意永琳”…… あとは夢殿大祀廟にいたると言われている“豊郷耳神子”と言ったところでしょうか」

永江の言う通りなら、この人里には頼れる程優しい者達が多いのかのう？

それならどうか事情を説明して、助けを求めると言うのもありかもしれないのじゃ。



……とは言うてもさすがに無関係の他人を巻き込んでしまうのも申し訳ない気がするのじゃが？

「ううむ……」

「木下さん、どうかしましたか？」

「いや、ただこつちにも事情があるとはいえ、無関係な他人を巻き添えにしてしまうというのも申し訳ない気がしての？」

「それでしたら気にする事はないと思いますよ？ 先ほどの寺子屋の先生も含めたこの

人達は外来人関係の保護を率先して引き受けてくれている人たちなので、よほど失礼なことをしたり悪人だったりしない限りはちゃんと外の世界に帰るまで面倒を見てくれます」

「少なくとも私達と一緒にいるよりは安全なのは間違いないわね。私達も大したことではないけど、一緒に説得して保護して貰った上でアンタに少しでもだけ路銀を渡すくらいのは出来るから、ここは素直に頼みに行ってみましょうよ？」

「木下さんも少しは誰かに頼ってみてもいいとは思いますが？ ……まあ、私達のように面倒ごと巻き込まれてしまうこともあるかもしれないかもしれませんが……」

「面倒ごとに巻き込んでるって言う自覚はあったのか……」

じゃがしかし、いくら当分のお金をいただいたとしてもこんな未知の世界で一人で生

きるなんてマネはできるはずも無いからのう。

それなら素直に誰かに助けを求めて今後の身の振り方を考えるというのもありなのかもしれんのじゃ。

「木下さんの事情を聴く限りではあのスキマババ……スキマ妖怪に目をつけられた可能性が高いみたいですし、ここは永遠亭の方から行ってみますか？」

「ああ…… だったら私はパス！ あそこのウサギとはひと悶着起こしてるから結構嫌われてるのよね」

「地上における総領娘様の評判は元からかなり悪い方ですよ？ たぶん天邪鬼の次くらいには不人気かと……」

「いったい比那名居は何をやらかしたのじゃ？」

「聞いてみたいとも思ったのじゃが、藪をつついて蛇を出す的な展開はごめんじやしのう……」

「と、とにかくその永遠亭というところに行ってみたいのじゃ！ いったいその永遠亭というのはどんなところなのじゃ？」

「ここは多少強引にでも話題を変えてみるのじゃ。比那名居の問題行動の話よりは盛り上がるじやろうし、行く先の情報はある程度知ってきたいというのもあからのう！ 「そうですね…… 先ほど話した寺子屋の教師の話は覚えていますか？」

「ちゃんと覚えておるぞい？ たしか度し難い変態な本性を隠して教師をしておる女性の話じゃったろ？」

「その教師に媚薬などの怪しいものを平気で売っている医者がいる診療所がこの永遠亭なのですか……」

「もうワシは突っ込まんぞい……」

何なのじゃ？ この幻想郷には変態しかおらんのか？

頼むからワシの元に少しでもいいから常識人を連れてきてくれ…… ワシがワシでなくなりそうで怖い……

「実はこの診療所は『迷いの竹林』と呼ばれている様々な要因から非常に迷いやすい竹林の中にあります……」

「それ、八雲殿やおぬしらに対する追手に絡まれるよりも危険度が高くないか？」

詳しく聞くと……

1・あまりにも単調すぎる風景

2・目印をつけられないほど異常なまでに成長が早い竹

3・地面が僅かながら斜めになっていて、そこに生えた竹による平衡感覚の異常

4・妖怪化して人間に襲い掛かってくる獣

……などの要因ゆえによほどの強運が無い限りは絶対に抜け出せない。

そんな天然の迷宮と化している竹林の中にその永遠亭と呼ばれている診療所があり、言葉通り命を懸けてでも行かなければならない限りは近づこうなどとは考えてはいけないところらしい。

「本当に近づきたく無くなってきたのじゃ……」

「ま、今回は大丈夫でしょ？ 最初は私が行くのはやめとこうかと思っただけど、よく考えてみたら私と衣玖の能力をうまく使えば、竹林内の様子くらいなら把握できるし、秀吉が永遠亭に到着した後で私らが余計なことをせずにさっさと帰った後で助けを求めれば、一人で出る手段のないアンタを理由もなく追い出すなんて無茶な真似はしないでしょう」

なんと滅茶苦茶な…… もしこれで話し合いに失敗したら最悪餓死という可能性も考えねばならないのか……

「ならさっそく永遠亭に向かうわよ！」

比那名居が大声をあげながら立ち上がるが……

『うるせえ!!』

「すみません！ すみません!!」

隣の席に座っていた客にとって迷惑だったようで、こちらが悪かったので何度も謝り

倒してなんとか許してもらったのじゃ……

こうしてわしは比那名居と永江に連れられて永遠亭に向かうことになったのじゃ。

はつきり言って、これまでに出会った者達が変人だらけであったがゆえに不安しかな

いのじゃが……

## 俺と地底の輝く監獄

「黒谷、ちよつと聞いていいか？」

「なんや？ 遠慮なく聞いてもええで？」

「ここ、本当に」あの「星熊の奴が経営している店なのか？」

黒谷達に案内されてついた星熊の店「スターライトベアー」……

ネオンの光で輝いている看板をぶら下げたその店に入って真っ先に出迎えたのは、スーツを着こなしたイケメン野郎の集団。

……中には鉄人並みに体格がいいおっさんも混じっていたが、不細工と言う訳でもなく、一言で言ったら「ダンディーなおじさま」的な印象を受ける。

そう、星熊が経営する店というのは「ホストクラブ」だったのだ。

「ちよつとキミ……」

やはりと言うべきか、未成年の入店には問題があるのか、出迎えていたホストの一人に呼び止められる。

「面接の希望かい？ だったらウチのスカウトマンから話を聞いているだろう？」

「俺みたいなガキでも働けんのかよこのクラブは!? つーかスカウトマンって誰だよ!？」

そんな話、聞いてねえよ！」

「なんだ違うのか…… 冷やかしなら出て行って……」

「そっちから勘違いしておいてどういう言い草だよコラ！ 星熊のやつからこの店で待つてるように言われただけで……」

「……え？ マジですか？」

「マジだよ」

さつきから偉そうな態度だったホストの顔が凄く青ざめている。

彼の先輩らしき別のホストがヤマメの元に確認に向かつていった。

「支配人の客人とは知らずに大変失礼なことを！ 申し訳ありません!!」

「あ、いや…… 特に気にしてないから頭をあげてくれるか？」

「その寛大なお言葉、ありがとうございます!! 黒谷お嬢様の元に案内しますのでどうぞこちらへ!!」

ホスト達に大慌てで奥に案内される。

その奥の扉には「VIPルーム」と書かれた扉があり、その扉の前には厳つい黒服の警備員のような男が二人……

「ようこそいらっしゃいました。どうぞ中へ」

黒服の男が扉を開けると、その先の世界は外の街の様子からは想像もつかないような

世界だった。

どう表現していいかは分からないが、目に着くのはまず内装の豪華さと人の多さだろう。

所々に金のような輝かしくありながらも落ち着きもあるバランスのとれた装飾が施された内装、老若・美醜問わずにホスト達によつてちやほやされて楽しむ女。

そんな金持ち女を相手にいやな顔をせず臨機応変に対応して見せるホスト達。

中央のステージのようなところで様々な音楽を奏でる音楽団員。

「こりやすげえな…… 夜の街の店つてこんなにもスゲエ所ばかりなのか？」

「さすがにここまで活気がある店はホスト業界ではここくらいだと思っけどね。取り敢えず私たちの席に案内するからついてきてよ。ちようどいろいろ飲み食いしながらお喋りしていたところだし」

子供同然の姿からは想像もつかないくらいに店に慣れているキスメ。

反応に困りながらもおとなしくついていくことにした雄二。

「おーい、坂本ー！ コッチだよー!!」

「黒谷お嬢様！ 危ないですから、シャンパンの瓶を振り回さないでくださいー！」

「前にその件で支配人から怒られていたでしょう！ 少しは自重なさってください!!」

「うわあ…… すでに出来上がってるね」



「しかもタチの悪い酔っ払いみたいになつてるし。どんな飲み方してんだよ」

「大した量飲んでないわよ。せいぜい2本くらい浴びるように飲んだだけなんだからあゝ」

ホストの連中が頭抱えて困り果てている。

さつきまで対応していたホストとは別の男がキレイに盛られたフルーツセットや銀色のラベルが張られた新しいシャンパンを5本ほど置いてそのまま下がっていった。

「俺の知らない間に何やつていたのかは知らねえけど、少しはおとなしくしとけよ。」

いくら支配人と知り合いだからって言って、あんまり迷惑をかけるとどうなるか分からねえぞ?」

「ぶ〜〜」

ブーたれながらもおとなしくしてくれたヤマメ。

友人の店とは言ってもそれなりの礼節はわきまえるべきである。

「いったいどんなメニュー……ブフォツ!」

坂本はあまりの値段の高さに思わず吹いてしまう。

最安値だと思われるシャンパンが一本1万（現代相場10万相当）などと表記されていれば驚くのも無理はない。

そのシャンパンを坂本が来る前に2本は飲まれて、ヤマメがもう一本持っている。

しかもさらに5本追加……

「軽く8万（現代相場80万相当）位は持つてきてるじゃねえか!? まさか星熊の奴、いい金づる見つけたとか思つてんじゃ……」

「オーナーはそんな姑息な事はしませんよ。こちらの飲食代はすべて黒谷お嬢様がお出しになるそうで……」

「おい、こつち来る前に金の使い道がないとか言つてなかつたか?」

前回の発言と矛盾する話を聞いた坂本は疑うようなジト目でヤマメを見る。

「なんか怪訝そうな顔をしてるけど、問題ないよ。ヤマメちゃんは少し前に起こつた事件を勇儀と一緒に解決した立役者の一人で、その時にもらえるはずだったお金を全部受け取つていないだけだから。」

だから『その礼金分を超えない限りは好きに飲み食いしても文句を言うな』つて古明地のお姉さんの方と勇儀から言われてるの〜

「それ自分でどんだけ使つてるのか把握できてんのか? いつか底を尽かせそうな勢いでいろんなもん頼みまくつてんだが!」

「少なくともその時のお金は人間だったらどんな贅沢をしても一生使いこなしきれないだけの金額だから……」

「マジかよ……」

聞いているだけで頭が痛くなってきた坂本。

とにかく話題を変えたくて別の話を振ろうとする。

「それにしたって8本はやり過ぎだろ？ 一体何をどうやったらこれだけの量の酒を注文するってことになるんだよ……」

「それはね〜？」

another story キスメサイド

坂本が門前で足止めを喰らっていた時の事だった。

「相変わらずすごいわね。このお店は。地上との不可侵条約が緩和されてもしばらくの間閑古鳥が鳴くくらいに人気が無かったのに」

「いまでも支配人たちには感謝していますよ。一部の地上の連中が温泉目当てに入り込んでくるようになってからトラブル続きでこの店ももうつぶされると思っていたのに……」

「助けを求められた支配人がこの店を経営するようになってから、信じられないほどの

活気を取り戻してくれたんですからね」

「そうなんだよねえ。あの博麗の巫女が地底に突っ込んでくる前のこの店ってデカいだけ取り柄みたいなゴミ屋敷みたいな感じだったのを勇儀が経営した途端にどんどんきれいになっていったんだから、纏める存在が違うだけでこうも変わるものなんだってつくづく思い知らされたよ」

「何言ってるんですか？ あなたたちもいろいろとやってくれたって聞いていますよ？ 新人の引き抜きからなにかから、ちよつとここでは言えないような事までやってくれたじゃないですか？」

『あ……うん。 それ、 やったのはパルスィの方。 私たちがやったのは裏方の方だったなんて言えないよ』

「ま、とにかく今日は久々に来てくれたんですから、遠慮しないでゆっくり楽しんでいってください」

そう言われて、キスメ達はVIPルームのなかでも最上級の客にしか回されない特別な席に案内された。

問題の会話はここからだ。

「なんか坂本が門前で足止め喰らってるけど…… とりあえずシャンパンからいっておこうかな？」

「はーい！ シャンパンお願いしまーす!!」

『おい、ここはどこが問題なんだよ?』

『話はここからだつてば?……』

「あ、でも後でパルスイの奴も来ると思うし…… 坂本の奴もただのシャンパン一本だけで後はお喋りして”はいお終い”だとか、地底の妖怪はケチ臭いとか思われそうだね?」

「そうかもしれないませんが…… だとしたら何本注文なさるおつもりですか?」

「そうだねえ?…… ここは潔く来る予定の人数分頼もうかな?」

「でしたら8本になっちゃいますよ!?!」

「アンタらの分もかい!? ま、いいや。 とりあえずシャンパン8本適当に見繕って持ってきてー!!」

another story キスmessage end

「……とりあえず分かった。 アンタらが俺がいた世界とは常識がまるで違うってことがな!!」

「なるほど、なかなか見かけない服を着ている方だと思いましたが、坂本様は外来人でしたか。 ならこの異常な景気の下さにも驚いたでしょう?」

「ああ、俺がいた世界で昔あった“バブル”って呼ばれてる超好景気時代の時の話そのまんまだわ」

確か、当時の政府や銀行が行った景気刺激策が原因で異常な経済の発展が起こった時代だった。

その波に乗れた資産家や投資家達の元には大量の金が流れ、その影響で大金持ちが現代では考えられないくらいに増えて行った時代だそうである。

最も、その金持ちの大半はバブル崩壊と呼ばれる時代の終わりとともに弾けてしまつたらしいそうだが……

「しかし、こんだけ人が集まるってなると大変だろうって思うぜ？」

確実に1000席はあるだろうこの大部屋はほぼ満席。そのうえでツーマンセルが基本となっているこの手の店ですべての客にホストがきちんと対応して見せているというのは見事と言う以外の言葉はないだろう。

「そうなんだよね。支配人もトラブルがあるたびに頭を抱えたりするんですよ。」

またその手の話か” って……」

「星熊の奴も苦労してんだなあ……」

「それでも完璧にやり遂げて見せるのが勇儀なんだけど。遅れてきた私を置いて先に

始めて、しかも盛り上がっているなんて妬ましい……」

勇儀をスタンガンで沈めて誘拐した女“水橋パルスィ”が急に会話に入ってきて席に座ってきた。

「あ、パルスィ！　パルスィお気に入りのシャンパンとデザート、取っておいてあるから早く座りなよ」

「ヤマメのそういう何気ない気遣いが妬ましい……　……ありがとう」

席に座ったパルスィの元にグラスが置かれ、すぐにホストの一人が入って来てはシャンパンをグラスに注ぎ始める。

「あ、パルスィお嬢様！」

「パルスィお嬢様だ!!」

「パルスィお嬢様！　サインしてください!!」

「パルスィお嬢様！　握手してください！」

「オレ……　パルスィお嬢様に手を握ってもらえたその日は恐れ多くて手を洗えなかったぜ……」

パルスィの存在に気が付いた周りのホスト達がパルスィの元に集まっている。

「(っ)か最後の奴、手はむしろ洗え！　汚いにもほどがあるわ!!」

「だれがお嬢様よ！　姫様と可愛がってくれていないあたりが妬ましい！」

「おおっ！ パルスィさんの妬ましいコール、キタア〜!!」  
「喜んでる!? ゲス共ね!」

パルスィの妬ましいコールに反応した周りのホスト達（接客中のホスト達はさすがに行きたい気持ちを抑えて接客に徹しています）がパルスィを姫のように担ぎ上げていく。

その対象となったパルスィはなぜこうなったのか全く自覚が無いまま困惑するばかりである。

「ま、パルスィには自覚が無いけれど、あの時の事件がきっかけでパルスィの気は本人の意思に反して急上昇しているからね。 条約の壁を越えた人気投票の際にはパルスィのランキングが29位と結構好成绩だったし、そんな慕われてる立場で嫉妬心を振り回されてもねえ」

第13回東方 project 人気投票の結果では水橋パルスィのランキングは185人中“29位”と言う好成绩を収めて見せた東方 project 内でも屈指の人気キャラである。

少なくとも、妬みまき散らしても全く説得力がなくなるくらいには順位がたかいのも事実である。

「はいはい、そこまでだよ。 さっさと待機室に戻って指名が入ってもいいように準備



してな」

そんな彼女の周りに集まってきたホスト達を星熊が止めに入ってきた。

別れを惜しんでいたホスト達だったが、これ以上は本当にパルスイにとつて迷惑になると分かっているために「仕方なく」待機室に戻っていった……

「星熊、お前いつ戻ってきたんだよ」

「ついさつきさ。パルスイはここにきてすぐにヤマメの元に行くって言っていたから、私は一度仕事着に着替えてからココに来たつて訳さ」

確かに、よく見てみたら星熊の服がオーナーホストが着るようなしつかりとしたスーツになっている。

星熊は高身長で、力強さからくる凛々しさもある為、一部の女子には相当受けるだろう。

などと言った事を雄二が考えている間に星熊が立ち上がった瞬間だった……

「ちよつ、落ち着いてください！ 一体どうなさつたんですか？」

「何よ何よ！ ちよつと可愛くて人気があるからつてえええええ!! そんな風に周りに見せつけて人気者は楽しいでしょうねえ？ ええ??」

少し下の階で怒鳴り散らしているのは酒瓶を振り回しているのは40代位の女性。その隣には頭から血を流しながら店のボーイたちに介抱されているホストの姿だ。

「ちよつ……なんかやばい雰囲気じゃねえか!？」

はつきり言つてあの怒鳴り散らしている女の劍幕に引き気味の坂本だが、その一方でヤメメ達はこの事態そのものに対しては何一つ動じてはいない。

むしろ人が一人もいなかったら欠伸をしながら普通に酒を飲んでいそうだとすら思えそうなほどに落ち着いている。

「大丈夫でしょ? この程度ならすぐに収まるって」

「なんでそんなことが言えるんだよ!？」

「だつて、勇儀がもう動いてるんだよ? ほかの店ならいざ知らず、よりにもよつてこの店で騒ぎを起こしたんだからさ?」

坂本が気が付いた時には既に騒ぎの中心に向かつている星熊の姿。

「お客様、本日はお越しいただきありがとうございます。」

暴れる女性に優しく話しかける星熊。

さつきまでヒス起こして暴れていたババアもいきなりの事にキョトンとした顔になつてしまつている。

「な、なによアンタ。 アンタも私にケチをつけようつてクチなの!？」

「よく、そういった事を言われてしまいました。 ですが、違います」

「だったら何なのよアンタ？」

「申し遅れました。 私（わたくし）当店の支配人をさせてもらっております。 星熊勇

儀と申します」

自己紹介をしながら名刺を差し出す星熊。

「お客様、恐れ入りますが、当店に限らずお店での暴力行為は他のお客様にとってご迷惑となりますのでどうかご遠慮願います」

昼の英雄の姿とはうって変わっておとなしい対応であることに驚いている坂本。

……だが、よく考えたらただの人間相手に鬼の拳なんて振るったら100%死ぬだろうという事実を身をもって思い知っている坂本は対応がおとなしい理由をなんとなく悟ってしまっていた。

「はっ！ その頭のツノ、アンタ鬼の妖怪でしょ？ だったら力づくで来てみなさいよ

！ その妖気、こけおどかしら!!」

「そういう訳にはまいりません。 当店において“お客様は神様”……ですから」

いい心構えではある…… だが、客からしてみれば、星熊のこの対応は調子に乗る口実でしかない。

実際にそのババア（ここから先、女性と呼べないくらいに酷いことをしだします）も

何を思っているのか別の酒瓶をもって星熊に近づいたとたん……

「だったらコレ、わたしのおごりよ？ 神様からのお恵み、たくさんと御飲みなさいな？」

流し込むように星熊の頭に大量の酒を浴びせ始める。

その下種な笑顔は星熊を見下すかのような気味の悪い顔だった。

「どうかしら？ 〃 神様〃 からお恵みは？ アハハハハ!!」

「あのババア！ もう我慢ならね……」

「坂本！ アンタは動くんじゃないよ!!」

「黒谷！ どこから出してんだよその糸!? ってそんな事はどうでもいい。あのバ

バア一遍ぶち殺してやる！ さっさと放せ……」

「まあ、見ていなよ。 勇儀の言った通り、ここでは〃お客様〃は神様なんだからさ」

ヤマメとキスメの言っていることの意味が分からずに困惑している坂本。

だが、この後で彼は星熊のオーナーとしての実力を思い知ることになる。

「ありがとうございます。 私はこの酒を浴びるように飲んでみたかったです……

おかげで夢が叶いました！」

「この女…… いい度胸してるじゃないのよ!!」

「キエエエ!!」

奇声をあげながら空になった酒瓶を振り回すババアだが、星熊もそれを見切つていて、顔色一つ変えずに簡単によけて見せる。

「キヤああああああ!!」

「でりや!!」

そんなことも分かつていないババアは何度も酒瓶で襲い掛かるが、星熊もそれをすべて読み切つて完璧によけて見せる。

「お客様、重ねて申し上げます。そろそろ、お引き取り願えませんでしょうか? もし、これ以上営業妨害を繰り返されますと……」

「営業妨害が何だつて言うのよ! ええ!!」

「はあく…… 仕方ないね」

星熊がため息をついた瞬間、彼女がまどつていた空気そのものが変わったのがはつきりと分かった。

黒谷達もそれが分かっているのか、先ほどまでの緩んだ態度が消し飛び、背筋が凍つた時の人間のようなひきつった笑顔になりながらもしつかりと見届けている。

「おう! ……いらで景気いいのをやりな!!」

星熊が号令をかけた瞬間、舞台上演奏していた音楽団員達が営業中の時とは全く違う躍動感に満ちている曲を流しだす！

まるで、アクションゲームのBGMのような…… いや、この曲にはその程度の表現ではすまされない荒々しさも刻まれている。

例えるなら…… ババアのキチ行動に内心キレていることを表現して見せている怒りの咆哮と呼ぶにふさわしいだろう。

秀吉だったらより詳しいことが分かるかもしれないが、音楽や演劇に詳しいわけではない坂本ではこれ以上の事は理解できなかった。

……が、この後の展開は容易に想像が着いてしまった。

「お客様がそこまでお望みなら…… 僭越ながらこの星熊、僭越ながらお相手いたしましょう。ただし、この星熊からは一切手出しは致しません。 何しろ……」

『お客様は神様』  
ですから……





その後の展開？ タダの酔っ払いババアが伝説級の鬼の相手になる訳が無い。

なんど襲い掛かっても避けられたり、捌かれたり、転ばされたり……

真後ろを取って氷砕く針みたいなやつに持ち替えて襲い掛かっていったのにも関わらず、簡単にぶん回された挙句に「危険だから此方の方は回収させていただきます」と言われながら肩の関節を外されていた。

ここまでやられたらもはや一種の公開処刑でしかない。

「このくそババア！」

「地底流の制裁、徹底して叩き込んでやる!!」

本来なら礼儀正しくあるべきホストですらが汚い口調で暴言を吐き、客もそれを気にすることなく、むしろ「いい気味よ」「ザマア!」「よくもケイ君に…… アンタ五体満足で帰れると思ってるじゃないわよ!!」なんて暴言が飛び交う始末……

気持ちそのものは分からなくもない坂本だったが、流石にこの空気のまま営業を再開

するのはまずいのではないかとも思い始める。

「お静かに！」

ババアへの暴言が飛び交う中、星熊がそれを止める。

客とホストの方はなぜ止めたのかが分からずに困惑している。

「ごらんとおり、こちらのお客様は本店での違反行為を繰り返すに飽き足らず、暴力行為だけが人まで出す騒ぎを起こしてしまい、お客様にまでご迷惑を重ねてしまいました。本来ならば地底の法に則った制裁を加えて妖怪の餌となり果てても何の文句も言えない立場でございます」

あまりの刑罰の重さに対してさすがに本気で絶句する坂本。

異端審問会を名乗るキチガイ集団でさえそこまで容赦のないことをする存在では無かったからだ。

改めて、この地底旧都が危険地帯だったのかが思い知らされる。

「ですが、それだけはご容赦願いませんでしょうか？」

「……え？ どうして？」

「こちらのお客様、このまま地底の法だけで処理してしまおうとすると、幻想郷全域における食糧事情を崩壊させてしまう危険がございます。一時の気の迷いを理由に幻想

郷を崩壊させる。それでは彼女にとつても本意ではないでしょうし、報いとするにはあまりにも酷ではないでしょうか？　そこで、お客様にご提案がございます」

「わ、私に……？」

「はい、地底の法に従つてしまえばあなたの死は免れません。ですが……当店の流儀に従つていただけるのであれば酒での失態を酒でそいでいただきたいのです」

星熊の言い分を要約するところである。

1. 別の形できちんと償つてくれているのならば、地底の治安維持の関係者も問題にし難いと言う事でもある。

2. 幻想郷において非常に希少な塩や海産物を取り扱う大問屋の旦那様の元に嫁がれている正妻ともなれば、動かせるだけの権力と金も相当な物である。ならば、金での謝罪位は容易であるはずだ。それで償える用の店とけが人への謝罪の為の代替え案がある事

4. お客様を犯罪者にしたくない。しかし、他のお客様にも変わらせずに楽しんでいただきたい。本当ならこれは、すべて、星熊のワガママでしかないので、最悪断られたならそれを受け入れようと思うと言う事。

「どうか皆さま、私の提案を聞き入れてはくださらないでしょうか!!」  
いきなりの客に向けて星熊からの土下座。

その見事な土下座にある種の感動すら覚えてしまう。

「提案っていったい何なのよ？」

「今回の一件だけがをしてしまったホストへの慰謝料と治療費の全面負担と地上にあるとお聞きしている診療所“永遠亭”への手配。本日における全てのお客様の代金を御馳走なさっては下さらないでしょうか？」

仮に受け入れたとしたら確実に数千万、もし客が調子に乗って客が遠慮なしにシャンパンなどを頼みまくれば確実に数億は軽く飛ぶほどの弁償代である。

それに治療費やらも合わせると……想像もしたくないために坂本は考えるのをやめる事にした。

「わ、分かったわ！ 本日のお代、全額こちらで持ちますし、彼へのお詫びもすべて出させてもらいます。皆さんがそれで許して下さいさるいうんでしたらの話ですが……」

「こちらのおばさまはこうおっしゃってくださいました！ 皆様はどうでしょうか？」  
頭を下げながらも暴れたババアをあくまで「客」として対応しようとする星熊。

その寛大でありながらもきちんとしてけじめを取らせる対応に客から笑顔と拍手が送られる。

坂本も星熊の対応のすごさに対して拍手を送ってしまったが……

「皆様、ありがとうございます！ 勇気ある決断をなされたこちらのお客様にも拍手を

お願いいたします!!」

星熊の言葉に驚いていたババアだが、そんな奴にも拍手が送られ、ババアの方もバツが悪そうな顔になってしまっている。

「では、引き続きお楽しみください」

ぺこりと頭をさげてその場から出て行った星熊。

暴れていたババアも荷物を抑えられ、酔い覚ましも兼ねて離れた別席に移動させられていった。

完全に落ち着いたら、支払いの請求とか慰謝料とか弁償などで大騒ぎになりそうである……

「しかし、星熊の奴もすげえな…… 本当に強い奴って〃暴力に頼る必要もない〃って事なんだろうな」

昔の自身の弱さを思い出した坂本は内心嫉妬に近い思いを抑えながら拳を握る。

「もし自分にあれだけの強さがあつたなら幼馴染の少女を守れただろう……」そう思わずにはいられないほどに……

「それは違うよ坂本」

そんな坂本の言葉を否定したのはヤマメだった。

「なんだかんだで勇儀も暴力を使うときは使うよ。さすがに強盗が相手だったら」客  
“じやないって理由で躊躇なく拳を叩き込んで地底流の666制裁の一つを加えるし”  
「そうなんだよねえ。坂本がやってくる数か月前にトチ狂った強盗がこのクラブに  
突っ込んできたんだけど、そいつへの制裁として地底666制裁の一つ“焼き土下座3  
0秒”を強引に実行させてムシヨに送り付けてるし」

“あのババア、金の事でごねたりしないだろうか？”さすがに心配になってきてし  
まった坂本だった。

その後は特に問題もなく話が進み、慣れないシャンパンに挑戦したり、キスメが一気  
飲みと称して持ってきたシャンパンの内の一本を一気飲み。

ヤマメがコギヤルのようなメイクを決めてから一本30万(300万相当)の酒を賭  
けて野球拳をやるなどとバカなことを雄二に吹っかけてきたり(雄二は顔を赤くして拒  
否)、パルスイの二元にやってきた新人と思えるシヨタホストをおもちやにして遊んでい  
たり……

滅茶苦茶に騒ぎまくった後、営業が終了したクラブの別室に案内された雄二は簡単な  
ベッドがある部屋とシャワールームを案内された。

……案内していた店長ホスト曰く、「幻想郷どころか地球上でもっとも安全安心な寝  
室」らしい。

ヤマメ達の悪乗りには振り回されて疲れ切っていた坂本はベッドに突っ伏して眠るところにした。

坂本雄二の地底生活はまだ始まったばかりである……

## ワシと竹林のムーンラビット

「なぜわしはベッドの上で眠らされておるのじゃ？」

秀吉は困惑していた。自分はついさつきまで比那名居と永江の二人と一緒にいたはずなのに、気が付いた時には保健室のベッドのようなところで眠らされていたのだ。

困惑しない方がおかしいだろう。

「あら、目が覚めたのかしら？」

目覚めたことに気が付いた女性が秀吉の元に近づいてくる。

「ああ、自己紹介がまだだったわね。私の名前は“八意永琳（やごころえいりん）”。

この診療所『永遠亭』で医者をやっているわ」

八意と名乗った女医。比那名居や永江とは全く違う大人の美しさを持つ整った顔

と銀髪が印象に残る。

赤と青の奇妙な服は少々奇抜だとは思うが……

「起きていきなりだけど、ちょっと目を確認させてもらおうわね」

目を覗くことで何が分かるのか…… おとなしく目を診てもらおう秀吉。

「問題ないわね。声は出せるかしら？ 一応もう一回なにか喋ってもらってもいいか



「しら〜」

「……どうしてこうなったのじゃ？」

「記憶の混濁…… 脳には異常は無いから落ち着けば記憶も戻ってくるでしょう」

頭の回転が鈍くなっている秀吉だが、この後の八意の言葉ははつきりと聞き逃さなかつた。

『まあ、最悪記憶が戻らなくても強制的に戻す薬を何種類か投与すればいいだけだし…… 服用法を間違えたら目玉が”ポーン”と飛ばされちゃうけど……』……と。

「ちよつと待つてほしいのじゃ。今、とんでもないことが聞こえた気がするのじゃが？」

「大丈夫よ。竹に体を打ち付けたから少し痛みもあるでしょうけど、この程度なら一日だけ休めば動けるようになるはずよ」

どうやら記憶を戻す薬とやらは使われずに済むようである……

表情こそ冷静を装っているが、内心震えあがっていた秀吉は心の奥底でホツ……と胸を撫でおろす。

「念の為、けがの治療の事もあるから数日は入院してもらおうわ。……って、そんなにお

びえないでも大丈夫よ。そんなにいう程の大げがじゃないから、八意印の特効薬は使

う必要はな……」

「全く、なんでわたしがお師匠様の薬を取ってこないといけないウサ…… 普段ならうどんなの仕事なのに……」

突然、兎耳をつけた少女が愚痴をこぼしながら入ってきた。

見た目は10歳くらいのようにも見えるが、どこかしたたかさを感じさせる赤い瞳をしている。

その瞬間に秀吉の洞察はある結論に行きつく。「この少女は信じてはいけない」と。

「うどんなげは私が軽くオシオキしている途中だから、今頼れるのはあなただけなのよ」

「臨死体験は軽いオシオキとは言わないと思うウサ……」

姫様とうどんなげ…… あ！ すべて思い出したのじゃ！

あれは迷いの竹林を比那名居と永江の二人の力で強引に突き進んでいった後の事じゃった。

another story

永遠亭を目指し、いくつもの罫を切り抜けてたどり着いた建物。

その門をたたこうと比那名居が近づこうとした時だった……

「患者様？ この永遠亭に何か御用でしょうか？」

いつの間にか比那名居の後ろで大型拳銃を突きつけている兎耳女子高生。

「あらあら、いつからこの永遠亭は暴力団の組事務所になったのかしら?」

「少なくとも、あなたのように神社を倒壊させた上に唯々調べ物をしに来ただけの普通の兎を攻撃してくるような問題児相手に警戒しない妖怪は存在しませんよ?」

どうもこの兎は比那名居の知り合いのようだ。

…が、比那名居の事をとて警戒しており、まともに話し合いなどは期待できなさそうであった。

「門前でうるさいわね! せっかくドクエジヨー〇ー3で合体ダー〇ドレア〇と身代わり用のはぐ〇メルが出来上がったところだったのに……」

門前で比那名居と兎耳の女子がもめていたところを聞きつけた少女が現れる。

腰よりも長く美しい黒髪。

手足の先まで隠しながらも月や桜、竹・紅葉・梅などの模様が金色で描かれ、純然たる和風の美を感じさせる服。

そんな純然たる和風の美女から発せられた第一声がまさかの「ゲームで楽しんでいたのを邪魔された」……

多少の異常には驚かなくなってきたはずの秀吉も思考が停止してしまう。

「珍しいですね。あのニートで引きこもりの姫様が表に出てくるなんて」

「うどんげ? あなたが私をどんな風に思っていたのかは分かったわ…… あら?」

うどんげと呼ばれたバニーガールともめていた比那名居の存在に気が付いた姫様。  
「あらあら、確かあなたはうどんげがお世話になったって言う……」

何を思ったのか、ぶつくさと言いながら屋敷の奥へと戻っていつてしまう姫様。

比那名居は歓迎されると思っており調子に乗りまくった事を言いたい放題だったが

……

「ひくなくない……」

静かになっていた永遠亭の奥からドタドタという荒々しい足音と共に、先ほどの姫様  
と思われる少女の唸るような声が響いてきた。

戻ってきた姫様の両手には謎の赤い石と金色に輝く謎の板切れ……

背中には白銀や黄金などの珠がいくつも装飾された木の枝のような何かまで背負っ  
ている。

「あの装飾のついた枝…… どこかで聞いた覚えがあるのじゃが……」

「フシヤアアア!!」

姫様が背負っている木の枝に関して考察している秀吉だが、答えを出している余裕は  
なかった。

過去に何があったかは分からないが、姫様は明らかに比那名居を見ただけで激怒しており、話し合いなどする気は微塵も感じられない。

「すぐに永琳に治させるから、全身の骨を砕いてやるわ!!」

「ち、ちよつと待ちなさいよ! とりあえず話を……」

「問答無用よ! ウチのうどんげを虐めてくれた分の返しをたつぷりとしてやるわ!」

新難題:『金閣寺の一枚天井』

姫様と呼ばれた少女が持っていた金の板が異様なまでに大きな天井板へと変形する

……

「何なんじゃ、あれは!?!」

「総領嬢様、ここはあなたにお任せします!!」

「冗談じゃないわよ! あんなの喰らったら……なんていうご褒美♡」

永江が秀吉を抱え、バカでかい金天井の処理を比那名居に押し付けて逃走しようとする。

が、しかし音速を超えた超スピードでたたきつけられた天井板の一撃から逃げ切るこ  
とが出来ず、秀吉の体をかすめてしまう。

その衝撃波が秀吉と永江の二人に襲い掛かる。

妖怪である永江は耐え抜いて見せたが、ただの人間……しかも霊力の欠片も持ち合わ

せていない秀吉では耐えきることなどできるはずもなく、竹に体を打ち付けた際にそのまま気絶。

秀吉が衝突した竹が完全にへし折れているあたり、どれほどの衝撃だったかが思い知らされる……

another story end

「それで！ あの後、いったいどうなったのじゃ!!」

「少し落ち着きなさい」

慌てふためく秀吉をなだめた八意は秀吉が気絶した後の事を簡単に語ってくれた。

「まずあの比那名居天子は姫様からの一枚天井を直撃させられて気絶していたわ。最も、あの子にとってはご褒美だったのか気持ち悪いくらいの笑顔だったけどね……」

八意の呆れ顔から察した秀吉は沈黙を貫くことに決めた。

「永江さんは妖怪だったのもあつてほぼ無傷だったわ。今頃はあの変態の介護でもしてるんじゃないかしら？」

耳を澄ましてみると隣の部屋から永江の楽しそうな声が聞こえた。

本当に無傷だったのだろう……

「あととはうどんげと姫様だけ…… てゐ、うどんげの様子はどうかしら?」

「いや…… 今のうどんげには近づきたくないんですけど…… 発狂寸前になっている位に発情中でこのままだと臭い粘液まみれのブ男や色を知らない幼女が相手でも躊躇なく襲い掛かりかねないウサ」

「なら問題無し……と」

「いろいろと問題だらけなのじゃ! いったいどんな薬を使ったのじゃ!」

「ちよつと軽い幻覚を見せる程度の試薬よ? まあ、副作用として薬の効果が切れる頃に陰部の痒みと極度の興奮が襲ってくる可能性があつてまだまだ完成には程遠いのだけれど……」

明らかに危険な薬品だった……

話を聞かずに銃で脅迫したうどんげだったが、臨死体験をさせられた上に危険すぎる薬の治験の被験体にさせられているというのはかわいそうになってきた……

「でも使用用途を考えたらこの副作用は残しても問題はなさそうね。元々この薬は八雲の狐から依頼された催眠薬的な物で、もう依頼はキャンセルされたから作る必要は無いらだけ……」

「だったらどうして完成させようと思つたウサ?」

「単なる知的好奇心よ？ 似たような効果の薬はいくつもあるけど、薬同士の相性の事もあるから薬の組み合わせも多様な物を用意しておかないと。それに違う薬を調合させることで全く異なる効果を持つ薬を作ることまでできるからその為の……」

一応医者としての自覚もあるのか、真剣な顔で語っている。

パソコンの画面のような物を覗きながらレポート用紙に記録と考察を書き上げていく。

「………本音はどうウサ？」

「発狂寸前なのに何もできずにもがいているうどんげを眺めていたかった。反省も後悔もしていないわ」

「このDS系変態女医は一遍死ねばいいと思うウサ。 ……あ、そういうばこのメス豚は死ななかつたウサ」

「本当に幻想郷には変態しかおらんのか？」

恍惚とした笑みで頬を赤らめている八意の発言にドン引きする秀吉とてゐる。

ゴミを見るような目で「とりあえず私は部下の様子を見てきます」と伝えたてゐは八意の返事を待たずに部屋を出て行く。



部屋に残っているのは普通の顔に戻っている八意とてみると同じく八意の事をゴミを見るような目で見ている秀吉の二人のみ……

部屋の空気はうかつな修羅場よりも重いものとなっていた。

「とにかく今日は様子見も兼ねて泊まっていきなさい……」

「全力でお断りするのじゃああああああああ!!」

全身に筋肉痛のような痛みが走るが、何をしてかす気なのが分からない変態女医から逃げる為に外を目指す秀吉。

「ちよっ…… 無茶したらダメよ! あなたは気絶して覚えていないのかもしれないけれど、姫様と比那名居天子の戦いの余波の影響で目覚めさせられた靈力が暴走して全身が悲鳴を上げているよ! そんな体で無茶したらどうなる事か……」

一応医者として止めに入っている八意だが、先ほどの会話の後で不安にならない方がおかしいだろう。

彼女の言葉を無視してどうにか永遠亭から出ようとした秀吉。

部屋から出るためのふすままであと数歩と言うところだった……

「永琳!! 私に飲ませた水に何か仕込んだでしょ!!」

秀吉が気絶する前に比那名居と戦っていた姫様が顔を真っ赤にしながら部屋の中に

突撃してきた。

とは言っても、門前で出てきた時とは打って変わって内股でプルプルと小鹿のように足を震わせながら入ってきたが……

「ハイ♡ 先ほどうどんげが飲んだ薬と同じ物と利尿ぎ…… いギョツツ!!」

セリフがまともだったら見惚れそうなほどの屈託のない純粋な笑顔で答えた永琳の顔面に拳を叩きこむお姫様。

空中で何十回も回転を繰り返した末に壁に叩き付けられて気絶した永琳……

「全く…… こんな変態でもいい所が沢山あるから一発ぶん殴る位で許しているけど、そうじゃなかったら対妹紅専用につけていた不死者対策用のトラップ満載の封印部屋にぶち込んでやるところよ」

「不死者対策とはいったい……」

「あら、アンタは確か比那名居と一緒にいた子よね？ とりあえずついてきなさい」

秀吉の存在に気が付いた姫様はとりあえず強引に抱きかかえた上で、隣の部屋にある布団へと運んでいく。

同じ部屋の中だと復活した永琳の変態トークが始まってしまい、ゆっくりと話が出来なくなるからである。

全身の筋肉痛で動けずにいる秀吉を布団に寝かしつけた姫様はしばらく部屋から出

て行つた。

隣の部屋で何かが叩きつけられる音が響く。恐らく永琳が目を覚ましてまた変な事を言つたのだらう……

それから数分後に先ほどとは打つて変わつてカリスマとしての姿を取り戻した姫様が戻つてきた。

「まずは自己紹介させてもらうわね。私の名前は『蓬莱山輝夜（ほうらいざんかぐや）』。この永遠亭の主で」

「元・月のお姫様……」

「永琳、あなたは下がつていなさい」

すでに復活していた永琳の服の襟をつかんで外へと投げ飛ばす輝夜。

先ほどから「姫様」と呼ばれている少女の行動とは思えない荒々しく、かつ豪快な力業に秀吉は度肝を抜かれた。

「わ、わしの名前は木下秀吉じゃ。初対面の者にはよく間違われるのじゃが、こう見えてもわしはおと……」

「男の子だつて言いたいんでしょ？　こう見えても姫やつている時間は長いんだから、ちよつと女くさい雰囲気がある程度で性別そのものを間違えるわけないでしょ？」

「……つつ!! わ、わしを一目で男だと分かってくれたのは主様だけじゃ!」

「ああつ……もう! うれしいのは分かったから抱き着くんじやないわよ! それと涙と鼻水吹きなさいよ! 汚いじゃないのよ!!」

幻想郷どころか外の世界でも性別を間違えられ続けてきた秀吉にとってはあまりにもうれしい事だったことも相まって輝夜に泣きつく秀吉。

そんな秀吉を強引に引きはがした輝夜は永琳が簡単に入ってこれないようにふすまを閉じて何か呪文のような物を唱える。

「ふう…… とりあえずこの部屋には私の永遠の術を込めたからいくら永琳でも私の許可なしに入っては来れないわ」

「永遠の術?」

「まあ、全部説明されても理解はできないでしょうから簡単に説明すると、『締め出し屋撃退用引きこもり魔法』を発動させて外からこの部屋に入ってこれないようにしておいたわ」

要約すると、『外からの干渉を無効化する術を発動させた』と、言う事である。

実際に外ではどうにかしてふすまを開けようと必死になっている永琳の声が聞こえるが、ふすまはガタガタと音を立てるだけで一向に開く様子が無い。

「さつきから私の部下が滅茶苦茶ばかりでごめんなさい。一応あんな変態でも医者だ

から治療はすっかりとやってくれているでしょう。今夜はこの部屋で泊まっていきなさい」

秀吉を寝かせた輝夜は一度部屋を出て食事を用意する。うどんげが作り置きしていたニンジン炒めをおかずとした普通の野菜炒めである。

「作り置きしていた野菜炒めしかないけど、食わないよりはいいでしょ」

「いやいやいや！ 突然押しかけてきたというのに、わざわざこのような食事まで用意してくれるとは思わなかったぞい！ ありがたく頂戴しますのじゃ」

「ならよかったわ。それになぜ靈力の靈の字も持ち合わせていなかったあなたがこの幻想郷に流されてきたのか聞きたかったし」

輝夜との話を続けられるように大急ぎで炒め物を食べきる秀吉。

「それで、秀吉君はなぜ幻想郷に？」

「学校の屋上で謎の爆発音が聞こえたので友人と共に屋上に向かったのじゃが、そこにいた美少女から話を聞こうとしたら、気味の悪い空間の裂け目へと落とされたのじゃ。

その落とされた先がこの幻想郷の上にある天界と呼ばれる場所だったのじゃ」

「ええ…… それでなんで幻想郷にやってくることになるのよ？」

「本当なら天界にいる比那名居のお父上が博麗神社と呼ばれているところまで送り届けてくれることになっていたのじゃが、その父親と喧嘩をってしまった比那名居が……」

「なるほど……　そこであの比那名居が竜宮の使いと一緒にあってあなたを人質に取って幻想郷に逃げてきたって訳ね。　あなたも災難だったわね」

頭を抱えながらため息を吐く輝夜。

「全くなのじや。　しかし坂本とムツツリーニも大丈夫なのかすこしだけ心配になってきたのじや」

「え？　あなた、お友達は一緒じゃないの？」

「うむ、同じ裂け目に一緒になって落ちたはずなのじやが……」

「それは不味いわね……　落ちた場所が人里とかあの人形使いの家とかだったら比較的安全なんだけど」

「人形使いの家とやらは知らぬが、少なくとも人里では坂本とムツツリーニの二人には会えなかったのじや」

「そう……」

秀吉の言葉に何を思ったのかいきなり部屋に仕込んでいた術を解除する輝夜。

「永琳」

「お呼びでしようか？」

何事もなかったように呼び掛けに応える永琳。

先ほどまでの変態っぷりは完全に消え失せ、姫に仕える従者としての姿になってい

る。

「先程までの愚行はすべて許すわ。今すぐにうどんげを解放して八雲紫対策を練りな  
ゃら」

「はっ、すでにうどんげは解放してあります。ですが、あの八雲紫が相手だとうどんげ  
の解放だけでは出し抜かれてしまう可能性があります」

「それで？」

「永遠亭の医務を完全休業して、永夜異変の時に使った結界を使って完全に封鎖してし  
まいたいのですが……」

「それはダメよ」

永琳の提案を一蹴する輝夜。

「な……なぜですか！」

「貴女…… これまでに人里でどれだけの薬と恩を売ってきたのかしら？」

「そ……それは！」

「私達みたいな“妖怪社会”・“人間社会”どこの勢力にも完全に属していない私達が  
一番やってはいけない事は何かくらい永琳ならとつくに分かっているでしょう？」

「……え？」

輝夜の言葉に秀吉は疑問を覚えた。

今輝夜が放った言葉はまるで“永遠亭が人間側についている勢力ではない”ともとれるのだ。

「秀吉君はよくわかっていないようだから説明してあげないといけないわね」

話についてこれなくなってきた秀吉に今の永遠亭の立場を簡単に説明することにした輝夜。

1. 永遠亭はかつて幻想郷内にありながらも存在を隠匿する事で誰にも認知されることなく隠れ潜んでいたが、永夜異変と呼ばれる異変を起こすきっかけとなった事件がきっかけで、異変の解決後に診療所として開放した事。

2. 存在を認知されてしまった以上、何かしらの活動をすることで不要な敵を作ることと避けねばならず、その一環として幻想郷内で薬の移動販売や診療などを行っている事。

3. その関係上で幻想郷に対して友好的な存在として認知され、評判がさらなる評判を呼んだ結果、今や幻想郷にはなくてはならない医療機関として名をあげてしまっている事。

「う……む？ それで……結局何が問題なのじゃ？」

「はあ〜っ……いい加減に察しなさいよ……私達みたいなまじ名前が売れているにも関わらずにどの勢力にも属さずにいる“部外者”にとっては八雲のような幻想郷



の賢者を相手に喧嘩を売るなんて言った“勢力図上の孤立”が致命的だつて言つてるの」

ここまで説明されてようやく理解する秀吉。

社会貢献ならいざ知らず、外来人一人の為に幻想郷のトップを相手にいたずらに喧嘩を売ろうものならあらゆる勢力が手のひらを返して永遠亭を危険視する可能性があるのだ。

少なくとも、永遠亭の信用と看板は“その程度”の価値しかないのである。

「それだとわしを庇い立てしようものなら……」

「それでもないわ。少なくとも“交渉のやりよう”ならいくらでもあるわ」

そういった輝夜が渡したのは謎のうさみバンドと女子高生が着るようなブレザー服である。

「え？……ちよつと待つのはじゃ！」

「待たないわよ。永琳、比那名居のバカの治療はもう大丈夫なのよね？」

「ええ、天人ただけあつて無駄に頑丈なうえに治療能力も極端に高かったですから、朝にはケロツツしていると思えますよ？」

「午前中には追い出しなさい。文句を言うようなら永琳が“本気”だしていいから。

午後には八雲のガキ……いなければ腰巾着の九尾でもいいわ。交渉に向かうわよ」

秀吉の言う事に聞く耳を持たずにいる輝夜は永琳に命じ、副作用のない範疇で効き目の高い疲労回復薬などの数種類の薬を秀吉に服用させる。

完全に疲れ切っていた秀吉は服用させられた薬の影響もあり、布団の中ですぐに眠ってしまった。

### 3日目く明久編

## バカと月の訓練計画

「吉井明久とサグメはいるかしら?」

客としてやってきたのは依姫である。

とつきの対応に清蘭と鈴胡の二人が出る事にしたようだ。

「ふ、二人ならまだ寝ていますが・・・」

「そう…… なら私は出直そうかしら? 別に今後の吉井君の事を考えて訓練でも施し

てあげようかと思っただけだし」

そう言っただけで依姫が取り出したのは謎のマシンガンである。一体何の訓練を始めよ

うと言うのだろうか……

「そ、そうですね…… もしよければ私からサグメ様にお伝えしておきましょうか?」

「あら、いいのかしら?」

「そうですよ! 吉井のアホには一番必要なものだと思います! じゃなかったら、サ

グメ様がダメになっちゃう……」

「なんか小声で聞こえたような気がするけど……」

「き、気のせいですよ！」

「そうですね！ 依姫様がお越しになつていたと言う事はしつかりとお伝えしますからご安心ください!!」

「……?? と、とりあえずちゃんと伝えてね？」

二人の慌てながらの対応に依姫は疑問を感じたが、そのままサグメ邸から出て行つた。

「…………ふう〜」

どうにか特に問題が起こる事も無く出て行つてくれたことに安堵する清蘭と鈴瑚。

「よかつた…… 依姫様にあんなサグメ様は見せられないよ……」

「監視カメラ、依姫様が調べまわっている様子無し。後はどうにかしてサグメ様を起こすだけね」

清蘭と鈴瑚の二人がとつきに対応した理由。

それはサグメと明久のせいでもある。

「あ、開けるよ?」

「う、うん」

サグメの部屋の前に到着した二人は息を飲みながら扉を開ける。

「…………すうすう」

部屋にいるのはクイーンサイズの大型ベッドの上でパジャマ姿になって眠っているサグメ。

そして……

完全に抱き枕にされて苦しんでいる吉井明久の姿であった。

なぜこうなっているのか？ それは明久が清蘭の着替えを除いた罰として弾幕で気絶させられた後の事である……

『今日は吉井は私の部屋でやすませる』

そう言つて明久を抱きしめたまま放さないサグメ。

「え？ ……でもサグメ様？ 吉井君にはなぜか穢れがほとんどないですけど、一応地上の人間なんですから、用心の為に吉井君の面倒は私か清蘭が……」

『鈴瑚…… あなたは凶暴な野獣と化した清蘭に吉井君の面倒をみれるとでも？』

サグメが目を向けた先には杵を持って素振りを繰り返している清蘭。

その目は血走っているかのようによく、彼女を一人にして明久の面倒をみさせようとしたならば、事故を装つて殺されても不思議ではなかった。

「……はい、サグメ様以外に面倒をみれる方がいませんね」

苦笑いで返す鈴瑚。

パートナーであるはずの彼女でも今の清蘭は止められないようだ……

『それに私くらいじゃなければあのスキマ妖怪には対抗できない。 鈴瑚には悪いけど、今日は清蘭の事をお願い』

そう言つてサグメが明久の事をお姫様抱つこで部屋の中に入る。

その後で明久に着せた服になぜか涎掛けとおしやぶりのようなものまでついていたことに疑問を感じながらも追及したら殺されそうだった鈴瑚が何も知らないふりをして部屋を出たのが最後だったはずである。

「ねえ？　なんで吉井の服に……」

「清蘭……　何も言わないであげよう……　吉井君は何も知らない方が幸せなんだ

……」

一方、吉井明久と稀神サグメの二人は夢の世界で大変な事になっていた。

「ディア・マイ・ドウタアアアアーツツ!!」

「イヤアアアア!! さつきからドレミーさんがトチ狂ってるせいで大変なことになってるんですけど!!」

『ドレミー、お願いだから吉井君に手を出さないで!!』

「ディア・マイ・ドウタアアアアーツツ!!」

全く言葉が通じなくなっているドレミー。

どうやらその攻撃対象の全てが明久に向けられているようだが……

『いい加減にして……いくら大切な友達のだレミーでも吉井君に手出しはさせない』

明久とドレミーの間に割って入ったサグメはすかさずドレミーの攻撃を捌いてみせる。

その後ドレミーの足を蹴って体制を崩し、彼女の服の襟をつかみながら振り回す。

最後に腕を極めて動きを封じて見せた。

どう考えてもこの瞬間にサグメが勝った……普通ならそうとしか思わないだろう。



だが、ドレミーは発狂していることで暴走している力をフルに發揮して強引な力業でサグメの拘束を振り払ってしまおう。

『吉井君、遠慮はいらない。私に合わせてドレミーの後頭部に蹴りを入れて』

「いやいやいや!! それ友達にしている事じゃないよね?」

明久がツツコミを入れてる間に発狂ドレミーはスペルカード、超特急「ドリームエクスプレス」を發動。

超特急電車のような幅広く素早い弾幕が明久の元に襲い掛かってくる。

「イヤアアアア!! このままじゃ本当に死んじゃうよ!!」

「コロス!!」

弾幕ごっこ経験者ならば幅広い弾幕に圧倒されることなく、簡単に回避してしまうだろう。

だが、吉井明久は試験召還戦争の訓練はしていても弾幕ごっこの経験は一切ない。

『吉井君、危ない!!』

サグメもすぐに明久を助けようとするが間に合わない。

普通ならこの幅広い弾幕を防ぐ事も躲すこともままならないまま轢かれて終わるだろう。

「ええいー！」

とつさに両手を前に出して弾幕に触れる明久。

その瞬間、ドレミーが発動していたはずのスペルカードは強制的にかき消され、スペルカードの発動も強制的に止められてしまった。

「そうか、吉井明久。　そこまでして私の可愛い可愛いサグメちゃんを寝取りたいのね……　ダケドワタシノイトシイサグメちゃんハワタサナイ。　オマエヲコロシテサグメチャンネルノジュンアイヲハグクムノハコノワタシヨ」

「どう見てもドレミーさんの目が死んでるんですけど!?　なんで包丁なんて持ち出してるの!!」

明久とサグメはそもそもなぜドレミーがそこまでトチ狂っているのかが分からないのである。

会話も成立しないので話し合いも出来ず、サグメと共に力づくで止めるしかなくなっているのだ。

『そんなものを持ち出すなら、実力行使……』

包丁を片手に特攻してきたドレミーを前にサグメが装備したのは最初に出会った時に吉井を拘束した手錠である。

その手錠をメリケンサックのようにはめて拳を構える。

「ディア・マイ・ドウタアアアアアアーツツ!!」

『ふっ!!』

明久を狙って刺そうとした包丁が誤ってサグメの元に向かってしまう。

それすら想定していたとでも言うのか、サグメはその振りかぶられた包丁を的確に殴り飛ばす。

それを何度も繰り返し、その勢いに乗せて拳を何度もドレミーの腹に叩き込む。

「ウグツ!!」

苦悶の表情を浮かべながらも耐えきるドレミー。

しかし、サグメはその隙にスペルカードを構えていた。

玉府「神々の光輝く弾冠（かみがみのひかりかがやくだんかん）」

明久を守るように抱きかかえるのと同時に発動させたスペルカード。

膨大な量の珠が放たれ、そこからさらに逃げ場を奪う様に弾幕を張り続ける。

「ディア・マイ・ドウタアアアアアアーツツ!!」

結局、発狂したドレミーが止まった（気絶）した間にその身に受けた弾の数は108発。

しかもこのスペルカードの発動時間中に止まることは無く、もう一つのスペルカード「白翼の白鷺」を使つてようやく止まったのである。

「で、サグメさん……どうやって起きるの？ さすがにそろそろ夢の世界から起きないと鈴瑚さんが心配するんじゃない？」

『どうやるものにも、夢の世界をつかさどるドレミーがこの調子じゃ出るに出不れない。念のために鈴瑚には10時になつても起きなかつたら起こしに来るように伝えてあるけど……』

サグメの反応から察する限りでは期待薄なのだろう。

ドレミーのせいで夢の中なのに疲れ切つてしまった明久はサグメと共に適当な部屋にあつたソファに座りながらジュースを飲むことにした。

「つて言うか、現実じゃないならジュースなんて飲んで意味あるの？」

『ドレミーが言つていたけど、夢の中で休息をとつているときは「今、心で抱えている問題を忘れて休みたいと思つている時間なの。だから思いつめて間違つた方向に行くことが無いように現状を見つめなおしなさい」とか……』

なんで夢を介した相談事にはこんなにも丁寧に教えてくれるのに、エッチな事や明久がサグメと一緒にいるときにはブチギレるのが全く分からずに考え込んでいると

……

「お待たせしました。カルボナーラとチキンドリア、エビフライにコンソメスープ。シーザードレッシング入り海鮮サラダ、デザートに焼きプリンとフルーツ盛り合わせを二人前分お持ちしましたー！」

いつの間にかサグメが頼んでいたのだろう。

謎の玉兎が持ってきた膨大な量の食事をサグメが受け取っていった。

「サグメさん、その大量の食べ物は一休……」

明久の知る限り、サグメは大喰いではなかったはずである。先日の食事量から考えたら一般女子の平均摂取量より少しだけ少ない程度のはずである。

それなのに明らかに一般女子どころか男子の摂取量を超える量を注文している。

夢の世界とは言え、これだけの食事を食べきれるとは思えない。

そのはずなのに、なぜかサグメは何か追われるように大急ぎで食べているようだ。

「さ、サグメさん？　なんでそんなに注文して……」

『あ、あれ？』

どうやらサグメも無自覚だったようである。

『夢占いだと、夢の世界でがつがつと急いで食事を食べる夢を見るのは「体力や気力を消耗している」時らしい。吉井君、教えてくれてありがとう』

そう言つてサグメは食べきれない分を捨ててしまった。

明久としては発狂しそうなほどもつたいない気持ちだったが、夢の世界の食べ物を現実を持ち込むことはできない事もあつて残したまま放置よりはいいと思つて諦める事に……

「あれだけのご飯…… もつたいなかったなあ……」

『これは夢よ…… これは夢……』

無駄に頼んでしまった食事の事に対しての後悔を引き摺っていると急にサグメの姿が消えてしまう。

それから遅れて10秒で急に明久の視界がぼやけてきた。

「サグメ様、いい加減起きてくださいよ」

「吉井、いい加減起きないと、その汚い口におしゃぶりでも啜えさせるわよ」

明久が目を覚ます。その目の前にあっただのは……

「やだ、まだ寝る。あと22時間経ったら起こして」

抱き着いているサグメの胸だった。

清らかな乙女特有の優しい香りが明久の鼻をくすぐり、急に眼が覚めるが……

「ぷっ！　なんでサグメさんがベッドに……　って、すごい力強い!!　サグメさん、お願

いだから離して下さ……」

「……いや。抱き心地がいいからもうちよつとだけだつこさせて」

余程起きたくないのか、より力強く明久の頭を抱きしめるサグメ。

普通の健全な男子ならこの状況だと『どんなご褒美だよ!!』とか、『リア充爆死しろ』的な事を思い浮かべてもおかしくはないだろう。

だがこの時、吉井明久と言う男の子は……

(ギャアアア!! 頭蓋骨が! 頭蓋骨が割れそうなほど痛い痛い!! あ、でもサグメさんが抱きしめてくれるから甘い香りと美波よりは出てる胸の柔らかい感触が……) それでも痛い痛い!! このままじゃ死んじゃうよおお!!)

サグメの女神としての強すぎる力のせいと死の境を彷徨い始めていた。

そんな中でも女子の胸の感触を味わえる辺り、意外と余裕もありそうだが……

「そんなこと言わないで起きて下さい!! 先ほど、依姫様がいらっしやりましたよ。なんでも吉井君に話があるとかで……」

『無視でいい。それよりも朝ごはん食べたい』

「いやいやいや!! 吉井君の今後の事を考える為の話らしいんで、ちゃんと行ってあげてください!! それなら朝ごはんくらいは用意します!!」

鈴瑚に言われて渋々と言った顔で『午後には依姫の所に行く』と伝えて』と鈴瑚にコ



メントを残してそのまま起きるサグメ。

夢占いの通り疲れているんだらうか？

その足取りはとても重かった。

午後になって明久達は依姫が待つと言っていた場所に向かったのだが……

「よし、これから吉井君の為に私が組んだ訓練を開始するわよ」

マシンガンを片手にいきなりの訓練開始宣言をする依姫。 明久達は状況を把握できずに困惑する。

「あの…… 依姫さん、どうしてもやらなきゃダメですか？」

「敵前逃亡は許さないわ！ 上司の命令は絶対よ!!」

「上司って…… 朝起きてなかったから腹いせとでも言わんばかりに思いつきりぶん殴られそうな気がするんだけど……」

「……………」

「分かりましたよ。 よろこんでお受けいたします」

不機嫌な顔で無言を貫く依姫相手に明久が折れた。

「いい子ね。 まずは私と一戦交えてもらおうかしら」

「急に体調が悪くなったので訓練は後日と言う事で……」

敵前逃亡は許さない。 有言実行とでも言わんばかりに依姫が逃げ出そうとした明久を一瞬で捕まえてしまった。

「い、いやだ！ 刀で切り殺されたり炎で焼き殺されたくなんて無いんだ!!」

「安心しなさい、ちゃんと手加減するから絶対に死ぬ事はないわ。私の能力である神卸しのスキルは使うつもりは無いし、私の身体能力も地上の人間の範疇にとどめておくから」

「本当ですか？」

一応の手加減をしてくれると言う事で安心してゐる明久。

最も、依姫がどれだけ手加減してもオリンピックの金メダルを大量獲得できる人間並みの力が出てしまうので明久にとっては充分強敵なのだが……

「ただし、戦力の調整も兼ねてこのマシンガンを装備……」

「体調が悪いので訓練は後日と言う事で!!」

「鈴瑚、吉井君を捕まえたらお昼に好きなだけ団子を贈呈することをここに誓うわ」

「捕まえました!!」

「モガ……モガモガ……!!」

猿ぐつわを掛けられながら捕まえられた明久。その時間、依姫の誓いから0.4秒。その時に明久は鈴瑚から200メートルほど離れており、やはり彼女も妖怪であると言う事実を認識させられてしまう。

その目には涙を溜めており、もがき続ける姿はまさしく拷問にかけられる直前の捕虜のようだ。

「つーかズルいでしょ、マシンガンとか!! しかも僕は素手なんでしょ? 十分反則だつて!!」

「安心しなさい、このマシンガンの銃弾は靈力でできているから絶対に痛い思いはしても死ぬ事はないわ。キレた神様による理不尽に比べたら充分手加減しているのだからありがたく思いなさい!!」

「あーそうですか! ありがとうございます、こん畜生!!」

こうして月の都警備隊長、綿月依姫による直々の訓練が行われることになった。

「やつぱりいやだああああああああああああ!!」

やはりと言うべきか……マシンガン相手に突っ込めるはずもなく明久は近くにあった岩場に隠れてしまった。

そこに弾を乱射し続ける依姫と言う光景はもはや一方的ないじめでしかない。

「だけどサグメ様? あんな滅茶苦茶で吉井君の何を測れるつて言うんですか?」

「別に吉井なんてどうでもいいけど、壊れたらさすがに捨てるのメンドクサイです……  
お願いですサグメ様、今クビになったら実家からも勘当されそうなんです……」

『多分、無駄に終わる。前に玉兔新兵隊の初教導で「開かない扉を開けろ」って宿題を出してその翌日に新兵達になんて答えたと思う?』

「私は受けた事なくて分からね…… もう明久様をぞんざいに扱ったりしませんから話しながら解任書を書き上げるのをやめてください! ほんとに悪かったですから!!」

『「開けられないなら力づく壊せ」…… 天然にしたってこれは酷い』

「よくそれで戦技教導官を務められますね。わたし受けなくてよかった…… って、本当にお願いします! ここまでやめさせられたらもう帰る場所がないんです!! 書状のハンコを押さないでください……」

『あ、吉井君が別の岩場に隠れた。依姫は気が付いている様子が無いから、たぶん反撃に移ると思う』

書き上げた書状を捨てながら解説するサグメ。

捨てられた未完成の書状を拾って破りながら見学に戻る清蘭。

「うおおおおおおお!!」

咆哮しながら依姫に突撃をかけた明久。

顔を殴るのにはどうしても抵抗があるのか、腹に狙いをつけて右拳で殴り掛かる。

「もし、奇襲をかける気なら可能な限り気配を殺しなさい。いくら奇襲をかける事が出来ても無手の基本を心得ている人間が相手なら簡単に捌かれる」

スウェイバックで後ろに下がるのと同時に明久に銃口を向ける依姫。

躊躇なく弾切れになるまで銃を乱射し続けた……

とっさに顔を庇おうと左手を自身の眼前にだしてしまふ明久。もしこの銃の弾が実弾だったなら左手を貫通する為、即死は避けられなかっただろう。

……靈力弾が左手に触れたとたん、弾が砕け散った。  
一発の例外もなく、左手に触れたすべての靈力弾が粉々に砕け散って消えたのである。

「な…… なにこれ？」

「八雲紫の言っていた能力の意味ってこういう事だったのね。まさか本当に、異能力が消せるなんて」

先ほどの靈力弾の全てを防ぎ切った明久が一番驚いていたのだが、そんな明久の事を無視して考察を続けている依姫。

何を思ったのか、先ほどまで使っていたマシンガンを清蘭に預けて何かの魔法陣のよ  
うな物を書き始める。

「吉井君、動かないでね。と、言うより動いたら死ぬわよ」

そう言った依姫が日本刀を一本、地面に差し込んだ。

その瞬間、刃の檻が明久の周りに飛び出す。

「うかつに動けば、触れた刃によつて切り刻まれる」と、言う事なのだろう。

『女神を閉じ込める祇園様の力』、本当なら人間相手に使う必要なんてないんだけど

……」

「なんでそんな危険な力で動けないようにするの…… って、うおおおおおおお

!! 斬れた! たまたま二の腕に刃が触れたけど、うつすらと血が出てきたよ!!」

あまりの切れ味の良さに動けないながらもツツコミを入れ続ける明久。

「その祇園様の力で生み出した刃の檻。 吉井君、その刃に触れてみなさい」

「いやだ!! 絶対に指の4・5本は切り落とされるに決まってるって!!」

「大丈夫。 もし私の見立てた通りなら吉井君がこの刃に触れても怪我なんてしないだ

ろう。 むしろその刃の檻から脱出して私に詰め寄る位造作もないはず……」

「ほんとに斬れたりしない?」

「大丈夫よ。 私があなたを裏切った事なんてあつたかしら? 少しは私を信じなさい」

い

「そんな事を言っておきながら躊躇なく僕をだまして使い捨てにしようとする友人を一人だけ知っているんだけど……」

「それって本当に友達なの?……」



明久の言うその友達とは言うまでもない、幻想郷の地底でショッピングを楽しんでいたタテガミライオンの風貌の親友である。

そんな友人に不幸が舞い降りて来てくれるように祈りながら、しぶしぶと言った顔でゆつくりとその手で刃に触れる。

「やはり……こうなつたわね」

結論から言うと、明久の手が「触れた刃」は一瞬で粉々に砕け散って消えた。

とは言つても、「触れていない刃」の全てが明久にめがけて襲い掛かろうとしてきた為、あくまで「触れた」異能の力でないと明久の能力は発揮されないようである。

「やっぱり騙されたよ!!」

「吉井君、本当に騙されやすいんだね」

一歩間違えたら全身を切断されかねない状況に漏らしている明久の姿を見てケタケタと笑い転げている鈴瑚と清蘭。

依姫がどうか祇園様の力を止めているから無傷で済んでいるが、一歩間違えたら本当に即死だっただろう。

「大体吉井君の能力の特性は分かったわ。明日には本格的な訓練メニューを組んでおくから朝にはここに来なさい。徹底して吉井君の為だけの護身術を叩き込んであげるから」

そう言われて明久はサグメの元に帰された。

清蘭と鈴瑚の二人の頭に大きなたんこぶが二つ重なるように出来上がっていた事に  
ツツコミを入れながら帰りに担々麺や胡椒餅（フーチャオピン）などを食べてから家に  
帰ることに。

明久が風呂から出た後で謎の玉兎2匹が明久が着ていたシャツのにおいをかぎながら  
体を震わせていた事に恐怖を覚えながら今日も“念の為”サグメの部屋で保護して  
貰いながら寝る事となった。

another story  
??? Side

「それで？　なぜ貴方達は吉井君のシャツやパンツの匂いを嗅いでいたのか説明しても

らおうか?」

今依姫が尋問しているのは訓練後の明久の服のにおいを嗅いで発情しかけていた玉兔二匹である。

この二匹、未だ興奮が収まりきっておらず、最初は優しく事情を聞こうとしていた依姫も業を煮やして威圧的な対応に切り替えざるを得なくなっている。

「確かにあの子が最初に月の都にやってきた日に見かけてとてもかわいい子だなんて思ったのは本当です」

「でも、流星にいきなり襲おうとか来ている服を盗みたいなんて思っただけはいいなかったはずなんです……」

バツの悪そうな顔で目をそらしてしまふ玉兔二匹。

「どうやら最初に明久に襲い掛かって投獄されたメイド玉兔とは違って多少の自制心は持ち合わせていたようである。」

「でもあの子の事で『すごく可愛い子だったね』とか『あんな良い子とお付き合い出来たら一生幸せにしてあげたいな』とか『あ、でも子供とかできたらその子供ばかり可愛がられて嫉妬してしまいそう』みたいなことを話してただけでその時はあんなことを考えたりなんてしていなかったんです」

「ならなぜそんな事を?」

「なぜかその後の記憶が全く無いんです!! 本当です! 信じてくださいいよおおおお……」

本気で泣きついてくる玉兔二匹。普通なら泣き落としだとしか思わないが、依姫にはこの二人の懇願があまりにも鬼気迫るものがあり、どうしても嘘には見えなかった。

「どうみますかお姉さま?」

「……この子たちは一度こちらで保護しましょう。レイセン」

「はい! この子たちにはペットとして礼儀と言うものを徹底的に叩き込んであげま……」

「それはいいから半分囚人、半分客人位のつもりで対応しなさい。しばらく外には出してあげられないけど、うちの仕事と家事の面倒を見てもらえれば釈放してあげるつもりだから……」

そう言った豊姫が見つめる先にあるものは……

放置された洗濯物の山。

溜まった洗われていない食器の山。

異様なまでに汚れにまみれた部屋……

「……私達の中で一人でも家事ができるのなら」

「それは言わないで頂戴。 女子として由々しき問題なんだから」

「それならしばらくお二人の秘書を休んで掃除に専念……」

「それはそれで仕事が回らないからやめて!!」

完全に汚部屋と化してる……

3人とも家事は出来ないのか、最初こそ笑って誤魔化していたがはつきりと言って汚い。

連行された玉兔二人もこの光景にはドン引きである。

## バカと修行と妖精戦争

「これが、今日から吉井君にこなしてもらおう訓練メニューよ!!」

これが依姫が渡した訓練メニューである。

9 : 00 ~ 柔軟体操

9 : 30 ~ 腹筋・背筋・腕立て伏せ・300回。

10 : 30 ~ 11 : 30 重量30キロのリュックを背負つてのランニング10キロ、又は依姫特製特殊アスレチックルーム走破3セット、あるいはキャッチボール。

12 : 00 ~ 13 : 00 昼食（ただしこの訓練をこなせなかつたら昼食抜き）

13 : 30 ~ 地獄の走破訓練（発情期のヤンデレ玉兔軍団との鬼ごっこ・鬼役全員が鉈・および包丁を装備しているので、もし捕獲されたら……）

15 : 30 ~ 地獄の銃撃回避訓練（八意印の禁薬注射弾の銃撃の雨をよけ続ける）

17 : 00 ~ 地獄の実践訓練（稀神サグメ・清蘭・鈴瑚・綿月依姫の内の3人を同時に相手取ってもらおう。1分戦えたらクリア）

18 : 00 ~ 反省会后に解散

「なにか不満はあるかしら？」

「午前の訓練メニューは考慮してくれてる感がありますが、午後の訓練に関しては死ねると思います」

明久と鈴瑚の二人が手を挙げながら抗議する。

『地上の人間にとつては地獄に等しいレベルの訓練』

特に13時以降の訓練に関してはロクな事にならない気がする。ならない。

「依姫様？ この訓練メニューだと基礎的な身体能力は大幅に向上するとは思いますが、戦うための技に関しては一切身につかないと思えます」

清蘭に言われてみんな気が付くが、どうもこの訓練……

最後の地獄の実践訓練以外の全てのメニューが逃げ回ったり避け続けたりするなどの「運動能力」「回避能力」を向上させる訓練だったりする。

「え？　今から吉井君を八雲紫クラスを相手取れる兵士に鍛えあげる？　いくら月の都の文明が優れていても絶対に無理よ。　おバカなくせに女玉兔をたぶらかすのだけは大意な天然ジゴロが相手では八意様が残してくださいさった人体改造薬を使っても筋肉が肥大化して破裂するだけよ」

「『何それ!?　超怖いんですけど!!』」

あまりにも危険すぎる薬である……

そんな薬を使われたらと思うと背筋に寒気が走る明久。

「それに午後の訓練も地獄と銘打っていますが、ただの人間レベルだと地獄に思うというだけで本物の地獄に比べてみれば全然ぬるいとすら思いますよ？」

依姫曰く「一週間も続けていれば体が慣れるからそれに合わせてレベルを上げていく」らしいので月人基準ではむしろ容易にこなせる程度の訓練で済んでいるのだろう

……

「依姫様……　午後の訓練の方ですが、私達玉兔でもかなりキツイ訓練になっています

よっ」



「特に最後の実践訓練の方とか現役兵隊玉兔の最強でも3秒持たないと思いますが……」

そんな事は無かった。

妖怪基準でもハードな訓練を続けるなど、拷問以外の何物でもないだろう……

「大丈夫よ。最終的にその実践訓練ではサグメちゃんが使っているのと同じ月の都流最上級護身術、通称『捌き』を強引に体得させるまでだから、そんなに不安になることも……」

「強引に”体得”て言われる地点で不安しかなんですけど!?”

強引なんて言葉が出てくる地点で無理を押ししているとしか言い様がない訓練だ。

「そう……ならこのまま八雲紫に拉致監禁されて、両手を鉋で切断される未来がいのね。私としてもそんな展開は心苦しいが、流石の私でも「境界を操る程度の能力」のような空間移動系の能力を相手に守り切れる自信は無いし、それでも訓練は嫌だということなら私にそれを強要する権利は……」

「全力でやらせていただきます!! 訓練頑張つてみんなの迷惑にならないくらいにはならないとなあ〜!!」

即座にジャージに着替える明久。

とは言っても中に着せられていただけなので上の制服を脱いだけなのだが……

「それじゃあ……」

「死ねえ！ 吉井明久ああああああああああ！！」  
「『訓練じゃなかったの!?!』」





「依姫さん、あれで手加減しているだなんて……」

「吉井ったら、依姫様との柔軟体操を始めてからすぐに死にそうな顔をしていたもんね」  
「いきなり筋肉をほぐすとか言い出して四の字固めかけたり、チヨークスリーパーとか  
卍字固め……弓矢固めまでいろんな関節技と絞め技をかけまくってたからね。 悶え  
苦しんでいる吉井君の顔が凄く面白かったよ」

清蘭の口からとても兵士とは思えない発言が聞こえたが、鈴瑚に自覚が無いだけかも

しれない……

「ま、あの柔軟体操は吉井にとつても役得だったんじゃない？ 地上の民の男子にとつて女の感触つてご褒美らしいから、依姫様の胸の感触とかよかったんじゃない……」

「いや、豊姫さんの豊満な胸とかならともかく、依姫隊長の貧相な胸では美波からの制裁と同じくらいにゴリゴリとした痛みしか感じないよ」

『女の価値は胸じゃない！ 女の価値は腰の括れと太腿で決まるのよ!!』

「ギャアアアア!! サグメさん!! 分かったから、僕の腕を取り掴まえて関節技を入れるのはやめてよ!!」

折れこそはしなかったものの、完全に後ろで固定されてギチギチと怪しい音を立て始めて腕の痛み悲鳴を上げてしまう明久。

そんな状況にも拘らず、何気にサグメのそこそこのボリウムと安定した形の美乳の感触を味わえたらと思っていた明久だが、そんな都合のいい事にはならず、折れそうに折れないギリギリのところまで固定されている腕の痛みでそんなものを感じ取る余裕などは一切なかった……

そんなくだらしない話を続けながら昼食を食べよう街を歩いていたその時だった……

「うわあああああ!! 妖精だ! 妖精が出たぞ!!」

「みんな逃げてえ!!」

店で注文を取ろうとした途端に大慌てで中に入り込んできた玉兔の言葉に驚いてウエイトレス達が大騒ぎしながら逃げて行ってしまう。

「嘘でしょ……今はまだ、防衛部隊が抑えているはずなのに……なんで妖精なんかが……」

「とにかく、一般玉兔の避難が先だよ! 清蘭!!」

明久が動揺している数秒の間に清蘭と鈴瑚の二人は店に入ってきた一般玉兔から事情を聞いてすぐに現場へと向かっていった……

「サグメさん、月の都で妖精ってそんなに嫌われているの?」

はつきり言って日本人感覚で「妖精」と言われるととてもかわいらしくて子供っぽい純真無垢なイメージを持っている明久。

なぜ慌てているのかが分からない事もあってこの場で質問できそうなサグメに質問する事にした。

『あなたが住んでいる日本での妖精のイメージは分からないけど、月では穢れと呼ばれている不純物の塊と言う扱いよ。その思考回路は腐っていて、拉致された男は去勢されて牢屋に入れられた後には狂犬に襲わせる非人道的な扱いを……女はおもちゃにされた末に穢れきったFB玉兔として爆弾感覚で投入されて月の都を汚染するモンズ



ターとして捨てられてしまうの……』

「ちよつと待つて…… サグメさん、いろいろとツツコミどころは満載だけど、まずはその“FB”ってなんの略なの？」

『「F（ファツキン）B（ビッチ）」の略……』

「うん！ とんでもなく危険な存在だと言う事だけは分かったよ!!」

月の都で言う妖精は、どちらかと言えば西洋的な悪魔のようなイメージに戦争時の軍隊の悪いイメージを詰め込んだような存在だと言う事なのだろう。

明久にはあまりイメージが湧かないが、そんなのが実在するという世界観の住民にとつて今の状況は洒落にならない事態なのは確かだった。

『今の吉井君では、去勢されて汚い鬼の餌にされるか女装させられるのが関の山。私とおとなしく避難所に逃げてもらう』

「そんな！ 清蘭と鈴瑚の二人が心配…… ちよつ！ 分かった!! 分かったからお姫様抱っこはやめ……」

完全にサグメのヒロイン枠に収まりつつある明久は彼女の手によってお姫様抱っこで避難させられた。

「ねえ。パパ…… こわいようせいはまだそとにいるの？」

「心配ないさ、外で頑張っている兵隊さんたちがきつとやつつけてくれるさ」

年端も行かない子供のらう。父親らしき玉兎はぐれる事が無いように子供の手をしっかりと手を握つてあげている。

避難所の中には何千という一般玉兎や月人達が集まっている。

平和な……文月学園の環境が平和かどうかはともかくとにかく平和な日本という国で暮らしてきた一学生でしかない明久には見慣れない光景だった。

こんな光景を生で見せられたら改めて戦争になつている事を認識させられてしまう。「それにこのシエルターにもなつている屋敷の中にいれば絶対安心さ。いざとなつたらここに避難したみんなで力を合わせれば妖精なんてやつつけちゃうさ」

頼もしいことを言う父親玉兎だが、日常的に鎌やらナイフやらと言つた凶器を当たり前のように持ち出して理不尽な理由で追い掛け回す覆面集団を相手に逃げ回る事に慣れている人間でも戦いに長けた存在を相手取るのは不可能と言うものだ。

「きゃああああ!!」

いきなり聞こえた悲鳴。

サグメが悲鳴が聞こえた方向に向かう。そこに続くように明久と兵隊玉兎らしき少女数名が付いていく……

「イツツ・パーティイイイ!!」

恐らく中に妖精が紛れ込んでいたのだろう。10歳くらいに見える羽の生えた少女が怪しくうねる棒のような物を持ち出しながら小さな兎耳の女の子に暴力をふるっている。

『女の子が取り残されてる!!』

「サグメ様!! よかった…… 力をお貸してください!!」

「つて、あの男の子何やってるのよ!! 早く止めないと……」

明久はウサ耳少女を助ける為に先ほどから妖精が叩きつけているうねる棒を捕まえて動きを止めようとする。

その瞬間にその棒が一瞬で砕け散る。

どうやらこの棒は何かしらの異能の力で作られたいる道具だったようだ。

「サグメ様、お見事です!!」

「殴り倒した上でうつぶせになって倒れた妖精を相手に一瞬で手錠をかけて拘束…… 相手に気が付かれるよりもはやく逮捕するなんて現場の警備隊でもここまで迅速に出る者はいませんよ……」

妖精が装備していた棒が砕けた事に驚いている間に少女を助け出した明久と立ち位置を入れ替えるように殴り掛かったサグメ。

どうやらその一撃に耐えられなかったのか、すぐに立ち上がれなかった妖精はサグメ

が持ち合わせていた手錠で簡単に拘束されたようである。

「けがはないかな…… あれ？」

「痛い痛い痛い痛い!! 痛いよ!! お兄ちゃああああああん!!」

よく見てみると腕の関節が外れているようである。

これは子供どころか大の大人でも悲鳴を上げるだろう……

「まずい…… 医療班を呼べ!!」

「ダメです!! 医療班は全班現場の方に行っていていましてこちらに手を回すのに30分は

かかる……」

「そんな……」

あまりにも遅い…… 死ぬような怪我ではないかもしれない……

だが、脱臼と言うのは形容しがたいほどの痛みが伴う上、外れた関節から先の部位を

正常に動かすことが出来なくなる。

大人でも体の一部が動かせないと言う事態に対してパニックになるだろう……

そんな激痛と恐怖に子供が30分も耐えられるわけがない。

「……すこし痛いかもしれないけど我慢できるかな？」

「………何するの？」

関節が外れて脱臼した部位を明久なりに診てみる事にした。

「うん…… これならいける」

『明久君？ いけるって何が？』

サグメのコメントが全く目に入っていない明久。

関節が外れた腕をつかんだ瞬間だった……

「いぎやあああ!!」

少女の腕の関節を完璧に戻して見せた。

明久の関節戻しは異端審問会と名乗る異常者集団のせいだ。文月学園の男子生徒にはもはや必須技能の一つとなっている普通の学生には無用の長物と言ってもいい技術である。

その無駄技術を活用し、少女の脱臼を応急処置ではあるが治療して見せたのである。

「ちよつと痛かったかな…… ごめんね」

「ごめんね…… ってなにやってるんですか貴方!？」

「今、ボコって変な音が鳴ってましたよ！ これ、大丈夫なんですか!？」

警備玉兎の少女たちもいきなりすぎる明久の行動が理解できず、明久をはねのけて少女の腕を確認する。

「うそ…… 外れたはずの関節が戻ってる……」

「貴方…… 本当にいったい何やったんですか?」

「えっと…… 外れた関節を元に戻したただけなんだけど……」

『明久君、月の都に迷い込む前は何かやっていたの……』

明久の持つ謎技術に驚いている避難所の面々だが、はつきりしている事も一つだけあった。

「若干腫れてはいるけど、これなら……」

「ええ、私達だけで処置できるわ。誰か、冷水か氷を持ってきてー」

どうやらこれで大丈夫なようである。

警備玉兎の指示通りに氷や湿布などが運ばれ、急いで治療が行われた。

「これで大丈夫かな？」

『明久君、どういうつもり？』

今度はこっちのほうがケガするんじゃないかと思わんばかりの強い力で明久の肩を掴みながら書いたコメントを見せるサグメ。

明久に見せている顔は若干怒っているようにも見えるが、それ以上に心配しているようにも感じられた。

「勝手に飛び出して…… もしあなたに万が一の事があつたらどうするつもりだったの

!? 今回はたまたま無事だったからよかったものの、これからはこんな無茶なんてしな

いで!!」

「ご、ごめんなさ……」

「私は謝ってほしいんじゃないの! 明久君に会ってから思っていたことがあるけど、今回の件ではつきり言わせてもらおうわ! あなたのそのバカで無茶でその癖優しい行動は穢れた地上の人間として生かすのがもったいないくらい的美徳だとは思う。でもね、そんな無茶な行動のせいで心配する人も中にはいるの!! そんな風に想ってくれている人達がどんな気持ちで……」

なかなか喋らないサグメが珍しく声を荒げながら説教を始めてしまう。

基本的に無口な事もあって、すぐに説教も終わるかと思っていたが、一度しゃべりだしたサグメの説教は鉄人以上に長く、それでいながら澄んだ声で明久の脳内に直接響くかのようにすらすると流れ込んでくる為は無視するなんてマネは出来ない……

これには避難民も含めた皆が同情しだしてサグメを説得しだしたおかげでようやく解放された明久だった。

「つ……… 疲れた………」

『ごめんね明久君…… 明久君なりにあの子の事を想ってやってあげた事なのに、明久君の事だけが心配だからってあんな言い方……』

「ううん、サグメさんは悪くはないよ……… むしろその後でどうやって関節をはめなおしたのかについて警備玉兎の娘達に延々と教え続ける方が大変で………」

あの少女の一件の後、警備玉兎の女の子達から明久が実行した関節戻しの技について何度も聞かされ、そのたびに同じことを何度も説明をする事になってしまった。

外での妖精との戦争の件もあり、もはや依姫が組んだ訓練どころではなくなってしまうため今日には解散する事となった。



「あ、ようやく見つけたよ。　　おーい、サグメ様〜！　　吉井く〜ん」

どうやら、清蘭と鈴瑚も戻ってきたようである。

本来の役目を放棄してまで最前線の玉兎隊の増援に向かっていた件について何か言われてないかと思つたが、特に何もなかったようである。

『今日は時間も遅いし、明久君も疲れているから外で済ませる？』

「さすがに今日は割り勘にしましょうよ……　　なんか外食するたびにサグメ様からおごられてる気がしますし……」

『別に気にしなくてもいい。　　私が奢りたいから奢つてあげているだけ……』

サグメの心遣いに感謝しながら今日の夕飯を食べに行こうと適当な露店に向かつていった。

「ん？　　あの子……」

「あ、治療してくれたお兄ちゃん……」

先ほどの兎耳少女である。

本格的な治療は無事に終わったのだろうか？　　はめられた関節の部分には包帯が巻かれている。

頭にはサーカスのピエロのようなアメリカなデザインが書き込まれた帽子をかぶっている。

活発そうなこの子には非常に似合っている。

「こんな時間にどうしたの？」

「あの…… 実はお願いがありません……」

「お願い？」



「蔵雲（クラウン）の事をお兄ちゃんのおうちに止めてくださいです！　ちゃんとシャワーも浴びてきましたから！　アタイなんでもします！」

「わー！　蔵雲ちゃん、ちよつとストップストップ!!」

大声でとんでもない事を頼みだしてきたアメリカン少女。　名前は蔵雲（クラウン）と言うらしい。

蔵雲ちゃんの大声を抑えるべく口と帽子を押さえておとなしくなってもらおうとするのだが……

「イヤアアア!!　触らないでください!!（兔耳に）」

「なんだか分からないけどゴメ……」

帽子を押さえて俯いてしまう蔵雲に謝る明久。　その明久の目の前には変態を見る

ような目で見ている清蘭と鈴瑚の二人……

「二……につこにつこにー♪　あなたのハートににこにこにー♪　笑顔を届ける吉井にこにこー♪　ヨッシーって覚えてねラブよし……」

「ああつ、野生のポリスメンが!!」

「二人とも、通報はやめてよー!」

笑顔でどうかか誤魔化そうとするが全く通じなかった。

通報をやめさせるために通話ボタンを押させないよう二人の指を掴んで抑え込んで

いる。

「安心してよ。二人は誤解しているだけなんだよ」

「ほう？」

「あの子が妖精に襲われていたのを僕が助けただけなんだ。だからそのお礼が言いたかっただけなんじゃないかと……」

「くねくねする気持ち悪い棒で叩かれていた時にお兄ちゃんが身を挺してかばってくれたですつ。その時に翼が生えているお姉さんと入れ替わるときに抱き締めながら妖精から突き放してくれて……」

「ああつ、またしても野生のポリスメンの部隊が!!」

「本当に何も無いから! だから通報はやめてよ!!」

傍から聞けば戦場で庇い立てするふりをして幼女に抱き着いたロリコンのような印象が残るのだろう。

清蘭と鈴瑚の二人が謎の端末で通報しようとするのをやめる気が無いようだ……

『二人とも、その子が言っているのは本当。だから通報はやめて』

サグメの一言で二人は謎の端末をポケットに収める。

「危うく月の都からも見放されるところだったよ……」

『そうなっても明久君の事は私が地上に降りて面倒を見てあげるから安心して』

「なんかサグメさんのコメントが重いんだけど……」

『もし明久君が本当に誘拐目的だったとしても私がしつかりと教育してあげるから安心してね』

「教育って言いながらへんな珠を出すのはやめてよ。一体どんな目に遭わされるのさ？」

『そんな事……書けない』

「サグメ様も大概な変態だった!?!」

サグメの最後のコメント……顔を赤らめながら目を背けて見せたものである。

明久にはなんのことも全く見当がつかなかったが、清蘭と鈴瑚には意味が分かったようである。

「クスツ」

「あ、やっと笑ってくれたねえ？」

明久達と再会してからずっと困り顔だった蔵雲がようやく笑顔を見せてくれた。

「まあ、今吉井が住んでいる家は吉井の家じゃなくてサグメ様の家だからね。許可はサグメ様にとりなよ、蔵雲ちゃん」

『私は別に構わないけどなぜ明久君に近付いたのか、その理由だけは教えて欲しい』

サグメのコメントを見てまた困り顔に戻ってしまった蔵雲だが、おとなしく理由を説

明してくれた。

「あの……アタイ、商店街の露店の店長さんの家に住み込みで働いていたんだけど、さっきの戦争のせいでお店がつぶれちゃって……もう、蔵雲どころかみんなの面倒が見切れなくなったからって……勝手なお願いですけど、兄ちゃんだったらしばらく泊めてくれるかなって……」

『とりあえず今日はゆつくりしていつて。とは言ってもまだご飯食べてないからすぐに家に帰るわけではないけど……』

「いいんですか？」

『ええ、もちろん』

うるんだ瞳で頼んできた蔵雲のお願い。

サグメも断り切れなかったのか、少女のお願いをかなえてあげる事にした。

another story 鈴瑚Side

『鈴瑚、蔵雲の働いていたお店の人に連絡を入れといてくれるかしら？』

夕食後、サグメは蔵雲の世話を明久に任せて鈴瑚と話をしていた。

「それはいいですけど、なんでですか？」

『あの様子だと向こうへの挨拶をせざるにいきなり来ているかもしれない。住み込みで働いていたと言うのなら一応身元の確認も兼ねて……』

どうやらサグメは明久程蔵雲の事を信用していないようである。

「と、言う事がありました」

『ありがとうございます。実は急にいなくなったものですから、私も心配していたんですよ』

どうやらサグメの読み通り向こうで世話になった店長とは別れの挨拶はしていなかったようである。

粗方、明日にでも話をつければいいと思っていたのだろう……

「それにしてもなんで蔵雲ちゃんはこのちに頼ってきたんですかね？　なんかウチにいる吉井つて男と繋がりがあるそうですけど……」

『ああ……　蔵雲から聞いたと思いますが、先の戦いであの子が住み込みで働いていたウチの店がつぶれてしまつて……　恥ずかしい話、従業員の面倒を見れなくなつてしまつたんですよ。　他の娘達は実家に帰つたのですが、どうやら蔵雲の方は訳アリで実家に帰れないとかで……　そのことであの子の身の振り方を考えていたら宛てがある



と云ってそのまま出て行ったので心配していたんですが……』

どうやら事情は説明していたようである。

「蔵雲ちゃんはサグメ様がしばらく面倒を見てくれるそうです。明日にサグメ様が改めて挨拶に向かうって言っていました」

『いえ、ウチとしても助かりました。他の娘達は帰る家があるそうなので大丈夫だっ

たのですが、蔵雲だけは帰る場所が無いと言われて困っていたところだったんです。

いやはや、サグメ様が面倒を見て下さると言うのなら私も安心ですよ』

蔵雲が働いていたと言う店の店長への連絡も済ませた鈴瑚は買い込んだ団子を食べながらサグメ宅へ向かう。

another story 鈴瑚Side end

## バカと修行と妖精大戦争

another story 蔵雲Side

みんな寝静まっている夜。こつそりと古ぼけた通信端末を取り出して誰かと話す者が一人……

「そう……うまく潜入出来たようねクラウンピース」

「はい！ あたいが兎耳をつけていると言うだけでみんな都合よく騙されてくれました！！」

クラウンピースの背中から小さな半透明の羽が生えてくる。

その羽の輝きはまさしく妖精のかわいらしさを物語る小さな光だった。

「だけど戦争中だと言うのにのんきなもんですよ月の都の連中は。ま、だからこそことうやつて簡単に潜入出来たんですけどね」

「油断しないのクラウンピース。もしかしたらこの会話も聞かれているのかもしれないのだから……」

「今は大丈夫ですって。住まわせてもらってる屋敷の連中は暗殺できるんじゃないか

? ってくらいに爆睡中ですし…… あ、この通信の前にサグメって言うお姉さんが隣の部屋で寝ていたバカなお兄ちゃんを運び出していましたけど……」

「何それ…… ちょっと怖いわね」

「しかもなぜか無駄にキラキラした服も持っていたのが気になりますけど、たいした問題ではないかと思えます」

「いや! それ…… バカのお兄ちゃんさんが本当に危ないわよ!!」

「多分、バカのお兄ちゃんがコスプレ趣味があるとかだと思えます」

「いやいやいや! それはそれでそのバカのお兄ちゃんとやらがかなり頭おかしい子つて事になっちゃうよ!」

「え? でも実際に着せてみたら似合いそうだと思うんですが……」

「似合ってるいない以前にいろいろとおかしいわよ!」

電話の先にいる人物も驚きを隠せないようだ。

「と、とにかく上手く潜入出来ているならそれでいいわ。引き続き潜入仕事を頼めるかしら?」

「心配はいりませんよ友人様。首尾よく事が進んだら合図を送りますので、本隊の準備をお願いしますね」

「ええ、健闘を祈るわ。 ……コレが月の都の最後だ」

a n o t h e r s t o r y e n d



翌朝。明久達は依姫の待つ訓練場に来ていた。

「す…… 少しだけ聞いていいかしら？」

「なんですか、依姫さん？」

「なんで清蘭とサグメちゃんはあるのに苦しそうなのかしら？」

依姫の視線の先には腹を抑えながら寝込んでいる清蘭とサグメ。

「あ…… いや、朝にこんなことがあります……」

another story

「サグメ様！ 清蘭先輩、鈴瑚先輩！ 朝ごはんの用意が出来てますっ!! はやくおきるですっ!!」

翌朝、珍しく早起きの明久と先日居候する事となつた蔵雲の二人が3人を起こしに行く。

因みに今の明久の格好はラブライブ、「僕らは今のなかで」にて星空凛が着ていた衣装を模した服の上から可愛い子猫がデザインされたエプロンを装着している……

最初着ていたパジャマや文月学園の制服から着せ替えられている件に関してはもうツッコミを入れるつもりもないようだ……

「わざわざありがとう蔵雲ちゃん」

そう言って蔵雲が明久と出した料理達……パエリアやピザ、大量の揚げたてのチキンに数種類のサラダ。カルボナーラのようなクリームスパゲティ、ドリアにビーフシチューにキツシュ……

「バカなお兄ちゃんといっしょに頑張つて作つたですっ!」

「……いや、吉井が料理出来るって話は聞いていたけどさっ?」

『これだけ重い料理を朝起きてすぐに食べるって……』

大食いの鈴瑚は喜んでいるが、普通の胃袋しか持ち合わせていない清蘭とサグメにとつては拷問に等しいのだろう。

あまりに多すぎる朝ごはんを目の前に顔が青ざめている……

「まあ、( )数日忙しいからと言つて外食で済ませていたことが原因で放置されていた食べ物全部使つたからね。自然と量が多くなつて……」

『それをこんな朝ご飯作るタイミングでやる!』

余程期限の近い食材が残つていたのだろうか？ 明久と蔵雲の二人が見せた冷蔵庫の中にはほとんど食材は残つてはいなかった。

『確かに食材を買つておきながら期限切れにして捨てるのももつたいないけど、料理しても食べきれなかったら結局もつたいない事には変わらない気が……』

「……しまったああああああああ!!」

a n o t h e r   s t o r y   e n d

「で？ 結局頑張つても食べきれずに残したつて訳？」

「うん…… それで結局食べきれなかった分は保存用の容器に入れて冷蔵庫に入れておいたけど……」



夜に食べようと思ってても味に飽きて食べきれないパターンだろう……

「はあ…… 一応、あなたは動けるのよね？」

「全然大丈夫ですけど？」

「そう…… ならさっそく……」

「死ねえ！ 吉井明久ああああああああ!!」

「「またですか!?!」」

「うるさい！ 人気投票でまだ上位にいるサグメちゃんや投票に関係のない明久君はい

いわよ!! 私なんて今回でさらに10も下がって99位なのよ! もう少しで3桁台に突入しそうなのに、それでヤケになるなんて言えるの!!」

「分かった! 分かりましたから、そろそろ4の字固めから解放してください! 本当に足の健が悲鳴を上げているんです!!」

『私も今回の人気投票で28位に順位を下げてる……』

「それでも上位にいるだけまだいいですよ…… 鈴瑚なんて100位ですからね?」

「そういう清蘭も97位だよ。まあ、わたしは順位とか気にしてないからいいけど」

「尤も…… これ見よがしに上位である事をひけらかしている奴がいたらさすがにムカつくけど」と言いながら、鈴瑚は持つてきた水筒の水の中に砂糖と塩を混ぜ合わせていく。

明久が無事休憩のために戻ってこれたら飲ませる為のドリンクだろう……

「あ、鈴瑚先輩。あたしも手伝うですっ」

「そう? ならそこにおいてあるレモンを絞ってくれる? 今作っているドリンクに使うから」

「はいですっ!」

鈴瑚の指示で蔵雲はレモン絞りを始める事に……

その一方で明久は依姫と一緒にあって訓練と称したキャッチボールを行っている。

時速175キロを超えたボールが明久のグラブの中に入っていくが、一般的な地上人の能力が基準ではあまりにも速過ぎるボールを取るなど出来るはずもなく、ボールはグラブごと彼方の先へと飛んで行ってしまった……

a n o t h e r   s t o r y

「ふあくあ…… 全く、昨日は散々だったよ……」

「ほんとよね。侵入してきた妖精の軍団が暴れた後の処理で忙しかったのに、それから休みなしで門番させられるなんてやってらんないわよ」

彼女たちは月の都の門番を務める駐屯玉兔。先日の妖精との戦いの件でせつかくの休みを無かった事にされた上にほとんど休憩らしい休憩もないまま門番をさせられている哀れな奴隷階級である……

「まあまあ、とりあえず豊姫様がピーチパイの差し入れしてくれてるから、休憩がてらに食べてきなよ。ちよつと予定より早いけど、門番は私達が変わるからさ」

むしろ丸一日休みが欲しい位だが、事情が事情故にそれが出来ない事を知っている門番二人は特に文句も言えずに詰め所に戻っていく。

「まあ、昨日あれだけの軍勢で暴れまわってるんだし、昨日の今日で連続でやってくることなんてないでしょ」

「そうだよ。 だったらこんな仕事さつさと終わらせた後で逆ナンにでも行きましようよ」

「それいいわね。 最近、サグメ様の元で保護されているって言う地上人が珍しく穢れてなくてしかも凄く可愛いつて話だし、うまい事誘って酒でも飲ませてみましょうよ」

「そうよね。 全く……他の玉兎連中は強引に襲うからメンヘラ痴女扱いされて逮捕されちゃうのよ。 うまい事誘いだして酒で酔わせてから合意の下でずり降ろして思いつきりヤツちやえばなんの問題もな……」

「ちよつと、いったいどうしたのよ?」

明久の貞操がピンチになりそうな事を言い出している玉兎だが、何かに気が付いたように、会話をとめてしまう。

その視線の先にあるのは謎の砂煙。

「ちよつと…… 何なのよあれ!？」

「なんか変なTシャツ着ている妖精軍団がバイクやらトラックやらで突っ込んでくるんですけど!？」

双眼鏡を片手に砂煙の正体を確認する門番玉兔。

『Welcome hell』と書かれた変なTシャツを着ている妖精達がバイクやバギー、拳銃の果てに大型トラックなどで隊列を組んで月の都に近付いてくる。

「ちよつ、これマズいんじゃない?？」

「急いで警報を鳴らして!! それと、対妖精用の兵器をありったけ持ってきて!!」

「もう持ってきてあるわよ! 豊姫様が近くにいて助かったわ!」

城門の上から「はろはろ」と朗らかな笑顔で門番玉兔達に手を振る豊姫。

そんな彼女の迅速な対応に感謝しながら、用意された武器の配布や兵器の設置を急いで行っていく。

「ほらほら、ぼさつとしてるんじゃないわよ!! 兵舎で休んでる奴らも全員叩き起こしな!!」

「今、兵舎で休息を取っていた駐屯玉兔隊の皆も向かっているそうです! 対妖精用収束荷電粒子砲のチャージも今行っています!!」

「隊長！ 敵軍が視認できました…… 何ていう事だ……予想以上の規模です！」

「どれだけの規模なの？」

「200……いや、500は確実に超えています!!」

玉兎隊の面々が迎撃兵器の稼働を急ぐ中、豊姫は敵陣の中心にいる謎の女性の存在に気が付く。

「あの変なTシャツに加えて変な星のような物を乗せている女は一体……」

「ああ…… あれが敵勢力の代表の一人、『ヘカーティア・ラピスラズリ』です」

ヘカーティアと呼ばれた女性は陣の中央で輿のような物に乗りながら金属バットを片手に堂々と腕を組んで構えている。

そんな彼女が組んだ腕をほどいたと思ったその瞬間、いきなり月の都をバットで指しだした。

「豊姫様！ 妖精軍のトラックが2台先行してこちらに突っ込んできます!! なんていう速さだ!!」

「なっ!?!」

どうやらあのヘカーティアの奇妙な行動はトラックへの指示だったようだ。

先行した2台のトラックはむしろスピードを上げ、月の都を守る壁を突き破らんばかりの勢いで突っ込んでくる。

「不味いわ…… 荷電粒子砲のチャージを中断！ 門の前にいる皆は私が救援します！！  
みんな一時撤退しなさい！！」

そう言った豊姫が門の前に飛び出した瞬間に指示を受けた玉兎隊は一斉に奥へと逃げ出していく。

「くっ…… 間に合って、『海と山をつなぐ程度の能力』……発動！！」



a  
n  
o  
t  
h  
e  
r  
  
s  
t  
o  
r  
y  
  
e  
n  
d

∴∴∴正門が爆炎に包まれた。

「ちよっ！　なんか向こうの方から爆炎が上がってるんだけど!!」

『……あそこは正門の方!!』

「全く！　昨日といい吉井君の訓練を始めている最中になんでこんな事件が起こるのよ!!」

別のグラブとボールを持ってきてプロ野球の最高速度を超えたボールによるキャッチボールを再開していた依姫は、悪態をつきながらもレイセンに預けていた日本刀を取り出す。

「今日の訓練は中止！　サグメちゃん、悪いけど清蘭と鈴瑚の二人を借りるわよ」

『分かった。　私は明久を連れて避難している』

「いや……　わたし達は依姫様についていくとは言ってないですからね!!」

昨日は前線に出て行ったのにも関わらず、何を思ったのか一転して今度は全力で依姫から連れられることを拒否しだした清蘭と鈴瑚。

「命令拒否するなら、厳罰として……」

「……厳罰として?」



「吉井君から兎の尻尾を延々とモフられても文句を言えないの刑に処す」

「ふざけんなオイ!! 玉兎最低最悪の凌辱の一つじゃねえか!?!」

「僕にそんな事をして喜ぶ趣味は無いから!?!」

「上官への暴言…… 厳罰として最前線であなたたち二人の体に爆弾をテープで巻きつけてあげるから覚悟しなさい!!」

「生かして帰す気が無い!?!」

むしろなんで軍隊と言う規律の塊のような組織内で上官に暴言を吐いてなんのお咎めもないと思っただのが分からない……

それでも普通は日本刀で斬り捨てられると言う“肅清”が真つ先に思い浮かべられそうなものだが、まさかの自爆特攻命令と言う太平洋戦争時の日本軍並みの無茶ぶりに明久もドン引きしている……

「サ、サグメ様…… お願いですからサグメ様からもなにか言ってくださ……」

救いを求めてサグメに懇願しようとする清蘭と鈴瑚の二人だが、その懇願も無駄に終

わることとを悟る……

「頑張って」と言わんばかりの優しい笑顔で手を振って見送っているだけの存在が、間違っても二人を庇い立てするとは思えない。

「さあ、最前線での戦いよ。月の都の為にも最後まで戦い抜けることを誇りに思いなさい!!」

「絶対にはやだああアアアア!!」

清蘭と鈴瑚の二人を何かと一緒に縄で縛り上げた依姫は瞬間移動したかのような速さで正門に向かっていく。

『明久君と蔵雲ちゃんは今私について来て』

そう言ったサグメは蔵雲に荷物を持たせ、明久を首から肩にかけて腕を回しながら上半身をやや上に起こしながら抱きかかえる……

いわゆる“お姫様抱っこ”を明久にしていた。

明久が朝からずっとアイドル衣装を着せられている事もあり、僕少女がお姉さんに抱きかかえている姿にしか見えない……

一方、都の正門前は大パニックに陥っていた。

「なんてことをするのよ…… 妖精の頭がオカシイって事は知ってはいたけど、流石に

これは気が狂っているとしたか言いようがないわよ！」

都の正門だった防壁は完全に破壊されて炎上。

豊姫のとっさの指示と行動のおかげで今のところの犠牲者が出てはいなかったが、今回の妖精軍の攻撃によって正門が破壊されていると言う光景によって兵達に動揺が走っている。

その隙を突くようにトラックの中にいた妖精の軍勢が月の都の中になだれ込もうとしている。

「総員正門前で迎撃!! 奴らがなだれ込む前に食い止めなさい!!」

豊姫の指示に従った玉兎隊が雄叫びを上げながら防衛陣を組んでいく。

「申し訳ないけど防衛陣の指示を任せてもいいかしら? 私は依姫にこの事態を伝える行かないと……」

現場を離れようとした豊姫の前に飛び降りる依姫。

彼女の背中には6振の日本刀が羽のように顕現している。

どのような神様を呼び出したのかは分からないが、手持ちの日本刀を合わせて7刀流で戦えそうである。

「お姉さま、何なんですかこの状況は?!」

「妖精軍の奴ら、本当に気が狂っているわよ。トラックに何を仕込んだのか、猛スピードで正門に突っ込んできて、後はごらんのありさま」

都の正門だった場所を見て驚く依姫。

しかし、すぐに切り替えて刀を構える。

「分かりました。正門の防衛は私が指揮します。お姉さまは逃げ遅れている一般人

の避難をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「ええ、気をつけなさいね。どうやら今回は敵の方も大将自ら攻め込んでくる気の様

だから」

「敵の大将が…… 分かりました。お姉さまの方もお気を付けて」



明久達はパニックに陥っている月の都の中を必死になって走り回っていた。

サグメは明久に対してお姫様抱っこを続けてパニックに陥っている都の中を走り続けている……

「ちよっ!! サグメさん、流石にこれは恥ずかしいから降ろして!!」

『大丈夫、下に落としたりなんてしないから』

「そういう問題じゃないんだってば!!」

抱きかかえられた明久の顔が恥辱にまみれて真っ赤になっているが、そんな事を気にしていられるほど余裕はないとも言わんばかりにサグメは避難所に向けて走り続ける。

「あはははははははははははははははは！ バカなお兄ちゃんの扱いが完全にメインヒロインですっ!!」

「ちよっ…… えっ!?! そんな…… ……もうお婿にいけない!」

『お嫁の間違いだと思う』

「いえ、お婿さんで間違いないと思うですよ?」

サグメは明久を何だと思っているのかは分からないが彼を降ろすつもりは毛頭ない様だ。

蔵雲も蔵雲でお姫様抱っこで抱きかかえられている明久の事を指さしながら笑い転げている辺り、ツツコミこそいれど本気でサグメを止めさせようと思いやる気もないのだろう。

「ヒヤッハー! このアマ、イチヤついてんじゃねえぞ!」

「ヤツちやうよオ〜! 徹底的にヤツちやうよオ〜!!」

「イ〜ッヒッヒッヒ……」

突如家の屋根から妖精がバットを片手に不意打ちを仕掛けてきた。

『しまった…… 依姫のハードトレーニングの疲労が残っているだろうと思つて明久君を強引に抱きかかえたけど、両手がふさがっていたら“捌き”が使えない……』

捌きが使えない状況の為に仕方なく明久の抱きかかえ方を変えながら転がるように回避する事にしたサグメ。

明久にけがは一つもないが、かなり無茶な避け方をした為にサグメも体制を崩してしまふ。

「ウホツ、イイ男♡」

「純弧様が喜びそうな感じの可愛い男の娘じゃないの。この女ボコった後に拉致るとでもしますかな」

「いいね、いいねえ！ さいつこうだねえ!! こういう男にある菊の花はうめえつてしつてるかあ?」

穢れた妖精の手から明久を守るべく臨戦態勢を取るサグメ。

最後の男子妖精の言っている意味は理解できてもしたくないだろう…… 鉄人とも八雲紫ともF B玉兎とも全く違う恐怖を目の当たりにした明久はすくみ上ってしまう……

「ほう? この妖精軍の第13班班長『ピロリ』軍曹様を相手にやりあおうとはこの女、いい度胸をしておる。 こういう気の強い女を屈服させて拉致った後が楽しみだからこの仕事はやめられ……」

『明久君の純潔は渡さない。 あの子の純潔は私が破る。 お前のような恋すら知らな

い汚物に性を語る資格はない!!』

急に現れたこの班長と呼ばれた妖精の言葉が続くことは無かった。

サグメの拳のラッシュを叩き込まれ、両腕を粉砕骨折させられた上に、その折れた両腕と顔面を何度も踏みつけられる……なんてマネをされたら今後真つ当に生きていられるかが怪しいレベルの重症になるのは間違いないだろう。

「ヒ…… ヒイイイイ!! 能力を使う前にピロリ軍曹が瞬殺された!」

「能力を持たないオレ等じゃ敵わねえ! 友人様から純化の儀式を受けた少尉クラス以上の方々をお呼びするんだ!!」

何かしらの通信端末らしきものを取り出した妖精の行動を阻止するべくサグメは妖精の顔面を殴り飛ばす。

その時の衝撃のせいで妖精は通信端末を落としてしまい、その通信端末はサグメの足によつて粉々になるまで踏み壊されてしまった。

「ヒイイイイ! みんなの事は助けたいけど、アタイ等ではあの女にはかなわないから素直に逃げさせてもらう事にするよ!!」

「い、命だけは御助けええ!!」

妖精を二人ほど逃してしまつたが、これ以上の深追いは危険と判断したサグメは再び

吉井をお姫様抱っこで抱きかかえようとした。

……が、全力で拒否されてしまい、しょんぼりと落ち込みながら明久の手を引いて道の先にあつた避難所の中へと入っていった。

……扉を開けようとした途端、  
F B 玉兔と化してしまった玉兔たちがゾンビのように  
襲い掛かってきた。